

虞美人草

夏目漱石



「随分遠いね。元来^{がんらい}どこから登るのだ」

ひとり^{ひとり}が手巾^{ハンケチ}で額^{ひたい}を拭きながら立ち留^{どま}った。

「どこか己^{おれ}にも判然せんがね。どこから登ったって、同じ事だ。山はあすこに見えているんだから」

と顔も体軀^{からだ}も四角に出来上った男が無雑作^{むぞうさ}に答えた。

反^{そり}を打った中折れの茶の廂^{ひさし}の下から、深き眉^{まゆ}を動かしながら、見上げる頭の上には、微茫^{かすか}なる春の空の、底までも藍^{あい}を漂^あわして、吹けば揺^{うご}くかと怪しまるるほど柔らかき中に屹然^{きつぜん}として、どうする気かと云^いわぬばかりに叡山^{えいざん}が聳^{そび}えている。

「恐ろしい頑固^{がんこ}な山だなあ」と四角な胸を突き出して、ちよつと桜^{つえ}の杖^{つえ}に身を倚^もたせていたが、

「あんなに見えるんだから、訳わけはない」と今度は叡山えいざんを輕蔑けいべつしたような事を云う。

「あんなに見えるつて、見えるのは今朝宿けさを立つ時から見えている。京都へ来て叡山が見えなくなつちや大變だ」

「だから見えてるから、好いじゃないか。余計な事を云わずに歩行あるいていれば自然と山の上へ出るさ」

細長い男は返事もせず、帽子を脱いで、胸のあたりを煽あおいでいる。日頃ひじろからなる廂ひさしに遮さへぎられて、菜の花を染め出す春の強き日を受けぬ広き額ひたいだけは目立あつて蒼白あおしろい。

「おい、今から休息しちや大變だ、さあ早く行こう」

相手は汗ばんだ額を、思うまま春風に曝さらして、粘ねばり着いた黒髪さかの、逆さかに飛うばぬを恨うらむごとくに、手巾ハンケチを片手に握はつて、額ほんのくぼとも云わず、顔とも云わず、頸窩ぼんのくぼの尽くるあたりまで、くちやく

ちやに掻き廻した。促がされた事には頓着する気色もなく、

「君はあの山を頑固だと云ったね」と聞く。

「うむ、動かばこそと云ったような安排じゃないか。こう云う風に」と四角な肩をいにとど四角にして、空いた方の手に榮螺の親類をつくりながら、いささか我も動かばこそその姿勢を見せる。

「動かばこそと云うのは、動けるのに動かない時の事を云うのだろう」と細長い眼の角から斜めに相手を見下した。

「そうさ」

「あの山は動けるかい」

「アハハハまた始まった。君は余計な事を云いに生れて来た男だ。さあ行くぜ」と太い桜の洋杖を、ひゅうと鳴らさぬばかりに、肩の上まで上げるや否や、歩行き出した。瘠せた男も手巾を袂に収めて歩行き出す。

「今日は山端やまばなの平八茶屋へいはちぢややで一日遊いちんちんだ方がよかつた。今から登つたつて中途半端はんぱになるばかりだ。元来がんらい頂上まで何里あるのかい」

「頂上まで一里半だ」

「どこから」

「どこからか分るものか、たかの知れた京都の山だ」

瘠やせた男は何にも云わずににやにやと笑つた。四角な男は威勢しやべよく喋舌しやべり続ける。

「君のように計画ばかりしていつこう実行しない男と旅行するど、どこもかしこも見損みそこなつてしまう。連つれこそいい迷惑だ」

「君のようにむちやに飛び出されても相手は迷惑だ。第一、人を連れ出して置きながら、どこから登つて、どこを見て、どこへ下りるのか見当けんとうがつかんじやないか」

「なんの、これしきの事に計画も何もいったものか、たかがあ

の山じゃないか」

「あの山でもいいが、あの山は高さ何千尺だか知っているかい」
「知るものかね。そんな下らん事を。——君知ってるのか」

「僕も知らんがね」

「それ見るがいい」

「何もそんなに威張らなくてもいい。君だつて知らんのだから。
山の高さは御互に知らんとしても、山の上で何を見物して何時
間かかるぐらいは多少確めて来なくっちゃ、予定通りに日程は
進行するものじゃない」

「進行しなければやり直すだけだ。君のように余計な事を考え
てるうちには何遍でもやり直しが出来るよ」となおさつさへ行
く。瘠やせた男は無言のままあとに後おくれてしまう。

春はものの匂になりやすき京の町を、七条から一条まで横に

貫ぬいて、煙る柳の間から、温き水打つ白き布を、高野川の磧に
 数え尽くして、長々と北にうねる路を、おおかたは二里余りも
 来たら、山は自から左右に逼つて、脚下に奔る潺湲の響も、折
 れるほどに曲るほどに、あるは、こなた、あるは、かなたと鳴
 る。山に入りて春は更けたるを、山を極めたらば春はまだ残る
 雪に寒かろうと、見上げる峰の裾を縫うて、暗き陰に走る一条
 の路に、爪上りなる向うから大原女が来る。牛が来る。京の春
 は牛の尿の尽きざるほどに、長くかつ静かである。

「おおい」と後れた男は立ち留りながら、先きなる友を呼んだ。
 おおいと云う声が白く光る路を、春風に送られながら、のそり
 閑と行き尽して、萱ばかりなる突き当りの山にぶつかった時、
 一丁先きに動いていた四角な影ははたと留つた。瘠せた男は、
 長い手を肩より高く伸して、返れ返れと二度ほど揺つて見せる。

桜の杖が暖かき日を受けて、またぴかりと肩の先に光つたと思
う間もなく、彼は帰つて来た。

「何だい」

「何だいじゃない。ここから登るんだ」

「こんな所から登るのか。少し妙だぜ。こんな丸木橋を渡るの
は妙だぜ」

「君見たようにむやみに歩行していると若狭の国へ出てしま
うよ」

「若狭へ出ても構わんが、いったい君は地理を心得ているのか」
「今大原女に聴いて見た。この橋を渡つて、あの細い道に向へ
一里上がると出るそうだ」

「出るとはどこへ出るのだい」

「叡山の上へさ」

「叡山の上のどこへ出るだろう」

「そりや知らない。登つて見なければ分らないさ」

「ハハハ君のような計画好きでもそこまでは聞かなかつたと見えるね。千慮の一失か。それじゃ、仰せおおに従つて渡るとするかな。君いよいよ登りだぜ。どうだ、歩行あるけるか」

「歩行けないたつて、仕方がない」

「なるほど哲学者だけあらあ。それで、もう少し判然すると一人前いちにんまえだな」

「何でも好いから、先へ行くが好い」

「あとから尾ついて来るかい」

「いいから行くが好い」

「尾おいて来る気なら行くさ」

「たにがわ溪川に危うく渡せる一本橋を前後して横切つた二人の影は、

草山の草繁き中を、辛うじて一縷の細き力に頂きへ抜ける小径のなかに隠れた。草は固より去年の霜を持ち越したまま立枯の姿であるが、薄く溶けた雲を透して真上から射し込む日影に蒸し返されて、両頬のほてるばかりに暖かい。

「おい、君、甲野さん」と振り返る。甲野さんは細い山道に適當した細い体軀を真直に立てたまま、下を向いて

「うん」と答えた。

「そろそろ降参しかけたな。弱い男だ。あの下を見たまえ」と例の桜の杖を左から右へかけて一振りに振り廻す。

振り廻した杖の先の尽くる、遙か向うには、白銀の一筋に眼を射る高野川を閃めかして、左右は燃え崩るるまでに濃く咲いた菜の花をべつとりと擦り着けた背景には薄紫の遠山を縹緲のあなたに描き出してある。

「なるほど好い景色だ」と甲野さんは例の長身を据^ねじ向けて、際^{きわ}どく六十度の勾配^{こうばい}に擦り落ちもせず立ち留^{とど}まっている。

「いつの間に、^まこんなに高く登ったんだろう。早いものだな」と宗近君^{むねちか}が云う。宗近君は四角な男の名である。

「知らぬ間に墮落したり、知らぬ間に悟^{さと}つたりするのと同じようなものだろう」

「昼が夜になったり、春が夏になったり、若いものが年寄りになったり、するのと同じ事かな。それなら、おれも疾^とくに心得ている」

「ハハハハそれで君は幾歳^{いくつ}だったかな」

「おれの幾歳より、君は幾歳だ」

「僕は分かつてるさ」

「僕だつて分かつてるさ」

「ハハハハやつぱり隠す了見だりようけんと見える」

「隠すものか、ちゃんと分つてるよ」

「だから、幾歳なんだよ」

「君から先へ云え」と宗近君はなかなか動じない。

「僕は二十七さ」と甲野君は雑作ぞうさもなく言つて退けるの。

「そうか、それじゃ、僕も二十八だ」

「だいぶ年を取つたものだね」

「冗談じようたんを言うな。たつた一つしか違わんじやないか」

「だから御互にさ。御互に年を取つたと云うんだ」

「うん御互にか、御互なら勘弁するが、おれだけじゃ……」

「聞き捨てにならんか。そう気にするだけまだ若いところもあるようだ」

「何だ坂の途中で人を馬鹿にするな」

「そら、坂の途中で邪魔になる。ちよつと退いてやれ」

百折れ千折れ、五間とは直に続かぬ坂道を、呑気な顔の女が、

ごめんやすと下りて来る。身の丈に余る粗朶の大束を、緑り洩

る濃き髪の上に圧え付けて、手も懸けずに戴きながら、宗近君

の横を擦り抜ける。生い茂る立ち枯れの萱をこそつかせた後ろ

姿の眼につくは、目暗縞の黒きが中を斜に抜けた赤襷である。

一里を隔てても、そこと指す指の先に、引つ着いて見えるほど

の藁葺は、この女の家でもあろう。天武天皇の落ちたまえる昔

のままに、棚引く霞は長しえに八瀬の山里を封じて長閑である。

「この辺の女はみんな奇麗だな。感心だ。何だか画のようだ」

と宗近君が云う。

「あれが大原女なんだろう」

「なに八瀬女だ」

「八瀬女と云うのは聞いた事がないぜ」

「なくつても八瀬の女に違ない。嘘だと思ふなら今度逢^あつたら聞いてみよう」

「誰も嘘だと云やしない。しかしあんな女を総称して大原女と云うんだろうじゃないか」

「きつとそうか、受合うか」

「そうする方が詩的でいい。何となく雅^がでいい」

「じゃ当分雅号として用いてやるかな」

「雅号は好いよ。世の中にはいろいろな雅号があるからな。立憲政体だの、万有神教だの、忠、信、孝、悌^{てい}、だのつてさまざまな奴があるから」

「なるほど、蕎麦屋^{そばや}に藪^{やぶ}がたくさん出来て、牛肉屋がみんないろはになるのもその格だね」

「そうさ、御互に学士を名乗つてゐるのも同じ事だ」

「つまらない。そんな事に帰着するなら雅号は廃せ^よばよかつた」

「これから君は外交官の雅号を取るんだろう」

「ハハハハあの雅号はなかなか取れない。試験官に雅味のある奴がいな^いせいだな」

「もう何遍落第したかね。三遍か」

「馬鹿を申せ」

「じゃ二遍か」

「なんだ、ちゃんと知つてゐる癖に。はばかりながら落第はこれでたつた一遍だ」

「一度受けて一遍なんだから、これからさき……」

「何遍やるか分らないとなると、おれも少々心細い。ハハハハ。時に僕の雅号はそれでいいが、君は全体何をするんだい」

「僕か。僕は叡山へ登るのさ。——おい君、そう後足で石を転がしてはいかん。後から尾いて行くものが剣呑だ。——ああ随分くたびれた。僕はここで休むよ」と甲野さんは、がさりと音を立てて枯薄の中へ仰向けに倒れた。

「おやもう落第か。口でこそいろいろな雅号を唱えるが、山登りはから駄目だね」と宗近君は例の桜の杖で、甲野さんの寝ている頭の先をこつこつ敲く。敲くたびに杖の先が薄を薙ぎ倒してがさがさ音を立てる。

「さあ起きた。もう少しで頂上だ。どうせ休むなら及第してから、ゆつくり休もう。さあ起きろ」

「うん」

「うんか、おやおや」

「反吐が出そうだ」

「反吐を吐いて落第するのか、おやおや。じゃ仕方がない。おれもひと^ひやすみつかまつ^{やすみつかまつ}仕ろう」

甲野さんは黒い頭を、黄ばんだ草の間に押し込んで、帽子も傘^{かさ}も坂道に転がしたまま、仰向けに空を眺^{なが}めている。蒼白く面高^{あおじろ おもだか}に削^{けず}り成^なせる彼の顔と、無^む辺際^{へんざい}に浮き出す薄き雲の條然^{ゆうぜん}と消えて入る大いなる天上界^{てんじょうかい}の間には、一塵の眼を遮^{さへ}ぎるものもない。反吐は地面の上へ吐くものである。大空に向う彼の眼中には、地を離れ、俗を離れ、古今の世を離れて万里の天があるのみである。

宗近君は米沢^{よねざわ}紆^わの羽織を脱いで、袖^{そで}畳^{たた}みにしてちよつと肩の上へ乗せたが、また思ひ返して、今度は胸の中から両手をむずと出して、うんと云う間^まに諸肌^{もろはだ}を脱いだ。下から袖無^{ちやんちゃん}が露^{あら}われる。袖無の裏から、もじやもじやした狐^{きつね}の皮が食^はみ出している。

これは支那へ行つた友人の贈り物として君が大事の袖無である。
千羊せんようの皮は一狐いつこの腋えきにしかずと云つて、君はいつでもこの袖無
を一着している。その癖裏に着けた狐の皮は斑まだらにほうけて、む
やみに脱落するところをもつて見ると、何でもよほど性たちの悪い
野良狐のらぎつねに違ない。

「御山おやまへ御登りやすのどすか、案内しまほうか、ホホホ妙けつたいな所
に寝ていやはる」とまた目暗縞めくらじまが下りて来る。

「おい、甲野さん。妙な所に寝ていやはるとき。女にまで馬鹿
にされるぜ。好い加減に起きてあるこうじゃないか」

「女は人を馬鹿にするもんだ」

と甲野さんは依然として天そらを眺ながめている。

「そう泰然と尻すを据えちや困るな。まだ反吐へどを吐きそうかい」

「動けば吐く」

「やつかい厄介だなあ」

「すべての反吐は動くから吐くのだよ。俗界万斛ばんこくの反吐皆動どうの一字きたより来る」

「何だ本当に吐くつもりじゃないのか。つまらない。僕はまたいよいよとなったら、君を担かついで麓ふもとまで下りなけりやならんかと思つて、内心少々辟易へきえきしていたんだ」

「余計な御世話だ。誰も頼みもしないのに」

「君は愛嬌あいぎようのない男だね」

「君は愛嬌の定義を知つてゐるかい」

「何のかのと云つて、一分いちぶんでも余計動かずにいようと云う算段だな。怪けしからん男だ」

「愛嬌と云うのはね、——自分より強いものを斃たおす柔やわらかい武器だよ」

「それじゃ無愛想むあいそは自分より弱いものを、扱こき使う鋭利なる武器だろう」

「そんな論理があるものか。動こうとすればこそ愛嬌あいけうも必要になる。動けば反吐を吐くと知った人間に愛嬌が入るものか」

「いやに詭弁きべんを弄ろうするね。そんなら僕は御先ごめんこうむへ御免蒙まうるぜ。いか」

「勝手にするがいい」と甲野さんはやつぱり空を眺めている。

宗近君は脱いだ両袖たてじまをぐるぐると腰へ巻き付けると共に、毛脛けずねに纏まつわる豎縞すその裾はしおをぐいと端折しろちりめんつて、同じく白縮緬まわりの周囲に畳み込む。最前袖そばみち畳にした羽織を桜の杖の先へ引き懸かけるが早いか「一剣天下を行く」と遠慮のない声を出しながら、十歩に尽くる岨路ひようぜんを飄然として左へ折れたぎり見えなくなつた。

あとは静である。静かなる事定さだまつて、静かなるうちに、わが

一脈の命を託^{たく}すると知つた時、この大乾坤^{だいけんこん}のいづくにか通^かう、
 わが血潮^{けいがい}は、肅々^{しゆくしゆく}と動くにもかかわらず、音なくして寂定裏^{じやくじやうり}に
 形骸^{けいがい}を土木^{どぼく}視して、しかも依稀^{いぎ}たる活氣を帶ぶ。生きてあらん
 ほどの自覺に、生きて受くべき有耶無耶^{うやむや}の累^{わづらい}を捨てたるは、雲
 岫^{しゆくう}を出で、空の朝な夕なを變わると同じく、すべての拘泥^{かうでい}を
 超絶^{しやくぜつ}したる活氣である。古今来^{ここんらい}を空^{むな}しゆうして、東西位^{とうざい}を尽^つ
 したる世界のほかなる世界に片足を踏み込んでこそ——それで
 なければ化石^{かせき}になりたい。赤も吸い、青も吸い、黄^{わう}も紫^{むらさき}も吸い
 尽くして、元の五彩^{かえ}に還^{かえ}す事を知らぬ真黒な化石になりたい。
 それでなければ死んで見たい。死は万事の終である。また万事
 の始めである。時を積んで日となすとも、日を積んで月となす
 とも、月を積んで年となすとも、詮^{せん}ずるにすべてを積んで墓と
 なすに過ぎぬ。墓^この此方側^{こちらがわ}なるすべてのいさくさは、肉一重^{ひとえ}の

垣に隔てられた因果に、枯れ果てたる骸骨にいらぬ情けの油を注して、要なき屍に長夜の踊をおどらしむる滑稽である。遐なる心を持てるものは、遐なる国をこそ慕え。

考へるともなく考へた甲野君はようやく身を起した。また歩行かねばならぬ。見たくもない叡山を見て、いらざる豆の数々に、役にも立たぬ登山の痕迹を、二三日がほどは、苦しき記念と残さねばならぬ。苦しき記念が必要ならば数えて白頭に至つて尽きぬほどある。裂いて髓にいつて消えぬほどある。いたずらに足の底に膨れ上る豆の十や二十——と切り石の鋭どき上に半ば掛けたる編み上げの踵を見下ろす途端、石はきりりと面を更えて、乗せかけた足をすわと云う間に二尺ほど滑べらした。

甲野さんは

「万里の道を見ず」

と小声に吟ぎんじながら、傘かさを力に、岨路そばみちを登り詰めると、急に折れた胸突坂むなつきざかが、下から来る人を天に誘いざなう風情ふぜいで帽せまに逼せまつて立っている。甲野さんは真廂まびさしを煽あおつて坂の下から真一文字に坂の尽きる頂いただきを見上げた。坂の尽きた頂いただきから、淡きうちに限りなき春の色みなを漲みなぎらしたる果はてもなき空を見上げた。甲野さんはこの時

「ただ万里の天を見る」

と第二の句を、同じく小声に歌った。

草山を登り詰めて、雑木ぞうきの間を四五段上のぼると、急に肩せから暗くなつて、踏む靴の底が、湿しめつぽく思われる。路は山の背せを、西から東へ渡して、たちまちのうちに草を失するとすぐ森に移ったのである。近江おうみの空を深く色どるこの森の、動かねば、その上かみの幹と、その上の枝が、幾重幾里いくえに連つらなりて、昔むかしながらの翠みどりり

を年ごとに黒く畳むと見える。二百の谷々を埋め、三百の神輿を埋め、三千の悪僧を埋めて、なお余りある葉裏に、三藐三菩提の仏達を埋め尽くして、森々と半空に聳ゆるは、伝教大師以来の杉である。甲野さんはただ一人この杉の下を通る。

右よりし左よりして、行く人を両手に遮ぎる杉の根は、土を穿ち石を裂いて深く地磐に食い入るのみか、余る力に、跳ね返して暗き道を、二寸の高さに段々と横切っている。登らんとする岩の梯子に、自然の枕木を敷いて、踏み心地よき幾級の階を、山霊の賜と甲野さんは息を切らして上って行く。

行く路の杉に逼って、暗きより洩るるがごとく這い出ずる日影蔓の、足に纏わるほどに繁きを越せば、引かれたる蔓の長きを伝わって、手も届かぬに、朽ちかかる菌朶の、風なき昼をふらふらと揺く。

「ここだ、ここだ」

と宗近君が急に頭の上で天狗てんぐのような声を出す。朽草くちくさの土となるまで積み古ふるるしたる上を、踏めば深靴を隠すほどに踏み答こたえもなきに、甲野さんはようやくの思で、蝙蝠傘かわほりがさを力に、天狗てんぐの座ざまで、登のぼって行く。

「善哉善哉ぜんざいぜんざい、われ汝なんじを待つ事ここに久しだ。全体何をぐずぐずしていたのだ」

甲野さんはただああと云ったばかりで、いきなり蝙蝠傘ほうちうを放り出すと、その上へどさりと尻持しりもちを突いた。

「また反吐へどか、反吐を吐く前に、ちよつとあの景色を見なさい。あれを見るとせっかくの反吐も残念ながら収まこまっちゃう」

と例の桜の杖つえで、杉の間を指す。天を封ずる老幹の亭々と行儀よく並ぶ隙間すきまに、的礫てきれきと近江おうみの湖が光った。

「なるほど」と甲野さんは眸ひとみを凝こらす。

鏡を延べたとばかりでは飽あき足らぬ。琵琶びわの銘ある鏡の明かなるを忌いんで、叡山いの天狗共が、宵よいに偷ぬすんだ神酒みきの酔えいに乗じて、曇れる氣息いきを一面に吹き掛けたように——光るものの底に沈んだ上には、野と山にはびこる陽炎かげろうを巨人の絵の具皿にあつめて、ただ一刷ひとしほに抹なすり付けた、湲れん灩えんたる春色が、十里のほかに模糊もことたなび棚引たなびいている。

「なるほど」と甲野さんはまた繰り返した。

「なるほどだけか。君は何を見せてやっても嬉うれしがらない男だね」

「見せてやるなんて、自分が作ったものじゃあるまいし」

「そう云う恩知らずは、得て哲学者にあるもんだ。親不孝な学問をして、日々人間にちにちと御無沙汰ごぶさたになつて……」

「誠に済みません。——親不孝な学問か、ハハハハハ。君白い帆が見える。そら、あの島の青い山を背うしろにして——まるで動かんぜ。いつまで見ていても動かんぜ」

「退屈な帆だな。判然しないところが君に似ていらあ。しかし奇麗だ。おや、こつちにもいるぜ」

「あの、ずっと向うの紫色の岸の方にもある」

「うん、ある、ある。退屈だらけだ。べた一面だ」

「まるで夢のようだ」

「何が」

「何がって、眼前の景色がさ」

「うんそうか。僕はまた君が何か思い出したのかと思った。ものは君、さつさと片付けるに限るね。夢のごとしだつて懐手ふところをしていちゃ、駄目だよ」

「何を云つてゐるんだい」

「おれの云う事もやつぱり夢のごとしか。アハハハ時に将門まさかどが気燄きえんを吐いたのはどこいらだろう」

「何でも向う側だ。京都を瞰下みおろしたんだから。こつちじゃない。あいつも馬鹿だなあ」

「将門か。うん、気燄を吐くより、反吐へどでも吐く方が哲学者らしいね」

「哲学者がそんなものを吐くものか」

「本当の哲学者になると、頭ばかりになつて、ただ考えるだけか、まるで達磨だるまだね」

「あの煙けふるような島は何だろう」

「あの島か、いやに縹緲ひょうびょうとしているね。おおかた竹生島ちくぶしまだろう」

「本當かい」

「なあに、好い加減さ。雅号なんざ、どうだって、質^{もの}さえたしかなら構わない主義だ」

「そんなたしかなもの世の中にあるものか、だから雅号が必要なんだ」

「人間万事夢のごとしか。やれやれ」

「ただ死と云う事だけが真^{まこと}だよ」

「いやだぜ」

「死に突き当らなくっちゃ、人間の浮気^{うわき}はなかなかやまないものだ」

「やまなくって好いから、突き当るのは真^まつ平御免^{びらごめん}だ」

「御免だつて今に来る。来た時にああそうかと思ひ当るんだね」

「誰が」

「小刀細工^{こがたなざいく}の好^{すき}な人間がさ」

山を下りて近江^{おうみ}の野に入れば宗近君の世界である。高い、暗い、日のあたらず所から、うららかな春の世を、寄り付けぬ遠くに眺^{なが}めているのが甲野さんの世界である。

二

くれないやよい
紅を弥生に包む昼^{たけなわ}酣なるに、春を抽^{ぬぎ}んずる紫の濃き一点を、
あめつち
天地の眠れるなかに、鮮^{あざ}やかに滴^{した}たらしたるがごとき女である。
夢の世を夢よりも艶^{あでやか}に眺^{なが}めしむる黒髪を、乱るるなと畳める鬢^{びん}
の上には、玉虫貝を冴々^{たまむし}と堇^{ささえ}に刻^{すみれ}んで、細き金脚^{きんあし}にはつしと打ち込んでいる。静かなる昼の、遠き世に心を奪い去らんとするを、黒き眸^{ひとみ}のさと動けば、見る人は、あなやと我に帰る。半滴^{はんてき}のひろがりに、一瞬の短かきを偷^{ぬす}んで、疾風^いの威^なを作すは、春

にいて春を制する深き眼である。この瞳を遡つて、魔力の境を窮むるとき、桃源に骨を白うして、再び塵寰に帰るを得ず。ただの夢ではない。模糊たる夢の大なるうちに、燦たる一点の妖星が、死ぬるまで我を見よと、紫色の、眉近く逼るのである。女は紫色の着物を着ている。

静かなる昼を、静かに葉を抽いて、箔に重き一卷を、女は膝の上に読む。

「墓の前に跪ずいて云う。この手にて——この手にて君を埋め参らせしを、今はこの手も自由ならず。捕われて遠き国に、行くほどもあらねば、この手にて君が墓を掃い、この手にて香を焚くべき折々の、長しえに尽きたりと思いたまえ。生ける時は、莫耶も我らを割き難きに、死こそ無惨なれ。羅馬の君は埃及に葬むられ、埃及なるわれは、君が羅馬に埋められ

んとす。君が羅馬は——わが思うほどの恩を、憂きわれに拒める、君が羅馬は、つれなき君が羅馬なり。されど、情だにあらば、羅馬の神は、よも生きながらの辱に、市に引かるるわれを、雲の上よりよそに見たまわざるべし。君が仇なる人の勝利を飾るわれを。埃及の神に見離されたるわれを。君が片身と残したまえるわが命こそ仇なれ。情ある羅馬の神に祈る。——われを隠したまえ。恥見えぬ墓の底に、君とわれを永劫に隠したまえ。」

女は顔を上げた。蒼白き頬の締れるに、薄き化粧をほのかに浮かせるは、一重の底に、余れる何物かを蔵せるがごとく、蔵せるものを見極わめんとあせる男はことごとく虜となる。男は眩げに半ば口元を動かした。口の居住の崩るる時、この人の意志はすでに相手の餌食とならねばならぬ。下唇のわざとらしく

色めいて、しかも判然はつきと口を切らぬ瞬間に、切り付けられたものは、必ず受け損う。

女はただ隼はやぶさの空を搏うつがごとくちらと眸ひとみを動かしたのみである。

男はにやにやと笑った。勝負はすでについた。舌を脛頭あしざきに

飛ばして、泡吹く蟹かにと、烏鷺うろを争うは策のもつとも拙つたなきもの

である。風励ふうれい鼓行して、やむなく城下じょうかの誓ちかいをなさしむるは策の

もつとも凡ぼんなるものである。蜜みつを含んで針を吹き、酒を強しいて毒

を盛るは策のいまだ至らざるものである。最上の戦には一語を

も交うる事を許さぬ。拈華ねんげの一拶いつさつは、ここを去る八千里ならざ

るも、ついに不言にしてまた不語である。ただ躊躇ちゅうちよする事刹那せつな

なるに、虚をうつ悪魔は、思うつばに迷まよと書き、惑まどと書き、失わ

れたる人の子、と書いて、すわと云う間に引き上げる。下界万丈げかいばんじょう

の鬼火おにびに、腥なまぐさき青燐せいりんを筆の穂に吹いて、会釈えしやくもなく描えがき出せ

る文字は、白髪しらがをたわしにして洗つても容易たやすくは消えぬ。笑つたが最後、男はこの笑を引き戻す訳わけには行くまい。

「小野おのさん」と女が呼びかけた。

「え？」とすぐ応じた男は、崩くずれた口元を立て直す暇いとまもない。

唇えみに笑を帯びたのは、半ば無意識にあらわれたる、心の波を、

手持無沙汰てもちぶさたに草書に崩くずしたまでであつて、崩くずしたものの尽きん

とする間際まぎわに、崩すべき第二の波の来ぬのを煩わづらつていた折であ

るから、渡りに船の「え？」は心安く咽喉のどを滑すべり出たのである。

女は固もとより曲者くせものである。「え？」と云わせたまま、しばらくは何

にも云わぬ。

「何ですか」と男は二の句を継ついだ。継がねばせつかくの呼吸

が合わぬ。呼吸が合わねば不安である。相手を眼中に置くもの

は、王侯といえども常にこの感を起す。いわんや今、紫の女の

ほかに、何ものも映らぬ男の眼には、二の句は固より愚かである。

女はまだ何にも言わぬ。床に懸けた容斎の、小松に交る稚子鬘の、太刀持こそ、昔しから長閑である。狩衣に、鹿毛なる駒のあるじ主人は、事なきに慣れし殿上人の常か、動く景色も見えぬ。ただ男だけは気が気でない。一の矢はあだに落ちた、二の矢のあたった所は判然せぬ。これが外れれば、また継がねばならぬ。男は氣息を凝らして女の顔を見詰めている。肉の足らぬ細面に予期の情を漲らして、重きに過ぐる唇の、奇か偶かを疑がいつつも、手答のあれかしと念ずる様子である。

「まだ、そこにいらしたんですか」と女は落ちついた調子で云う。これは意外な手答である。天に向つて彎ける弓の、危うくも吾が頭の上に、瓢箪羽を舞い戻したようなものである。男

の我を忘れて、相手を見守るに引き反^かえて、女は始めより、わが前に坐^すわれる人の存在を、膝^{ひざ}に開^{ひら}ける一冊のうちに見失つていたと見える。その癖、女はこの書物を、箔^{はく}美しと見つけた時、今携^{たずさ}えたる男の手から挽^もぎ取るようにして、読み始めたのである。

男は「ええ」と申したぎりであつた。

「この女は羅馬^{ロウマ}へ行くつもりなんでしょうか」

女は臍^ふに落ちぬ不快^{おもも}の面持^{もち}で男の顔を見た。小野さんは「クレオパトラ」の行為に対して責任を持たねばならぬ。

「行きはしませんよ。行きはしませんよ」

と縁もない女王を弁護したような事を云う。

「行かないの？ 私だつて行かないわ」と女はようやく納^な得^{とく}する。小野さんは暗い隧^{トンネル}道を辛^{かろ}うじて抜け出した。

「沙翁シエクスピアの書いたものを見るとその女の性格が非常によく現われている
いますよ」

小野さんは隧道を出るや否や、すぐ自転車に乗って馳かけ出そうとする。魚は淵ふちに躍おどる、鳶とびは空に舞う。小野さんは詩の郷くにに住む人である。

稜錐塔ピラミッドの空を燬やく所、獅身女の砂を抱く所、長河ちやうがの鰐魚がくぎよを蔵する所、二千年の昔妖姫ようきクレオパトラの安図尼アントニーと相擁して、駝鳥だちようの翼簀しようしように軽ぎよつきく玉肌を払える所、は好画題であるまた好詩料である。小野さんの本領である。

「沙翁の描かいたクレオパトラを見ると一種妙な心持ちになります」

「どんな心持ちに？」

「古い穴の中へ引き込まれて、出る事が出来なくなつて、ぼん

やりしているうちに、紫色のクレオパトラが眼の前に鮮やかに映つて来ます。剥はげかかった錦絵にしきえのなかから、たった一人がぱつと紫に燃えて浮き出して来ます」

「紫？　よく紫とおっしゃるのね。なぜ紫なんです」

「なぜって、そう云う感じがするのです」

「じゃ、こんな色ですか」と女は青き畳の上に半ば敷ける、長き袖そでを、さつと捌さばいて、小野さんの鼻の先に翻ひるがえす。小野さんの眉間みけんの奥で、急にクレオパトラの臭においがふんとした。

「え？」と小野さんは俄然がぜんとして我に帰る。空を掠かすめる子規ほととぎすの、駟しも及ばぬに、降る雨の底を突き通して過ぎたるごとく、ちらと動ける異あやしき色は、疾とく収まつて、美くしい手は膝頭ひざがしらに乗っている。脈打みやくうつときえ思えぬほどに静かに乗っている。

ふんとしたクレオパトラの臭は、しだいに鼻の奥から逃げて

行く。二千年の昔から不意に呼び出された影の、恋々れんれんと遠のく後あとを追うて、小野さんの心は杳窈ようちようの境に誘いざなわれて、二千年のかなたに引き寄せらるる。

「そよと吹く風の恋や、涙の恋や、嘆息ためいきの恋じやありません。暴風雨あらしの恋、曆こよみにも録のつていない大暴雨おおあらしの恋。九寸五分の恋です」と小野さんが云う。

「九寸五分の恋が紫なんですか」

「九寸五分の恋が紫なんじゃない、紫の恋が九寸五分なんです」

「恋を斬きると紫色の血が出るといいますか」

「恋が怒おこると九寸五分が紫色に閃ひかると云うのです」

「沙翁がそんな事を書いてるんですか」

「沙翁シエクスピヤが描かいた所を私わたしが評ひらしたのです。——安図尼アントニーが羅馬ロウマでオクテヴィアと結婚した時に——使のものが結婚の報道しらせを持つて

来た時に——クレオパトラの……」

「紫が嫉妬しつとで濃く染まつたんでしよう」

「紫が埃及エジプトの日で焦こげると、冷たい短刀が光ります」

「このくらいの濃さ加減なら大丈夫ですか」と言う間まもなく長い袖そでが再び閃ひらめいた。小野さんはちよつと話の腰を折られた。相手に求むるところがある時でさえ、腰を折らねば承知をせぬ女である。毒気を抜いた女は得意に男の顔を眺ながめている。

「そこでクレオパトラがどうしました」と抑おさえた女は再び手綱たづなを緩ゆるめる。小野さんは馳かけ出さなければならぬ。

「オクテヴィヤの事を根堀り葉堀り、使のものに尋ねるんです。その尋ね方が、詰なり方が、性格を活動させているから面白い。オクテヴィヤは自分のように背せいが高いかの、髪の毛はどんな色だの、顔が丸いかの、声が低いかの、年はいくつだのと、どこ

までも使者を追窮ついぎゆうします。……」

「全体追窮する人の年はいくつなんです」

「クレオパトラは三十ばかりでしょう」

「それじゃ私に似てだいぶ御婆おばあさんね」

女は首を傾けてホホと笑った。男は怪しき靨えくぼのなかに捲まき込まれたままちよつと途方に暮れている。肯定すれば偽いつわりになる。

ただ否定するのは、あまりに平凡である。皓しろい齒に交る一筋の金

の耀かがやいてまた消えんとする間際まぎわまで、男は何の返事も出なかつ

た。女の年は二十四である。小野さんは、自分と三つ違である事を疾とうから知っている。

美しき女の二十はたちを越えて夫おつとなく、空むなしく一二三を数えて、二

十四きようの今日けふまで嫁がぬは不思議である。春院しゅんいんいたずらに更ふけて、

花影かえい欄おぼしまにたけなわなるを、遅日ちじつ早く尽きんとする風情ふぜいと見て、

こと 琴を抱いて恨み顔なるは、嫁ぎ後れたる世の常の女の習なるに、
 ほつす 塵尾に払う折々の空音に、琵琶らしき響を琴柱に聴いて、本来
 ねいろ ならぬ音色を興あり気に楽しむはいよいよ不思議である。仔細
 もと は固より分らぬ。この男とこの女の、互に語る言葉の影から、
 のぞ 時々に見き込んで、いらざる臆測に、うやむやなる恋の八卦を
 うら ひそかに占うばかりである。
 しつと 「年を取ると嫉妬が増して来るものでしょうか」と女は改たまつ
 て、小野さんに聞いた。

めんくら 小野さんはまた面喰う。詩人は人間を知らねばならん。女の
 わけ 質問には当然答うべき義務がある。けれども知らぬ事は答えら
 れる訳がない。中年の人の嫉妬を見た事のない男は、いくら詩
 人でも文士でも致し方がない。小野さんは文字に堪能なる文学
 者である。

「そうですね。やっぱりに因^よるでしょう」

角^{かど}を立てない代りに挨拶^{あいさつ}は濁^ぬっている。それで済^すます女ではない。

「私がそんな御婆さんになったら——今でも御婆さんでしたっけね。ホホホ——しかしそのくらいな年になったら、どうでしょう」

「あなたが——あなたに嫉妬^{しつと}なんて、そんなものは、今だつて……」

「有りますよ」

女の声は静かなる春風^{はるかぜ}をひやりと斬^きった。詩の国に遊^{あそ}んでいた男は、急に足を外^{はず}して下界に落ちた。落ちて見ればただの人である。相手は寄りつけぬ高い崖^{がけ}の上から、こちらを見下^{みおろ}している。自分をこんな所に蹴落^{けおと}したのは誰だと思える暇もない。

「清姫きよひめが蛇じやになったのは何歳いくつでしょう」

「左様さよう、やつぱり十代にしないと芝居になりませんね。おおか

た十八九でしょう」

「安珍あんちんは」

「安珍は二十五ぐらいがよくはないでしょうか」

「小野さん」

「ええ」

「あなたは御何歳おいくつでしたかね」

「私わたしですか——私とは……」

「考えないと分らないんですか」

「いえ、なに——たしか甲野君と御同おない年どしでした」

「そうそう兄と御同い年ですね。しかし兄の方がよっぽど老ふけて見えますよ」

「なに、そうでも有りません」

「本当よ」

「何か奢おごりましょうか」

「ええ、奢おごつてちょうだい。しかし、あなたのは顔が若いのじゃない。気が若いんですよ」

「そんなに見えますか」

「まるで坊っちゃんのようにですよ」

「可愛かわいそう想に」

「可愛らしいんですよ」

女の二十四は男の三十にあたる。理も知らぬ、非も知らぬ、世の中がなぜ廻まわ転して、なぜ落ちつくかは無論知らぬ。大いなる古今の舞台の極きままりなく発展するうちに、自己はいかなる地位を占めて、いかなる役割を演じつつあるかは固もとより知らぬ。

ただ口だけは巧者である。天下を相手にする事も、国家を向うへ廻す事も、一団の群衆を眼前に、事を処する事も、女には出来ぬ。女はただ一人を相手にする芸当を心得ている。一人と一人と戦う時、勝つものは必ず女である。男は必ず負ける。具象ぐしやうの籠かごの中に飼かわれて、個体の粟あわを喙ついばんでは嬉しげに羽搏はばたきするものは女である。籠の中の小天地で女と鳴く音ねを競うものは必ず斃たおれる。小野さんは詩人である。詩人だから、この籠の中に半分首を突き込んでゐる。小野さんはみごとに鳴き損そこねた。

「可愛らしいんですよ。ちょうど安珍あんちんのようなの」

「安珍は苛ひどい」

許せと云わぬばかりに、今度は受け留とめた。

「御不服なの」と女は眼元だけで笑う。

「だって……」

「だって、何が御厭おいやなの」

「私は安珍のように逃げやしません」
わたし

これを逃げ損ねの受太刀うけだちと云う。坊っちゃんきは機を見て奇麗に引き上げる事を知らぬ。

「ホホホ私は清姫のように追つ懸かけますよ」

男は黙っている。

「蛇じやになるには、少し年が老ふけ過ぎていますかしら」

時ならぬ春の稲妻いなずまは、女を出でて男の胸をするりと透とおした。

色は紫である。

「藤尾ふじおさん」

「何です」

呼んだ男と呼ばれた女は、面と向つて対座している。六畳の座敷は緑みどりり濃き植込へだに隔てられて、往来に鳴る車の響かすさえ幽か

ある。寂寞^{せきばく}たる浮世のうちに、ただ一人のみ、生きてゐる。茶縁^{ちやべり}

の畳を境に、二尺を隔^{へだ}てて互に顔を見合した時、社会は彼らの

傍^{かたえ}を遠く立ち退^のいた。救世軍はこの時太鼓を敲^{たた}いて市中を練り

歩^あるいてゐる。病院では腹膜炎で患者が虫の氣息^{いき}を引き取ろう

としてゐる。露西亞^{ロシア}では虚無党^{きよむとう}が爆裂弾を投^なげている。停車場^{ステーション}

では掏摸^{すり}が捕^{つら}まっている。火事がある。赤子^{あかご}が生れかかつてい

る。練兵場^{れんべいば}で新兵が叱^{しか}られている。身を投^なげている。人を殺し

ている。藤尾^{ふじお}の兄^{あに}さんと宗近君^{そうきん}は叡山^{えいざん}に登^{のぼ}っている。

花^かの香^かさえ重きに過ぐる深き巷^{ちまた}に、呼び交^かわしたる男と女の

姿が、死の底に滅^めり込む春の影の上に、明らかに躍^{おど}りあがる。

宇宙は二人の宇宙である。脈々三千条の血管を越す、若き血潮

の、寄せ来る^{きた}心臓^{しんざう}の扉^{とびら}は、恋と開き恋と閉じて、動かざる男女^{なんによ}

を、躍然^{たいくうり}と大空裏^{えが}に描^{えが}き出^でしている。二人の運命はこの危うき

刹那に定まる。東か西か、微塵だに体を動かせばそれぎりである。呼ぶはただごとではない、呼ばれるのもただごとではない。生死以上の難関を互の間に控えて、冪然たる爆発物が抛げ出されるか、抛げ出すか、動かざる二人の身体は二塊の骸である。「御帰りいつ」と云う声が玄関に響くと、砂利を軋る車輪がはたと行き留まった。襖を開ける音がする。小走りに廊下を伝う足音がする。張り詰めた二人の姿勢は崩れた。

「母が帰つて来たのです」と女は坐つたまま、何気なく云う。

「ああ、そうですか」と男も何気なく答える。心を判然と外に

露わさぬうちは罪にはならん。取り返しをつく謎は、法庭の証

拠としては薄弱である。何気なく、もてなしている二人は、互

に何気のあつた事を黙許しながら、何気なく安心している。天

下は太平である。何人も後指を指す事は出来ぬ。出来れば向う

が悪^{わる}い。天下はあくまでも太平である。

「御母^{おつか}さんは、どちらへか行^いらしたんですか」

「ええ、ちよつと買物に出掛^いけました」

「だいぶ御邪魔^{ごじゃま}をしました」と立ち懸^かける前に居住^{いずまい}をちよつと繕^{つくろ}うい直^{ただ}す。洋袴^{ズボン}の襷^{ひだ}の崩^{くずれ}れるのを氣^きにして、常^{じょう}は出来^{でき}るだけ楽^{らく}に坐^まる男である。いざと云^いえば、突^つつかい棒^{ぼう}に、尻^{しつぽう}を挙^あげるための、膝頭^{ひざがしら}に揃^{そろ}えた両手^{ねずみじま}は、雪^{ゆき}のようなカフスに甲^{こう}まで蔽^{おほ}われて、くすんだ鼠縞^{ねずみじま}の袖^{そで}の下から、七宝^{しっぽう}の夫婦釦^{めおとボタン}が、きらりと顔を出^でしている。

「まあ御緩^{ごゆつ}くりなさい。母^{はは}が帰^{かえ}つても別に用事^{ようじ}はないんですか」と女^{おんな}は帰^{かえ}つた人^{ひと}を迎^{むか}える氣色^{けしき}もない。男^{おとこ}はもとより尻^{しつぽう}を上^あげるのは厭^{いや}である。

「しかし」と云^いいながら、隠袋^{かくし}の中^{うち}を搜^{さが}ぐつて、太^{ふと}い巻煙草^{まきたばこ}を

一本取り出した。煙草の煙は大抵のものを紛らす。いわんやこれは金の吸口の着いた埃及産である。輪に吹き、山に吹き、雲に吹く濃き色のうちには、立ち掛けた腰を据え直して、クレオパトラと自分の間隔を少しでも詰める便が出来んとも限らぬ。薄い煙りの、黒い口髭を越して、ゆたかに流れ出した時、クレオパトラは果然、

「まあ、御坐り遊ばせ」と丁寧な命令を下した。

男は無言のまま再び膝を崩す。御互に春の日は永い。

「近頃は女ばかりで淋しくつていけません」

「甲野君はいつ頃御帰りますか」

「いつ頃帰りますか、ちつとも分りません」

「御音信が有りますか」

「いいえ」

「時候が好いから京都は面白いでしょう」

「あなたもいつしよに御出おいでになればよかったのに」

「私は……」と小野さんは後ぼを暈かしてしまふ。

「なぜ行らつしやらなかったの」

「別に訳はないんです」

「だって、古い御馴染おなじみじゃありませんか」

「え？」

小野さんは、煙草の灰を畳の上に無遠慮に落す。「え？」と云う時、不要意に手が動いたのである。

「京都には長い事、いらしたんじゃないやありませんか」

「それで御馴染なんですか」

「ええ」

「あんまり古い馴染だから、もう行く気にならんです」

「随分不人情ね」

「なに、そんな事はないです」と小野さんは比較的真面目まじめになつて、埃及煙草エジプトたばこを肺の中まで吸い込んだ。

「藤尾、藤尾」と向うの座敷で呼ぶ声がする。

「御母さんおつかでしよう」と小野さんが聞く。

「ええ」

「私わたしはもう帰ります」

「なぜです」

「でも何か御用が御在りおあになるんでしょう」

「あつたつて構わないじゃありませんか。先生じゃありませんか。先生が教えに来てゐるんだから、誰が帰つたつて構わないじゃありませんか」

「しかしあんまり教えないんだから」

「教わっていますとも、これだけ教わっていればたくさんですわ」

「そうでしょうか」

「クレオパトラや、何かたくさん教わってるじゃありませんか」

「クレオパトラぐらいで好ければ、いくらでもあります」

「藤尾、藤尾」と御母さんはしきりに呼ぶ。

「失礼ですがちよつと御免蒙ります。——なにまだ伺いたい事

があるから待っていて下さい」

藤尾は立つた。男は六畳の座敷に取り残される。平床に据え

た古薩摩こさつまの香炉こうろに、いつ焼たき残したる煙の迹あとか、こぼれた灰の、

灰のままに崩くずれもせず、藤尾の部屋は昨日きのうも今日も静かである。

敷はき棄つてた八反はつたんの座布団ざぶとんに、主ぬしを待つ間まの温気ぬくもりは、軽く払う春

風に、ひっそり閑かんと吹かれている。

小野さんは默然もくねんと香炉こうろを見て、また默然と布団を見た。崩しくず格子ごうしの、畳から浮く角に、何やら光るものが奥はさに挟はさまっている。小野さんは少し首を横にして輝やくものを物色して考えた。どうも時計らしい。今までは頓とんと気がつかなかった。藤尾の立つ時に、絹障きぬざわりのしなやかに、布団ふとんが擦ずれて、隠したものが出掛つたのかも知れぬ。しかし布団の下に時計を隠す必要はあるまい。小野さんは再び布団の下を覗のぞいて見た。松葉形まつばがたに繋つなぎ合せた鎖の折れ曲つて、表に向いている方が、細く光線を射返す奥に、盛り上がる七子ななこの縁ふちが幽かすかに浮いている。たしかに時計に違ない。小野さんは首を傾けた。

金は色の純にして濃きものである。富貴ふうきを愛するものは必ずこの色を好む。栄誉えいごを冀ねがうものは必ずこの色を撰えらむ。盛名を致すものは必ずこの色を飾る。磁石じしやくの鉄を吸うごとく、この色は

すべての黒き頭を吸う。この色の前に平身せざるものは、弾力なき護謨ゴムである。一個の人として世間に通用せぬ。小野さんはいい色だと思つた。

折柄おりから向う座敷の方角から、絹のざわつく音が、曲まがり椽えんを伝わつて近づいて来る。小野さんは覗のぞき込んだ眼を急に外そらして、素知らぬ顔で、容齋ようさいの軸じくを真正面に眺めてみると、二人の影が敷居口にあらわれた。

黒縮緬くろちりめんの三つ紋を撫なで肩がたに着こなして、くすんだ半襟はんえりに、髻まげばかりを古風につやつやと光らしている。

「おやいらつしやい」と御母おつかさんは軽く会釈えしやくして、椽えんに近く座を占める。鶯うぐいすも鳴かぬ代りに、目に立つほどの塵もなく掃除の行き届いた庭に、長過ぎるほどの松が、わが物顔に一本控えている。この松とこの御母さんは、何となく同一体のように思わ

れる。

「藤尾が始終御厄介になりまして——さぞわがままばかり申す

事でございましょう。まるで小供でございますから——さあ、

どうぞ御楽に——いつも御挨拶を申さねばならんはずでござい

ますが、つい年を取っているものでございますから、失礼のみ致

します。——どうも実に赤児で、困り切ります、駄々ばかり捏

ねまして——でも英語だけは御蔭さまで大変好きな模様で——

近頃ではだいぶむずかしいものが読めるそうで、自分だけはな

かなか得意であります。——何兄がいるのでございますから、

教えて貰えば好いのでございますが、——どうも、その、やつ

ぱり兄弟は行かんものと見えまして——」

御母さんの弁舌は滾々としてみごとである。小野さんは一字

の間投詞を挟む違まなく、口車に乗って馳けて行く。行く先は

もと
固より判然せぬ。藤尾は黙つて最前小野さんから借りた書物を
開いて続つづきを読んでいる。

「花を墓に、墓に口を接吻くちづけして、憂うきわれを、ひたふるに嘆
きたる女王は、浴湯ゆをこそと召す。浴ゆあみしたる後のちは夕餉ゆうげをこ
そと召す。この時賤いやしき厠卒こものありて小さき籃かごに無花果いちじくを盛り
て参らす。女王の該撒シイザアに送れる文ふみに云う。願わくは安図尼アントニーと
同じ墓にわれを埋うずめたまえと。無花果いちじくの繁れる青き葉陰には
ナイルの泥つちの燄ほのおの舌したを冷やしたる毒蛇どくだを、そつと忍ばせたり。
該撒シイザアの使は走る。闔たつを排して眼まなこを射れば——黄金こがねの寝台よこたに、
位高よそおいき装を今日と凝こらして、女王の屍しかばねは是非なく横よこたわる。ア
イリスと呼ぶは女王の足のあたりにこの世を捨てぬ。チャ―
ミオンと名づけたるは、女王の頭かしらのあたりに、月黒き夜よの露
をあつめて、千顆せんかの珠たまを鑄かんむりたる冠の、今落ちんとするを力な

く支う。鬨を排したる該撒の使はこはいかにと云う。埃及エジプトの御代みよしろし召す人の最後ぞ、かくありてこそと、チャーミオンは言い終つて、倒れながらに目を瞑ねむる」

埃及の御代しろし召す人の最後ぞ、かくありてこそと云う最後の一句は、焚たき罩こむる鍊香ねりこうの尽きなんとして幽かすかなる尾おを虚冥きよめいに曳ひくごとく、全まったき頁ページが淡く霞かすんで見える。

「藤尾」と知らぬ御母おつかさんは呼ぶ。

男はやつと寛容くつろいだ姿で、呼ばれた方へ視線を向ける。呼ばれた当人は俯向うつむいている。

「藤尾」と御母さんは呼び直す。

女の眼はようやくに頁ひさしがみを離れた。波を打つ廂髪ひさしがみの、白い額に接つく下から、骨張らぬ細い鼻はなを承うけて、紅くれなゐを寸すんに織る唇くちびるが――唇くちびるをそと滑すべつて、頬ほおの末としつくり落ち合う脣あごが――脣あごを棄すて

てなよやかに退いて行く咽喉が——しだいと現実世界に競り出して来る。

「なに？」と藤尾は答えた。昼と夜の間に立つ人の、昼と夜の間の返事である。

「おや気楽な人だ事。そんなに面白い御本なのかい。——あとで御覧なさいな。失礼じゃないか。——この通り世間見ずのわがままもので、まことに困ります。——その御本は小野さんから拝借したのかい。大変奇麗な——汚さないようになさいよ。本などは大事にしないと——」

「大事にしていますわ」

「それじゃ、好いけれども、またこないだのように……」

「だって、ありや兄さんが悪いんですもの」

「甲野君がどうかしたんですか」と小野さんは始めて口らしい

口を開いた。ひら

「いえ、あなた、どうもわがまま者の寄り合いだもんでござんすから、始終、しじゅう小供のように喧嘩ばかり致しまして——こないだも兄の本を……」と御母さんは藤尾の方を見て、言おうか、言うまいかと云う態度を取る。同情のある恐喝手段は長者の好んで年少に対して用いる遊戯である。きようかつ

「甲野君の書物をどうなすつたんです」と小野さんは恐る恐る聞きたがる。

「言いましうか」と老人は半ば笑いながら、控えている。玩具の九寸五分を突き付けたような気合である。おもちゃ

「兄の本を庭へ抛なげたんですよ」と藤尾は母を差し置いて、鋭どい返事を小野さんの眉間みけんへ向けて抛なげつけた。御母さんは苦笑にがわらいをする。小野さんは口を開く。あ

「これの兄も御存じの通り随分変人ですから」と御母さんおつかは遠廻しに棄鉢すてばちになった娘の御機嫌をとる。

「甲野さんはまだ御帰りにならんそうですね」と小野さんは、うまいところで話頭を転換した。

「まるであなた鉄砲玉のようで——あれも、始終身体しじゅうからだが悪いとか申して、ぐずぐずしておりますから、それならば、ちと旅行でもして判然はきはきしたらよかろうと申しましてね——でも、まだ、何だかだと駄々こを捏ねて、動かないのを、ようやく宗近に頼んで連れ出して貰もらいました。ところがまるで鉄砲玉で。若いものと申すものは……」

「若いつて兄さんは特別ですよ。哲学で超絶しているんだから特別ですよ」

「そうかね、御母さんには何だか分らないけれども——それに

あなた、あの宗近と云うのが大の呑氣屋のんきやで、あれこそ本当の鉄砲玉で、随分の困りものでしてね」

「アハハハ快活な面白い人ですな」

「宗近と云えば、御前おまゐさっきのものはどこにあるのかい」と御母さんは、きりりとした眼を上げて部屋のうちを見廻わす。

「ここです」と藤尾は、軽く諸膝もろひざを斜めななに立てて、青畳の上に、はったんざぶとんの座布団をさらりと滑すべらせる。富貴ふうきの色は蜷局とぐろを三重に巻いた鎖の中に、堆うずたかく七子の蓋ふたを盛り上げている。

右手を伸のべて、輝くものを戛然かつぜんと鳴らすよと思う間に、掌たまごころよ

り滑る鎖が、やおら畳に落ちんとして、一尺の長さに喰くい留とめられると、余る力を横に抜いて、端はじにつけた柘榴石ガーネットの飾りと共

に、長いものがふらりふらりと二三度揺れる。第一の波は紅くれなゐの珠たまに女の白き腕かいなを打つ。第二の波は観世かんぜに動いて、軽く袖口そでぐちに

あたる。第三の波のまさに静まらんとするとき、女は衝と立ち上がった。

奇麗な色が、二色、三色入り乱れて、疾く動く景色を、茫然と眺めていた小野さんの前へぴたりと坐った藤尾は

「御母さん」と後を顧みながら、

「こうすると引き立ちますよ」と云つて故の席に返る。小野さんの胸には松葉形に組んだ金の鎖が、釦の穴を左右に抜けて、黒ずんだメルトン地を背景に燦爛と耀やいている。

「どうです」と藤尾が云う。

「なるほど善く似合いますね」と御母さんが云う。

「全体どうしたんです」と小野さんは煙に巻かれながら聞く。御母さんはホホホと笑う。

「上げましょうか」と藤尾は流し目に聞いた。小野さんは黙つ

ている。

「じゃ、まあ、止よしましう」と藤尾は再び立つて小野さんの胸から金時計を外はずしてしまつた。

三

柳やなぎ鞆たづれて条々じょうじょうの煙を欄らんに吹き込むほどの雨の日である。衣桁いこうに懸かけた紺こんの背広の暗く下がるしたに、黒い靴足袋くつたびが三分一裏返しに丸く蹲踞うずくまっている。違棚ちがいだなの狭い上に、偉大な頭陀袋ずだぶくろを据すえて、締括しめくくりのない紐ひもをだらだらと嬾ものうくも垂らした傍らかたわに、鍊齒粉ねりはみがきと白楊子しろようじが御早うと挨拶あいさつしている。立て切つた障子しょうじの硝子ガラスを通して白い雨の糸が細長く光る。

「京都という所は、いやに寒い所だな」と宗近君むねちかは貸浴衣かしゆかたの上

に銘仙^{めいせん}の丹前を重ねて、床柱^{とこばしら}の松の木を背負^{しよつ}て、傲然^{ごうぜん}と箕坐^{あぐら}をかいたまま、外^{のぞ}を覗^{のぞ}きながら、甲野^{こうの}さんに話しかけた。

甲野^{こうの}さんは駱駝^{らくだ}の膝掛^{ひざかけ}を腰から下へ掛けて、空気枕^{くうきまくら}の上で黒い頭をぶくつかせていたが

「寒いより眠い所だ」

と云いながらちよつと顔の向^{むき}を換えると、櫛^{くし}を入れたての濡^ぬれた頭が、空気の弾力で、脱ぎ棄てた靴足袋^{くつたび}といっしょになる。

「寝てばかりいるね。まるで君は京都へ寝^ねに來たようなものだ」

「うん。実に氣樂な所だ」

「氣樂になつて、まあ結構だ。御母^{おつか}さんが心配していたぜ」

「ふん」

「ふんは御挨拶だね。これでも君を氣樂にさせるについては、人の知らない苦勞をしているんだぜ」

「君あの額の字が読めるかい」

「なるほど妙だね。※雨※風か。見た事がないな。何でも人扁にんべん

だから、人がどうかするんだろう。いらざる字を書きやがる。

元来何者だい」

「分らんね」

「分らんでもいいや、それよりこの襖ふすまが面白いよ。一面に金紙きんがみ

を張り付けたところは豪勢だが、ところどころに皺しわが寄つて

には驚ろいたね。まるで緞帳芝居どんちやうしばいの道具立見どうぐだてたようだ。そこへ

持つて来て、筍たけのこを三本、景氣なげに描かいたのは、どう云う了見りようけんだろ

う。なあ甲野さん、これは謎なぞだぜ」

「何と云う謎だい」

「それは知らんがね。意味が分からないものが描^かいてあるんだから謎だろう」

「意味が分からないものは謎にはならんじゃないか。意味があるから謎なんだ」

「ところが哲学者なんてものは意味がないものを謎だと思って、一生懸命に考えてるぜ。氣^き狂^{きちがい}の発明した詰^{つめ}将棋^{しょうぎ}の手を、青筋を立てて研究しているようなものだ」

「じゃこの筍も氣違の画^え工^{かき}が描いたんだろう」

「ハハハハ。そのくらい事^じ理^りが分つたら煩悶^{はんもん}もなからう」

「世の中と筍といっしょになるものか」

「君、昔話^{むかしばな}しにゴージアン・ノットと云うのがあるじゃないか。

知ってるかい」

「人を中学生だと思ってる」

「思つていなくつても、まあ聞いて見るんだ。知つてゐるなら云つて見ろ」

「うるさいな、知つてゐるよ」

「だから云つて御覧なさいよ。哲学者なんてものは、よくごまかすもので、何を聞いても知らないと白状の出来ない執念深い人間だから、……」

「どっちが執念深いか分りやしない」

「どっちでも、いいから、云つて御覧」

「ゴージアン・ノットと云うのはアレキサンダー時代の話しき」

「うん、知つてゐるね。それで」

「ゴージアスと云う百姓がジュピターの神へ車を奉納したところ

ほうのう

ろが……」

「おやおや、少し待った。そんな事があるのかい。それから」

「そんな事があるのかつて、君、知らないのか」

「そこまでは知らなかった」

「何だ。自分こそ知らない癖に」

「ハハハハ学校で習った時は教師がそこまでは教えなかった。あの教師もそこまではきつと知らないに違ない」

「ところがその百姓が、車の轆ながえと横木を蔓かずらで結ゆわいた結び目を誰がどうしても解とく事が出来ない」

「なあるほど、それをゴージアン・ノットと云うんだね。そうか。その結目ノットをアレキサンダーが面倒臭いって、刀を抜いて切つちまつたんだね。うん、そうか」

「アレキサンダーは面倒臭いとも何とも云やあしない」

「そりやどうでもいい」

「この結目を解いたものは東方ていの帝たらんと云う神託しんたくを聞いたと

き、アレキサンダーがそれなら、こうするばかりだと云つて……」

「そこは知つてゐるんだ。そこは学校の先生に教わつた所だ」

「それじゃ、それでいいじゃないか」

「いいがね、人間は、それならこうするばかりだと云う了見りようけんがなくつちや駄目だと思ふんだね」

「それもよからう」

「それもよからうじゃ張り合がないな。ゴージアン・ノットはいくら考えたつて解けつこ無いんだもの」

「切れば解けるのかい」

「切れば——解けなくつても、まあ都合がいいやね」

「都合か。世の中に都合ほど卑怯ひきようなものはない」

「するとアレキサンダーは大変な卑怯な男になる訳だ」

「アレキサンダーなんか、そんなに豪えらいと思つてゐるのか」

会話はちよつと切れた。甲野さんは寝返りを打つ。宗近君は箕坐あぐらのまま旅行案内をひろげる。雨は斜ななめに降る。

古い京をいやが上に寂さびよと降る糠雨ぬかあめが、赤い腹を空に見せて

衝ついと行く乙鳥つばくらの背せに応こたえるほど繁しもぎようくなつたとき、下京かみぎようも上京かみぎよう

もしめやかに濡ぬれて、三十六峰さんじゅうろつぽうの翠みどりの底みに、音ゆうぜんは友禅べにの紅べにを

溶といて、菜の花そそに注そそぐ流ながのみである。「御前川上おまえ、わしや川下

で……」と芹せりを洗せんう門口かどぐちに、眉まゆをかくす手拭てぬぐいの重おもきを脱ぬげば、

「大文字だいもんじ」が見える。「松虫まつむし」も「鈴虫すずむし」も幾代いくよの春はるを苔蒸こけむして、

鶯うぐいすの鳴くべき藪やぶに、墓はかばかりは残のこっている。鬼おにの出る羅生門らしやうもんに、

鬼おにが来きずなつてから、門かどもいつの代よにか取り毀こぼれた。綱つなが挽ひ

ぎとつた腕うでの行末ゆくえは誰たれにも分わからぬ。ただ昔むかししながらの春雨はるさめが

降ふる。寺町てらまちでは寺てらに降ふり、三条さんじょうでは橋はしに降ふり、祇園ぎおんでは桜さくらに降ふ

り、金閣寺きんかくじでは松まつに降ふる。宿しゆくの二階にかいでは甲野かうのさんと宗近そうじん君くんに降ふつ

ている。

甲野さんは寝ながら日記を記けだした。横綴よことじの茶の表布クロースの少しは汗に汚よれた角かどを、折るようにあけて、二三枚めくると、一頁ページの三が**一**ほど白い所が出て来た。甲野さんはここから書き始める。鉛筆を執とつて景気よく、
「いちれんろうかくのあめ一奩楼角雨、かんさつすここのひと閑殺古今人」
と書いてしばらく考えている。転結てんけつを添えて絶句にする気と見える。

旅行案内を放ほうり出して宗近君はずしんと畳を威嚇おどかして椽側えんがわへ出る。椽側には御詔向おあつらえむきに一脚の籐との椅子いすが、人待ち顔に、しめつぽく据すえてある。連翹れんぎようの疎まばらなる花の間から隣り家となやの座敷が見える。障子しょうじは立て切つてある。中うちでは琴の音ねがする。

「たちまちきんぎんのひびき 忽※彈琴響、すいよううらみをひいてあらたなり 垂楊 惹恨 新」

と甲野さんは別行に十字書いたが、氣に入らぬと見えて、すぐさま棒を引いた。あとは普通の文章になる。

「宇宙は謎である。なぞ 謎を解くは人々の勝手である。勝手に解いて、勝手に落ちつくものは幸福である。疑えば親さえ謎である。

兄弟さえ謎である。妻も子も、かく観ずる自分さえも謎である。

この世に生まれるのは解けぬ謎を、押しつけられて、白頭はくとうに儻個せんかい

し、中夜ちゆうやに煩悶はんもんするために生まれるのである。親の謎を解くた

めには、自分が親と団体にならねばならぬ。妻の謎を解くためには妻と同心にならねばならぬ。宇宙の謎を解くためには宇宙と同心団体にならねばならぬ。これが出来ねば、親も妻も宇宙

も疑である。解けぬ謎である、苦痛である。親兄弟と云う解けぬ謎のある矢先に、妻と云う新しき謎を好んで貰うのは、自分の財産の所置に窮している上に、他人の金銭を預かると一般である。妻と云う新らしき謎を貰うのみか、新らしき謎に、また新らしき謎を生ませて苦しむのは、預かつた金銭に利子が積んで、他人の所得をみずからと持ち扱うようなものであろう。……すべての疑は身を捨てて始めて解決が出来る。ただどう身を捨てるかが問題である。死？ 死とはあまりに無能である」

宗近君は籐との椅子いすに横平おうへいな腰こしを据おえてきつきから隣ことりの琴ことを聴きいている。御室おむろの御所ごしょの春寒はるさむに、銘めいをたまわる琵琶びわの風流ふうりゅうは知るはずがない。十三絃じゅうさんげんを南部なんぶの菖蒲形しょうぶがたに張はつて、象牙ぞうげに置おいた蔣まきえ絵えの舌したを気高けだかしと思おもう数奇すきも有もたぬ。宗近君はただ漫然まんぜんと聴きいているばかりである。

滴々^{てきてぎ}と垣^{おほ}を蔽^{れんぎよう}う連翹^きの黄^{なりひらだけ}な向^{ひとむら}うは業平竹の一叢^{こけ}に、苔^{こけ}の多い御影^{えいざんげけ}の突^つく這^はいを添^{そへ}えて、三坪に足らぬ小庭には、一面に叡山苔^{えいざんげけ}を這^はわしている。琴^ねの音はこの庭から出る。

雨は一つである。冬は合羽^{かつぱ}が凍^{こお}る。秋は灯心^{とうしん}が細^こる。夏は襪^{ふとし}を洗^{せん}う。春は——平打^{ひらうち}の銀簪^{ぎんかん}を畳^{たたみ}の上に落^おしたまま、貝^{かい}合せの貝^{かい}の裏^{うら}が朱^{しゆ}と金^{きん}と藍^{あい}に光^{あかり}る傍^{かたわら}に、ころりんと搔^かき鳴^ならし、またころりんと搔^かき乱^{みだ}す。宗近君^{むねちか}の聴^きいてるのはまさにこのころりのである。

「眼^めに見^みるは形^{かたち}である」と甲野^{かしの}さんはまた別行^{べつぎやう}に書^かき出^でした。

「耳^{みみ}に聴^きくは声^{こゑ}である。形^{かたち}と声^{こゑ}は物^{もの}の本体^{ほんたい}ではない。物^{もの}の本体^{ほんたい}を証^{しやう}得^{とく}しないものには形^{かたち}も声^{こゑ}も無^む意義^{いぎぎ}である。何物^{なんぶつ}かをこの奥^{おく}に捕^{とら}えたる時^{とき}、形^{かたち}も声^{こゑ}もことごとく新^{あらた}らしき形^{かたち}と声^{こゑ}になる。これが象徴^{しやうてい}である。象徴^{しやうてい}とは本来^{ほんらい}空^{くう}の不可思議^{ふかぎ}を眼^めに見^み、耳^{みみ}に聴^き

くための方便である。……」

琴の手は次第に繁くなる。雨滴あまだれの絶間たえまを縫ぬうて、白い爪が幾

度か駒こまの上を飛ぶと見えて、濃こまやかなる調べは、太き糸の音ねと細

き音を縋より合せて、代る代るに乱れ打つように思われる。甲野

さんが「無絃むげんの琴を聴きいて始めて序破急じよはきゆうの意義を悟る」と書き

終った時、椅子いすに靠もたれて隣家となりばかりを瞰下みおろしていた宗近君は

「おい、甲野さん、理窟りくつばかり云わずと、ちとあの琴でも聴く

がいい。なかなか旨うまいぜ」

と椽側えんがわから部屋の中へ声を掛けた。

「うん、さつきから拝聴している」と甲野さんは日記をぱたりと伏せた。

「寝ながら拝聴する法はないよ。ちよつと椽えんまで出張を命ずるから出て来なさい」

「なに、ここで結構だ。構つてくれるな」と甲野さんは空気枕を傾けたまま起き上がる景色けしきがない。

「おい、どうも東山が奇麗きれいに見えるぜ」

「そうか」

「おや、鴨川かもがわを渉わたる奴やつがある。実に詩的だな。おい、川を渉る奴があるよ」

「渉つてもいいよ」

「君、布団ふとん着て寝たる姿やとか何とか云うが、どこに布団を着ている訳かな。ちよつとここまで来て教えてくれんかな」

「いやだよ」

「君、そうこうしているうちに加茂の水嵩みずかさが増して来たぜ。いやあ大変だ。橋が落ちそうだ。おい橋が落ちるよ」

「落ちてでも差さし支つかえなしだ」

「落ちてても差し支えなしだ？　晩に都踊が見られなくつても差し支えなしかな」

「なし、なし」と甲野さんは面倒臭くなつたと見えて、寝返りを打つて、例の金襴きんぷすまたの筭たけのこを横に眺め始めた。

「そう落ちついていちゃ仕方がない。こつちで降参するよりほかに名案もなくなつた」と宗近さんは、とうとう我がを折つて部屋の中へ這入はいつて来る。

「おい、おい」

「何だ、うるさい男だね」

「あの琴を聴いたろう」

「聴いたと云つたじゃないか」

「ありや、君、女だぜ」

「当り前さ」

「幾何だと思ふ」

「幾歳だかね」

「そう冷淡じゃ張り合がない。教えてくれなら、教えてくれと判然云うがいい」

「誰が云うものか」

「云わない？ 云わなければこつちで云うばかりだ。ありや、

しまだ
島田だよ」

「座敷でも開いてるのかい」

「なに座敷はぴたりと締つてる」

「それじゃまた例の通り好加減な雅号なんだろう」

「雅号にして本名なるものだね。僕はあの女を見たんだよ」

「どうして」

「そら聴きたくなつた」

「何聴かなくつてもいいさ。そんな事を聞くよりこの筍を研究たけのこしている方がよっぽど面白い。この筍を寝ていて横に見ると、背せいが低く見えるがどう云うものだろう」

「おおかた君の眼が横に着いているせいだろう」

「二枚の唐紙からかみに三本描かいたのは、どう云う因縁いんねんだろう」

「あんまり下手だから一本負けたつもりだろう」

「筍の真青まつさおなのはなぜだろう」

「食うと中毒あたると云う謎なぞなんだろう」

「やつぱり謎か。君だつて謎を积とくじやないか」

「ハハハハ。時々は积いて見るね。時に僕がさつきから島田の謎を解いてやろうと云うのに、いつこう积かせないのは哲学者にも似合わん不熱心な事だと思ふがね」

「积きたければ积くさ。そうもつたいぶつたつて、頭を下げる

ような哲学者じゃない」

「それじゃ、ひとまず安っぽく釈いてしまつて、後から頭を下
げさせる事にしよう。——あのね、あの琴の主はね」

「うん」

「僕が見たんだよ」

「そりや今聴いた」

「そうか。それじゃ別に話す事もない」

「なければ、いいさ」

「いや好くない。それじゃ話す。昨日ね、僕が湯から上がつて、

椽側で肌を抜いで涼んでいると——聴きたいだろう——僕が何

気なく鴨東の景色を見廻わして、ああ好い心持だとふと眼を

落して隣家を見下すと、あの娘が障子を半分開けて、開けた障

子に靠たれかかつて庭を見ていたのさ」

「別嬪べっぴんかね」

「ああ別嬪だよ。藤尾さんよりわるいが糸公いとこうより好いようだ」

「そうかい」

「それつきりじゃ、余あんまり他愛たあいが無さ過ぎる。そりや残念な事をした、僕も見ればよかつたぐらい義理にも云うがいい」

「そりや残念な事をした、僕も見ればよかつた」

「ハハハハだから見せてやるから椽側えんがわまで出て来いと云うのに」

「だって障子は締つてるんじゃないか」

「そのうち開くあかも知れないさ」

「ハハハハ小野なら障子の開くまで待つてるかも知れない」

「そうだね。小野を連れて来て見せてやれば好かつた」

「京都はああ云う人間が住むに好い所だ」

「うん全く小野的だ。大将、来いと云うのになんのかのと云つ

て、とうとう来ない」

「春休みに勉強しようと云うんだろう」

「春休みに勉強が出来るものか」

「あんな風じゃいつだつて勉強が出来やしない。一体文学者は軽いからいけない」

「少々耳が痛いね。こつちも余まり重くはない方だからね」

「いえ、単なる文学者と云うものは霞かすみに酔よつてぼうつとしてゐるばかりで、霞ひらを披ひらいて本体を見つけないから性根しょうねがないよ」

「霞よの酔ぼろいつ払はらか。哲学者は余計な事を考え込んで苦にがい顔をするから、塩水の酔よつ払はらだろう」

「君見たように叡山えいざんへ登るのに、若狭わかさまで突き貫ぬける男は白雨ゆうだちの酔よつ払はらだよ」

「ハハハハそれぞれ酔つ払つてゐるから妙だ」

甲野さんの黒い頭はこの時ようやく枕を離れた。光沢のある髪で湿つぽく押し付けられていた空氣が、彈力で膨れ上がると、枕の位置が畳の上でちよつと廻つた。同時に駱駝の膝掛が擦り落ちながら、裏を返して半分に折れる。下から、だらしなく腰に捲き付けた平紵の細帯があらわれる。

「なるほど酔つ払いに違ない」と枕元に畏まつた宗近君は、即座に品評を加えた。相手は瘦せた体軀を持ち上げた肱を二段に伸して、手の平に胴を支えたまま、自分で自分の腰のあたりを睨め廻していたが

「たしかに酔つ払つてゐるようだ。君はまた珍らしく畏まつてゐるじゃないか」と一重瞼の長く切れた間から、宗近君をじろりと見た。

「おれは、これで正気なんだからね」

「いずまい居住だけは正気だ」

「精神も正気だからさ」

「どてらをかしこまつ着て跪坐てるのは、酔っ払っていながら、異状がないと得意になるようなものだ。なおおかしいよ。酔っ払いは酔っよつばらい払くらしくするがいい」

「そうか、それじゃ御免蒙ごめんこうむろう」と宗近君はすぐさま胡坐あぐらをか

「君は感心ぐんしんに愚を主張しないからえらい。愚にして賢と心得ているほど片腹痛かたはらい事はないものだ」

「いさめ諫に従う事流るるがごとしとは僕の事を云ったものだよ」

「酔っ払っていてもそれなら大丈夫だ」

「なんて生意気を云う君はどうだ。酔っ払っていると知りながら、

胡坐をかく事も跪坐る事も出来ない人間だろう」

「まあ立ん坊だね」と甲野さんは淋さびし気に笑った。勢いきおい込んで喋しゃべ舌しやべつて来た宗近君は急に真面目まじめになる。甲野さんのこの笑顔をみると宗近君はきつと真面目にならなければならぬ。幾多の顔の、幾多の表情のうちで、あるものは必ず人の肺腑はいふに入る。面上の筋肉が我勝ちわれがに躍おどるためではない。頭上の毛髪が一筋ごといわずまに稲妻を起すためでもない。涙管るいかんの関が切れて滂沱ぼうたの観を添うるがためでもない。いたずらに劇烈なるは、壮士が事もなきに剣を舞わして床ゆかを斬きるようなものである。浅いから動くのである。本郷座の芝居である。甲野さんの笑ったのは舞台で笑ったのではない。

毛筋けほどな細い管を通して、捕とらえがたい情けなさの波が、心の底から辛かろうじて流れ出して、ちらりと浮世の日に影を宿したので

ある。往来に転ころがつている表情とは違う。首を出して、浮世だなと気がつけばすぐ奥の院へ引き返す。引き返す前に、捕つかまえた人が勝ちである。捕そこまえ損しんなえは生涯しょうがい甲野さんを知る事は出来ぬ。

甲野さんの笑は薄く、柔らかに、むしろ冷やかである。そのおとなしいうちに、その速すみやかなるうちに、その消えて行くうちに、甲野さんの一生は明あきらかに描えがき出されている。この瞬間の意義を、そうかと合点するものは甲野君の知己ちぎである。斬きった張はったの境に甲野さんを置いて、ははあ、こんな人かと合点がてんするようでは親子といえどもいまだしである。兄弟といえども他人である。斬きった張はったの境に甲野さんを置いて、始めて甲野さんの性格を描えがき出すのは野暮やぼな小説である。二十世紀に斬きった張はったがむやみに出て来るものではない。

春の旅は長閑^{のどか}である。京の宿は静かである。二人は無事である。ふざけている。その間に宗近君は甲野さんを知り、甲野さんは宗近君を知る。これが世の中である。

「立ん坊か」と云ったまま宗近君は駱駝^{らくだ}の膝掛^{ひざかけ}の馬簾^{ばれん}をひねくり始めたが、やがて

「いつまでも立ん坊か」

と相手の顔は見ず、質問のように、独語^{ひとりごと}のように、駱駝の膝掛に話しかけるように、立ん坊を繰り返した。

「立ん坊でも覚悟だけはちゃんとしている」と甲野さんはこの時始めて、腰を浮かして、相手の方に向き直る。

「叔父さんが生きてると好いがな」

「なに、阿爺^{おやじ}が生きているとかえって面倒かも知れない」

「そうさなあ」と宗近君はなあ、を引つ張った。

「つまり、家を藤尾にくれてしまえばそれで済むんだからね」

「それで君はどうするんだい」

「僕は立ん坊さ」

「いよいよ本当の立ん坊か」

「うん、どうせ家を襲いだって立ん坊、襲がなくなつたって立ん坊なんだからいっこう構わない」

「しかしそりや、いかん。第一叔母おばさんが困るだろう」

「母がか」

甲野さんは妙な顔をして宗近君を見た。

疑がえおのれば己にさえ欺あざむかれる。まして己以外の人間の、利害

の衢ちまたに、損失の塵除ちりよけと被かぶる、面の厚つらさは、容易には度はかられぬ。

親しき友の、わが母を、そうと評するのは、面の内側で評する
のか、または外側でのみ云りう了見か。己にさえ、己を欺く魔の、

どこにか潜ひそんでいるような気持は免かれぬものを、無二の友達
 とは云え、父方の縁続きとは云え、迂濶うかつには天機を洩もらしがた
 い。宗近の言は継母に対するわが心の底を見んための鎌かまか。見
 た上でも元の宗近ならばそれまでであるが、鎌を懸かけるほどの
 男ならば、思う通りを引き出した後あとで、どう引つ繰り返らぬと
 も保証は出来ん。宗近の言は真率しんそつなる彼の、裏表の見界みさかいなく、
 母の口占くちうらを一図いちずにそれと信じたる反響か。平生へいぜいのかれこれから
 推おして見ると多分そうだろう。よもや、母から頼まれて、曇る
 胸の、われにさえ恐ろしき淵ふちの底に、詮索さぐりの錘おもりを投げ込むよう
 な卑劣な振舞はしまい。けれども、正直な者ほど人には使われ
 やすい。卑劣と知って、人の手先にはならんでも、われに対す
 る好意みそくから、見損みそくなつた母の意を承うけて、御互に面白からぬ結
 果を、必然きていの期程以前に、家庭のなかに打ち開まける事がないと

も限らん。いずれにしても入らぬ口は発^きくまい。

二人はしばらく無言である。隣家^{となり}ではまだ琴^{こと}を弾^ひいている。

「あの琴は生田流^{いくたりゆう}かな」と甲野さんは、つかぬ事を聞く。

「寒くなつた、狐の袖^{ちやんちやん}無でも着よう」と宗近君も、つかぬ事を

云う。二人は離れ離れに口を発^はいている。

丹前の胸を開いて、違棚^{ちがいだな}の上から、例の異様な胴衣^{チョツキ}を取り下

ろして、体^{たい}を斜^なめに腕を通した時、甲野さんは聞いた。

「その袖^{ちやんちやん}無は手製か」

「うん、皮は支那に行つた友人から貰つたんだがね、表は糸公
が着けてくれた」

「本物だ。旨^{うま}いもんだ。御糸^{おいと}さんは藤尾なんぞと違って実用的

に出来ているからいい」

「いいか、ふん。彼奴^{あいつ}が嫁に行くと少々困るね」

「いい嫁の口はないかい」

「嫁の口か」と宗近君はちよつと甲野さんを見たが、氣の乗らない調子で「無い事もないが……」とだらりと言葉の尾を垂れた。甲野さんは問題を転じた。

「御糸さんが嫁に行くと御叔父おじさんも困るね」

「困つたつて仕方がない、どうせいつか困るんだもの。——それよりか君は女房を貰わないのかい」

「僕か——だつて——食わす事が出来ないもの」

「だから御母おつかさんの云う通りに君が家うちを襲つかいで……」

「そりや駄目だよ。母が何と云つたつて、僕は厭いやなんだ」

「妙だね、どうも。君が判然しないもんだから、藤尾さんも嫁に行かれないんだろう」

「行かれないんじゃない、行かないんだ」

宗近君はだまって鼻をぴくつかせている。

「また鰐はもを食わせるな。毎日鰐ばかり食って腹の中が小骨だらけだ。京都と云う所は実に愚ぐな所だ。もういい加減に帰ろうじゃないか」

「帰つてもいい。鰐ぐらいなら帰らなくつてもいい。しかし君の嗅覚きゅうかくは非常に鋭敏だね。鰐の臭がするかい」

「するじゃないか。台所でしきりに焼いていらあね」

「そのくらい虫が知らせると阿爺おやじも外国で死ななくつても済んだかも知れない。阿爺は嗅覚が鈍かったと見える」

「ハハハハ。時に御叔父さんの遺物はもう、着いたか知ら」

「もう着いた時分だね。公使館の佐伯さえきと云う人が持つて来てくれるはずだ。——何にもないだろう——書物が少しあるかな」

「例の時計はどうしたろう」

「そうそう。倫敦^{ロンドン}で買った自慢の時計か。あれは多分来るだろう。小供の時から藤尾の玩具^{おもちゃ}になった時計だ。あれを持つとなかなか離さなかったもんだ。あの鍔^{くさり}に着いている柘榴石^{ガーネット}が気に入ってね」

「考えると古い時計だね」

「そうだろう、阿爺^{おや}が始めて洋行した時に買ったんだから」

「あれを御叔父さんの片身^{かたみ}に僕にくれ」

「僕もそう思っていた」

「御叔父さんが今度洋行するときね、帰ったら卒業祝にこれを御前にやろうと約束して行つたんだよ」

「僕も覚えている。——ことによると今頃は藤尾が取つてまた玩具^{おもちゃ}にしているかも知れないが……」

「藤尾さんとあの時計はどうてい離せないか。ハハハハなに構

わない、それでも貰おう」

甲野さんは、だまって宗近君の眉まゆの間を、長い事見ていた。御昼の膳ぜんの上には宗近君の予言通り鱧はもが出た。

四

甲野こうのさんの日記の一筋に云う。

「色を見るものは形を見ず、形を見るものは質を見ず」

小野さんは色を見て世を暮らす男である。

甲野さんの日記の一筋にまた云う。

「生死しょうし因縁いんねん無了期むりょうき、色相世界現狂癡しきそうせかいきやうちをげんず」

小野さんは色相世界しきそうに住する男である。

小野さんは暗い所に生れた。ある人は私生児だとさえ云う。

筒袖つつそでを着て学校へ通う時から友達に苛められていた。行く所で犬に吠えられた。父は死んだ。外で辛い目に遇った小野さんは帰る家が無くなった。やむなく人の世話になる。

水底みなそこの藻もは、暗い所に漂ただようて、白帆行く岸辺に日のあたる事を知らぬ。右に揺うごこうが、左りに靡なびこうが翻なぶるは波である。ただその時々逆さからわなければ済む。馴なれては波も気にならぬ。波は何物ぞと考える暇ひまもない。なぜ波がつらく己おのれにあたるかは無論問題には上らぬ。上ったところで改良は出来ぬ。ただ運命が暗い所に生はえていろと云う。そこで生えている。ただ運命が朝な夕なに動けと云う。だから動いている。——小野さんは水底の藻であつた。

京都では孤堂先生こどうの世話になつた。先生から緋かすりの着物をこしらえて貰つた。年に二十円の月謝も出して貰つた。書物も時々教

わった。祇園ぎおんの桜をぐるぐる周まわる事を知った。知恩院ちおんいんの勅額ちよくがくを見上げて高いものと悟った。御飯いちにんまえも一人前は食うようになった。水底の藻は土を離れてようやく浮かび出す。

東京は目の眩くらむ所である。元禄げんろくの昔に百年の寿ことぶきを保ったものは、明治の代よに三日住んだものよりも短命である。余所よそでは人が蹠かかとであるいている。東京では爪先つまさきであるく。逆立さかだちをする。横に行く。気の早いものは飛んで来る。小野さんは東京できりきりと回った。

きりきりと回った後あとで、眼を開けて見ると世界が変っている。眼を擦こすつても変っている。変だと考えるのは悪わるく変った時である。小野さんは考えずに進んで行く。友達ともだちは秀才だと云う。教授は有望だと云う。下宿では小野さん小野さんと云う。小野さんは考えずに進んで行く。進んで行ったら陛下から銀時計を

賜^{たま}わつた。浮かび出した藻^もは水面で白い花をもつ。根のない事には気がつかぬ。

世界は色の世界である。ただこの色を味^{あじ}えば世界を味^{あじ}わつたものである。世界の色は自己の成功につれて鮮^{あざ}やかに眼^うに映^{うつ}る。鮮やかなる事錦^{あざむ}を欺^{あざむ}くに至^{いた}つて生きて甲斐^{かい}ある命^{こと}は貴^{とう}とい。小野^{おの}さんの手巾^{ハンケチ}には時々へりオトロープの香^{にお}がする。

世界は色の世界である、形は色の残骸^{なきがら}である。残骸^{あげつら}を論^{ろん}つて中味^{うちま}の旨^{うま}きを解^とせぬものは、方円^{うつつわ}の器^かに拘^かわつて、盛り上^ある酒^{さけ}の泡^{あわ}をどう片^{くち}づけてしかるべきかを知らぬ男である。いかに見^み極^{きわ}めても皿^わは食^くわれぬ。唇^{くちびる}を着^きけぬ酒^{さけ}は氣^きが抜^ぬける。形式^{けいしき}の人は、底^{そこ}のない道義^{みちぎ}の后^{あと}を抱^{いだ}いて、路頭^{きよくせき}に跼^こ蹐^こしている。

世界は色の世界である。いたずらに空華^{くうげ}と云い鏡花^{きやうか}と云う。真如^{しんにょ}の実相^{じつさう}とは、世に容^いれられぬ畸形^{きけい}の徒^たが、容^うれられぬ恨^{うら}みを、

こくてんきょうり⁴
 黒※郷裏に晴らすための妄想である。盲人は鼎を撫でる。色が
 見えねばこそ形が究め^{きわ}たくなる。手のない盲人は撫でる事をす
 らあえてせぬ。ものの本体を耳目のほかに求めんとするは、手
 のない盲人の所作^{しよさ}である。小野さんの机の上には花が活^いけてあ
 る。窓の外には柳が緑を吹く。鼻の先には金縁の眼鏡^{めがね}が掛かっ
 ている。

絢爛^{けんらん}の域を超えて平淡に入るは自然の順序である。我らは昔^{むか}
 し赤ん坊と呼ばれて赤いべべを着せられた。大抵^{たいてい}のものは絵画^{にしきえ}
 のなかに生い立って、四条派^{しじょうは}の淡彩から、雲谷流^{うんこく}の墨画^{すみえ}に老い
 て、ついに棺桶^{かんおけ}のはかなきに親しむ。顧^{かえり}みると母がある、姉が
 ある、菓子がある、鯉^{こい}の幟^{のぼり}がある。顧みれば顧みるほど華麗^{はなやか}で

ある。小野さんは趣^{おもむき}が違^{ちが}う。自然の径路^{けいろ}を逆^{さか}しまにして、暗い土から、根を振り切つて、日の透^{とお}る波の、明^あるい渚^{なぎさ}へ漂^{ただよ}うて来た。——坑^{あな}の底で生れて一段ごとに美しい浮世へ近寄るためには二十七年かかった。二十七年の歴史を過去の節穴^{ふしあな}から覗^{のぞ}いて見ると、遠くなればなるほど暗い。ただその途中に一点の紅^{くれなゐ}がほのかに揺^{うご}いている。東京へ来^きたてにはこの紅が恋しくて、寒い記憶を繰り返すのも厭^{いと}わず、たびたび過去の節穴を覗いては、長^よき夜を、永き日を、あるは時雨^{しぐ}るるをゆかしく暮らした。今は——紅もだいぶ遠退^{とおの}いた。その上、色もよほど褪^さめた。小野さんは節穴を覗く事を怠^{おこ}たるようになった。

過去の節穴^{ふさ}を塞^{ふさ}ぎかけたものは現在に満足する。現在が不景気だと未来を製造する。小野さんの現在は薔薇^{ばら}である。薔薇の蕾^{つばみ}である。小野さんは未来を製造する必要はない。蕾^{つばみ}んだ薔薇

を一面に開かせればそれが自^{おのず}からなる彼の未来である。未来の節穴^{つち}を得意の管^{くだ}から眺^{なが}めると、薔薇はもう開いている。手を出せば捕^{つか}まえられそうである。早く捕^{つか}まえろと誰かが耳^その傍^{そば}で云う。小野さんは博士論文を書くように決心した。

論文が出来たから博士になるものか、博士になるために論文が出来るものか、博士に聞いて見なければ分らぬが、とにかく論文を書かねばならぬ。ただの論文ではならぬ、必^{かな}ず博士論文でなくてはならぬ。博士は学者のうちで色のもつとも見事なるものである。未来の管を覗^{のぞ}くたびに博士の二字が金^{こん}色^{じき}に燃えている。博士の傍には金時計が天から懸^かつている。時計の下には赤い柘榴石^{ガーネット}が心臓^{ほのお}の焰^{ほのお}となつて揺れている。その側^{わき}に黒い眼の藤尾^{ほそ}さんが繊^{ほそ}い腕^{うで}を出して手招^{てまね}ぎをしている。すべてが美しくい画^えである。詩人の理想はこの画の中の人物となるにある。

昔^{むか}しタンタラスと云う人があつた。わるい事をした罰^{ばち}で、苛^{ひど}
 い目に逢^おうたと書いてある。身体^{からだ}は肩深く水に浸^{ひた}っている。頭
 の上には旨^{うま}そうな菓物^{くだもの}が累々と枝をたわわに結実^なっている。タ
 ンタラスは咽喉^{のど}が渴^{かわ}く。水を飲もうとすると水が退^ひいて行く。
 タンタラスは腹が減る。菓物を食おうとすると菓物が逃^すげて行
 く。タンタラスの口が一尺動くと向うでも一尺動く。二尺前^すむ
 と向うでも二尺前む。三尺四尺は愚か、千里を行き尽しても、
 タンタラスは腹が減り通しで、咽喉が渴き続けである。おおか
 た今でも水と菓物を追つ懸^かけて歩いてるだろう。——未来の管
 を覗くたびに、小野さんは、何だかタンタラスの子分のような
 気がする。それのみではない。時によると藤尾さんがつんと澄
 ましている事がある。長い眉^{まゆ}を押しつけたように短かくして、
 屹^{きつ}と睨^{にら}めている事がある。柘榴石がぱつと燃えて、燄のなかに、

女の姿が、包まれながら消えて行く事がある。博士の二字がだんだん薄くなつて剥はげながら暗くなる事がある。時計が遙はるかな天から隕石いんせきのように落ちて来て、割れる事がある。その時はびしりと云う音がする。小野さんは詩人であるからいろいろな未来を描えがき出す。

机の前に頬杖ほおづえを突いて、色硝子いろガラスの一輪挿いちりんざしをぱつと蔽おおう椿つばきの花の奥に、小野さんは、例によつて自分の未来を覗のぞいている。幾通りもある未来のなかで今日は一層出来がわるい。

「この時計をあなたに上げたいんだけど」と女が云う。どうか下さいと小野さんが手を出す。女がその手をびしやりと平手ひらてでたたいて、御気の毒様もう約束済ですと云う。じゃ時計は入りません、しかしあなたは……と聞くと、私？ 私は無論時計にくつつ付むいているんですと向むをむいて、すたすた歩き出す」

小野さんは、ここまで未来をこしらえて見たが、余り殘刻な
 のに驚いて、また最初から出直そうとして、少し痛くなり掛け
 た腰あしを持ち上げると、障子しょうじが、すうと開あいて、御手紙ですと下
 女が封書を置いて行く。

「小野清三様」と子昂流すじうりゅうにかいた名宛なあてを見た時、小野さんは、急
 に両肱りょうひじに力を入れて、机に持たした体たいを跳はねるように後へ引い
 た。未来を覗つばきく椿くだの管が、同時に揺れて、唐紅からくれないの一片ひとひらがロゼツ
 チの詩集の上に音なく落ちて来る。完まったき未来は、はや崩くずれか
 けた。

小野さんは机に添ひだえて左りの手を伸のびしたまま、顔を斜ななめに、
 受け取った封書を掌てのひらの上に遠くから眺ながめていたが、容易に裏を
 返さない。返さんでもおおかたの見当けんとうはついている。ついでい
 ればこそ返しにくい。返した暁に推察の通りであつたなら、そ

れこそ取り返しがつかぬ。かつて亀に聞いた事がある。首を出す
と打たれる。どうせ打たれるとは思いつながら、出来るならば
と甲羅こうらの中に立て籠こもる。打たれる運命を眼前に控えた間際まぎわでも、
一刻の首は一刻だけ縮めていたい。思うに小野さんは事実の判
決を一寸いっすんに逃のがれる学士の亀であろう。亀は早晚首を出す。小野
さんも今に封筒の裏を返すに違ない。

良やしばらく眺ながめていると今度は掌がむず痒がくなる。一刻の
安やすきを貪むさぼった後あとは、安やすき思おもいを、なお安くするために、裏返して
得心得心したくなる。小野さんは思い切つて、封筒を机の上に逆さかに
置いた。裏から井上孤堂いのうえこどうの四字が明かにあらわれる。白い状袋
に墨を惜しまず肉太に記した草字そうじは、小野さんの眼に、針の先
を並べて植えつけたように紙を離れて飛びついて来た。

小野さんは障さわらぬ神に祟たたりなしと云う風で、両手を机から離す。

ただ顔だけが机の上の手紙に向いている。しかし机と膝ひざとは一尺の谷で縁が切れている。机から引き取った手は、ぐにやりとして何だか肩から抜けて行きそうだ。

封を切ろうか、切るまいか。だれか来て封を切れと云えば切らぬ理由を説明して、ついでに自分も安心する。しかし人を屈伏させないとどうして自分も屈伏させる事が出来ない。あやふやな柔術使は、一度往来で人を抛なげて見ないうちはどうも柔術家たる所以ゆえんを自分に証明する道がない。弱い議論と弱い柔術は似たものである。小野さんは京都以来の友人がちよつと遊びに来てくれればいいと思つた。

二階の書生がヴァイオリンを鳴らし始めた。小野さんも近日うちにヴァイオリンの稽古を始めようとしている。今日はそんな気もいつこう起らぬ。あの書生は呑気のんきで羨うらやましいと思う。――

椿の花片はなびらがまた一つ落ちた。

一輪挿いちりんざしを持ったまま障子あを開けて椽側えんがわへ出る。花は庭へ棄すて

た。水もついでにあげた。花活はないけは手に持つてゐる。実は花活も

ついでに棄てるところであつた。花活を持つたまま椽側に立つ

てゐる。檜ひのきがある。塀へいがある。向むこうに二階がある。乾きかけた庭

に雨傘が干ほしてある。蛇じゃの目の黒い縁ふちに落花らっかが一片貼ふたひらへばりついてい

る。その他いろいろある。ことごとく無意義にある。みんな器

械的である。

小野さんは重い足を引き擦すつてまた部屋のなかへ這入はいつて来

た。坐らずに机の前に立つてゐる。過去の節穴ふしあながすうと開あいて

昔の歴史が細長く遠くに見える。暗い。その暗いなかの一点が

ぱつと燃え出した。動いて来る。小野さんは急に腰を屈かがめて手

を伸ばすや否や封を切つた。

「拜啓柳暗花明の好時節と相成候処いよいよ御壮健奉賀がしたてまつり

そうろう

候。小生も不相変頑強、小夜も息災に候えば、乍憚御休はばかりながら

くださるべくそうろう

きゆうろう

神可被下候。さて旧臘中一寸申上候東京表へ転住の義、其後そのご

はか

色々の事情にて捗どりかね候所、此程に至り諸事好都合に埒らち

あき、いよいよ近日中に断行の運びに至り候はずにつき左様

くだされたくそうろう

御承知被下度候。二十年前に其地を引き払い候儘、両度の

とうりゆう

上京に、五六日の逗留の外は、全く故郷の消息に疎く、万事

うと

不案内に候えば到着の上は定めて御厄介の事と存候。

ふ

「年来住み古るしたる住宅は隣家蔦屋にて譲り受け度旨申込

つたや

たきむねもうしこみ

これあり

有之、其他にも相談の口はかかり候えども、此方に取り極め

こちら

申候。荷物其他嵩張り候ものは皆当地にて売払い、なるべく

かさば

手輕に引き移るつもりに御座候。唯小夜所持の琴一面は本人

こと

の希望により、東京迄持ち運び候事に相成候。故きを棄てが

ふる

たき婦女の心情御憐察可被^{くださるべくそうろう}下候。

「御承知の通小夜^{とおり}は五年前当地^{ぜん}に呼び寄せ候迄、東京にて学

校教育を受け候事とて切に転住^{すみや}の速かなる事を希望致し居

候。同人行末^{ゆくすえ}の義に關しては大略御同意の事と存じ候えば別

に不申述^{もうしのべず}。追て其地にて御面会^{ざつと}の上篤^{とく}と御協議申上度と存候。

「博覽会にて御地は定めて雜沓^{ざつと}の事と存候。出立の節はなる

べく急行の夜汽車^{えら}を撰^{えら}みたくと存じ候えども、急行は非常の乗

客の由につき、一層途中^{いつそ}にて一二泊の上ゆるゆる上京致すや

も計りがたく候。時刻限はいずれ確定次第御報可致^{いたすべくそうろう}候。

まずは右当用迄^{そうそう}匆々不一

読み終つた小野さんは、机の前に立つたままである。巻き納

めぬ手紙は右の手からだらりと垂れて、清三様……孤堂とかい

た端^{はじ}が青いカシミヤの机掛の上に波を打つて二三段に畳まれて

いる。小野さんは自分の手元から半切れを伝わって机掛の白く染め抜かれているあたりまで順々に見下して行く。見下した眼の行き留^{どま}った時、やむを得ず、睛^{ひとみ}を転じてロゼツチの詩集を眺めた。詩集の表紙の上に散った二片の紅も眺めた。紅に誘われて、右の角^{かど}に在るべき色硝子の一輪挿も眺めようとした。一輪挿はどこかへ行つてあらぬ。一昨日挿^{おととい}した椿^{つばき}は影も形もない。うつくしい未来を覗く管^{くだ}が無くなった。

小野さんは机の前へ坐った。力なく巻き納める恩人の手紙のなかから妙な臭^{のぼ}が立ち上る。一種古^{ちゆうちよ}ぼけた黴臭^{かびくさ}いにおいが上る。過去のにおいである。忘れんとして躊躇^{ちゆうちよ}する毛筋の末を引いて、細^{えにし}い縁^{えにし}に、絶えるほどにつながる今と昔を、面^まのあたりに結び合^にわす香^{におい}である。

半世の歴史を長き穂の心細きまで逆^{さか}しまに尋^{さか}ぬれば、溯^{さかのぼ}るほ

どに暗澹^{あんたん}となる。芽を吹く今の幹なれば、通わぬ脈の枯れ枝^えの
 末に、錐^{きり}の力の尖^{とが}れるを幸^{さいわい}と、記憶の命を突き透^{とお}すは要なしと
 云^うわんよりむしろ無惨^{むざん}である。ジェーナスの神は二つの顔に、
 後^{うし}ろをも前をも見る。幸なる小野さんは一つの顔しか持たぬ。
 背^{そびら}を過去に向けた上は、眼に映るは熙^き々たる前程のみである。
 後^{うしろ}を向けばひゆうと北風が吹く。この寒い所をやつとの思いで
 斬り抜けた昨日^{きのう}今日、寒い所から、寒いものが追つ懸^かけて来る。
 今までではただ忘れればよかった。未来の発展の暖^あく鮮^{あざ}やかなる
 うちに、己^{おの}れを捲^まき込んで、一步でも過去を遠退^{とおの}けばそれで済
 んだ。生きている過去も、死んだ過去のうちに静かに鏤^{ちりばめ}られて、
 動くかとは掛念^{けねん}しながらも、まず大丈夫だろうと、その日、そ
 の日に立ち退^のいては、顧みるパノラマの長く連なるだけで、一
 点も動かぬに胸^なを撫^なでていた。ところが、昔しながらとたかを

括^くつて、過去の管^{くだ}を今さら覗いて見ると——動くものがある。われは過去を棄てんとしつつあるに、過去はわれに近づいて来る。逼^{せま}つて来る。静かなる前後と枯れ尽したる左右を乗り超^こえて、暗夜^{やみよ}を照らす提灯^{ちようちん}の火のごとく揺れて来る、動いてくる。小野さんは部屋の中を廻り始めた。

自然は自然を用い尽さぬ。極^{きわ}まらんとする前に何事か起る。単調は自然の敵である。小野さんが部屋の中を廻り始めて半^{はん}分^{ぶん}と立たぬうちに、障子^{しょうじ}から下女の首が出た。

「御客様」と笑いながら云う。なぜ笑うのか要領を得ぬ。御早うと云つては笑い、御帰んなさいと云つては笑い、御飯ですと云つては笑う。人を見て妄^{みだ}りに笑うものは必ず人に求むるところのある証拠である。この下女はたしかに小野さんからある報酬^{ほうしゅ}を求めている。

小野さんは氣のない顔をして下女を見たのみである。下女は失望した。

「通しましょうか」

小野さんは「え、うん」と判然しない返事をする。下女はまた失望した。下女がむやみに笑うのは小野さんに愛嬌があるからである。愛嬌のない御客は下女から見ると半文の価値もない。小野さんはこの心理を心得ている。今日まで下女の人望を繋いだのも全くこの自覚に基づく。小野さんは下女の人望をさえ妄りに落す事を好まぬほどの人物である。

同一の空間は二物によって同時に占有せらるる事能わずと昔の哲学者が云った。愛嬌と不安が同時に小野さんの脳髓に宿る事はこの哲学者の発明に反する。愛嬌が退いて不安が這入る。下女は悪むるところへぶつかった。愛嬌が退いて不安が這入る。

愛嬌が附焼刃つけやきばで不安が本体だと思ふのは偽哲学者である。家主いえぬしが這入るについて、愛嬌が示談じだんの上、不安に借家を譲り渡したまでである。それにしても小野さんは悪いところを下女に見られた。

「通してもいいんですか」

「うん、そうさね」

「御留守だつて云いましょうか」

「誰だい」

「浅井さん」

「浅井か」

「御留守？」

「そうさね」

「御留守になさいますか」

「どう、しようか知ら」

「どっち、でも」

「逢^あおうかな」

「じゃ、通しましょう」

「おい、ちよつと、待った。おい」

「何です」

「ああ、好^いい。好^よし好^し」

友達には逢いたい時と、逢いたくない時とある。それが判然すれば何の苦もない。いやなら留守を使えば済む。小野さんは先方の感情を害せぬ限りは留守を使う勇氣のある男である。ただ困るのは逢いたくもあり、逢いたくもなくて、前へ行つたり後^{うし}ろへ戻つたりして下女にまで馬鹿にされる時である。

往来で人と往き合う事がある。双方でちよつと体^{たい}を交^かわせば、

それぎりで御互にもとの通り、あかの他人となる。しかし時によると両方で、同じ右か、同じ左りへ避ける。これではならぬと反対の側へ出ようと、足元を取り直すとき、向うもこれではならぬと気を換えて反対へ出る。反対と反対が鉢合せをして、おいしまったと心づいて、また出直すと、同時同刻に向うでも同様に直直してくる。兩人は出直そうとしては出遅れ、出遅れては出直そうとして、柱時計の振子のようにこつち、あつちと迷い続けに迷うてくる。しまいには双方で双方を思い切りの悪るい野郎だと悪口が云いたくなる。人望のある小野さんは、もう少しで下女に思い切りの悪るい野郎だと云われるところであつた。

そこへ浅井君が這入ってくる。浅井君は京都以来の旧友である。茶の帽子のいささか崩れかかったのを、右の手で押し潰す。

ように握つて、畳の上へ抛り出すや否や

「ええ天気だな」と胡坐あぐらをかく。小野さんは天気のことを忘れていた。

「いい天気だね」

「博覧会へ行つたか」

「いいや、まだ行かない」

「行つて見い、面白いぜ。昨日きのう行つての、アイスクリームを食

うて来た」

「アイスクリーム？　そう、昨日はだいぶ暑かったからね」

「今度は露西亞料理ロシアを食いに行くつもりだ。どうだいっしょに行かんか」

「今日かい」

「うん今日でもいい」

「今日は、少し……」

「行かんか。あまり勉強すると病気になるぞ。早く博士になって、美しい嫁さんでも貰おうと思うてけつかる。失敬な奴ちゃ」

「なにそんな事はない。勉強がちつとも出来なくなつて困る」

「神経衰弱だろう。顔色が悪いぞ」

「そうか、どうも心持ちがわるい」

「そうだろう。井上の御嬢さんが心配する、早く露西亞料理でも食うて、好うならんと」

「なぜ」

「なぜって、井上の御嬢さんは東京へ来るんだらう」

「そうか」

「そうかつて、君の所へは無論通知が来たはずじゃ」

「君の所へは来たかい」

「うん、来た。君の所へは来んのか」

「いえ来た事は来たがね」

「いつ来たか」

「もう少し先刻さつきだった」

「いよいよ結婚するんだろう」

「なにそんな事があるものか」

「せんのか、なぜ？」

「なぜって、そこにはだんだん深い事情があるんだがね」

「どんな事情が」

「まあ、それはおつて緩ゆるつくり話すよ。僕も井上先生には大変世話になったし、僕ので出来る事は何でも先生のためにする気なんだがね。結婚なんて、そう思う通りに急に出来るものじゃないさ」

「しかし約束があるんだろう」

「それがね、いつか君にも話そう話そうと思っていたんだが、
——僕は実に先生には同情しているんだよ」

「そりゃ、そうだろう」

「まあ、先生が出て来たら緩ゆつくり話そうと思うんだね。そう向うだけで一人ひとりぎめにきめていても困るからね」

「どんなに一人できめているんだい」

「きめているらしいんだね、手紙の様子で見ると」

「あの先生も随分昔むかし堅かたき気だからな」

「なかなか自分できめた事は動かない。一徹いつてつなんだ」

「近頃くらは家計の方も余りよくないんだろう」

「どうかね。そう困りもしまい」

「時に何時なんじかな、君ちよつと時計を見てくれ」

「二時十六分だ」

「二時十六分？——それが例の恩賜の時計か」

「ああ」

「^{うま}旨い事をしたなあ。僕も貰つて置けばよかった。こう云うものを持つていると世間の受けがだいぶ違うな」

「そう云う事もあるまい」

「いやある。何しろ天皇陛下が保証して下さったんだからたしかだ」

「君これからどこかへ行くのかい」

「うん、天気がいいから遊ぶんだ。どうだいつしよに行かんか」
「僕は少し用があるから——しかしそこまでいつしよに出よう」
「^{かどぐち}門口で分れた小野さんの足は甲野の邸に向った。」

山門を入れる事一步にして、古き世の緑りが、急に左右から肩を襲う。自然石の形状乱れたるを幅一間に行儀よく並べて、錯落と平らかに敷き詰めたる徑に落つる足音は、甲野さんと宗近君の足音だけである。

一条の径の細く直なるを行き尽さざる此方から、石に眼を添えて遙かなる向うを極むる行き当りに、仰げば伽藍がある。木賊茸の厚板が左右から内輪にうねって、大なる両の翼を、陰しき一本の背筋にあつめたる上に、今一つ小さき家根が小さき翼を伸して乗っかっている。風抜きか明り取りかと思われる。甲野さんも、宗近君もこの精舎を、もつとも趣きある横側の角度から同時に見上げた。

「明かだ」と甲野さんは杖つえを停とどめた。

「あの堂は木造でも容易に壊す事が出来ないように見える」

「つまり恰好かつこうが旨うまくそう云う風に出来てるんだらう。アリストー

トルのいわゆる理形フオームに適かなつてるのかも知れない」

「だいぶむずかしいね。——アリストートルはどうでも構わな

いが、この辺の寺はどれも、一種妙な感じがするのは奇体だ」

「舟板塀趣味ふないたべいしゅみや御神灯趣味ごじんとうしゅみとは違うさ。夢窓国師むそうこくしが建てたんだ

もの」

「あの堂を見上げて、ちよつと変な気になるのは、つまり夢窓国師になるんだな。ハハハハ。夢窓国師も少しは話せらあ」

「夢窓国師や大燈国師になるから、こんな所を逍遙しょうようする価値があるんだ。ただ見物したって何になるもんか」

「夢窓国師も家根やねになつて明治まで生きていれば結構だ。安直あんちよく

な銅像よりよつぽどいいね」

「そうさ、いちもくりようぜん一目瞭然だ」

「何が」

「何がって、この境内けいだいの景色けしきがさ。ちつとも曲つていない。どこまでも明らかだ」

「ちようどおれのようだな。だから、おれは寺へ這入はいると好い気持ちになるんだろう」

「ハハハそうかも知れない」

「して見ると夢窓国師がおれに似ているんで、おれが夢窓国師に似ているんじゃない」

「どうでも、好いさ。——まあ、ちつと休もうか」と甲野さんは蓮池れんちに渡した石橋せつきょうの欄干らんかんに尻をかける。欄干の腰には大きな三階松さんがいまつが三寸の厚さを透すかして水に臨んでいる。石には苔こけの斑ふ

が薄青く吹き出して、灰を交えた紫の質に深く食い込む下に、
枯蓮の黄な軸がすいすいと、去年の霜を弥生の中に突き出して
いる。

宗近君は燐寸を出して、煙草を出して、しゅつと云わせた燃
え残りを池の水に棄てる。

「夢窓国師はそんな悪戯はしなかった」と甲野さんは、
に、両手で杖の頭を丁寧に抑えている。

「それだけ、おれより下等なんだ。ちつと宗近国師の真似をす
るが好い」

「君は国師より馬賊になる方がよからう」

「外交官の馬賊は少し変だから、まあ正々堂々と北京へ駐在す
る事にするよ」

「東洋専門の外交官かい」

「東洋の経緯さ。ハハハハ。おれのようなのはとうてい西洋には向きそうもないね。どうだろう、それとも修業したら、君のおやじ阿爺ぐらいにはなれるだろうか」

「阿爺のように外国で死なれちや大変だ」

「なに、あとは君に頼むから構わない」

「いい迷惑だね」

「こつちだつてただ死ぬんじゃない、天下国家のために死ぬんだから、そのくらいな事はしてもよからう」

「こつちは自分一人を持て余しているくらいだ」

「元来、君は我儘過わがままぎるよ。日本と云う考が君の頭のなかにあるかい」

今までは真面目の上に冗談じょうだんの雲がかかっていた。冗談の雲はこの時ようやく晴れて、下から真面目が浮き上がって来る。

「君は日本の運命を考えた事があるのか」と甲野さんは、杖の先に力を入れて、持たした体を少し後ろへ開いた。

「運命は神の考えるものだ。人間は人間らしく働けばそれで結構だ。日露戦争を見ろ」

「たまたま風邪が癒れば長命だと思ってる」

「日本が短命だと云うのかね」と宗近君は詰め寄せた。

「日本と露西亞の戦争じゃない。人種と人種の戦争だよ」

「無論さ」

「亜米利加を見ろ、印度を見ろ、亜弗利加を見ろ」

「それは叔父さんが外国で死んだから、おれも外国で死ぬと云う論法だよ」

「論より証拠誰でも死ぬじゃないか」

「死ぬのと殺されるのとは同じものか」

「大概は知らぬ間に殺されているんだ」

すべてを爪弾きした甲野さんは杖の先で、とんと石橋を敲い

て、ぞつとしたように肩を縮める。宗近君はぬつと立ち上がる。

「あれを見ろ。あの堂を見ろ。峩山と云う坊主は一椀の托鉢だ

けである本堂を再建したと云うじゃないか。しかも死んだのは

五十になるか、ならんうちだ。やろうと思わなければ、横に寝

た箸を豎にする事も出来ん」

「本堂より、あれを見ろ」と甲野さんは欄干に腰をかけたまま、

反対の方角を指す。

世界を輪切りに立て切った、山門の扉を左右に颯と開いた中

を、——赤いものが通る、青いものが通る。女が通る。小供が

通る。嵯峨の春を傾けて、京の人は繽紛絡繹と嵐山に行く。「あ

れだ」と甲野さんが云う。二人はまた色の世界に出た。

天竜寺の門前を左へ折れれば釈迦堂しゃかどうで右へ曲れば渡月橋とげつきようである。

京は所の名さえ美しい。二人は名物と銘打った何やらかやらをやたらに並べ立てた店を両側に見て、停車場ステーションの方へ旅衣七日余りの足を旅心地に移す。出逢うは皆京の人である。二条からにじよう半時はんときごとに花時あだを空にするなと仕立てる汽車が、今着いたばかりの好男子好女子をことごとく嵐山の花に向つて吐き送る。

「美しいな」と宗近君はもう天下の大勢たいせいを忘れている。京ほどに女の綺羅きらを飾る所はない。天下の大勢も、京女きようおんなの色には叶かなわぬ。

「京都のものは朝夕都踊りをしている。気楽なものだ」

「だから小野的だと云うんだ」

「しかし都踊はいいよ」

「悪わるるくないね。何となく景気けいきがいい」

「いいえ。あれを見るとほとんど異性セックスの感がない。女もあれほどに飾ると、飾りまけがして人間の分子が少なくなる」

「そうさその理想の極端は京人形だ。人形は器械だけに厭味いやみがない」

「どうも淡粧あつさりして、活動する奴が一番人間の分子が多くつて危険だ」

「ハハハハいかなる哲学者でも危険だろうな。ところが都踊となると、外交官にも危険はない。至極しごく御同感だ。御互に無事な所へ遊びに来てまあ善よかつたよ」

「人間の分子も、第一義が活動すると善いが、どうも普通は第十義ぐらいがむやみに活動するから厭いやになつちまう」

「御互は第何義ぐらいだろう」

「御互になると、これでも人間が上等だから、第二義、第三義

以下には出ないね」

「これでかい」

「云う事はたわいがなくつても、そこに面白味がある」

「ありがたいな。第一義となると、どんな活動だね」

「第一義か。第一義は血を見ないと出て来ない」

「それこそ危険だ」

「血でもつてふざけた了見りようけんを洗った時に、第一義が躍然とあらわれる。人間はそれほど軽薄なものなんだよ」

「自分の血か、人の血か」

甲野さんは返事をする代りに、売店に陳ならべてある、抹茶茶碗まっちゃぢゃわんを見始めた。土を捏こねて手造りにしたものか、棚三段を尽くして、あるものはことごとくとぼけている。

「そんなとぼけた奴は、いくら血で洗ったって駄目だろう」と

宗近君はなおまつわつて来る。

「これは……」と甲野さんが茶碗の一つを取り上げて眺^{なが}めている袖^{そで}を、宗近君は断わりもなく、力任せにぐいと引く。茶碗は土間の上で散々に壊れた。

「こうだ」と甲野さんが壊れた片^{かけ}を土の上に眺めている。

「おい、壊れたか。壊れたって、そんなものは構わん。ちよつとこつちを見ろ。早く」

甲野さんは土間の敷居^{また}を跨ぐ。「何だ」と天竜寺の方を振り返る向うは例の京人形の後姿がぞろぞろ行くばかりである。

「何だ」と甲野さんは聞き直す。

「もう行つてしまった。惜しい事をした」

「何が行つてしまったんだ」

「あの女がさ」

「あの女とは」

「隣りのさ」

「隣りの？」

「あの琴ことの主さ。君が大いに見たがつた娘さ。せつかく見せてやろうと思つたのに、下らない茶碗なんかいじくつているものだから」

「そりや惜しい事をした。どれだい」

「どれだか、もう見えるものかね」

「娘も惜しいがこの茶碗は無残むざんな事をした。罪は君にある」

「有つてたくさんだ。そんな茶碗は洗つたくらいじゃ追おっつかない。壊してしまわなけりや直らない厄やっかい介物だ。全体茶人の持つてゐる道具ほど気に食わないものはない。みんな、ひねくれていゝる。天下の茶器をあつめてことごとくたた敲き壊してやりたい氣が

する。何ならついでだからもう一つ二つ茶碗を壊して行こうじゃないか」

「ふうん、一個何錢ぐらいかな」

二人は茶碗の代を払って、ステーション停車場へ来る。

浮かれ人を花に送る京の汽車は嵯峨さがより二条にじょうに引き返す。引

き返さぬは山を貫いて丹波たんばへ抜ける。二人は丹波行の切符を買つ

て、亀岡かめおかに降りた。保津川ほづがわの急湍きゅうたんはこの駅より下る掟くだである。

下るべき水は眼の前にまだ緩く流れて碧油へきゆうの趣おもむきをなす。岸は開

いて、里の子の摘む土筆つくしも生える。舟子ふなこは舟を渚なぎさに寄せて客を

待つ。

「妙な舟だな」と宗近君が云う。底は一枚板の平らかに、舷こべりは

尺と水を離れぬ。赤い毛布けつとに煙草盆を転がして、二人はよきほ

どの間隔に座を占める。

「左へ寄つていやはつたら、大丈夫どす、波はかかりまへん」
 と船頭が云う。船頭かづの数は四人である。真つ先なるは、二間の
 竹竿たけざお、続つづく二人は右側にかい櫂、左に立つは同じく竿である。
 ぎいぎいとかい櫂が鳴る。粗削あらけずりに平たいらげたるかし櫂の頸筋くびすじを、太い藤蔓ふじづる
 に捲まいて、余る一尺に丸味を持たせたのは、両の手にむんずと
 握る便りである。握る手の節ふしの隆たかきは、真黒きは、松の小枝に
 青筋を立てて、うんと搔かく力の脈を通わせたように見える。藤
 蔓に頸根くびねを抑えられたうなじ櫂が、搔かくごとにしわ撓りでもする事か、強
 き項うなじを真直ますぐに立てたまま、藤蔓と擦すれ、舷と擦れる。櫂は一搔
 ごとにぎいぎいと鳴る。

岸は二三度うねりを打つて、音なき水を、停とどまる暇なきに、
 前へ前へと送る。重かさなる水の蹙しじまつて行く、頭こうべの上には、山城やましろを
 屏風びょうぶと囲う春の山が聳そびえている。逼せまりたる水はやむなく山と山

の間に入る。帽に照る日の、たちまちに影を失うかと思えば舟は早くも山峽さんきょうに入る。保津の瀬はこれからである。

「いよいよ来たぜ」と宗近君は船頭の体たいを透すかして岩と岩の逼る間を半丁むじょうの向むに見る。水はごうと鳴る。

「なるほど」と甲野さんが、舷ふなばたから首を出した時、船ははや瀬の中に滑り込すべんだ。右側の二人はすわと波を切る手を緩める。櫂は流れて舷に着く。舳へうぎに立つは竿を横よこたえたままである。傾かたむいて矢のごとく下る船は、どどどと刻み足に、船底に据えた尻に響く。壊こわれるなと気がついた時は、もう走る瀬を抜けだしていた。

「あれだ」と宗近君が指ゆびす後うしろを見ると、白い泡あわが一町ばかり、逆さかか落しに噛かみ合つて、谷を洩もる微かすかな日影を万顆ばんかの珠たまと我勝われがちに奪い合っている。

「^{さか}壮んなものだ」と宗近君は大いに御意^{ぎよい}に入つた。

「夢窓国師とどっちがいい」

「夢窓国師よりこつちの方がえらいようだ」

船頭は至極^{しごく}冷淡である。松を抱く巖^{いわ}の、落ちんとして、落ちざるを、苦にせぬように、櫂を動かし来り、棹^{さお}を操^{あやつ}り去る。通る瀬はさまざまに廻^{めぐ}る。廻るごとに新たなる山は当面に躍^{おど}り出す。石山、松山、雑木山と数^{ぞうき}うる邊^{いとま}を行客^{こうかく}に許さざる疾^とき流れは、船を駆^かつてまた奔湍^{ほんたん}に躍^{おど}り込む。

大きな丸い岩である。苔^{こけ}を畳む煩^{わづら}わしさを避けて、紫^{むらさき}の裸身^{はだかみ}に、撃^うちつけて散る水沫^{しぶき}を、春寒く腰から浴びて、緑^{くろ}り崩^{くず}る真中に、舟こそ来れと待つ。舟は矢^やも楯^{たて}も物かは。一図^{いちず}にこの大岩を目懸けて突きかかる。渦捲^{うずま}いて去る水の、岩に裂かれたる向うは見えず。削^{けず}られて坂と落つる川底の深さは幾段か、乗

る人のこなたよりは不可思議の波の行末ゆくえである。岩に突き当つて碎けるか、捲まき込まれて、見えぬ彼方かなたにどつと落ちて行くか、——舟はただまともに進む。

「当るぜ」と宗近君が腰を浮かした時、紫の大岩は、はやくも船頭の黒い頭を圧して突つ立つた。船頭は「うん」と舳しりぞに気合を入れた。舟は碎けるほどの勢いに、波を呑のむ岩の太腹もぐに潜り込む。横たえた竿は取り直されて、肩より高く両の手が揚あがると共に舟はぐうと廻つた。この獣奴けだものめと突き離す竿の先から、岩の裾すそを尺も余さず斜めに滑つて、舟は向うへ落ち出した。

「どうしても夢窓国師より上等だ」と宗近君は落ちながら云う。
 急灘きゅうなんを落ち尽すと向むこうから空舟からふねが上のぼつてくる。竿も使わねば、櫂は無論の事である。岩角に突つ張つた懸命こゑしの拳を収めて、肩から斜めくらじまめに目暗縞めくらじまを掠からめた細引繩に、長々と谷間伝いを根限り

戻り舟を牽ひいて来る。水行くほかに尺寸せきすんの余地みいだに見出しがたき岸辺を、石に飛び、岩に這はうて、穿はく草鞋わらんじの滅めり込むまで腰を前に折る。だらりと下げた両の手は塞せかれて注そぐ渦の中に指先を浸ひたすばかりである。うんと踏ん張る幾世いくよの金剛力に、岩は自然じねんと擦すり減つて、引き懸けて行く足の裏を、安々と受ける段々もある。長い竹をここ、かしこと、岩の上に渡したのは、牽綱ひきづなをわが勢さからに逆さからぬほどに、疾とく滑すべらすための策はかりごとと云う。

「少しは穩おだやかになったね」と甲野さんは左右の岸に眼を放つ。踏む角も見えぬ切つ立つた山の遙はるかの上に、鉦なの音おとが丁々ちようちようとする。黒い影は空高く動く。

「まるで猿だ」と宗近君は咽喉のどぼとけ仏を突き出して峰を見上げた。「慣なれると何でもするもんだね」と相手も手を翳かざして見る。

「あれで一日働いて若干いくらになるだろう」

「若干になるかな」

「下から聞いて見みようか」

「この流れは余り急過ぎる。少しも余裕がない。のべつに駛はしっている。所々にこう云う場所がないとやはり行かんね」

「おれは、もつと、駛りたい。どうも、さっきの岩の腹を突いて曲がつた時なんか実に愉快だった。願ねがくは船頭の棹さおを借りて、おれが、舟を廻したかった」

「君が廻せば今頃は御互に成仏じょうぶつしている時分だ」

「なに、愉快だ。京人形を見ているより愉快じゃないか」

「自然は皆第一義で活動しているからな」

「すると自然は人間の御手本だね」

「なに人間が自然の御手本さ」

「それじゃやつぱり京人形党だね」

「京人形はいいよ。あれは自然に近い。ある意味において第一義だ。困るのは……」

「困るのは何だい」

「大抵困るじゃないか」と甲野さんは打ち遣^やった。

「そう困った日にや方^{ほう}が付かない。御手本が無くなる訳だ」

「瀬を下つて愉快だと云うのは御手本があるからさ」

「おれにかい」

「そうさ」

「すると、おれは第一義の人物だね」

「瀬を下つてゐるうちは、第一義さ」

「下つてしまえば凡人か。おやおや」

「自然が人間を翻訳する前に、人間が自然を翻訳するから、御手本はやっぱり人間にあるのさ。瀬を下つて壮快なのは、君の

腹にある壮快が第一義に活動して、自然に乗り移るのだよ。それが第一義の翻訳で第一義の解釈だ」

「肝胆相照らすと云うのは御互に第一義が活動するからだろう」

「まずそんなものに違ない」

「君に肝胆相照らす場合があるかい」

甲野さんは默然^{もくねん}として、船の底を見詰めた。言うものは知らずと昔^{むか}し老子が説いた事がある。

「ハハハハ僕は保津川^{ほづがわ}と肝胆相照らした訳だ。愉快愉快」と宗

近君は二たび三たび手を敲^{たた}く。

乱れ起る岩石を左右に繋^{めぐ}る流は、抱^{いだ}くがごとくそと割れて、半^{みど}ば碧^{みど}りを透明に含む光琳波^{こうりんなみ}が、早蕨^{さわらび}に似たる曲線を描^{えが}いて巖角^{いわかど}をゆるりと越す。河はようやく京に近くなつた。

「その鼻を廻ると嵐山^{らんざん}どす」と長い棹^{さお}を舷^{こべり}のうちへ挿^さし込んだ

船頭が云う。鳴る櫂かいに送られて、深い淵ふちを滑すべるように抜け出すと、左右の岩おのずかが自ら開いて、舟は大悲閣だいひかくの下もとに着いた。

二人は松と桜と京人形の群むらがるなかに這はい上がる。幕と連つらなる袖そでの下を搔かい潜くぐつて、松の間を渡月橋に出た時、宗近君はまた甲野さんの袖をぐいと引いた。

赤松ふたかかえの二抱たてを楯おおいに、大堰の波に、花の影の明かなるを誇る、橋たもとの袂よしずぢややの葭簀茶屋かぶに、高島田が休んでいる。昔まげしの鬘まげを今の世にしばし許せと被かぶる瓜実うりざね顔がおは、花に臨んで風に堪たえず、俯目ふしめに人を避けて、名物の団子ながを眺めてゐる。薄く染めた綸子りんずの被布ひふに、正しく膝を組み合せたれば、下に重ねる衣きぬの色は見えぬ。ただ襟元えりもとより燃え出する何の模様の半襟はんきんかが、すぐ甲野さんの眼に着いた。

「あれだよ」

「あれが？」

「あれが琴を弾いた女だよ。あの黒い羽織は阿爺に違ない」

「そうか」

「あれは京人形じゃない。東京のものだ」

「どうして」

「宿の下女がそう云った」

瓢箪に酔を飾る三五の癡漢が、天下の高笑に、腕を振つて後ろから押して来る。甲野さんと宗近さんは、体を斜めにえらがる人を通した。色の世界は今が真つ盛りである。

六

丸顔に愁少し、颯と映る襟地の中から薄鶯の蘭の花が、幽な

る香を肌^かに吐いて、着けたる人の胸の上にこぼれかかる。糸子^{いとこ}はこんな女である。

人に示すときは指を用いる。四つを掌^{たなごころ}に折つて、余る第二指のありたけにあれぞと指す時、指す手はただ一筋の紛れなく明らかである。五本の指をあれ見よとことごとく伸ばすならば、西東は当るとも、当ると思わるる感じは鈍くなる。糸子は五指を並べたような女である。受ける感じが間違つてゐるとは云えぬ。しかし変だ。物足らぬとは指^さ点す指の短かきに過ぐる場合を云う。足り余るとは指^さ点す指の長きに失する時であろう。糸子は五指を同時に並べたような女である。足るとも云えぬ。足り余るとも評されぬ。

人に指^さ点す指の、細^{ほつ}そりと爪^{つま}先に肉を落すとき、明かなる感じは次第に爪先に集まつて焼^{しょうてん}点を構成^{かたちづく}る。藤尾^{ふじお}の指は爪^{つま}先の紅^{べに}

を抜け出でて縫針の尖とがれるに終る。見るものの眼は一度に痛い。要領を得ぬものは橋を渡らぬ。要領を得過ぎたものは欄干らんかんを渡る。欄干を渡るものは水に落ちる恐れがある。

藤尾と糸子は六畳の座敷で五指と針の先との戦争をしている。すべての会話は戦争である。女の会話はもつとも戦争である。「しばらく御目に懸かりませんね。よくいらしつた事」と藤尾は主人役に云う。

「父一人で忙がしいものですから、つい御無沙汰ごぶさたをして……」
「博覧会へもいらつしやらないの」

「いいえ、まだ」

「向島むこうしまは」

「まだどこへも行かないの」

宅うちにばかりいて、よくこう満足していられると藤尾が思う。

——糸子の眼尻には答えるたびに笑の影が翳^さす。

「そんなに御用が御在^{おあ}りなの」

「なに大した用じゃないんですけれども……」

糸子の答は大概半分で切れてしまう。

「少しは出ないと毒ですよ。春は一年に一度しか来ませんわ」

「そうね。わたしもそう思ってるんですけれども……」

「一年に一度だけでも、死ねば今年ぎりじゃありませんか」

「ホホホ死んじやつまらないわね」

二人の会話は互に、死と云う字を貫いて、左右に飛び離れた。

上野は浅草へ行く路^{みち}である。同時に日本橋へ行く路である。藤

尾は相手を墓の向側^{むこうがわ}へ連れて行こうとした。相手は墓に向側の

ある事さえ知らなかった。

「今に兄が御嫁でも貰ったら、出てあるきますわ」と糸子が云

う。家庭的の婦女は家庭的の答えをする。男の用を足すために生れたと覚悟をしている女ほど憐れなものはない。藤尾は内心にふんと思つた。この眼は、この袖そでは、この詩とこの歌は、鍋なべ、炭取たぐいの類ではない。美くしい世に動く、美しい影である。実用の二字を冠かむらせられた時、女は——美くしい女は——本来の面目を失つて、無上の侮辱を受ける。

「はじめ一さんは、いつ奥さんを御貰いなさるおつもりなんでしよう」と話しだけは上滑うわすべりをして前へ進む。糸子は返事をする前に顔を揚あげて藤尾を見た。戦争はだんだん始まつて来る。

「いつでも、来て下さる方があれば貰うだろうと思ひますの」今度は藤尾の方で、返事をする前に糸子を昵じつと見る。針は真逆まさかの用意に、なかなか瞳ひとみの中うちには出て来ない。

「ホホホどんな立派な奥さんでも、すぐ出来ますわ」

「本当にそうなら、いいんですが」と糸子は半分ほど裏へ絡ま^{から}つてくる。藤尾はちよつと逃げて置く必要がある。

「どなたか心当りはないんですか。一^{はじめ}さんが貰うときまれば本気に搜^さがしますよ」

籬^{もちぎさお}竿は届いたか、届かないか、分らぬが、鳥は確かに逃げたようだ。しかしもう一步進んで見る必要がある。

「ええ、どうぞ搜^さがしてちょうだい、私の姉さんのつもりで」
糸子は際^{きわ}どいところを少し出過ぎた。二十世紀の会話は巧妙なる一種の芸術である。出ねば要領を得ぬ。出過ぎるとはたかれる。

「あなたの方が姉さんよ」と藤尾は向うで入れる搜索^{さぐり}の綱を、ぶつりと切つて、逆^{さか}さまに投げ帰した。糸子はまだ悟らぬ。

「なぜ？」と首を傾ける。

放つ矢のあたらずぬはこちらの不手際である。あたったのに手答てごたえもなく装よそおわるるは不器量である。女は不手際よりは不器量を無念に思う。藤尾はちよつと下唇を噛かんだ。ここまで推おして来て停とどまるは、ただ勝つ事を知る藤尾には出来ない。

「あなたは私の姉さんになりたくはなくつて」と、素知らぬ顔で云う。

「あらつ」と糸子の頬に吾われを忘れた色が出る。敵はそれ見ろと心うちの中で冷笑あざわらつて引き上げる。

甲野さんこうのと宗近君むねちかと相談の上取りきめた格言に云う。――第

一義において活動せざるものは肝胆相照らすを得ずと。両人ふたりの妹は肝胆の外廓そとぐるわで戦争をしている。肝胆の中に引き入れる戦争か、肝胆の外に追つ払う戦争か。哲学者は二十世紀の会話を評して肝胆相曇らす戦争と云った。

ところへ小野さんが来る。小野さんは過去に追い懸け^かられて、下宿の部屋のなかをぐるぐると廻った。何度廻つても逃げ延びられそうもない時、過去の友達に逢つて、過去と現在との調停を試みた。調停は出来たような、出来ないような訳で、自己は依然として不安の状態にある。度胸を据えて、追つ懸けてくるものを取^とつ押^{つか}える勇氣は無論ない。小野さんはやむを得ず、未来を望んで馳^かけ込んで来た。衰竜^{こんりよう}の袖に隠れると云^{こと}う諺^{わざ}がある。小野さんは未来の袖に隠れようとする。

小野さんは蹠^{そうそうろうろう}々^{そうそうろうろう}として来た。ただ蹠^{そうそうろうろう}々^{そうそうろうろう}の意味を説明しがたいのが残念である。

「どうか、なすつたの」と藤尾が聞いた。小野さんは心配の上に被^きせる従容^{しようよう}の紋付^{もんつき}を、まだ誂^{あつら}えていない。二十世紀の人は皆この紋付^{もんつき}を二三着ずつ用意すべしと先の哲学者が述べた事がある。

る。

「大変御顔の色が悪い事ね」と糸子が云った。便る未来が戈を逆さかしまにして、過去をほじり出そうとするのは情なさけない。

「二三日寝られないんです」

「そう」と藤尾が云う。

「どう、なすつて」と糸子が聞く。

「近頃論文を書いていらつしやるの。——ねえそれででしょう」と藤尾が答弁と質問を兼ねた言葉使いをする。

「ええ」と小野さんは渡りに舟の返事をした。小野さんは、どんな舟でも御乗んなさいと云われれば、乗らずにはいられない。たいてい大抵の嘘うそは渡頭ととうの舟である。あるから乗る。

「そう」と糸子は軽く答える。いかなる論文を書こうと家庭的の女子は関係しない。家庭的の女子はただ顔色の悪いところだ

けが気にかかる。

「卒業なすつても御忙しいのね」

「卒業して銀時計を御頂きになったから、これから論文で金時計を御取りになるんですよ」

「結構ね」

「ねえ、そうでしょう。ねえ、小野さん」

小野さんは微笑した。

「それじゃ、兄やこちらの欽吾きんごさんといっしょに京都へ遊びにいらつしやらないはずね。——兄なんぞはそりや呑氣のんきよ。少し寝られなくなればいいと思うわ」

「ホホホそれでも家うちの兄より好いでしよう」

「欽吾さんの方がいくら好いか分かりやしない」と糸子さんは、半分無意識に言つて退のけたが、急に気がついて、羽はぶたえ一重の手巾ハンケチ

を膝の上でくちやくちやに丸めた。

「ホホホホ」

唇の動く間から前歯の角を彩どる金の筋がすつと外界に映る。
敵は首尾よくわが術中に陥った。藤尾は第二の凱歌を揚げる。
「まだ京都から御音信はないですか」と今度は小野さんが聞き出した。

「いいえ」

「だって端書ぐらい来そうなものですね」

「でも鉄砲玉だって云うじやありませんか」

「だれがです」

「ほら、この間、母がそう云ったでしょう。二人共鉄砲玉だつて——糸子さん、ことに宗近は大の鉄砲玉ですとき」

「だれが？ 御叔母さんが？ 鉄砲玉でたくさんよ。だから早

く御嫁を持たしてしまわないとどこへ飛んで行くか、心配でい
けないんです」

「早く貰つて御上げなさいよ。ねえ、小野さん。二人で好いの
を見つけて上げようじゃありませんか」

藤尾は意味有り氣に小野さんを見た。小野さんの眼と、藤尾
の眼が行き当つてぶるぶると顫える。

「ええ好いのを一人周旋しましょう」と小野さんは、手巾を出
して、薄い口髭をちよつと撫でる。幽かな香がぷんとする。強
いのは下品だと云う。

「京都にはだいぶ御知合があるでしょう。京都の方を一さんに
御世話なさいよ。京都には美人が多いそうじゃありませんか」

小野さんの手巾はちよつと勢を失つた。

「なに實際美しくはないんです。——帰つたら甲野君に聞いて

見ると分ります」

「兄がそんな話をするものですか」

「それじゃ宗近君に」

「兄は大変美人が多いと申しておりますよ」

「宗近君は前にも京都へいらした事があるんですか」

「いいえ、今度が始めてですけれども、手紙をくれまして」

「おや、それじゃ鉄砲玉じゃないのね。手紙が来たの」

「なに端書よ。都踊の端書をよこして、そのはじに京都の女はみんな奇麗きれいだと書いてあるのよ」

「そう。そんなに奇麗なの」

「何だか白い顔がたくさん並んでちつとも分らないわ。ただ見たら好いかも知れないけれども」

「ただ見ても白い顔が並んどるばかりです。奇麗は奇麗ですけ

れども、表情がなくつて、あまり面白くはないです」

「それから、まだ書いてあるんですよ」

「無精ぶしように似合わない事ね。何と」

「隣家となりの琴は御前より旨うまいつて」

「ホホホ一さんに琴の批評は出来そうもありませんね」

「私にあてつけたんでしょう。琴がまずいから」

「ハハハ宗近君もだいぶ人の悪い事をしますね」

「しかも、御前より別嬪べっぴんだと書いてあるんです。にくらしいわ

ね」

「一さんは何でも露骨なんですよ。私なんぞも一さんに逢あつちや

叶かなわない」

「でも、あなたの事は褒ほめてありますよ」

「おや、何と」

「御前より別嬪だ、しかし藤尾さんより悪いって」

「まあ、いやだ事」

藤尾は得意と軽侮の念を交えたる眼を輝かして、すらりと首を後ろに引く。鬢に比すべきものの波を起すばかりに見えたるなかに、玉虫貝の堇のみが星のごとく可憐の光を放つ。

小野さんの眼と藤尾の眼はこの時再び合った。糸子には意味が通ぜぬ。

「小野さん三条に蔦屋と云う宿屋がござんすか」

底知れぬ黒き眼のなかに我を忘れて、縫る未来に全く吸い込まれたる人は、刹那の戸板返しにずどんと過去へ落ちた。

追い懸けて来る過去を逃がるるは雲紫に立ち騰る袖香炉の煙る影に、縹緲の樂しみをこれぞと見極むるひまもなく、貪ぼると云う名さえつけがたき、眼と眼のひたと行き逢いたる一撈に、

結ばぬ夢は醒めて、逆しまに、われは過去に向つて投げ返される。草間蛇あり、容易に青を踏む事を許さずとある。

「つたや蔦屋がどうかしたの」と藤尾は糸子に向う。

「なにその蔦屋にね、欽吾さんと兄さんが宿つてゐるんですつて。だから、どんな所かと思つて、小野さんに伺つて見たんです」

「小野さん知つていらしつて」

「三条ですか。三条の蔦屋と。そうですね、有つたようにも覚えていますが……」

「それじゃ、そんな有名な旅屋じゃないんですね」と糸子は無邪気に小野さんの顔を見る。

「ええ」と小野さんは切なそうに答えた。今度は藤尾の番となる。

「有名でなくつたつて、好いじゃありませんか。裏座敷で琴が聴

えて——もつとも兄と一さんじゃ駄目ね。小野さんなら、きつと御氣に入るでしょう。春雨がしとしと降ってる静かな日に、宿の隣家おとなりで美人が琴を弾ひいてるのを、気楽に寝転ねころんで聴いてるのは、詩的でいいじゃありませんか」

小野さんはいつになく黙っている。眼さえ、藤尾の方へは向けないで、床とこの山吹を無意味に眺ながめている。

「好いわね」と糸子が代理に答える。

詩を知らぬ人が、趣味の問題に立ち入る権利はない。家庭的の女子からいいわね、ぐらいの賛成を求めて満足するくらいなら始めから、春雨も、奥座敷も、琴の音ねも、口に出さぬところであつた。藤尾は不平である。

「想像すると面白い画えが出来ますよ。どんな所としたらいいでしょう」

家庭的の女子には、なぜこんな質問が出てくるのか、とんとその意を解げしかねる。要いらぬ事と黙ひかつて控ひかえているより仕方がない。小野さんは是非共口を開かねばならぬ。

「あなたは、どんな所がいいと思います」

「私？ 私はね、そうね——裏二階がいいわ——廻まわり縁えんで、加茂川がすこし見えて——三条から加茂川が見えても好いんでしよう」

「ええ、所によれば見えます」

「加茂川の岸には柳がありますか」

「ええ、あります」

「その柳が、遠くに煙けむるように見えるんです。その上に東山が——東山でしたね奇麗きれいな丸まるい山は——あの山が、青い御供おそなえのよ
うに、こんもりと霞かすんでるんです。そうして霞のなかに、薄く

五重の塔が——あの塔の名は何と云いますか」

「どの塔です」

「どの塔つて、東山の右の角に見えるじゃありませんか」

「ちよつと覚えませぬ」と小野さんは首を傾^{かた}げる。

「有るんです、きつとあります」と藤尾が云う。

「だつて琴は隣りよ、あなた」と糸子が口を出す。

女詩人^{じよしじん}の空想はこの一句で破れた。家庭的の女は美しい世をぶち壊しに生れて来たも同様である。藤尾は少しく眉を寄せ
る。

「大変御急ぎだ事」

「なに、面白く伺つてるのよ。それからその五重の塔がどうか
するの」

五重の塔がどうもする訳^{わけ}はない。刺身を眺めただけで台所へ

下げる人もある。五重の塔をどうかしたがる連中は、刺身を食わなければ我慢の出来ぬように教育された実用主義の人間である。

「それじゃ五重の塔はやめましょう」

「面白いんですよ。五重の塔が面白いのよ。ねえ小野さん」

御機嫌に逆さかった時は、必ず人をもつて詫わびを入れるのが世間である。女王の逆鱗げきりんは鍋なべ、釜かま、味噌みそ漉こしの御供物おくもつでは直せない。役にも立たぬ五重の塔を霞かすみのうちに腫物はれもののように安置しなければならぬ。

「五重の塔はそれつきりよ。五重の塔がどうするものですかね」
藤尾の眉まゆはぴくりと動いた。糸子は泣きたくなる。

「御氣さむに障さわったの——私が悪るかったわ。本当に五重の塔は面白いのよ。御世辞ごせじじゃない事よ」

針鼠は撫はでれば撫なでるほど針を立てる。小野さんは、破裂せぬ前にどうかしなければならぬ。

五重の塔を持ち出せばなお怒おこられる。琴の音ねは自分に取つて禁物である。小野さんはどうして調停したら好かろうかと考えた。話が京都を離れれば自分には都合だが、むやみに縁のない離し方をする、糸子さん同様に輕蔑けいべつを招く。向うの話題に着いて廻つて、しかも自分に苦痛のないように發展させなければならぬ。銀時計の手際ではちとむずかし過ぎるようだ。

「小野さん、あなたには分るでしょう」と藤尾の方から切つて出る。糸子は分らず屋として取り除のけられた。女二人を調停するのは眼の前に快こころよからぬ言葉の果し合を見るのが厭いやだからである。文錦あやにしきやさしき眉まゆに切り結ぶ火花の相手が、相手にならぬと見下げられれば、手を出す必要はない。取除とりのけもの者を仲間に入れて

やる親切は、取除者の方で、うるさく絡からつてくる時に限る。おとなしくさえしていれば、取り除けられようが、見下げられようが、当分自分の利害には関係せぬ。小野さんは糸子を眼中に置く必要がなくなつた。切つて出た藤尾にさえ調ば子を合せていれば間違はない。

「分りますとも。——詩の命は事実より確かです。しかしそう云う事が分らない人が世間にはだいぶありますね」と云つた。小野さんは糸子を軽蔑けいべつする料簡りようけんではない、ただ藤尾の御機嫌に重きを置いたまでである。しかもその答は真理である。ただ弱いものにつらく当る真理である。小野さんは詩のために愛のためかしらにそのくらいの犠牲をあえてする。道義は弱いものの頭かがやに耀かず、糸子は心細い気がした。藤尾の方はようやく胸すが隙く。

「それじゃ、その続をあなたに話して見ましょうか」

人を呪わば穴二つと云う。小野さんは是非共ええと答えなければならぬ。

「ええ」

「二階の下に飛石が三つばかり筋違に見えて、その先に井桁があつて、小米桜が擦れ擦れに咲いていて、釣瓶が触るとほろほろ、井戸の中へこぼれそうなんです。……」

糸子は黙つて聴いている。小野さんも黙つて聴いている。花曇りの空がだんだん擦り落ちて来る。重い雲がかさなり合つて、弥生をどんよりと抑えつける。昼はしだいに暗くなる。戸袋を五尺離れて、袖垣のはずれに幣辛夷の花が怪しい色を併べて立っている。木立に透かしてよく見ると、折々は二筋、三筋雨の糸が途切れ途切れに映る。斜めにすうと見えたかと思うと、はや消える。空の中から降るとは受け取れぬ、地の上に落つるとは

なおさら思えぬ。糸の命はわずかに尺余りである。

居は氣を移す。藤尾の想像は空と共に濃こまやかになる。

「小米桜を二階の欄干てすりから御覧になった事があつて」と云う。

「まだ、ありません」

「雨の降る日に。——おや少し降つて来たようですね」と庭の方を見る。空はなおさら暗くなる。

「それからね。——小米桜の後うしろは建仁寺の垣根で、垣根の向うで琴の音がするんです」

琴はいよいよ出て来た。糸子になるほどと思う。小野さんはこれはと思う。

「二階の欄干から、見下すと隣家となりの庭がすっかり見えるんです。

——ついでにその庭の作りも話しましょうか。ホホホホ」と藤尾は高く笑った。冷たい糸が辛夷の花をきらりと掠かすめる。

「ホホホ御厭おいやなの——何だか暗くなつて来た事。花曇りが化ばけ出しそうね」

そこまで近寄つて来た暗い雲は、そろそろ細い糸に変化する。すいと木立を横ぎつた、あとから直すぐすいと追懸おいけて来る。見ているうちにすいすいと幾本もいっしょに通つて行く。雨はようやく繁くなる。

「おや本降ほんぷりになりそうだ事」

「私失礼わたしするわ、降つて来たから。御話し中で失礼だけでも。大変面白かつたわ」

糸子は立ち上がる。話しは春雨と共に崩くずれた。

燐寸マツチを擦する事一寸いっすんにして火は闇やみに入る。幾段さいきんの彩錦めくを捲めくり終れば無地さかいの境をなす。春興ににんは二人の青年に尽きた。狐ちやんちやんの袖無うを着て天下を行くものは、日記ふところを懷ふところにして百年の憂うれいを抱いだくものと共に帰程きていに上のぼる。

古き寺、古き社やしろ、神の森、仏の丘おほを掩おほうて、いそぐ事を解げせぬ京の日はようやく暮れた。倦怠けたるい夕べである。消えて行くすべてのものの上に、星ばかり取り残されて、それすらも判然はきとは映らぬ。瞬またたくも嬾ものうき空の中にどろんと溶けて行こうとする。過去はこの眠れる奥から動き出す。

一人いちにんの一生には百の世界がある。ある時は土の世界に入り、ある時は風の世界に動く。またある時は血の世界に腥なまぐさき雨を浴びる。一人の世界を方寸まに纏まとめたる団子だんしと、他の清濁を混じたる団子と、層々相連あいつらなつて千人に千個の実世界を活現する。個々

の世界は個々の中心を因果の交叉点に据えて分相應の円周を右に劃^{かく}し左に劃^{かく}す。怒^{いかり}の中心より画^{えが}き去る円は飛ぶがごとくに速^{すみや}かに、恋の中心より振^{きた}り来る円周は蝕^{ほのお}の痕^{あと}を空裏^{くうり}に焼く。あるものは道義の糸を引いて動き、あるものは奸譎^{かんぎつ}の圓^{かん}をほのめかして回^{めぐ}る。縦横に、前後に、上下^{しやうか}四方に、乱れ飛ぶ世界と世界が喰^くい違^{ちが}うとき秦越^{しんえつ}の客ここに舟を同じゆうす。甲野^{かうの}さんと宗近^{むねちか}君は、三春行樂の興尽きて東に帰る。孤堂^{こどう}先生と小夜子^{さよこ}は、眠れる過去を振り起して東に行く。二個の別世界は八時発の夜汽車で端^{はし}なくも喰^くい違^{ちが}った。

わが世界とわが世界と喰^くい違^{ちが}うとき腹を切る事がある。自滅する事がある。わが世界と他^{ひと}の世界と喰^くい違^{ちが}うとき二つながら崩れる事がある。破^かけて飛ぶ事がある。あるいは発矢^{はつし}と熱を曳^ひいて無極のうちに物別れとなる事がある。凄^{すさ}まじき喰^くい違^{ちが}い方

が生涯しょうがいに一度起るならば、われは幕引く舞台に立つ事なくして
 自おのずからなる悲劇の主人公である。天より賜たまわる性格はこの時始
 めて第一義において躍動する。八時発の夜汽車で喰い違つた世
 界はさほどに猛烈なものではない。しかしただ逢おうてただ別れ
 る袖そでだけの縁えにしならば、星深き春の夜を、名さえ寂さびたる七条に、
 さして喰い違ちがうほどの必要もあるまい。小説は自然を彫琢ちようたくする。
 自然その物は小説にはならぬ。

二個の世界は絶えざるがごとく、続かざるがごとく、夢のご
 とく幻まぼろしのごとく、二百里の長き車のうちに喰い違つた。二百里
 の長き車は、牛を乗せようか、馬を乗せようか、いかなる人の
 運命をいかに東かたの方に搬はこび去ろうか、さらに無頓着むとんじやくである。世
 を畏おそれぬ鉄輪てつわをごとりと転まわす。あとは驀ましぐら地に闇やみを衝つく。離れて
 合あうを待ち伫わび顔なるを、行ゆいて帰るを快からぬを、旅に馴れ

て徂徠^{そらい}を意とせざるを、一様に束ね^{つか}て、ことごとく土偶^{どぐう}のごとくに遇待^{もてなそ}うとする。夜^よこそ見えね、熾^{さか}んに黒煙^{くろけむり}を吐きつつある。眠る夜を、生けるものは、提灯^{ちようちん}の火に、皆七条に向つて動いて来る。梶棒^{かじぼう}が下りるとき黒い影が急に明かるくなつて、待合に入る。黒い影は暗いなかから続々と現われて出る。場内は生きた黒い影で埋^{うず}まつてしまふ。残る京都は定めて静かだろうと思われる。

京の活動を七条の一点にあつめて、あつめたる活動の千と二千の世界を、十把一束^{じっばひとからげ}に夜明までに、あかるい東京へ推^おし出そうために、汽車はしきりに煙を吐きつつある。黒い影はなだれ始めた。——一団の塊まりはばらばらに解^ほれて点となる。点は右へと左へと動く。しばらくすると、無敵な音を立てて車輛^{しやりよう}の戸をはたはたと締めて行く。忽然^{こつぜん}としてプラットフォームは、

在る人を掃いて捨てたようにがらんと広くなる。大きな時計ばかりが窓の中から眼につく。すると口笛くちふえが遙かはるの後ろうしで鳴った。車はごとりと動く。互の世界がいかなる関係に織り成さるるかを知らぬ氣げに、闇の中を鼻で行く、甲野さんは、宗近君は、孤堂先生は、可憐なる小夜子は、同じくこの車に乗っている。知らぬ車はごとりとごとりと廻転する。知らぬ四人は、四様の世界を喰い違わせながら暗い夜の中に入る。

「だいぶ込み合うな」と甲野さんは室内を見廻わしながら云う。「うん、京都の人間はこの汽車でみんな博覧会見物に行くんだろう。よつぽど乗ったね」

「そうさ、待合所が黒山のようにだった」

「京都は淋さびしいだろう。今頃は」

「ハハハ本当に。実に閑静な所だ」

「あんな所にいるものでも動くから不思議だ。あれでもやつぱりいろいろな用事があるんだろうな」

「いくら閑静でも生れるものと死ぬものはあるだろう」と甲野さんは左の膝を右の上へ乗せた。

「ハハハハ生れて死ぬのが用事か。蔦屋つたやの隣家となりに住んでる親子なんか、まあそんな連中だね。随分ひっそり暮してるぜ。かたりともしない。あれで東京へ行くと云うから不思議だ」

「博覧会でも見に行くんだろう」

「いえ、家うちを畳んで引越すんだそうだ」

「へええ。いつ」

「いつか知らない。そこまでは下女に聞いて見なかった」

「あの娘もいずれ嫁に行く事だろうな」と甲野さんは独り言ひとごとのように云う。

「ハハハ行くだろう」と宗近君は頭陀袋ずだぶくろを棚たなへ上げた腰おを卸おろしながら笑う。相手は半分顔を背そむけて硝子越ガラスこしに窓の外すかを透すかして見る。外はただ暗いばかりである。汽車は遠慮もなく暗いなかを突切げうつて行く。轟ごうと云う音のみする。人間は無能力である。

「随分早いね。何哩マイルくらいの速力か知らん」と宗近君が席の上へ胡坐あぐらをかきながら云う。

「どのくらい早いか外が真暗でちつとも分らん」

「外が暗くつたつて、早いじゃないか」

「比較するものが見えないから分らないよ」

「見えなくつたつて、早いさ」

「君には分るのか」

「うん、ちゃんと分る」と宗近君は威張おごつて胡坐をかき直す。話しはまた途切れる。汽車は速度を増して行く。向むこうの棚たなに載せた

誰やらの帽子が、傾いたまま、山高の頂^{いただき}を顫^{ふる}わせている。給仕^{ボーイ}が時々室内を抜ける。大抵の乗客は向い合せに顔と顔を見守っている。

「どうしても早いよ。おい」と宗近君はまた話しかける。甲野さんは半分眼を眠^{ねむ}っていた。

「ええ？」

「どうしてもね、——早いよ」

「そうか」

「うん。そうら——早いだろう」

汽車は轟^{ごう}と走る。甲野さんはにやりと笑ったのみである。

「急行列車は心持ちがいい。これでなくつちや乗ったような気がしない」

「また夢窓国師より上等じゃないか」

「ハハハハ第一義に活動しているね」

「京都の電車とは大違だろう」

「京都の電車か？ あいつは降参だ。全然第十義以下だ。あれで運転しているから不思議だ」

「乗る人があるからさ」

「乗る人があるからつて——あんま余りだ。あれで布設したのは世界一だそうだけ」

「そうでもないだろう。世界一にしちや幼稚過ぎる」

「ところが布設したのが世界一なら、進歩しない事も世界一だそうだ」

「ハハハハ京都には調和している」

「そうだ。あれは電車の名所古蹟だね。電車の金閣寺だ。元来十年一日のごとしと云うのは賞ほめる時の言葉なんだがな」

「千里の江陵こうりょう一日に還るなんと云う句もあるじゃないか」

「一百里程墨壁の間さ」

「そりや西郷隆盛だ」

「そうか、どうもおかしいと思ったよ」

甲野さんは返事を見合せて口を緘とじた。会話はまた途切れる。汽車は例によつて轟ごうと走る。二人の世界はしばらく闇やみの中に揺られながら消えて行く。同時に、残る二人の世界が、細長い夜よを糸のごとく照らして動く電灯の下もとにあらわれて来る。

色白く、傾く月の影に生れて小夜さよと云う。母なきを、つづま

やかに暮らす親一人子一人の京すまいの住居に、孟蘭盆うらぼんの灯籠とうろうを掛け

てより五遍になる。今年の秋は久し振で、亡き母の精霊しょうりょうを、東

京おがらの芋殻おがらで迎える事と、長袖の右左に開くなから、白い手を

尋常に重ねている。物の憐れは小さき人の肩にあつまる。乗のし

掛^かる怒^{いかり}は、撫^なで下^{おろ}す絹^{なさけ}しなやかに情^{すそ}の裾^{すべ}に滑^{すべ}り込む。

紫^{おご}に驕^{おご}るものは招^{まね}く、黄^{わう}に深く情濃^{じやうのう}きものは追^おう。東西^{とうし}の春

は二百里^{ふたひゃり}の鉄路^{てつろ}に連^{つら}なるを、願^{ねが}の糸^{いと}の一筋^{ひとすぢ}に、恋^{こひ}こそ誠^{まこと}なれと、

髪^{かみ}に掛^かけたる丈^{たけ}長^{なが}を顫^{ふる}わせながら、長^{なが}き夜^よを縫^{ぬい}うて走^{はし}る。古^{ふる}き

五年^{ごねん}は夢^{ゆめ}である。た^{ただ}滴^{した}たる絵筆^{えびし}の勢^{せい}に、うやむやを貫^{くわん}いて赫^{かつ}

と染^そめつけられた昔^{むかし}の夢^{ゆめ}は、深^{ふか}く記憶^{きこく}の底^{そこ}に透^{とお}つて、当^{その}時^{とき}を裏^{うら}

返^{かへ}す折^を々にさ^{あざや}え鮮^{あざや}かに煮^に染^じんで見^みえる。小夜子^{せやこ}の夢^{ゆめ}は命^{いのち}よりも

明^{あき}かである。小夜子^{せやこ}はここの明^{あき}かなる夢^{ゆめ}を、春寒^{はるさむ}の懷^{ふところ}に暖^ぬめつつ、

黒^{くろ}く動^{うご}く一条^{いっせう}の車^{くるま}に載^のせて東^{ひがし}に行く。車^{くるま}は夢^{ゆめ}を載^のせたままひた

すらに、た^{ただ}だ東^{ひがし}へと走^{はし}る。夢^{ゆめ}を携^もえたる人^{ひと}は、落^おすまじと、ひ

しと燃^もゆるもの^{もの}を抱^だきしめて行^いく。車^{くるま}は無^む二^に無^む三^{さん}に走^{はし}る。野^のに

は緑^{みどり}りを衝^つき、山^{やま}には雲^{くも}を衝^つき、星^{ほし}あるほどの夜^よには星^{ほし}を衝^つい

て走^{はし}る。夢^{ゆめ}を抱^{いだ}く人^{ひと}は、抱^{いだ}きながら、走^{はし}りながら、明^{あき}かなる夢^{ゆめ}

を暗闇くらやみの遠きより切り放して、現実の前に抛なげ出さんとしつつある。車の走るごとに夢と現実の間は近づいてくる。小夜子の旅は明かなる夢と明かなる現実がはたと行き逢おうて区別なき境に至つてやむ。夜はまだ深い。

隣りに腰を掛けた孤堂先生はさほどに大事な夢を持つておらぬ。日ごとに朧あごの下に白くなる疎髯そぜんを握もつては昔むかしを思い出そうとする。昔しは二十年の奥に引き籠こもつて容易には出て来ない。漠々ばくばくたる紅塵のなかに何やら動いている。人か犬か木か草かそれすらも判然せぬ。人の過去は人と犬と木と草との区別がつかぬようになつて始めて真の過去となる。恋々れんれんたるわれを、つれなく見捨て去る当時そのかみに未練があればあるほど、人も犬も草も木もめちやくちやである。孤堂先生は胡麻塩交りの髯ひげをぐいと引いた」

「御前が京都へ来たのは幾歳いくつの時だったかな」

「学校を廃やめてから、すぐですから、ちょうど十六の春でしょう」

「すると、今年で何だね、……」

「五年目です」

「そう五年になるね。早いものだ、ついこの間のように思っていたが」とまた髯を引つ張った。

「来た時に嵐山あらしやまへ連れていつていただいたでしょう。御母おかあさんといつしよに」

「そうそう、あの時は花がまだ早過ぎたね。あの時分から思うと嵐山もだいぶ変ったよ。名物の団子だんごもまだできなかつたようだ」

「いえ御団子さんげんぢややはありましたわ。そら三軒茶屋そばの傍で喫たべたじや

ありませんか」

「そうかね。よく覚えていないよ」

「ほら、小野さんが青いのばかり食べるつて、御笑いなすつたじゃありませんか」

「なるほどあの時分は小野がいたね。御母^{おつか}さんも丈夫だったがな。ああ早く亡^なくなるうとは思わなかったよ。人間ほど分らんものはない。小野もそれからだいぶ変つたろう。何しろ五年も逢わないんだから……」

「でも御丈夫だから結構ですわ」

「そうさ。京都へ来てから大變丈夫になった。来たては随分蒼^{あお}い顔をしてね、そうして何だか始終^{しじゅう}おどおどしていたようだが、馴れるとだんだん平氣になつて……」

「性質^{やさし}が柔和いんですよ」

「柔和いんだよ。柔和過ぎるよ。——でも卒業の成績が優等で銀時計をちょうだいして、まあ結構だ。——人の世話はするもんだね。ああ云う性質たちの好い男でも、あのまま放ほうつて置けばそれぎり、どこへどう這入はいつてしまふか分らない」

「本当にね」

明かなる夢は輪を描えがいて胸のうちに回めぐり出す。死したる夢ではない。五年の底から浮き刻ぼりの深き記憶を離れて、咫尺しせきに飛び上がつて来る。女はただ眸ひとみを凝こらして眼前ぜんまに逼る夢の、明らかに過ぐるほどの光景を右から、左から、前後上下から見ろ。夢を見るに心を奪われたる人は、老いたる親の髻ひげを忘れる。小夜子は口をきかなくなつた。

「小野は新橋まで迎むかえにくるだろうね」

「いらつしやるでしょうとも」

夢は再び躍る。^{おど}躍るなと抑えたるまま、夜を込めて揺られながらに、暗きうちを駛^かける。老人は髯から手を放す。やがて眼^{ねむ}を眠る。人も犬も草も木も判然^{はき}と映らぬ古き世界には、いっとなく黒い幕が下りる。小さき胸に躍りつつ、転^{まわ}りつつ、抑えられつつ走る世界は、闇を照らして火のごとく明かである。小夜子はこの明かなる世界を抱^{いだ}いて眠についた。

長い車は包む夜を押し分けて、やらじと逆^{さか}う風を打つ。追ひ懸^{よみ}くる冥府の神を、力ある尾に敲^{たた}いて、ようやくに抜け出でたる暁の国の青く煙^{けふ}る向うが一面に競^せり上がって来る。茫々^{ぼうぼう}たる原野の自^{おのず}から尽きず、しだいに天に逼^{せま}つて上へ上へと限りなきを怪しみながら、消え残る夢を排して、眼^{まなこ}を半天に走らす時、日輪の世は明けた。

神の代^よを空に鳴く金鷄^{きんけい}の、翼^{つばさ}五百里なるを一時に搏^{はば}して、漲^{みな}

ぎる雲を下界に披く大虚の真中に、朗に浮き出す万古の雪は、
 末広になだれて、八州の野を圧する勢を、左右に展開しつつ、
 蒼茫の裡に、腰から下を埋めている。白きは空を見よがしに貫
 ぬく。白きものの一段を尽くせば、紫の襞と藍の襞とを斜めに
 畳んで、白き地を不規則なる幾条に裂いて行く。見上ぐる人は
 這う雲の影を沿うて、蒼暗き裾野から、藍、紫の深きを稲妻に
 縫いつつ、最上の純白に至つて、豁然として眼が醒める。白き
 ものは明るき世界にすべての乗客を誘う。

「おい富士が見える」と宗近君が座を滑り下りながら、窓をは
 たりと卸す。広い裾野から朝風がすうと吹き込んでくる。

「うん。さつきから見えている」と甲野さんは駱駝の毛布を頭
 から被つたまま、存外冷淡である。

「そうか、寝なかつたのか」

「少しは寝た」

「何だ、そんなものを頭から被って……」

「寒い」と甲野さんは膝掛の中で答えた。

「僕は腹が減った。まだ飯は食わさないだろうか」

「飯を食う前に顔を洗わなくっちゃ……」

「ごもつともだ。ごもつともな事ばかり云う男だ。ちつと富士

でも見るがいい」

「^{えいざん}叡山よりいいよ」

「叡山？ 何だ叡山なんか、たかが京都の山だ」

「大変^{けいべつ}軽蔑するね」

「ふふん。——どうだい、あの雄大な事は。人間もああ来なくつ

ちやあ駄目だ」

「君にはああ落ちついちやいられないよ」

「保津川が関の山か。保津川でも君より上等だ。君なんぞは京都の電車ぐらいなところだ」

「京都の電車はあれでも動くからいい」

「君は全く動かないか。ハハハハ。さあ駱駝を払い退けて動いた」と宗近君は頭陀袋を棚から取り卸す。室のなかはざわついてくる。明かるい世界へ馳け抜けた汽車は沼津で息を入れる。

——顔を洗う。

窓から肉の落ちた顔が半分出る。疎髯を一本ごとにあるいは黒くあるいは白く朝風に吹かして

「おい弁当を二つくれ」と云う。孤堂先生は右の手に若干の銀貨を握って、へぎ折を取り取る左と引き換に出す。御茶は部屋のなかで娘が注いでいる。

「どうだね」と折の蓋を取ると白い飯粒が裏へ着いてくる。な

かには長芋ながいもの白茶しらちやに寝転かたわんでいる傍らに、一片ひときれの玉子焼が黄色くお圧つぶし潰つぶされようとして、苦し紛れに首だけ飯の境に突き込んでゐる。

「まだ、食べたくないの」と小夜子は箸はしを執とらずに折ごと下へ置く。

「やあ」と先生は茶碗を娘から受取つて、膝の上の折に突き立てた箸はしを眺ながめながら、ぐつと飲む。

「もう直じきですね」

「ああ、もう訳はない」と長芋ながいもが髯ひげの方へ動き出した。

「今日はいいい御天気ですよ」

「ああ天気で仕合せだ。富士が奇麗きれいに見えたね」と長芋が髯ひげから折のなかへ這入はいる。

「小野さんは宿を捜さがして置いて下すつたでしょうか」

「うん。搜が——搜がしたに違ない」と先生の口が、喫飯めしと返事を兼勤する。食事はしばらく継続する。

「さあ食堂へ行こう」と宗近君が隣りの車室で米沢紉よねざわがすりの襟えりを掻き合せる。背広の甲野さんは、ひよろ長く立ち上がった。通りに転がっている手提革鞆てさげかばんを跨またいだ時、甲野さんは振り返って「おい、蹴爪けつまずくと危ない」と注意した。

ガラスど硝子戸を押し開けて、隣りの車室へ足を踏み込んだ甲野さんは、真直まつすぐに抜ける気で、中途まで来た時、宗近君が後ろうしろから、ぐいと背広の尻を引っ張った。

「御飯が少し冷えてますね」

「冷えてるのはいいが、硬過こわすぎてね。——阿爺おとつさんのように年を取ると、どうも硬いこわのは胸に痞つかえていけないよ」

「御茶でも上がったら……注つぎましようか」

青年は無言のまま食堂へ抜けた。

日ごと夜ごとを入り乱れて、じんじつぼう尽十方に飛び交かわす小世界の、
普あまねく天てん涯がいを行き尽して、しかも尽くる期なしと思わるるなかに、
絹糸の細きを厭いとわず植えつけし蚕かいこの卵の並べるごとくに、
四人の小宇宙は、心なき汽車のうちに往く夜半よわを背中合せの知らぬ顔に並べられた。星の世は掃はき落されて、大空の皮を奇麗うちに剥はぎ取った白日の、隠すなかれと立ち上る窓の中に、四人の小宇宙は偶ぐうを作つて、ここぞと互すに擦れ違つた。擦れ違つて通り越した二個の小宇宙は今白い卓布たくふを挟んでハムエクスを平げつつある。

「おいしいたぜ」と宗近君が云う。

「うんいた」と甲野さんは献立表メヌーを眺めながら答える。

「いよいよ東京へ行くと見える。昨夕ゆうべ京都の停車場ステーションでは逢わな

かったようだね」

「いいや、ちつとも気がつかなかった」

「隣りに乗つてるとは僕も知らなかった。——どうも善く逢うね」

「少し逢い過ぎるよ。——このハムはまるで膏あぶらばかりだ。君のも同様かい」

「まあ似たもんだ。君と僕の違ぐらいなところかな」と宗近君は肉刺フオークを逆さかにして大きな切身を口へ突き込む。

「御互に豚をもつて自任あづかしているのかなあ」と甲野さんは、少々情なさけなさそうに白い膏味あぶらみを頬張ほおる。

「豚でもいいが、どうも不思議だよ」

「猶太人ユデアじんは豚を食わんそうだね」と甲野さんは突然超然たる事を云う。

「猶太人はともかくも、あの女がさ。少し不思議だよ」
ユデアじん

「あんまり逢うからかい」

「うん。——給仕紅茶を持って来い」
ボーイ

「僕はコフィーを飲む。この豚は駄目だ」と甲野さんはまた女を外はずしてしまう。

「これで何遍逢うかな。一遍、二遍、三遍と何でも三遍ばかり逢うぜ」

「小説なら、これが縁になつて事件が発展するところだね。これだけでまあ無事らしいから……」と云つたなり甲野さんはコフィーをぐいと飲む。

「これだけで無事らしいから御互に豚なんだろう。ハハハハ。

——しかし何とも云われない。君があの人に懸想けそうして……」

「そうさ」と甲野さん、相手の文句を途中で消してしまった。

「それだけでなく、このくらい逢うくらいだからこの先、どう関係がつかないとも限らない」

「君とかい」

「なにさ、そんな関係じゃないほかの関係さ。情交以外の関係だよ」

「そう」と甲野さんは、左の手で顎あごを支さえながら、右に持ったコフィー茶碗を鼻の先に据すえたままぼんやり向うを見ている。

「蜜柑みかんが食いたい」と宗近君が云う。甲野さんは黙っている。やがて

「あの女は嫁にでも行くんだろうか」と毫げうも心配にならない気色けしきで云う。

「ハハハハ。聞いてやろうか」と挨拶あいさつも聞きく料簡りょうけんはなさそうである。

「嫁か？ そんなに嫁に行きたいものかな」

「だからさ、そりや聞いて見なけりやあ分らないよ」

「君の妹なんぞは、どうだ。やつぱり行きたいようかね」と甲野さんは妙な事を真面目^{まじめ}に聞き出した。

「糸公か。あいつは、から赤児^{ねんね}だね。しかし兄思いだよ。狐の袖無^{ちやんちゃん}を縫^{ちやんちゃん}ってくれたり、なんかしてね。あいつは、あれで裁縫が上手なんだぜ。どうだ肱突^{ひじつき}でも造^{こしら}えてもらつてやろうか」

「そうさな」

「いらないか」

「うん、いらん事もないが……」

肱突は不得要領に終つて、二人は食卓を立つた。孤堂先生の車室を通り抜けた時、先生は顔の前に朝日新聞を一面に拡^{ひろ}げて、小夜子は小さい口に、玉子焼をすくい込んでいた。四個の小世

界はそれぞれに活動して、二たび列車のなかに擦れ違つたま
ま、互の運命を自家の未来に危ぶむがごとく、また怪しまざる
がごとく、測るべからざる明日の世界を擁して新橋の停車場に
着く。

「さつき馳けて行つたのは小野じゃなかったか」と停車場を出
る時、宗近君が聞いて見る。

「そうか。僕は気がつかなかったが」と甲野さんは答えた。

四個の小世界は、停車場に突き当つて、しばらく、ばらばら
となる。

八

一本の浅葱桜が夕暮を庭に曇る。拭き込んだ椽は、立て切つた

障子の外に静かである。うちは小形の長火鉢ながひばちに手取形の鉄瓶てとりがたてつびんを沸たぎらして前には絞り羽二重しぼはふたえの座布団ざぶとんを敷く。布団の上には甲野こうのの母が品ひんよく座すわっている。きりりと釣り上げた眼尻がんすじの尽くるあたりうわべに、疳かんの筋すじが裏を通つて額へ突き抜けているらしい上部うわべを、浅黒く膚理きめの細かい皮が包んで、外見だけは至極しごく穏やかである。

――針こうやくを海綿はに蔵かくして、ぐつと握らしめたる後、柔らかき手に膏藥こうやくを貼はつて創口きずぐちを快よく慰めよ。出来得べくんば唇くちびるを血の出る局所に接つけて他意なきを示せ。――二十世紀に生れた人はこれだけの事を知らねばならぬ。骨を露あらわすものは亡ほろぶと甲野さんがかつて日記に書いた事がある。

静かな椽おろに足音がする。今卸おろしたかと思われるほどの白足袋しろたびを張り切るばかりに細長い足に見せて、変り色の厚い襪ふきの椽おろに引き擦るを軽く蹴返けかえしながら、障子しょうじをすうと開ける。

居住をそのままの母は、濃い眉を半分ほど入口に傾けて、

「おや御這入」と云う。

藤尾は無言で後を締める。母の向に火鉢を隔ててすらりと坐つ

た時、鉄瓶はしきりに鳴る。

母は藤尾の顔を見る。藤尾は火鉢の横に二つ折に畳んである新聞を俯目に眺める。——鉄瓶は依然として鳴る。

口多き時に真少し。鉄瓶の鳴るに任せて、いたずらに差し向う親と子に、椽は静かである。浅葱桜は夕暮を誘いつつある。春は逝きつつある。

藤尾はやがて顔を上げた。

「帰つて来たのね」

親、子の眼は、はたと行き合つた。真は一瞥に籠る。熱に堪えざる時は骨を露わす。

「ふん」

ながぎせる
長煙管に煙草たばこの殻ちようを丁とはたく音がする。

「どうする気なんでしょう」

「どうする気か、彼人あのひとの料簡りようけんばかりは御母さんおつかにも分らないね」

雲井の煙は会釈えしやくなく、骨の高い鼻の穴から吹き出す。

「帰って来ても同じ事おんなですね」

「同じ事しょうがいさ。生涯しやうがいあれなんだよ」

御母さんおつかの疳かんの筋は裏から表へ浮き上がって来た。

「家うちを襲つかぐのがあんなに厭いやなんでしょうか」

「なあに、口だけさ。それだから悪いにくんだよ。あんな事を云つて

私達わたしたちに当付あてつけるつもりなんだから……本当に財産も何も入らな

いなら自分で何かしたら、善いじゃないか。毎日毎日ぐずぐず

して、卒業きようしてから今日までもう二年にもなるのに。いくら哲

学だつて自分一人ぐらいどうにかなるにきまつていらあね。煮え切らないっちゃありやしない。彼人の顔を見るたんびに阿母は疳癪かんしやくが起つてね。……」

「遠廻しに云う事はちつとも通じないようね」

「なに、通じて、不知しらを切つてるんだよ」

「憎らしいわね」

「本当に。彼人がどうかしてくれないうちは、御前の方をどうにもする事が出来ない。……」

藤尾は返事を控えた。恋はすべての罪惡を孕はらむ。返事を控えたうちには、あらゆるものを犠牲に供するの決心がある。母は続ける。

「御前も今年で二十四じゃないか。二十四になつて片付かないものが滅多めったにあるものかね。——それを、嫁にやろうかと相談

すれば、御^お廃^よしなさい、阿^お母^つさんの世話は藤尾にさせたいからと云うし、そんなら独立するだけの仕事でもするかと思えば、毎日部屋^{ひと}のなかへ閉^とじ籠^{こも}つて寝転んでるしさ。——そうして他人には財産を藤尾にやって自分は流浪^{るろう}するつもりだなんて云うんだよ。さもこつちが邪魔にして追い出しにでもかかつてるようで見つともないじゃないか」

「どこへ行つて、そんな事を云つたんです」

「宗^{むね}近^{ちか}の阿^お爺^つの所へ行つた時、そう云つたとき」

「よつぽど男らしくない性^た質^ちですね。それより早く糸^{いと}子^こさんでも貰^{もら}つてしまつたら好いでしょうに」

「全体貰^{もら}う気があるのかね」

「兄^りさんの料^り簡^{よう}はとも分りませんわ。しかし糸^{いと}子^こさんは兄^あさんの所へ来たがつてゐるんですよ」

母は鳴る鉄瓶てつびんを卸おろして、炭取を取り上げた。隙間すきまなく渋しぶの洩もれた劈痕ひびやき焼に、二筋三筋藍あいを流す波を描えがいて、真白ましろな桜を気ままに散らした、薩摩さつまの急須きゅうすの中には、緑りを細く縋より込んだ宇治うじの葉が、午ひるの湯に腐ふやけたまま、ひたひたに重なり合うて冷えている。

「御茶でも入れようかね」

「いいえ」と藤尾は疾とく抜け出した香かおりのなお余りあるを、急須と同じ色の茶碗のなかに畳み込む。黄な流れの底を敲たたくほどは、さほどとも思えぬが、縁ふちに近くようやく色を増して、濃き水は泡あわを面おもてに片寄せて動かずなる。

母は掻かき馴ならしたる灰の盛り上りたるなかに、佐倉炭さくらずみの白き残骸なきがらの完まったきを毀こぼちて、心しんに潜む赤きものを片寄せる。温ぬくもる穴くずの崩くずれたる中には、黒く輪切の正しきを択えらんで、ぴちぴちと活い

ける。——室内の春光は飽くまでも二人の母子に穏かである。

この作者は趣なき会話を嫌う。猜疑不和の暗き世界に、一点

の精彩を着せざる毒舌は、美しき筆に、心地よき春を紙に流す詩

人の風流ではない。閑花素琴の春を司どる人の歌めく天が下に

住まずして、半滴の気韻だに帯びざる野卑の言語を臚列すると

き、毫端に泥を含んで双手に筆を運らしがたき心地がする。宇

治の茶と、薩摩の急須と、佐倉の切り炭を描くは瞬時の閑を儼

んで、一弾指頭に脱離の安慰を読者に与うるの方便である。た

だし地球は昔しより廻転する。明暗は昼夜を捨てぬ。嬉しから

ぬ親子の半面を最も簡短に叙するはこの作者の切なき義務であ

る。茶を品し、炭を写したる筆は再び二人の対話に戻らねばな

らぬ。二人の対話は少なくとも前段より趣がなくてはならぬ。

「宗近と云えば、一もよつぽど剽軽者だね。学問も何にも出来

ない癖に大きな事ばかり云つて、——あれで当人は立派にえらい気なんだよ」

厩うまやと鳥屋とやといつしよにあつた。牝鶏めんどりの馬を評する語に、——

あれは鶏鳴とぎをつくる事も、鶏卵たまごを生む事も知らぬとあつたそう
だ。もつともである。

「外交官の試験に落第したつて、ちつとも恥ずかしがらないんですよ。普通なみのものなら、もう少し奮発する訳ですがねえ」

「鉄砲玉だよ」

意味は分らない。ただ思い切つた評である。藤尾は滑なめらか

な頬ほおに波を打たして、にやりと笑つた。藤尾は詩を解する女で

ある。駄菓子だかしの鉄砲玉は黒砂糖を丸めて造る。砲兵工廠ほうへいこうしょうの鉄砲

玉は鉛とを鎔とかして鑄いる。いずれにしても鉄砲玉は鉄砲玉である。

そうして母は飽あくまでも真面目まじめである。母には娘の笑つた意味

が分からない。

「御前はあの人をどう思ってるの」

娘の笑は、端^{はし}なくも母の疑問を起す。子を知るは親に若^しかずと云う。それは違っている。御互に喰い違っておらぬ世界の事は親といえども唐^{から}、天竺^{てんじく}である。

「どう思ってるって……別にどうも思つてやしません」

母は鋭^{まゆ}どき眉の下から、娘を屹^{きつ}と見た。意味は藤尾にちゃんと分っている。相手を知るものは騒がず。藤尾はわざと落ちつき払つて母の切つて出るのを待つ。掛引は親子の間にもある。

「御前あすこへ行く気があるのかい」

「宗近へですか」と聞き直す。念を押すのは満を引いて始めて放つための下拵^{したごしらえ}と見える。

「ああ」と母は軽く答えた。

「いやですわ」

「いやかい」

「いやかいって、……あんな趣味のない人」と藤尾はすぱりと句を切った。たけのこ筍を輪切りにすると、こんな風になる。はり張のある眉に風を起して、まゆこれぎりでたくさんだと締切った口元になお籠る何物かがちよつと閃いてすぐ消えた。はためこも母は相槌を打つ。

「あんな見込のない人は、私も好かない」わたし

趣味のないのを見込のないのとは別物である。鍛冶の頭はか、かみんと打ち、相槌はとんと打つ。つるぎされども打たるるは同じ剣である。

「いつそ、ここで、判然断わろう」はつきり

「断わるって、約束でもあるんですか」

「約束？ 約束はありません。けれども阿爺が、おとっさんあの金時計を

はじめ

「一にやると御言いのだよ」

「それが、どうしたんです」

「御前が、あの時計を玩具おもちゃにして、赤い珠たまばかり、いじつてい

た事があるもんだから……」

「それで」

「それでね——この時計と藤尾とは縁の深い時計だがこれを御前にやろう。しかし今はやらない。卒業したらやる。しかし藤尾が欲しがつて繰くつ着ついて行くかも知れないが、それでも好いかつて、冗談じやうだん半分に皆みんなの前で一におっしやつたんだよ」

「それを今だに謎なぞだと思つてゐるんですか」

「宗近おとつさんの阿爺くちうらの口占ではどうもそうらしいよ」

「馬鹿らしい」

藤尾は鋭かどどい一句を長火鉢の角かどに敲たたきつけた。反響はすぐ起

る。

「馬鹿らしいのさ」

「あの時計は私が貰いますよ」

「まだ御前の部屋にあるかい」

「文庫のなかに、ちゃんとしまつてあります」

「そう。そんなに欲しいのかい。だつて御前には持てないじゃないか」

「いいから下さい」

鎖の先に燃える柘榴石ガーネットは、蒔絵まきえの蘆雁ろがんを高く置いた手文庫の

底から、怪しき光りを放つて藤尾を招く。藤尾はすうと立つた。

臙おぼろとも化けぬ浅葱桜あさぎざくらが、暮近く消えて行くべき昼の命を、今少時しばし

と護まもる椽えんに、抜け出した高い姿が、振り向きながら、瘠面やさおもての影

になつた半面を、障子のうちに傾けて

「あの時計は小野さんに上げてても好いでしようね」

と云う。障子しょうじのうちの返事は聞えず。――春は母と子に暮れた。

同時に豊かな灯ひが宗近家の座敷に点る。静かなる夜を陽に返す洋灯ランプの笠に白き光りをゆかしく罩こめて、唐草からくさを一面に高く敲たたき出した白銅の油壺あぶらつぼが晴がましくも宵よいに曇らぬ色を誇る。灯火ともしびの照らす限りは顔ごとに賑にぎやかである。

「アハハハハ」と云う声がまず起る。この灯火ともしびの周囲まわりに起るすべての談話はアハハハハをもつて始まるを恰好かつこうと思う。

「それじゃ相輪そうりん櫓とらも見ないだろう」と大きな声を出す。声の主は老人である。色の好い頬の肉が双方から垂れ余つて、抑えられた顎あごはやむを得ず二重ふたえに折れている。頭はだいぶ禿はげかかった。これを時々撫なでる。宗近の父は頭を撫で禿がしてしまった。

「相輪櫓そうりんは何ですか」と宗近君は阿爺おやじの前で変則の胡坐あぐらをかい

ている。

「アハハハそれじゃ叡山^{えいざん}へ何しに登ったか分からない」

「そんなものは通り路に見当らなかつたようだね、甲野^{こうの}さん」

甲野さんは茶碗を前に、くすんだ万筋の前を合して、黒い羽織の襟^{えり}を正しく坐っている。甲野さんが問い懸^かけられた時、軋然^{にこやか}な糸子の顔は揺^{うご}いた。

「相輪櫓はなかつたようだね」と甲野さんは手を膝^{ひざ}の上に置いたままである。

「通り路にないって……まあどこから登ったか知らないが——
吉田かい」

「甲野さん、あれは何と云う所かね。僕らの登ったのは」

「何と云う所か知ら」

「阿爺^{おとつさん}何でも一本橋を渡ったんですよ」

「一本橋を？」

「ええ、——一本橋を渡つたな、君、——もう少し行くと若狭^{わかさ}の国へ出る所だそうです」

「そう早く若狭へ出るものか」と甲野さんはたちまち前言を取り消した。

「だつて君が、そう云つたじゃないか」

「それは冗談^{じやうだん}さ」

「アハハハ若狭へ出ちや大変だ」と老人は大いに愉快そうである。糸子も丸顔に二重^{ふたえまぶた}瞼の波を寄せた。

「一体御前方はただ歩^{ある}行くばかりで飛脚^{ひきやく}同然だからいけない。

——叡山^{とうとう}には東塔^{さいとう}、西塔^{さいとう}、横川^{よかわ}とあつて、その三カ所を毎日往来してそれを修業にしている人もあるくらい広い所だ。ただ登つて下りるだけならどこの山へ登つたつて同じ事じゃないか」

「なに、ただの山のつもりで登ったんです」

「アハハハそれじゃ足の裏へ豆を出しに登ったようなものだ」

「豆はたしかです。豆はそちの受持です」と笑ながら甲野さんの方を見る。哲学者もむずかしい顔ばかりはしておられぬ。灯火は明かに揺れる。糸子は袖を口へ当てて、崩しかかった笑顔の収まり際に頭を上げながら、眸を豆の受持ち手の方へ動かし、眼を動かさんとするものは、まず顔を動かす。火事場に泥棒を働らくの格である。家庭的の女にもこのくらいな作略はある。素知らぬ顔の甲野さんは、すぐ問題を呈出した。

「御叔父さん、東塔とか西塔とか云うのは何の名ですか」

「やはり延暦寺の区域だね。広い山の中に、あすこに一と塊まり、ここに一と塊まりと坊が集まっているから、まあこれを三つに分けて東塔とか西塔とか云うのだと思えば間違はない」

「まあ、君、大学に、法、医、文とあるようなものだよ」と宗近君は横合から、知ったような口を出す。

「まあ、そうだ」と老人は即座に賛成する。

「東は修羅しゆら、西は都に近ければ横川よかわの奥ぞ住みよかりけると云う歌がある通り、横川が一番淋さびしい、学問でもするに好い所となつている。——今話した相輪櫓そうりんとうから五十丁も這入はいらなければ行かない」

「どうれで知らずに通つた訳だな、君」と宗近君がまた甲野さんに話しかける。甲野さんは何とも云わずに老人の説明を謹聴している。老人は得意に弁ずる。

「そら謡曲ふなべんけいの船弁慶にもあるだろう。——かように候そうろうものは、西塔さいとうの傍かたわらに住居すまいする武蔵坊弁慶にて候——弁慶は西塔におつたのだ」

「弁慶は法科にいたんだね。君なんかは横川の文科組なんだ。

——阿爺さんおとつ叡山えいざんの総長は誰ですか」

「総長とは」

「叡山の——つまり叡山を建てた男です」

「開基かいぎかい。開基は伝教大師でんぎょうだいしさ」

「あんな所へ寺を建てたつて、人泣かせだ、不便で仕方がありやしない。全体むか昔しの男は酔興だよ。ねえ甲野さん」

甲野さんは何だか要領を得ぬ返事を一口した。

「伝教大師は御前おまい、叡山の麓ふもとで生れた人だ」

「なるほどそう云えば分った。甲野さん分ったろう」

「何が」

「伝教大師御誕生地と云う棒杭ぼうぐいが坂本に建っていましたよ」

「あすこで生れたのさ」

「うん、そうか、甲野さん君も気が着いたろう」

「僕は気が着かなかつた」

「豆に気を取られていたからさ」

「アハハハハ」と老人がまた笑う。

観ずるものは見ず。昔しの人^そうは想こそ無上なれと説いた。逝^ゆく水は日夜を捨てざるを、いたずらに真と書き、真と書いて、去る波の今書いた真を今載^のせて杳然^{ようぜん}と去るを思わぬが世の常である。堂に法華^{ほっけ}と云い、石に仏足^{ぶつそく}と云い、櫟^{とう}に相輪^{そうりん}と云い、院に浄土と云うも、ただ名と年と歴史を記^きして吾事^{わがこと}畢^{おわ}ると思うは屍^{しかばね}を抱^{いだ}いて活ける人^{ほうふつ}を髣髴^{ほうふつ}するようなものである。見るは名あるがためではない。観ずるは見るがためではない。太上^{たいじょう}は形を離れて普遍の念に入る。——甲野さん^{えいぜん}が叡山^{えいざん}に登つて叡山^{えいざん}を知らぬはこの故である。

過去は死んでいる。大法鼓だいほうこを鳴らし、大法螺だいほうらを吹き、大法幢だいほうとうを樹たてて王城の鬼門まもを護りし昔むかしは知らず、中堂に仏眠りて天蓋てんがいに蜘蛛くもの糸引く古伽藍ふるがらんを、今いまさらのように桓武天皇かんむの御宇ぎようから掘り起して、無用の詮議せんぎに、千古の泥を洗い落すは、一日に四十八時間の夜昼ある閑人ひまじんの所作しよさである。現在こくは刻をきざんで吾われを待つ。有為ういの天下は眼前まへに落ち来る。双かいなの腕は風を截きつて乾坤けんこんに鳴る。——これだから宗近君は叡山いづさつに登りながら何にも知らぬ。

ただ老人だけは太平である。天下の興廃は叡山いづさつ一刹いっさつの指揮によつて、夜来やらい、日来にちらいに面目を新たにするものじやと思ひ籠こめたように、嬋々びびとして叡山いづさつを説く。説くは固もとより青年に対する親切から出る。ただ青年は少々迷惑である。

「不便だつて、修業のためにわざわざ、ああ云う山えらを択んで開く

のさ。今の大学などはあまり便利な所にあるから、みんな贅沢ぜいたくになつて行かん。書生の癖に西洋菓子だの、ホイスキーだのと云つて……」

宗近君は妙な顔をして甲野さんを見た。甲野さんは存外真面目まじめである。

「阿爺おとつさん叡山の坊主は夜十一時頃から坂本まで蕎麦そばを食いに行くそうですよ」

「アハハハ真逆まさか」

「なに本当ですよ。ねえ甲野さん。——いくら不便だつて食いたいのものは食いたいですからね」

「それはのらくら坊主だろう」

「すると僕らはのらくら書生かな」

「御前達はのらくら以上だ」

「僕らは以上でもいいが——坂本までは山道二里ばかりありますぜ」

「あるだろう、そのくらいは」

「それを夜の十一時から下りて、蕎麦を食つて、それからまた登るんですからね」

「だから、どうなんだい」

「到底のらくらじゃ出来ない仕事ですよ」

「アハハハハ」と老人は大きな腹を競り出して笑つた。洋灯の蓋が喫驚するくらいな声である。

「あれでも昔しは真面目な坊主がいたものでしょうか」と今度は甲野さんがふと思ひ出したような様子で聞いて見る。

「それは今でもあるよ。真面目なものが世の中に少ないごとく、僧侶にも多くはないが——しかし今だつて全く無い事はない。

何しろ古い寺だからね。あれは始めは一乗止観院いちじょうしがんいんと云つて、延暦寺となつたのはだいぶ後の事だあと。その時分から妙な行があつて、十二年間山へ籠り切りに籠るんだそうだがねこも

「蕎麦どころじゃありませんね」

「どうして。——何しろ一度も下山しないんだから」

「そう山の中で年ばかり取つてどうする了見かなりようけん」

と宗近君が今度は独語ひとりごとのように云う。

「修業するのさ。御前達もそうのらくらしないでちとそんな真似まねでもするがいい」

「そりや駄目ですよ」

「なぜ」

「なぜつて。僕は出来ない事もないが、そうした日にや、あなたの命令に背くそむ訳になりますからね」

「命令に？」

「だって人の顔を見るたんびに嫁を貰え嫁を貰えとおっしゃるじゃありませんか。これから十二年も山へ籠こもつたら、嫁を貰う時分にや腰が曲がっちゃいます」

一座はどつと噴ふき出した。老人は首を少し上げて頭の禿かを逆さかに撫でる。垂れ懸つた頬の肉が顫ふるえ落ちそうだ。糸子は俯うつむ向いて声を殺したため二重瞼ふたえまぶたが薄赤くなる。甲野さんの堅い口も解けた。

「いや修業も修業だが嫁も貰わなくちゃあ困る。何しろ二人だから億劫おっくうだ。——欽吾きんごさんも、もう貰わなければならんね」

「ええ、そう急には……」

いかにも気の無い返事をする。嫁を貰うくらいなら十二年叡山こもへでも籠こもる方が増しであると心のうちに思う。すべてを見逃

さぬ糸子の目には欽吾の心がひらりと映った。小さい胸が急に重くなる。

「しかし阿母さんおつかが心配するだろう」

甲野さんは何とも答えなかった。この老人も自分の母を尋常の母と心得ている。世の中に自分の母の心のうちを見抜いたものは一人いちにんもない。自分の母を見抜かなければ自分に同情しようはずがない。甲野さんは眇然びようぜんとして天地の間に懸あいだつていかる。世界滅却の日をただ一人ひとり生き残った心持である。

「君がぐずぐずしていると藤尾さんも困るだろう。女は年頃をはずすと、男と違つて、片づけるにも骨が折れるからね」

敬うべく愛すべき宗近の父は依然として母と藤尾の味方である。甲野さんは返事のしようがない。

「はじめ一にも貰つて置かんと、わしも年を取っているから、いつど

んな事があるかも知れないからね」

老人は自分の心で、わが母の心を推^{すい}している。親と云う名が同じでも親と云う心には相違がある。しかし説明は出来ない。

「僕は外交官の試験に落第したから当分駄目ですよ」と宗近が横から口を出した。

「去年は落第さ。今年の結果はまだ分らんだろう」

「ええ、まだ分らんです。ですがね、また落第しそうですよ」

「なぜ」

「やつぱりのらくら、以上だからでしょう」

「アハハハハ」

今夕^{こんせき}の会話はアハハハハに始まってアハハハハに終った。

真葛まぐずが原はらに女郎花おみなえしが咲いた。すらすらと薄すすきを抜けて、悔くいある
 高き身みに、秋風ひんを品ひんよく避よけて通す心細さを、秋は時雨しぐれて冬に
 なる。茶に、黒に、ちりちりに降る霜しもに、冬は果てしなく続つく
 なかに、細い命あさゆうを朝夕に頼み少なく繫つなぐ。冬は五年の長きを
 厭いとわず。淋まぎしき花は寒い夜を抜け出でて、紅緑まづしさに貧まづしさを知らぬ春
 の天下ふとうきに紛まぎれ込んだ。地に空に春風のわたるほどは物みな燃え
 立つて富貴ふうきに色づくを、ひそかなる黄を、一本ひとつもとの細き末にいた
 だいて、住はばむまじき世に肩身狭く憚はばかりの呼吸いきを吹くようであ
 る。

今までは珠たまよりも鮮あざやかなる夢いを抱いだいていた。真黒闇まぐらやみに据すえ
 た金剛石きんがうしにわが眼を授け、わが身を与え、わが心を託たくして、そ
 の他なる右も左りも氣かに懸いける暇いとまもなかった。懷ふとしろに抱く珠の光

りを夜に抜いて、二百里の道を遙々と闇の袋より取り出した時、珠は現実の明海に幾分か往昔の輝きを失った。

小夜子は過去の女である。小夜子の抱けるは過去の夢である。

過去の女に抱かれたる過去の夢は、現実と二重の関を隔てて逢う瀬はない。たまたまに忍んで来れば犬が吠える。自からも、わが来る所ではないか知らんと思う。懷に抱く夢は、抱くまじき罪を、人目を包む風呂敷に藏してなおさらに疑を路上に受くるような気がする。

過去へ帰ろうか。水のなかに紛れ込んだ一雫の油は容易に油壺の中へ帰る事は出来ない。いやでも心でも水と共に流れねばならぬ。夢を捨てようか。捨てられるものならば明海へ出ぬうちに捨ててしまう。捨てれば夢の方で飛びついて来る。

自分の世界が二つに割れて、割れた世界が各自に働き出すと

苦しい矛盾が起る。多くの小説はこの矛盾を得意に描く。小夜子の世界は新橋の停車場へぶつかった時、劈痕が入った。あとは割れるばかりである。小説はこれから始まる。これから小説を始める人の生活ほど気の毒なものはない。

小野さんも同じ事である。打ち遣った過去は、夢の塵をむくむくと掻き分けて、古ぼけた頭を歴史の芥溜から出す。おやと思う間に、ぬつくと立つて歩いて来る。打ち遣った時に、生息の根を留めて置かなかつたのが無念であるが、生息は断わりもなく向で吹き返したのだから是非もない。立ち枯れの秋草が氣紛の時節を誤つて、暖たかき陽炎のちらつくなかに甦えるのは情けない。甦つたものを打ち殺すのは詩人の風流に反する。追いつかれれば労らねば済まぬ。生れてから済まぬ事はただの一度もした事はない。今後とてとする気はない。済まぬ事をせぬよ

うに、また自分にも済むように、小野さんはちよつと未来の袖そでに隠れて見た。紫むらさきの匂は強く、近づいて来る過去の幽霊もこれならばと度胸を据すえかける途端とたんに小夜子は新橋に着いた。小野さんの世界にも劈痕が入る。作者は小夜子を気の毒に思うごとくに、小野さんをも気の毒に思う。

「阿父おとつさんは」と小野さんが聞く。

「ちよつと出ました」と小夜子は何となく臆している。引き越して新たに家をなす翌日あしたより、親一人に、子一人に春忙がしき世帯は、蒸むれやすき髪に櫛くしの齒を入れる暇もない。不断着の綿入めんいりさえ見すばらしく詩人の眼に映る。——粧よそおいは鏡に向つて凝こらす、はりへいり玻璃瓶裏に薔薇ばらの香かを浮かして、軽うんかんく雲鬟ひたを浸し去る時、琥珀こはくの櫛じようじようみどりは条々の翠を解く。——小野さんはすぐ藤尾の事を思い出した。これだから過去は駄目だと心のうちに語るものがある。

「御忙おいそがしいでしょう」

「まだ荷物などもそのままにしております……」

「御手伝きの手に出るつもりでしたが、昨日きのうも一昨日おとといも会がありませんでした……」

日ごとの会に招かる小野さんはその方面に名を得たる証拠である。しかしどんな方面か、小夜子には想像がつかぬ。ただ己おのれよりは高過ぎて、とても寄りつけぬ方面だと思う。小夜子は俯うつむ向むいて、膝ひざに載のせた右手の中指に光る金の指輪を見た。――藤尾ふじおの指輪とは無論比較にはならぬ。

小野さんは眼を上げて部屋の中を見廻めぐわした。低い天井てんじょうの白茶あまもりけた板いたの、二た所ふしあなまで節穴れつきの歴然れつきと見える上、雨漏あまもりの染しみを侵おかして、ここかしこと蜘蛛くもの囿いを欺あざむく煤すすがかたまつて黒く釣かりを懸かけている。左から四本目の棧すぎばしの中ほどを、杉箸すぎばしが一本横に

貫ぬいて、長い方の端が、思うほど下に曲がつているのは、立ち退いた以前の借主が通す縄に胸を冷やす氷嚢でもぶら下げたものだろう。次の間を立て切る二枚の唐紙は、洋紙に箔を置いてイギリスの幾何模様を規則正しく数十個並べている。屋敷らしい縁の黒塗がなおさら卑しい。庭は二た間を貫ぬく椽に沿うて勝手に折れ曲ると云う名のみで、幅は茶献上ほどのない。丈に足らぬ檜が春に用なき、去年の葉を硬く尖らして、瘠せて立つ後は、腰高塀に隣家の話が手に取るように聞える。家は小野さんが孤堂先生のために周旋したに相違ない。しかし極めて下卑ている。小野さんは心のうちに厭な住居だと思つた。どうせ家を持つならばと思つた。袖垣に辛夷を添わせて、松苔を葉蘭の影に畳む上に、切り立ての手拭が春風に揺らつくような所に住んで見たい。——藤尾はあの家を貫うとか聞いた。

「御蔭おかげさまで、好い家うちが手に入りまして……」と誇る事を知らぬ小夜子は云う。本当に好い家と心得ているなら情なさけない。あの人やつに奴鰻こうなぎを奢おごったなら、御蔭様で始めて旨い鰻うまを食べましてと礼を云った。奢った男はそれより以来この人を軽蔑けいべつしたそうである。

いじらしいのと見縊みくびるのはある場合において一致する。小野さんはたしかに真面目に礼を云った小夜子を見縊った。しかしそのうちに露いじらしいところがあるとは気がつかなかった。紫たが祟たったからである。祟があると思玉が三角になる。

「もつと好い家うちでないと御氣に入るまいと思つて、方々尋ねて見たんですが、あいにく恰好かつこうなのがなくなつて……」
と云い懸かけると、小夜子は、すぐ、

「いえこれで結構ですわ。父も喜んでおります」と小野さんの

言葉を打ち消した。小野さんは吝嗇けちな事を云うと思つた。小夜子は知らぬ。

細い面をちよつと奥へ引いて、上眼に相手の様子を見る。どうしても五年前とは變つてゐる。——眼鏡は金に變つてゐる。くろめがすり久留米緋は背広に變つてゐる。五分刈ごぶがりは光沢つやのある毛に變つてゐる。——髭ひげは一躍して紳士の域のほに上る。小野さんは、いつの間にかやら黒いものを蓄ためてゐる。もとの書生ではない。襟えりは卸おろし立てである。飾りには留針ピンさえ肩を動かすたびに光る。鼠の勝つた品の好い胴衣チョツキの隠袋かくしには——恩賜の時計が這入はいつてゐる。この上に金時計をとほ、小さき胸の小夜子が夢にだも知るはずがない。小野さんは變つてゐる。

五年の間一日一夜も懷ひとひとよに忘られぬ命より明らかな夢の中なる小野さんはこんな人ではなかつた。五年は昔である。西東長短にしひがし

の袂^{たもと}を分かつて、離愁^{りしゆう}を鎖^{とぎ}す暮雲^{ぼうん}に相思^{そうし}の関^{かん}を塞^せかれては、逢^あう事の疎^{うと}くなりまさるこの年月^{としつき}を、変らぬとのみは思いも寄らぬ。風吹けば変る事と思い、雨降れば変る事と思い、月に花に
 変る事と思い暮らしていた。しかし、こうは変るまいと念じて
 プラット・フォームへ下りた。

小野さんの変りかたは過去を順当に延ばして、健氣^{けなげ}に生い立つ
 た阿蒙^{あもう}の変りかたではない。色の褪^さめた過去を逆^{さか}に捩^ねじ伏せて、
 目醒^{めざま}しき現在を、相手が新橋へ着く前の晩に、性急^{こし}に拵^{こしら}え上
 げたような変りかたである。小夜子には寄りつけぬ。手を延ば
 しても届きそうにない。変りたくても変られぬ自分が恨めしい
 気になる。小野さんは自分と遠ざかるために変ったと同然であ
 る。

新橋へは迎^{むかえ}に来てくれた。車を備^{やと}つて宿へ案内してくれた。

のみならず、忙がしいうちを無理に算段して、蝸牛かたつむり親子して寝る庵いおりを借りてくれた。小野さんは昔の通り親切である。父も左様さように云う。自分もそう思う。しかし寄りつけない。

プラット・フォームを下りるや否や御荷物をと云った。小さい手提てさげの荷にはならず、持って貰うほどでもないのを無理に受取つて、膝掛ひざかけといつしよに先へ行つた、刻み足きざの後ろ姿うしを見たときに——これとは思つた。先へ行くのは、遙々はるばると来た二人を案内するためではなく、時候おく後れの親子を追い越して馳かけ抜けるためのように見える。割符わりふとは瓜二つうりを取つてつけて較くらべるための証しるし拠である。天に懸かる日よりも貴とうとしと護まもるわが夢を、五年いっとなせの長き香洩かもる「時」の袋から現在に引き出して、よも間違はあるまいと見較べて見ると、現在にはやくも遠くに立ち退のいてゐる。握る割符は通用しない。

始めは穴を出でて眩まばゆき故と思う。少し慣なれたらばと、逝ゆく日を杖つえに、一度逢い、二度逢い、三度四度と重なるたびに、小野さんはいよいよ丁寧になる。丁寧になるにつけて、小夜子はいよいよ近寄りがたくなる。

やさしく咽喉のどに滑すべり込む長い顎あごを奥へ引いて、上眼に小野さんの姿を眺ながめた小夜子は、変る眼鏡を見た。変る髭ひげを見た。変る髪ふの風ふうと変る装よそおいとを見た。すべての変るものを見た時、心の底でそつと嘆息ためいきを吐ついた。ああ。

「京都の花はどうです。もう遅いでしょう」

小野さんは急に話を京都へ移した。病人を慰めるには病氣の話をする。好かぬ昔に飛び込んで、ありがたくほどけ掛けた記憶よりぎやくの絢よりぎやくを逆に戻すは、詩人の同情である。小夜子は急に小野さんと近づいた。

「もう遅いでしよう。立つ前にちよつと嵐山へ参りましたがその時がちょうど八分通りでした」

「そのくらいでしよう、嵐山あらしやまは早いですから。それは結構でした。どなたとごいつしよに」

花を看みる人は星月夜のごとく黝おびただしい。しかしいつしよに行く人は天を限り地を限つて父よりほかにない。父でなければ——あとは胸のなかでも名は言わなかつた。

「やつぱり阿父おとつさんとですか」

「ええ」

「面白かつたでしよう」と口の先で云う。小夜子なぎはなぜか情けない心持がする。小野さんは出直した。

「嵐山も元とはだいぶ違つたでしようね」

「ええ。大悲閣だいひかくの温泉などは立派に普請ふしんが出来て……」

「そうですか」

「小督こくうの局つぼねの墓がござんしたろう」

「ええ、知っています」

「彼所あそこいらは皆掛茶屋みんなばかりで大変賑やかになりました」

「毎年俗まいとしになるばかりですね。昔の方がよほど好い」

近寄れぬと思つた小野さんは、夢の中の小野さんとはたりと合つた。小夜子のはつと思う。

「本当に昔の方が……」と云い掛けて、わざと庭を見る。庭には何にもない。

「私がいっしょに遊びに行つた時分は、そんなに雑沓ざつとうしませんでしたね」

小野さんはやはり夢の中の小野さんであつた。庭を向いた眼は、ちらりと真向まむきに返る。金縁の眼鏡めがねと薄黒い口髭くちひげがすぐ眸ひとみに

映る。相手は依然として過去の人ではない。小夜子はゆかしい昔話の緒の、するすると抜け出しそうな咽喉を抑えて、黙って口をつぐんだ。調子づいて角を曲ろうとする、どっこいと突き当る事がある。品のいい紳士淑女の対話も胸のうちでは始終突き当たっている。小野さんはまた口を開く番となる。

「あなたはあの時分と少しも違っていらつしやいませんね」

「そうでしょうか」と小夜子は相手を諾するような、自分を疑うような、気の乗らない返事をする。変っておりさえすればこんな心配はしない。変るのは歳ばかりで、いたずらに育った縞柄と、用い古るした琴が恨めしい。琴は蔽のまま床の間に立て掛けてある。

「私はだいぶ変りましたろう」

「見違えるように立派に御成りです事」

「ハハハハそれは恐れ入りますね。まだこれからどしどし変るつもりです。ちようど嵐山のように……」

小夜子は何と答えていいか分らない。膝ひざに手を置いたまま、下を向いている。小さい耳みみが、行儀よく、鬢びんの末くぐを潜り抜けて、頬ほと頸くびの続目つぎめが、暈ぼかしたように曲線を陰に曳ひいて去る。見事な画えである。惜しい事に真向まむきに座すわった小野さんには分からない。詩人は感覚美を好む。これほどの肉の上げ具合、これほどの肉の退ひき具合、これほどの光線ひに、これほどの色の付き具合は滅多めったに見られない。小野さんがこの瞬間にこの美しい画を捕えたなら、編み上げの踵かかとを、地に滅めり込むほどに回めぐらして、五年の流を逆に過去に向つて飛びついたかも知れぬ。惜しい事に小野さんは真向まむきに坐っている。小野さんはただ面白味のない詩趣に乏しい女だと思つた。同時に波を打つて鼻の先ひるがに翻ひるがえる袖そで

の香^かが、濃^{むらさき}き紫^{みけん}の眉^{かす}間^{かす}を掠^{かす}めてふんとする。小野さんは急に帰りたくなつた。

「また来ましょう」と背^せ広^{びろ}の胸^{むね}を合^あせる。

「もう帰る時分ですから」と小さな声で引き留^{とど}めようとする。

「また来ます。御^ご帰^{かへ}りになつたら、どうぞ宜^{よろ}しく」

「あの……」と口^{くちごも}籠^{かご}つてゐる。

相手は腰^{こし}を浮^うかしながら、あののあとを待ち兼ねる。早くと急^せぎ立^たてられる気がする。近寄^{きよ}れぬものはますます離^{はな}れて行く。情^{なさけ}ない。

「あの……父^{ちち}が……」

小野さんは、何とも知れず重い気分になる。女はますます切り出^でし悪^{にく}くなる。

「また上がります」と立ち上がる。云おうと思う事を聞いても

くれない。離れるものは没義道に離れて行く。未練も会釈もな
く離れて行く。玄関から座敷に引き返した小夜子は惘然として、
椽えんに近く坐つた。

降らんとして降り損ねた空の奥から幽かな春の光りが、淡き
雲に遮さへぎられながら一面に照り渡る。長閑かさを抑えつけたる
頭の上は、晴るるようで何となく鬱陶うつとうしい。どこやらで琴の音
がする。わが弾ひくべきは塵も払わず、更紗の小包を二つ並べた
間に、袋のままで淋さびしく壁に持たれている。いつ鬱金うこんの掩おひを除
ける事やら。あの曲はだいぶ熟なれた手に違ない。片々に抑えて
片々に弾はじく爪の、安らかに幾関の柱を往きつ戻りつして、春を
限りと乱るる色は甲斐かい甲斐がいしくも豊かである。聞いていると、
あの雨をつい昨日きのうのように思う。ちらちらに昼の螢と竹垣に滴
る連翹れんぎょうに、朝から降つて退屈だと阿父様がおっしゃる。縷子しゆすの

袖口は手頸てくびに滑りやすい。絹糸を細長く目に貫ぬいたまま、針差の紅くれなゐをふつりと刺して立ち上がる。盛り上がる古桐の長い胴に、鮮あざやかに眼を醒さませと、への字に渡す糸の数々を、幾度か抑えて、幾度か撥はねた。曲はたしか小督こしゅうであつた。狂う指の、憂うき昼を、くちやくちやに揉もみこなしたと思う頃、阿父様は御苦労と手ずから御茶を入れて下さつた。京は春の、雨の、琴ことの京である。なかでも琴は京によう似合う。琴の好すきな自分は、やはり静かな京に住むが分である。古い京から抜けて来た身は、闇やみを破やぶる鳥からすの、飛び出して見て、そぞろ黒きに驚ろき、舞い戻らんとする夜はからりと明け離れたようなものである。こんな事なら琴の代りに洋琴ピアノでも習つて置けば善かつた。英語も昔のままで、今はおおかた忘れてゐる。阿父とうさまは女にそんなものは必要がないとおつしやる。先の世に住み古るしたる人を便りに、小野さんに

は、追いつく事も出来ぬように後れてしまった。住み古るした人の世はいずれ長い事はあるまい。古るい人に先だたれ、新しい人に後れれば、今日きょうを明日あすと、その日に数はかる命は、文あやも理めも危あやうい。……

格子こうしががらりと開あく。古いにしえの人は帰った。

「今帰ったよ。どうも苛ひどい埃ほこりでね」

「風もないのに？」

「風はないが、地面が乾いてるんで——どうも東京と云う所は厭いやな所だ。京都の方がよっぽどいいね」

「だって早く東京へ引き越す、引き越すって、毎日のように云っていらしたじゃありませんか」

「云った事は、云ってたが、来て見るとそうでもないね」と
椽側たびで足袋をはたいて座に直った老人は、

「茶碗が出ているね。誰か来たのかい」

「ええ。小野さんがいらしって……」

「小野が？ そりゃあ」と云ったが、提^さげて来た大きな包をか
らげた細縄の十文字を、丁寧^{ていねい}に一文字ずつほどこき始める。

「今日はね。座布^{ざふとん}団を買おうと思つて、電車へ乗つたところが、
つい乗り替を忘れて、ひどい目に逢^あつた」

「おやおや」と気の毒そうに微笑^{ほほえ}んだ娘は

「でも布団は御買いになつて？」と聞く。

「ああ、布団だけはここへ買つて来たが、御蔭^{おかげ}で大変遅れてし
まつたよ」と包みのなかから八丈^{はちじょう}まがいの黄^{しま}な縞を取り出す。

「何枚買つていらしって」

「三枚さ。まあ三枚あれば当分間に合うだろう。さあちよつと
敷いて御覧」と一枚を小夜子の前へ出す。

「ホホホあなた御敷なさいよ」

「阿父おとつさんも敷くから、御前も敷いて御覧。そらなかなか好いだろ
う」

「少し綿が硬いようね」

「綿はどうせ——価ねが価だから仕方がない。でもこれを買うために電車に乗り損そくなつてしまつて……」

「乗替をなさらなかつたんじゃないの」

「そうさ、乗替を——車掌に頼んで置いたのに。忌々いまいましいから
帰りには歩いて来た」

「御草臥おくだびれなすつたでしょう」

「なあに。これでも足はまだ達者だからね。——しかし御蔭で
髻ひげも何も埃ほこりだらけになつちまつた。こら」と右手めての指を四本并なら
べて櫛くしの代りに顎あごの下を梳すくと、果して薄黒いものが股につい

て来た。

「御湯に御這入^{おはい}んなさらないからですよ」

「なに埃だよ」

「だって風もないのに」

「風もないのに埃が立つから妙だよ」

「だって」

「だってじゃないよ。まあ試しに外へ出て御覧。どうも東京の埃には大抵のものは驚ろくよ。御前がいた時分もこうかい」

「ええ随分苛^{ひど}くつてよ」

「年々烈しくなるんじゃないかしら。今日なんぞは全く風はないね」と廂^{ひさし}の外を下から覗^{のぞ}いて見る。空は曇る心持ちを透^すかし、春の日があやふやに流れている。琴の音^ねがまだ聴^{きこ}える。

「おや琴を弾いているね。——なかなか旨^{うま}い。ありや何だい」

「当てて御覧なさい」

おとっさん

「当てて見ろ。ハハハハ阿父には分らないよ。琴を聴くと京都の事を思い出すね。京都は静でいい。阿父のような時代後れの人間は東京のような烈^{はげ}しい所には向かない。東京はまあ小野だの、御前だののような若い人が住まう所だね」

時代後れの阿父は小野さんと自分のためにわざわざ埃だらけの東京へ引き越したようなものである。

「じゃ京都へ帰りましょうか」と心細い顔に笑^{えみ}を浮べて見せる。老人は世に疎^{うと}いわれを憐れむ孝心と受取った。

「アハハハハ本当に帰ろうかね」

「本当に帰ってもようござんすわ」

「なぜ」

「なぜでも」

「だつて来たばかりじゃないか」

「来たばかりでも構いませんわ」

「構わない？　ハハハハ冗談を……」
じょうだん

娘は下を向いた。

「小野が来たそうだね」

「ええ」娘はやつぱり下を向いている。

「小野は——小野は何かね——」

「え？」と首を上げる。老人は娘の顔を見た。

「小野は——来たんだね」

「ええ、いらしつてよ」

「それで何かい。その、何も云つて行かなかつたのかい」

「いいえ別に……」

「何にも云わない？——待つてれば好いのに」

「急ぐからまた来るつて御帰りになりました」

「そうかい。それじゃ別に用があつて来た訳じゃないんだね。」

「そうか」

「阿父様おとうさま」

「何だね」

「小野さんは御変りなさいましたね」

「変つた？——ああ大変立派になつたね。新橋で逢あつた時はまるで見違えるようだった。まあ御互に結構な事だ」

娘はまた下を向いた。——単純な父には自分の云う意味が徹せぬと見える。

「私は昔の通りで、ちつとも變つていないそうです。……變つていないたつて……」

後あとの句は鳴る糸の尾を素足に踏むごとく、孤堂先生の頭に響

いた。

「変つていないたつて？」と次を催促する。

「仕方がないわ」と小さな声で附ける。老人は首を傾けた。

「小野が何か云つたかい」

「いいえ別に……」

同じ質問と同じ返事はまた繰返される。水車みずぐるまを踏めば廻るばかりである。いつまで踏んでも踏み切れるものではない。

「ハハハくだらぬ事を氣にしちやいけない。春は氣が鬱ふさぐものでね。今日なぞは阿父おとつさんなどにもよくない天氣だ」

氣が鬱ふさぐのは秋である。餅もちと知つて、酒の咎とがだと云う。慰さ

められる人は、馬鹿にされる人である。小夜子は黙っていた。

「ちつと琴ことでも弾ひいちやどうだい。氣晴きばらしに」

娘は浮かぬ顔を、愛嬌あいぎように傾けて、床の間を見る。軸じくは空むなしく

落ちて、いたずらに余る黒壁の端を、たて 豎に截きつて、うこん 鬱金の蔽おひが春を隠さず明らかである。

「まあ廃よしましょう」

「廃す？ 廃すなら御廃し。——あの、小野はね。近頃忙がし
いんだよ。きんきん 近々博士論文を出すんだそうで……」

小夜子は銀時計すらいらぬと思う。百の博士も今の己おのれには
無益である。

「だから落ちついていないんだよ。学問に凝こると誰でもあんな
ものさ。あんまり心配しないがいい。なに緩ゆつくりしたくつても、
していられないんだから仕方がない。え？ 何だつて」

「あんなにね」

「うん」

「急いでね」

「ああ」

「御歸りに……」

「御歸りに——なつた？　ならないでも？　好きそうなものだつて仕方がないよ。学問で夢中になつてゐるんだから。——だから一日都合をして貰つて、いっしょに博覧会でも見ようつて云つてゐるんじゃないか。御前話したかい」

「いいえ」

「話さない？　話せばいいのに。いつたい小野が来たと云うのに何をしていたんだ。いくら女だつて、少しは口を利^きかなくつちやいけない」

口を利けぬように育てて置いてなぜ口を利かぬと云う。小夜子はすべての非を負わねばならぬ。眼の中が熱くなる。

「なに好いよ。阿父^{おとつさん}が手紙で聞き合せるから——悲しがる事は

ない。叱つたんじゃない。——時に晩の御飯はあるかい」

「御飯だけがあります」

「御飯だけあればいい、なに御菜おさいはいらないよ。——頼んで置いた婆さんは明日あしたくるそうだ。——もう少し慣れると、東京だつて京都だつて同じ事だ」

小夜子は勝手へ立つた。孤堂先生は床の間の風呂敷包を解き始める。

十

謎なぞの女は宗近家むねちかへ乗り込んで来る。謎の女のいる所には波が山となり炭団たどんが水晶と光る。禅家では柳は緑花は紅くれなゐと云う。あるいは雀はちゅちゅで鳥からすはかあかあとも云う。謎の女は鳥をちゅ

ちゆにして、雀をかあかあにせねばやまぬ。謎の女が生れてから、世界が急にほうすんごたくさになつた。謎の女は近づく人を鍋の中へ入れて、方寸の杉箸に交ぜ繰り返す。芋をもつて自みずからおるものでなければ、謎の女に近づいてはならぬ。謎の女は金剛石ダイヤモンドのようなものである。いやに光る。そしてその光りの出所が分らぬ。右から見ると左に光る。左から見ると右に光る。雑多な光を雑多な面から反射して得意である。神楽かぐらの面には二十通りほどある。神楽の面を発明したものは謎の女である。——謎の女は宗近家へ乗り込んでくる。

真率なる快活なる宗近家の大和尚だいおしょうは、かく物騒な女が天あめが下に生を享うけて、しきりに鍋の底を攪かき廻しているとは思ひも寄らぬ。唐木からぎの机に唐刻ほうじようの法帖を乗せて、厚い坐布団の上に、信濃しなのの国に立つ煙、立つ煙と、大きな腹の中から鉢はちの木きを謡うたつてい

る。謎の女はしだいに近づいてくる。

悲劇マクベスの妖婆ようばは鍋なべの中に天下の雑物ぞうもつを攫さらい込んだ。石の影みに三十日そかの毒を人知れず吹く夜の墓ひきと、燃ゆる腹を黒せき背かに蔵かくす蝾螈いもりの胆きもと、蛇の眼まなこと蝙蝠かわほりの爪と、——鍋はぐらぐらと煮える。妖婆はぐるりぐらりと鍋を廻る。枯れ果てて尖とがれる爪は、世を咀のろう幾代いくよの錆さびに瘡やせ尽くしたる鉄くろがねの火箸ひばしを握る。煮え立つた鍋はどろどろの波を泡あわと共に起す。——読む人は怖ろしいと云う。

それは芝居である。謎の女はそんな気味の悪い事はせぬ。住むは都である。時は二十世紀である。乗り込んで来るのは真昼間まっぴるまである。鍋の底からは愛嬌あいぎようが湧わいて出る。漾ただようは笑の波だと云う。攪かき淆まぜるのは親切の箸と名づける。鍋そのものから品ひんよく出来上っている。謎の女はそろりそろりと攪かき淆まぜる。手

つきさえ能掛のうがかりである。大和尚だいおしょうの怖こわがらぬのも無理はない。

「いや。だいぶ御暖おあつたかになりました。さあどうぞ」と布団の方へ

大きな掌てのひらを出す。女はわざと入口に坐つたまま両手を尋常につかえる。

「その後のちは……」

「どうぞ御敷き……」と大きな手はやつぱり前へ突き出したままである。

「ちよつと出ますんでございますが、つい無人ぶにんだもので、出ようと思ひながら、とうとう御無沙汰ごぶさたになりました……」で少し句が切れたから大和尚が何か云おうとすると、謎の女はすあとぐ後をつける。

「まことに相済みません」で黒い頭をぴたりと畳へつけた。

「いえ、どう致しまして……」ぐらいでは容易に頭を上げる女

ではない。ある人が云う。あまりしとやかに礼をする女は気味がわるい。またある人が云う。あまり丁寧に御辞儀をする女は迷惑だ。第三の人が云う。人間の誠は下げる頭の時間と正比例するものだ。いろいろな説がある。ただし大和尚は迷惑党である。

黒い頭は畳の上に、声だけは口から出て来る。

「御宅でも皆様御変りもなく……毎々きんご欽吾や藤尾ふじおが生まれて、
ごやつかい御厄介にばかりなりまして……

……せんだつてはまた結構なものをちようだい致しまして、とうに御礼に上がらなければならんでございますが、つい手前にかまけまして……」

頭はここでもうやく上がる。おとつさん阿父はほつと氣息いきをつく。

「いや、詰らんもので……到来物でね。アハハハようやく暖あつたかになつて」と突然時候をつけて庭の方を見たが

「どうです御宅の桜は。今頃はちょうど盛さかでしよう」で結んでしまった。

「本年は陽気のせいか、例年より少し早目みしろで、四五日前ぜんがちょうど観み頃でございましたが、一昨日いつさくじつの風で、だいぶ傷いためられまして、もう……」

「駄目ですか。あの桜は珍らしい。何とか云いましたね。え？
浅葱あさぎざくら桜。そうそう。あの色が珍らしい」

「少し青味を帯びて、何だか、こう、夕方などは凄すごいような心持が致します」

「そうですか、アハハハハ。荒川あらかわには緋桜ひざくらと云うのがあるが、
浅葱桜は珍らしい」

「みなさんがそうおっしゃいます。八重はたくさんあるが青いのは滅多にあるまいってね……」

「ないですよ。もつとも桜も好事家こうずかに云わせると百幾種とかあるそうだから……」

「へええ、まあ」と女はさも驚ろいたように云う。

「アハハハ桜でも馬鹿には出来ない。この間も一はじめが京都から帰つて来て嵐山へ行つたと云うから、どんな花だと聞いて見たら、ただ一重だと云うだけでね、何にも知らない。今時のものは呑気のんきなものでアハハハハ。——どうです粗菓そかだが一つ御撮おつまみなさい。岐阜ぎふの柿羊羹かきようかん」

「いえどうぞ。もう御構うまい下さいますな……」

「あんまり、旨いものじゃない。ただ珍らしいだけだ」と宗近老人は箸はしを上げて皿の中から剥はぎ取つた羊羹の一片ひときれを手を受け、独りひとでむしゃむしゃ食う。

「嵐山と云えば」と甲野こうのの母は切り出した。

「せんだつて中は欽吾きんごがまた、いろいろ御厄介ごがけになりました、御蔭様で方々見物させていただいたと申して大変喜んでおります。まことにあの通の我儘者わがままものでございますから一さんもさぞ御迷惑でございましたらう」

「いえ、一の方でいろいろ御世話になったそうで……」

「どう致しまして、人様の御世話などの出来るような男ではございませんので。あの年になりまして朋友ほうゆうと申すものがただの一人もございませんそうで……」

「あんまり学問をすると、そう誰でも彼でもむやみに附合つきあいが出来にくくなる。アハハハハ」

「私には女でいっこう分りませんが、何だか鬱ふさいばかりいるようで——こちらの一さんにでも連れ出していただかないと、誰も相手にしてくれないように……」

「アハハハハ一はまた正反對。誰でも相手にする。家にさえいるとあなた、妹いもにばかりからかつて——いや、あれでも困る」

「いえ、誠に陽氣で淡泊さつぱりしてて、結構でございますねえ。どうか一さんの半分でいいから、欽吾がもう少し面白くしてくれれば好いと藤尾にも不断申しているんでございますが——それもこれもみんな彼人あれの病氣のせいだから、今さら愚癡ぐちをこぼしたつて仕方がないとは思いますが、なまじい自分の腹を痛めた子でないだけに、世間へ対しても心配になりました……」

「ごもつともで」と宗近老人は真面目まじめに答えたが、ついでに灰吹はいふきをぽんと敲たたいて、銀の延打のべうちの煙管きせるを畳の上にころりと落す。雁首がんくびから、余る煙が流れて出る。

「どうです、京都から帰ってから少しは好いようじゃありませんか」

「御蔭様で……」

「せんだつて家へ見えた時などは皆と馬鹿話をして、だいぶ愉快そうでしたが」

「へええ」これは仔細らしく感心する。「まことに困り切ります」これは困り切つたように長々と引き延ばして云う。

「そりや、どうも」

「彼人の病氣では、今までどのくらい心配したか分りません」

「いつそ結婚でもさせたら氣が變つて好いかも知れませんか」

謎の女は自分の思ふ事を他に云わせる。手を下しては落度になる。向うで滑つて転ぶのをおとなしく待つてゐる。ただ滑るような泥海を知らぬ間に用意するばかりである。

「その結婚の事を朝暮申すのでございますが——どう在つても、うんと云つて承知してくれませんか。私も御覽の通り取る年でこ

ございますし、それに甲野もあんな風に突然外国で亡なくなります
ような仕儀で、まことに心配でなりませんから、どうか一日も早いちじつ
く彼人のために身の落つきをつけてやりたいと思ひまして……
本当に、今まで嫁の事を持ち出した事は何度だか分りません。
が持ち出さんびに頭から撥はねつけられるのみで……」

「実はこの間見えた時も、ちよつとその話をしたんですがね。
君がいつまでも強情を張ると心配するのは阿母おつかさんだけで、可愛想
だから、今のうちに早く身を堅めて安心させたら善かろうつて
ね」

「御親切にどうもありがとう存じます」

「いえ、心配は御互で、こつちもちょうどどうかしなければな
らないのを二人背負しよい込んでるものだから、アハハハどうも
何ですね。何歳いくつになつても心配は絶えませんね」

「此方様などは結構でいらつしやいますが、私は——もし彼人がいつまでも病氣だ病氣だと申して嫁を貰つてくれませんうちに、もしもの事があつたら、草葉の陰で配偶つれあいに合わす顔がございません。まあどうして、あんなに聞き訳がないんでございましょう。何か云い出すと、阿母おつかさんわたし私はこんな身体からだで、とても家の面倒は見て行かれないから、藤尾に聶むこを貰つて、阿母おつかさんの世話をさせて下さい。私は財産なんか一銭も入らない。と、まあこうでござんすもの。私が本当の親なら、それじゃ御前の勝手におしと申す事も出来ますが、御存じの通りなさぬ中の間柄でございますから、そんな不義理な事は人様に対しても出来かねますし、じつに途方に暮れます」

謎の女は和尚おしょうをじつと見た。和尚は大きな腹を出したまま考えている。灰吹がぼんと鳴る。紫檀したんの蓋ふたを丁寧かぶに被せる。煙管きせる

は転がった。

「なるほど」

和尚の声は例に似ず沈んでいる。

「そうかと申して生の母でない私が圧制がましく、むやみに差出た口を利きますと、御聞かせ申したくないようなごたごたも起りましょうし……」

「ふん、困るね」

和尚は手提てさげの煙草盆の浅い抽出ひきだしから鬱金木綿うこんもめんの布巾ふきんを取り出して、鯨くじらの蔓つるを鄭重ていちょうに拭き出した。

「いつそ、私からとくと談じて見ましょうか。あなたが云い悪ければ」

「いろいろ御心配を掛けまして……」

「そうして見るかね」

「どんなものでございましょう。ああ云う神経が妙になつているところへ、そんな事を聞かせましたら」

「なにそりや、承知しているから、当人の氣に障さわらないように云うつもりですがね」

「でも、万一私がこなたへ出てわざわざ御願ひ申したように取られると、それこそ後あとが大変な騒さわぎになりますから……」

「弱るね、そう、疳かんが高くなつてちやあ」

「まるで腫物はれものへ障さわるようで……」

「ふうん」と和尚おしょうは腕組ゆきを始めた。袖ゆきが短かいので太い肘ひじが無作法ぶざほうに見える。

謎なぞの女は人を迷宮に導いて、なるほどと云わせる。ふうんと云わせる。灰吹をぽんと云わせる。しまいには腕組ゆきをさせる。二十世紀の禁物は疾言しつげんと遽色きょしよくである。なぜかと、ある紳士、あ

る淑女に尋ねて見たら、紳士も淑女も口を揃そろえて答えた。——
疾言と遽色ていしよくは、もつとも法律に触れやすいからである。——謎
の女の鄭重ていぢゆうなのはもつとも法律に触れ悪い。和尚は腕組をして
ふうんと云った。

「もし彼人あれが断然家うちを出ると云い張りますと——私がそれを見
て無論黙っている訳には参りませんが——しかし当人がどうし
ても聞いてくれないとすると……」

「むこ聾かね。聾となると……」

「いえ、そうなつては大変でございますが——万一の場合も考
えて置かないと、いざと云う時に困りますから」

「そりや、そう」

「それを考えると、あれが病氣でもよくなつて、もう少ししつ
かりしてくれないうちは、藤尾を片づける訳に参りません」

「左様さようさね」と和尚は単純な首を傾けたが

「藤尾さんは幾歳いくつです」「

「もう、明けて四しになります」

「早いものですね。えつ。ついこの間までこれっばかりだった
が」と大きな手を肩とすれすれに出して、ひろげた掌てのひらを下から
覗のぞき込むようにする。

「いえもう、身体なりばかり大きゅうございまして、から、役に立
ちません」

「……勘定すると四になる訳だ。うちの糸が二だから」

話は放ほうつて置くとどこかへ流れて行きそうになる。謎の女は
引つ張らなければならぬ。

「こちらでも、糸子さんやら、一さんはじめやらで、御心配のところ
を、こんな余計な話を申し上げて、さぞ人の気も知らない呑気のんき

な女だと覺し召すでございましょうが……」

「いえ、どう致して、実は私の方からその事についてとくと御相談もしたいと思つていたところで——はじめ一も外交官になるとか、ならんとか云つて騒いでいる最中だから、今日明日と云う訳にも行かないですが、おそ晩かれ、早かれ嫁を貰わなければならんで……」

「でございますとも」

「ついては、その、藤尾さんなんですがね」

「はい」

「かたあの方なら、まあ気心も知れているし、私も安心だし、一は無論異存のある訳はなし——よかろうと思うんですがね」

「はい」

「どうでしょう、おつかさん阿母の御考は」

「あの通^{とお}行き届きませんものをそれほどまでにおつしやつて下さるのはまことにありがたい訳でございますが……」

「いいじゃ、ありませんか」

「そうなれば藤尾も仕合せ、私も安心で……」

「御不足ならともかく、そうでなければ……」

「不足どころじゃございません。願^{かな}つたり叶^{かな}つたりで、この上もない結構な事でございますが、ただ彼^あ人^れに困りますので。一人さんは宗近家を御^お襲^つぎになる大事な身体でいらつしやる。藤尾が御氣に入るか、入らないかは分りませんが、まず貰^{もら}つていただいたと致したところで、差上げた後で、欽吾がやはり今のようでは私も実のところはなはだ心細いような訳で……」

「アハハハそう心配しちや際限がありませんよ。藤尾さんさえ嫁に行つてしまえば欽吾さんにも責任が出る訳だから、自然と

考もちがつてくるにきまつている。そうなさい」

「そう云うものでございましょうかね」

「それに御承知の通、阿父おとつさんがいつぞやおつしやつた事もあるし。そうなれば亡なくなつた人も満足だろう」

「いろいろ御親切にありがとう存じます。なに配偶つれあいさえ生きておりますれば、一人で——こん——こんな心配は致さなくつても宜よろしい——のでございますが」

謎の女の云う事はしだいに湿氣しつけを帯びて来る。世に疲れたる筆はこの湿氣を嫌う。辛うかろじて謎の女の謎をここまで叙きたし来つた時、筆は、一步も前へ進む事が厭いやだと云う。日を作り夜を作り、海と陸おかとすべてを作りたる神は、七日目に至つて休めと言つた。謎の女を書きこなしたる筆は、日のあたる別世界に入つてこの湿氣を払わねばならぬ。

日のあたる別世界には二人の兄妹きょうだいが活動する。六畳の中二階ちゅうにかいの、南を受けて明るきを足れりとせず、小気味よく開け放ちたる障子の外には、二尺の松が信楽しがらきの鉢はちに、蟠わだかまる根を盛りあげて、くの字の影を椽えんに伏せる。一間いっけんの唐紙からかみは白地に秦漢瓦鐃しんかんがとうの譜を散らしに張つて、引手には波に千鳥が飛んでいる。つづく三尺の仮とこの床は、軸を嫌つて、籠花活かごはなけに軽い一輪をぎつくばらんに投げ込んだ。

糸子は床の間に縫物の五色を、彩あやと乱して、糸屑いとくずのこぼるるほどの抽出ひきだしを二つまであらわに抜いた針箱を窓近くに添える。縫うて行く糸の行方ゆくえは、一針ごとに春を刻きざむ幽かすかな音に、聴かれるほどの静かさを、兄は大きな声で消してしまふ。

腹這はらばいは弥生やよいの姿、寝ながらにして天下の春を領す。物指ものさしの先でしきりに敷居たたを敲たたいている。

「糸公。こりや御前の座敷の方が明かるくつて上等だね」

「替えたげましょうか」

「そうさ。替えて貰ったところで余り儲あんまかりそうでもないが——
しかし御前には上等過ぎるよ」

「上等過ぎたつて誰も使わないんだから好いじゃありませんか」
「好いよ。好い事は好いが少し上等過ぎるよ。それにこの装飾
物がどうも——妙齡の女子には似合わしからんものがあるじや
ないか」

「何が？」

「何がつて、この松さ。こりやたしか阿父おとつさんが苔盛園たいせいえんで二十五円
で売りつけられたんだろう」

「ええ。大事な盆栽よ。ひつくりかえし転覆でもしようもんなら大変よ」

「ハハハこれを二十五円で売りつけられる阿爺おとつさんも阿爺だが、

それをまた二階まで、えつちらおつちら担かつぎ上げる御前も御前だね。やつぱりいくら年が違つても親子は争あわれないものだ」

「ホホホ兄さんはよつぽど馬鹿ね」

「馬鹿だつて糸公と同じくらいな程度だあね。兄弟だもの」

「おやいやだ。そりや私わたしは無論馬鹿ですわ。馬鹿ですけれども、

兄さんも馬鹿よ」

「馬鹿よか。だから御互に馬鹿よで好いじゃあないか」

「だつて証拠があるんですもの」

「馬鹿の証拠がかい」

「ええ」

「そりや糸公の大発明だ。どんな証拠があるんだね」

「その盆栽はね」

「うん、この盆栽は」

「その盆栽はね——知らなくって」

「知らないとは」

「私大嫌よ」

「へええ、今度こんだこっちの大発明だ。ハハハハ。嫌きらいものを、な
んでまた持つて来たんだ。重いだろうに」

「阿父おとうさまが御自分で持つていらしたのよ」

「何だつて」

「日あが中つて二階の方が松のために好いつて」

「阿爺おやじも親切だな。そうかそれで兄さんが馬鹿になつちまつた
んだね。阿爺親切にして子は馬鹿になりか」

「なに、そりや、ちよつと。発句ほっく？」

「まあ発句に似たもんだ」

「似たもんだつて、本当の発句じゃないの」

「なかなか追窮するね。それよりか御前今日は大変立派なものを縫ってるね。何だいそれは」

「これ？ これは伊勢崎いせざきでしょう」

「いやに光ひかつくじゃないか。兄さんのかい」

おとうさま
「阿爺おとうさまのよ」

「阿爺おとうさまのものばかり縫って、ちつとも兄さんには縫ってくれないね。狐ちやんちゃんの袖うそ無おみかぎ以後御見限りだね」

「あらいやだ。あんな嘘うそばかり。今着ていらつしやるのも縫って上げたんだわ」

「これかい。これはもう駄目だ。こらこの通り」

「おや、ひどい襟垢えりあかだ事、こないだ着たばかりなのに——兄あふらさんは膏が多過ぎるんですよ」

「何が多過ぎても、もう駄目だよ」

「じゃこれを縫い上げたら、すぐ縫って上げましょう」

「新らしいんだろうね」

「ええ、洗って張ったの」

「あの親父おとつさんの拝領ものか。ハハハハ。時に糸公不思議な事があるがね」

「何が」

「阿爺は年寄の癖に新らしいものばかり着て、年の若いおれには御古おふるばかり着せたがるのは、少し妙だよ。この調子で行くとしまいいは自分でパナマの帽子を被って、おれには物置にある陣笠じんがさをかぶれと云うかも知れない」

「ホホホ兄さんは随分口が達者ね」

「達者なのは口だけか。可哀かわいそう想に」

「まだ、あるのよ」

宗近君は返事をやめて、欄干らんかんの隙間すきまから庭前の植込にわさきを頬杖ほおづえに見下みくだしている。

「まだあるのよ。一寸ちよいと」と針を離れぬ糸子の眼は、左の手につんと撮つまんだ合せ目を、見る間まに括くけて来て、いざと云う指先を白くふつくらと放した時、ようやく兄の顔を見る。

「まだあるのよ。兄さん」

「何だい。口だけでたくさんだよ」

「だって、まだあるんですもの」と針の針孔めどを障子しょうじへ向けて、可愛かわいらしい二重瞼ふたえまぶたを細くする。宗近君は依然として長閑のどかな心を頬杖に託して庭を眺ながめている。

「云つて見ましようか」

「う。うん」

下顎したあごは頬杖で動かす事が出来ない。返事は咽喉のどから鼻へ抜け

る。

「あし。分つたでしょう」

「う。うん」

紺の糸を唇くちびるに湿しめして、指先に尖とがらすは、射損いそくなつた針孔を通す女の計はかりごとである。

「糸公、誰か御客があるのかい」

「ええ、甲野の阿母おつかさんが御出おいでよ」

「甲野の阿母か。あれこそ達者だね、兄さんなんかとうてい叶かなわない」

「でも品ひんがいいわ。兄さん見たように悪口はおつしやらないくらいいいわ」

「そう兄さんが嫌きらじゃ、世話の仕栄しづえがない」

「世話もしない癖に」

「ハハハハ実は狐の袖無の御札に、近日御花見にでも連れて行くかと思つていたところだよ」

「もう花は散つてしまつたじゃありませんか。今時分御花見だなんて」

「いえ、上野や向島は駄目だが荒川は今が盛だよ。荒川から萱野へ行つて桜草を取つて王子へ廻つて汽車で帰つてくる」

「いつ」と糸子は縫う手をやめて、針を頭へ刺す。

「でなければ、博覧会へ行つて台湾館で御茶を飲んで、イルミネーションを見て電車で帰る。——どっちが好い」

「わたし、博覧会が見たいわ。これを縫つてしまつたら行きましよう。ね」

「うん。だから兄さんを大事にしなくっちゃあ行けないよ。こんな親切な兄さんは日本中に沢山はないぜ」

「ホホホホへえ、大事に致します。——ちよつとその物指を借かしてちょうだい」

「そうして裁縫しごとを勉強すると、今に御嫁に行くときに金剛石ダイヤモンドの指環ゆびわを買つてやる」

「旨いうまのねえ、口だけは。そんなに御金があるの」

「あるのつて、——今はないさ」

「いったい兄さんはなぜ落第したんでしよう」

「えらいからさ」

「まあ——どこかそこいらに銕はさみはなくつて」

「その蒲団ふとんの横にある。いや、もう少し左。——その銕に猿が着いてるのは、どう云う訳だ。洒落しやれかい」

「これ？ 奇麗きれいでしょう。縮緬ちりめんの御申おさるさん」

「御前がこしらえたのかい。感心うまに旨く出来てる。御前は何に

も出来ないが、こんなものは器用だね」

「どうせ藤尾さんのようには参りません——あらそんな椽側えんがわへ煙草の灰を捨てるのは御廃およしなさいよ。——これを借かして上げるから」

「なんだいこれは。へええ。板目紙いためがみの上へ千代紙を張り付けて。やつぱり御前がこしらえたのか。閑人ひまじんだなあ。いったい何にするものだい。——糸を入れる？ 糸の屑くずをかい。へええ」

「兄さんは藤尾さんのような方かたが好きなんでしょう」
「御前のようなのも好きだよ」

「私は別物として——ねえ、そうでしょう」
「嫌いやでもないね」

「あら隠していらつしやるわ。おかしい事」

「おかしい？ おかしくつてもいいや。——甲野の叔母おばさんはしき

りに密談をしているね」

「ことに因ると藤尾さんの事かも知れなくつてよ」

「そうか、それじゃ聴きに行こうか」

「あら、御廃しなさいよ——わたし、火熨ひのしがいるんだけれども遠慮して取りに行かないんだから」

「自分の家うちで、そう遠慮しちや有害だ。兄さんが取つて来てやろうか」

「いいから御廃しなさいよ。今下へ行くとせつかくの話をやめてしまつてよ」

「どうも剣呑けんどんだね。それじゃこつちも氣息いきを殺して寝転ねころんでるのか」

「氣息を殺さなくつてもいいわ」

「じゃ氣息を活かして寝転ぶか」

「寝転ぶのはもう好い加減になさいよ。そんなに行儀がわるいから外交官の試験に落第するのよ」

「そうさな、あの試験官はことによると御前と同意見かも知れない。困ったもんだ」

「困ったもんだって、藤尾さんもやつぱり同意見ですよ」

裁縫しじょうの手を休やすめて、火熨たいめちに逡巡しじょうつていた糸子は、入子菱いりこびしに膝かつ

た指拔ゆを抽ぬいて、鴝色ときいろに銀の雨を刺す針差はりさしを裏に、如鱗木じよりんもくの塗

美くしき蓋ふたをはたと落した。やがて日永ひながの窓に赤くなつた耳朶みみたぶ

のあたりを、平手ひらてで支えて、右の肘ひじを針箱の上に、取り広げた

る縫物ひざの下で、隠れた膝を斜めに崩くずした。襦袢じゆばんの袖に花と乱る

る濃き色は、柔らかき腕を音なく滑すべつて、くつきりと普通つねより

は明かなる肉の柱が、蝶ちようと傾く絹紐リボンの下に鮮あざやかである。

「兄さん」

「何だい。——仕事はもうおやめか。何だかぼんやりした顔を
しているね」

「藤尾さんは駄目よ」

「駄目だ？　駄目とは」

「だって来る気はないんですもの」

「御前聞いて来たのか」

「そんな事がまさか無駄ぶじつけに聞かれるもんですか」

「聞かないでも分かるのか。まるで巫女いちこだね。——御前がそう

頬杖ほおづえを突いて針箱へ靠もたれているところは天下の絶景だよ。妹

ながら天晴あつぱれな姿勢だハハハハ」

「沢山たんとおひ御冷やかさない。人がせっかく親切に言つて上げるの

に」

云いながら糸子は首を支えた白い腕をぱたりと倒した。揃そろつ

た指が針箱の角を抑えるように、前へ垂れる。障子に近い片頬は、お圧し付けられた手の痕を耳朶あこ共にぼうと赤く染めている。奇麗に囲う二重の脰は、涼しい眸を、長い睫に隠そうとして、上の方から垂れかかる。宗近君はこの睫の奥からしみじみと妹に見られた。——四角な肩へ肉を入れて、倒した胴を肘ひじに撥ねて起き上がる。

「糸公、おれは叔父さんの金時計を貰う約束があるんだよ」

「叔父さんの？」と軽く聞き返して、急に声を落すと「だつて……」と云うや否や、黒い眸は長い睫の裏にかくれた。派出はでな色の絹紐リボンがちらりと前の方へ顔を出す。

「大丈夫だ。京都でも甲野に話して置いた」

「そう」と俯目ふしめになった顔を半ば上げる。危ぶむような、慰めるような笑が顔と共に浮いて来る。

「兄さんが今に外国へ行ったら、御前に何か買つて送つてやるよ」

「こんだ今度の試験の結果はまだ分らないの」

「もう直じきだろう」

「今度は是非及第なさいよ」

「え、うん。アハハハハ。まあ好いや」

「よ好かないわ。——藤尾さんはね。学問がよく出来て、信用のある方かたが好きなんですよ」

「兄さんは学問が出来なくつて、信用がないのかな」

「そうじゃないのよ。そうじゃないけれども——まあ例たとえに云うと、あの小野さんと云う方があるでしょう」

「うん」

「優等で銀時計をいただいたつて。今博士論文を書いていらつ

しやるつてね。——藤尾さんはああ云う方が好なのよ」

「そうか。おやおや」

「何がおやおやなの。だって名誉ですわ」

「兄さんは銀時計もただけず、博士論文も書けず。落第はする。不名誉の至だ^{いたり}」

「あら不名誉だと誰も云やしないわ。ただあんまり気楽過ぎるのよ」

「あんまり気楽過ぎるよ」

「ホホホおかしいのね。何だかちつとも苦^くにならないようね」

「糸公、兄さんは学問も出来ず落第もするが——まあ廃^よそう、どうでも好い。とにかく御前兄さんを好い兄さんと思わないかい」

「そりや思うわ」

「小野さんとどっちが好い」

「そりや兄さんの方が好いわ」

「甲野さんとは」

「知らないわ」

深い日は障子を透とおして糸子の頬を暖かに射る。俯向うつむいた額の
色だけがいちじるしく白く見えた。

「おい頭へ針が刺さつてる。忘れると危ないよ」

「あら」と翻ひるがえる襦袢じゅばんの袖そでのほのめくうちを、二本の指に、こ
こと抑おさえて、軽く抜き取る。

「ハハハハ見えない所でも、旨うまく手が届くね。盲目めくらにすると瘡か

の好い按摩あんまさんが出来るよ」

「だって慣なれてるんですもの」

「えらいもんだ。時に糸公面白い話を聞かせようか」

「なに」

「京都の宿屋の隣に琴を引く別嬪べっぴんがいてね」

「端書はがきに書いてあつたんでしよう」

「ああ」

「あれなら知つててよ」

「それがさ、世の中には不思議な事があるもんだね。兄さんと甲野さんと嵐山あらしやまへ御花見に行ったら、その女に逢つたのさ。逢つたばかりならいいが、甲野さんがその女に見惚みとれて茶碗を落してしまつてね」

「あら、本当？　まあ」

「驚ろいたろう。それから急行の夜汽車で帰る時に、またその女と乗り合せてね」

「嘘うそよ」

「ハハハハとうとう東京までいつしよに來た」

「だって京都の人がそうむやみに東京へくる訳がないじゃないやありませんか」

「それが何かの因縁いんねんだよ」

「人を……」

「まあ御聞きよ。甲野が汽車の中であの女は嫁に行くんだろうか、どうだろうかって、しきりに心配して……」

「もうたくさん」

「たくさんなら廃よそう」

「その女の方は何とおっしゃるの、名前かたは」

「名前かい——だってもうたくさんだって云うじゃないか」

「教えたって好いじゃありませんか」

「ハハハハそう真面目まじめにならなくっても好い。実は嘘うそだ。全く

兄さんの作り事さ」

「惡らしい」

糸子 はめでたく笑った。

十一

蟻^{あり}は甘きに集まり、人は新しきに集まる。文明の民は劇烈な生存^{せいそん}のうちに無聊^{ぶりょう}をかこつ。立ちながら三度の食につくの忙^{いそがし}きに堪^たえて、路上に昏睡^{こんすい}の病を憂^{うれ}う。生を縦横に託して、縦横に死を貪^{むさぼ}るは文明の民である。文明の民ほど自己の活動を誇るものなく、文明の民ほど自己の沈滞に苦しむものはない。文明は人の神経を髪剃^{かみそり}に削^{けず}つて、人の精神を搗木^{すりこぎ}と鈍くする。刺激に麻痺^{まひ}して、しかも刺激に渴^{かわ}くものは数^{すう}を尽くして新らしき博覧会に集まる。

狗は香を恋い、人は色に趁る。狗と人とはこの点においてもつとも鋭敏な動物である。紫衣と云い、黄袍と云い、青衿と云う。皆人を呼び寄せるの道具に過ぎぬ。土堤を走る弥次馬は必ずいろいろな旗を担ぐ。担がれて懸命に權を操るものは色に担がれるのである。天下、天狗の鼻より著しきものはない。天狗の鼻は古えより赫奕として赤である。色のある所は千里を遠しとせず。すべての人は色の博覧会に集まる。

蛾は灯に集まり、人は電光に集まる。輝やくものは天下を牽く。金銀、碑礫、瑪瑙、琉璃、閻浮檀金、の属を挙げて、ことごとく退屈の眸を見張らして、疲れたる頭を我破と跳ね起させるために光るのである。昼を短かしとする文明の民の夜会には、あらわなる肌に鏤たる宝石が独り幅を利かす。金剛石は人の心を奪うが故に人の心よりも高価である。泥海に落つる星の影は、影な

がら瓦かわらよりも鮮あざやかに、見るものの胸きくらめに閃く。閃く影おどに躍る善男子ぜんなんし、善女子ぜんによしは家を空むなしゅうしてイルミネーションに集まる。

文明を刺激の袋の底ふちに篩ふるい寄せると博覧会になる。博覧会を鈍よき夜の砂こに漉せば燦さんたるイルミネーションになる。いやしくも生きてあらば、生きてる証拠を求めんがためにイルミネーションを見て、あつと驚かざるべからず。文明に麻痺したる文明の民は、あつと驚く時、始めて生きているなと気がつく。

花電車が風きを截きつて来る。生きている証拠を見てこいと、積み込んだ荷やましたがんべを山下雁鍋あたの辺おろで卸す。雁鍋はとくの昔に亡なくなつた。卸された荷物かたは、自己が亡くならんとしつつある名誉を回復せんと森かたの方にぞろぞろ行く。

岡よは夜よを掠からめて本郷から起る。高き台おぼろを朧おぼろに浮かして幅十町を東へなだれる下り口おは、根津に、弥生やよいに、切り通しに、驚ろ

かんとするものを枘ますで料はかつて下谷したやへ通す。踏み合う黒い影はこ
とごとく池いけの端はたにあつまる。——文明の人ほど驚ろきたがるも
のはない。

松高くして花を隠さず、枝の隙間すきまに夜を照らす宵重よいかさなりて、
雨も降り風も吹く。始めは一片ひとひらと落ち、次には二片と散る。次
には数うるひまにただはらはらと散る。この間中あいだじゅうは見るからに、
万紅ばんこうを大地に吹いて、吹かれたるものの地に届かざるうちに、
梢こずえから後を追うて落ちて来た。忙おさまがしい吹雪ふぶきはいつか尽きて、
今は残る樹頭に嵐もようやく収おさまつた。星ならずして夜を護もる花
の影は見えぬ。同時にイルミネーションは点ついた。

「あら」と糸子が云う。

「夜の世界は昼の世界より美しい事」と藤尾が云う。

薄すすきの穂を丸く曲げて、左右から重なる金の閃きらめく中に織り出し

た半月はんげつの数は分ならず。幅広に腰を蔽おほう藤尾の帯を一尺隔てて宗近君むねちかと甲野さんこうのが立っている。

「これは奇観だ。ざつと竜宮だね」と宗近君が云う。

「糸子いとこさん、驚いたようですね」と甲野さんは帽子を眉深まゆく被かぶつて立つ。

糸子は振り返る。夜の笑は水の中で詩を吟ずるようなものである。思う所へは届かぬかも知れぬ。振り返る人の衣きぬの色は黄に似て夜を欺あざむくを、黒いものが幾筋も豎たてに刻んでいる。

「驚いたかい」と今度は兄が聞き直す。

「貴所方あなたがたは」と糸子を差し置いて藤尾ふじおが振り返る。黒い髪かみの陰から颯さつと白い顔が映さす。頬の端は遠い火光ひかりを受けてほの赤い。

「僕は三遍目だから驚ろかない」と宗近君は顔一面を明かるい方へ向けて云う。

「驚くうちは楽たのしみがあるもんだ。女は楽が多くて仕合せだね」と
甲野さんは長い体からだ軀を真直ますぐに立てたまま藤尾を見下みおろした。

黒い眼が夜を射て動く。

「あれが台湾館なの」と何気なき糸子は水を横切つて指を点さす。
「あの一番右の前へ出ているのがそうだ。あれが一番善く出来
ている。ねえ甲野さん」

「夜見ると」甲野さんがすぐ但書ただしがきを附け加えた。

「ねえ、糸公、まるで竜宮のようだろう」

「本当に竜宮ね」

「藤尾さん、どう思う」と宗近君はどこまでも竜宮が得意であ
る。

「俗じゃありませんか」

「何が、あの建物がかね」

「あなたの形容がですよ」

「ハハハハ甲野さん、竜宮は俗だと云う御意見だ。俗でも竜宮じゃないか」

「形容は旨く中ると俗になるのが通例だ」

「中ると俗なら、中らなければ何になるんだ」

「詩になるでしょう」と藤尾が横合から答えた。

「だから、詩は実際に外れる」と甲野さんが云う。

「実際より高いから」と藤尾が註釈する。

「すると旨く中った形容が俗で、旨く中らなかつた形容が詩なんだね。藤尾さん無味くつて中らない形容を云つて御覧」

「云つて見ましようか。——兄さんが知つてるでしょう。聴いて御覧なさい」と藤尾は鋭い眼の角から欽吾を見た。眼の角は云う。——無味くつて中らない形容は哲学である。

「あの横にあるのは何」と糸子が無邪氣に聞く。

燄ほのおの線を闇やみに渡して空を横に切るは屋根である。竪たてに切るは

柱である。斜めに切るは薨いらかである。臙おぼろの奥に星を埋めて、限り

なき夜を薄黒く地ならししたる上に、稲妻いなずまの穂は一を引いて虚

空を走った。二を引いて上から落ちて来た。卍まんじを描いて花火の

ごとく地に近く廻転した。最後に穂先を逆に返して帝座ていざの真中

を貫けとばかり抛なげ上げた。かくして塔は棟むねに入り、棟は床とこに

連つらなつて、不忍しのばずの池いけの、此方こなたから見渡す向を、右から左へ隙間すきま

なく埋めて、大いなる火の絵図面が出来た。

藍あいを含む黒塗に、金を惜まぬ高時たかとき絵は堂を描き、楼を描き、廻

廊を描き、曲欄きょくらんを描き、円塔方柱えんとうほうちゆうの数々を描き尽して、なお余

りあるを是非に用い切らなために、描ける上を往きつ戻りつす

る。縦横くわうに空を走る燄の線は一点一劃を乱すことなく整然とし

て一点一劃のうちに活きている。動いている。しかも明かに動いて、動く限りは形を崩す^{くず}気色^{けしき}が見えぬ。

「あの横に見えるのは何」と糸子が聞く。

「あれが外国館。ちょうど正面に見える。ここから見るのが一番奇麗だ。あの左にある高い丸い屋根が三菱館。——あの^{かつこう}恰好が好い。何と形容するかな」と宗近君はちよつと躊躇^{ちゆうちよ}した。

「あの真中だけが赤いのね」と妹が云う。

「^{かんむり}冠に^{ルビー}紅玉を嵌^はめたようだ事」と藤尾が云う。

「なるほど、天賞堂の広告見たようだ」と宗近君は知らぬ顔で俗にしてしまう。甲野さんは軽く笑つて仰向^{あおもむ}いた。

空は低い。薄黒く大地に逼^{せま}る夜の中に、煮え切らぬ星が路頭に迷つて放^{はな}下^さがつている。柱と連^{つら}なり、薨と積む万点の燄は逆^{さか}しまに天を浸^{ひた}して、寝とぼけた星の眼^{まなこ}を射る。星の眼は熱い。

「空が焦^こげるようだ。——羅馬法王^{ロウマ}の冠かも知れない」と甲野さんの視線は谷中^{やなか}から上野の森へかけて大いなる圓^{けん}を画^{えが}いた。

「羅馬法王の冠か。藤尾さん、羅馬法王の冠はどうだい。天賞堂の広告の方が好きそうだがね」

「いずれでも……」と藤尾は澄ましている。

「いずれでも差支^{さしつかえ}なしか。とにかく女王^{クイーン}の冠じゃない。ねえ甲

野さん」

「何とも云えない。クレオパトラはあんな冠をかぶっている」

「どうして御存じなの」と藤尾は鋭どく聞いた。

「御前の持つている本に絵がかいてあるじゃないか」

「空より水の方が奇麗^{きれい}よ」と糸子が突然注意した。対話はクレ

オパトラを離れる。

昼でも死んでいる水は、風を含まぬ夜の影に圧^{おさ}し付けられて、

見渡す限り平かである。動かぬはいつの事からか。静かなる水は知るまい。百年の昔に掘った池ならば、百年以来動かぬ、五十年の昔ならば、五十年以来動かぬとのみ思われる水底から、腐った蓮の根がそろそろ青い芽を吹きかけている。泥から生れた鯉と鮒が、闇を忍んで緩やかに鰲を働かしている。イルミネーションは高い影を逆まにして、二丁余の岸を、尺も残さず真赤になつてこの静かなる水の上に倒れ込む。黒い水は死につつもぱつと色を作す。泥に潜む魚の鰭は燃える。

湿える皴は、一抹に岸を伸して、明かに向側へ渡る。行く道に横わるすべてのものを染め尽してやまざるを、ぷつりと截つて長い橋を西から東へ懸ける。白い石に野羽玉の波を跨ぐアーチの数は二十、欄に盛る擬宝珠はことごとく夜を照らす白光の珠である。

「空より水の方が奇麗よ」と注意した糸子の声に連れて、残る三人の眼はことごとく水と橋とに聚つた。あつま一間ごとに高く石欄干を照らす電光が、遠きこちらからは、行儀よく一列に空に懸つて見える。下をぞろぞろ人が通る。

「あの橋は人で埋つている」うま

と宗近君が大きな声を出した。

小野さんは孤堂先生と小夜子こじょうを連れて今この橋を通りつつあ

る。驚ろかんとあせる群集は弁天の祠やしろを抜けて圧おして来る。向

が岡おかを下りて圧して来る。東西南北の人は広い森と、広い池の

周囲まわりを捨ててことごとく細長い橋の上に集まる。橋の上は動か

れぬ。真中に弓張を高く差し上げて、巡査が来る人と往く人を

左へ右へと制している。来る人も往く人もただ揉もまれて通る。

足を地に落す暇はない。楽に踏む余地を尺寸せきすんに見出して、安々

と踵かかとを着ける心持がやつと有つたなと思ううち、もう後ろうしろから前へ押し出される。歩くとは思えない。歩かぬとは無論云えぬ。小夜子は夢のように心細くなる。孤堂先生は過去の人間を押し潰つぶすために皆みんなが揉むのではないかと恐ろしがる。小野さんだけは比較的得意である。多勢たぜいの間に立つて、多数より優すぐれたりとの自覚あるものは、身動きが出来ぬ時ですら得意である。博覧会は当世である。イルミネーションはもつとも当世である。驚ろかんとしてここにあつまる者は皆当世的の男と女である。ただあつと云つて、当世的に生存せいそんの自覚を強くするためである。御互に御互の顔を見て、御互の世は当世だと默契して、自己の勢力を多数と認識したる後家のちに帰つて安眠するためである。小野さんはこの多数の当世のうちで、もつとも当世なものである。得意なのは無理もない。

得意な小野さんは同時に失意である。自分一人でこそ誰が眼にも当世に見える。申し分のあるはずがない。しかし時代後れの御荷物を丁寧^{ていねい}に二人まで背負^{しょ}つて、幅の利^きかぬ過去と同一体だと当世から見られるのは、ただ見られるのではない、見咎^{みとが}められるも同然である。芝居に行つて、自分の着ている羽織の紋の大き^{おおき}が、時代か時代後れか、そればかりが氣になつて、見物にはいつこう身が入らぬものさえある。小野さんは肩身が狭い。人の波の許す限り早く歩く。

「阿爺^{おとうさん}、大丈夫^{うしろ}」と後から呼ぶ。

「ああ大丈夫だよ」と知らぬ人を間に挟んだまま一軒置いて返事がある。

「何だか危なくつて……」

「なに自然^{じねん}に押して行けば世話はない」と挟^{はさ}まつた人をやり過

ごして、苦しいところを娘といつしよになる。

「押されるばかりで、ちつとも押せやしないわ」と娘は落ちつかぬながら、薄い片頬かたほに笑えみを見せる。

「押さなくつてもいいから、押されるだけ押されるさ」と云ううち二人は前へ出る。巡査の提灯ちようちんが孤堂先生の黒い帽子を掠かすめて動いた。

「小野はどうしたかね」

「あすこよ」と眼元で指さす。手を出せば人の肩で遮さえぎられる。

「どこに」と孤堂先生は足を揃そろえる暇もなく、そのまま日和下駄ひよりげた

の前歯を傾けて背延せいのびをする。先生の腰が中心を失いかけたところを、後ろから気の早い文明の民が押おしかかる。先生はのめつた。危うく倒れるところを、前に立つ文明の民の背中のようにやぐ喰い留める。文明の民はどこまでも前へ出たがる代りに、背

中で人を援ける事を拒まぬ親切な人間である。

文明の波は自から動いて頼のない親と子を弁天の堂近く押し出して来る。長い橋が切れて、渡る人の足が土へ着くや否や波は急に左右に散つて、黒い頭が勝手な方へ崩れ出す。二人はようやく胸が広くなつたような心持になる。

暗い底に藍を含む逝く春の夜を透かして見ると、花が見える。雨に風に散り後れて、八重に咲く遅き香を、夜に懸けん花の願を、人の世の灯が下から朗かに照らしている。朧に薄紅の螺鈿を鐫ると云うと硬過る。浮くと云えば空を離れる。この宵とこの花をどう形容したらよからうかと考えながら、小野さんは二人を待ち合せている。

「どうも怖ろしい人だね」と追いついた孤堂先生が云う。怖ろしいとは、本当に怖ろしい意味でかつ普通に怖ろしい意味であ

る。

「随分出ます」

「早く家へ帰りたくなつた。どうも怖おそろしい人だ。どこからこんなに出て来るのかね」

小野さんはにやにやと笑つた。蜘蛛くもの子のように暗い森を蔽おほうて至る文明の民は皆自分の同類である。

「さすが東京だね。まさか、こんなじゃ無かろうと思つていた。怖すうしい所だ」

数は勢いきおいである。勢を生む所は怖おたまししい。一坪に足らぬ腐れた水でも御玉杓子のうじようじょ湧わく所は怖おたまししい。いわんや高等なる文明の御玉杓子を苦もなくひり出す東京が怖おたまししいのは無論の事である。小野さんはまたにやにやと笑つた。

「小夜や、どうだい。あぶない、もう少しで紛はぐれるところだつ

た。京都じゃこんな事はないね」

「あの橋を通る時は……どうしようかと思いましたわ。だつて怖くつて……」

「もう大丈夫だ。何だか顔色が悪いようだね。くたびれたかい」
「少し心持が……」

「悪い？ 歩きつけないのを無理に歩いたせいだよ。それにこの人出じゃあ。どつかでちよいと休もう。——小野、どつか休む所があるだろう、小夜が心持がよくないそうだから」

「そうですか、そこへ出るとたくさん茶屋がありますから」と
小野さんはまた先へ立つて行く。

運命は丸い池を作る。池を回るものはどこかで落ち合わねばならぬ。落ち合つて知らぬ顔で行くものは幸である。人の海の湧き返る薄黒い倫敦で、朝な夕なに回り合わんと心掛ける甲斐

もなく、眼を皿に、足を棒に、尋ねあぐんだ当人は、ただ一重ひとえの壁に遮さへぎられて隣りの家に煤すすけた空を眺ながめている。それでも逢あえぬ、一生逢えぬ、骨が舍利しゃりになつて、墓に草が生えるまで逢う事が出来ぬかも知れぬと書いた人がある。運命は一重の壁に思う人を終古しゅうこに隔てると共に、丸い池に思わぬ人をはたと行き合わせる。変なものは互に池の周囲まわりを回りながら近寄つて来る。不可思議の糸は闇の夜をさえ縫う。

「どうだい女連おんなれんはだいぶ疲れたろう。ここで御茶でも飲むかね」と宗近君が云う。

「女連はとにかく僕の方が疲れた」

「君より糸公の方が丈夫だぜ。糸公どうだ、まだ歩けるか」

「まだ歩けるわ」

「まだ歩ける？ そりやえらい。じゃ御茶は廃よしにするかね」

「でも欽^{きんご}吾さんが休みたいとおつしやるじゃありませんか」

「ハハハハなかなか旨^{うま}い事を云う。甲野さん、糸公が君のために休んでやるとき」

「ありがたい」と甲野さんは薄笑をしたが、

「藤尾も休んでくれるだろうね」と同じ調子でつけ加える。

「御頼みなら」と簡明な答がある。

「どうせ女には敵^{かな}わない」と甲野さんは断案^{くだん}を下した。

池の水に差し掛けて洋風に作り上げた仮^{かり}普請^{ぷしん}の入口^{まぐち}を跨ぐと、

小^{ちい}い卓^{さく}に椅子^{いす}を添えてここ、かしこに併^{なら}べた大広間に、三人四

人^{むれ}ずつの群^{むれ}がおのおの口の用を弁じている。どこへ席をとろう

かと、四五十人の一座をずっと見廻した宗近君は、並んで右に

立っている甲野さんの袂^{たもと}をぐいと引いた。後^{うしろ}の藤尾はすぐおや

と思う。しかし仰山^{おやうきん}に何事かと聞くのは不見識である。甲野さ

んは別段相図を返した様子もなく

「あすこが空あいている」とずんずん奥へ這入はいつて行く。あとを跟つけながら藤尾の眼は大きな部屋の隅から隅までを残りなく腹の中へ畳み込む。糸子はただ下を見て通る。

「おい氣がついたか」と宗近君の腰はまず椅子に落ちた。

「うん」と云う簡潔な返事がある。

「藤尾さん小野が来ているよ。後うしろを見て御覧」と宗近君がまた云う。

「知っています」と云つたなり首は少しも動かなかつた。黒い眼が怪しい輝かがやきを帯びて、頬の色は電気灯のもとでは少し熱過ぎる。

「どこに」と何気なにげなき糸子は、優やさしい肩を斜ななめに据ねじ向けた。入口を左へ行き尽くして、二列目の卓を壁際に近く囲んで小

野さんの連中は席を占めている。腰を卸した三人は突き当りの右側に、窓を控えて陣を取る。肩を動かした糸子の眼は、広い部屋に所沢ばず散らついている群衆を端から端へ貫ぬいて、遙か隔たつた小野さんの横顔に落ちた。——小夜子は真向に見える。孤堂先生は背中の紋ばかりである。春の夜を淋しく交る白い糸を、顎の下に抜くも嬾うく、世のままに、人のままに、また取る年の積るままに捨てて吹かるる憂き髯は小夜子の方に向いている。

「あら御連があるのね」と糸子は頸をもとへ返す。返すとき前に坐っている甲野さんと眼を見合せた。甲野さんは何にも云わない。灰皿の上に豎に挟んだ燐寸箱の横側をしゅつと擦った。藤尾も口を結んだままである。小野さんとは背中合せのままでわかれるつもりかも知れない。

「どうだい、別嬪べっぴんだろう」と宗近君は糸子に調戯からかいかける。

俯目ふしめに卓布を眺ながめていた藤尾の眼は見えぬ、濃い眉だけはぴくりと動いた。糸子は気がつかぬ、宗近君は平気である、甲野さんは超然としてゐる。

「うつくしい方かたね」と糸子は藤尾を見る。藤尾は眼を上げない。

「ええ」と素気そつけなく云い放つ。極めて低い声である。答を与う

るに価あたいせぬ事を聞かれた時に、——相手に合あ槌いづちを打つ事を屑いさぎよしとせざる時に——女はこの法を用いる。女は肯定の辞に、否定の調子を寓する靈腕を有している。

「見たかい甲野さん、驚いたね」

「うん、ちと妙だね」と巻煙草まきたばこの灰を皿の中にはたき落す。

「だから僕が云ったのだ」

「何と云ったのだい」

「何と云つたつて、忘れたかい」と宗近君も下向したむきになつて燐寸マツチを擦する。刹那せつなに藤尾の眸ひとみは宗近君の額を射た。宗近君は知らない。啣くわえた巻煙草に火を移して顔を真向まむきに起した時、稻妻はすでに消えていた。

「あら妙だわね。二人して……何を云つていらつしやるの」と糸子が聞く。

「ハハハ面白い事があるんだよ。糸公……」と云い掛けた時紅茶と西洋菓子来る。

「いやあ亡国の菓子が来た」

「亡国の菓子とは何だい」と甲野さんは茶碗を引き寄せる。

「亡国の菓子さハハハハ。糸公知つてるだろう亡国の菓子の由緒いわれを」と云いながら角砂糖を茶碗の中へ抛ほうり込む。蟹かにの眼のよう

な泡あわが幽かすかな音を立てて浮き上がる。

「そんな事知らないわ」と糸子は匙さじでぐるぐる攪かき廻かしている。

「そら阿爺おとっさんが云ったじゃないか。書生が西洋菓子なんぞを食うようじゃ日本も駄目だつて」

「ホホホそんな事をおっしゃるもんですか」

「云わない？ 御前よつぽど物覚がわるいね。そらこの間甲野さんや何かと晩飯を食った時、そう云ったじゃないか」

「そうじゃないわ。書生の癖に西洋菓子なんぞ食うのはのらくらものだつておっしゃったんでしょ」

「はああ、そうか。亡国の菓子じゃなかったかね。とにかく阿爺は西洋菓子が嫌きらだよ。柿羊羹かきようかんか味噌松風みそまつかぜ、妙なもののばかり珍重したがる。藤尾さんのようなハイカラの傍そばへ持つて行くとすぐ軽蔑けいべつされてしまう」

おとうさま

「そう阿爺の悪口をおつしやらなくつてもいいわ。兄さんだつて、もう書生じやないから西洋菓子を食べたつて大丈夫ですよ」

きづかい

「もう叱られる氣遣はないか。それじゃ一つやるかな。糸公も一つ御上り。おあがどうだい藤尾さん一つ。——しかしなんだね。阿爺おとうさん

のような人はこれから日本にだんだん少なくなるね。惜しいもんだ」とチョコレートカステラを塗った卵糖を口いっぱいに頬張る。ほおば

「ホホホ一人で饒舌しゃべつて……」と藤尾の方を見る。藤尾は応じない。

「藤尾は何も食わないのか」と甲野さんは茶碗を口へ付けながら聞く。

「たくさん」と云つたぎりである。

おろ

甲野さんは静かに茶碗を卸して、首を心持藤尾の方へ向け直した。藤尾は来たなと思ひながら、またたき瞬もせず窓を通して映る、うつ

イルミネーションの片割かたわれを専念に見ている。兄の首はしだいに故もとの位地に帰る。

四人が席を立った時、藤尾は傍目わきめも触らず、ただ正面を見たなりで、女王の人形が歩を移すがごとく昂然こうぜんとして入口まで出る。

「もう小野は帰ったよ、藤尾さん」と宗近君は洒落しゃらくに女の肩を敲たたく。藤尾の胸は紅茶で焼ける。

「驚ろくうちは楽たのしみがある。女は仕合せなものだ」と再び人込ひとごみへ出た時、何を思ったか甲野さんは復前言またを繰り返した。

驚ろくうちは楽がある！ 女は仕合せなものだ！ 家うちへ帰って寢床ふしどへ這入はいるまで藤尾の耳にこの二句が嘲あざけりの鈴れいのごとく鳴った。

貧乏を十七字に標榜^{ひょうぼう}して、馬の糞、馬の尿^{いばり}を得意氣^{えい}に咏^うずる
 発句^{はつく}と云うがある。芭蕉^{ばしやう}が古池に蛙^{かわず}を飛び込ますと、蕪村^{ぶそん}が傘^{かさ}を
 担^{かつ}いで紅葉^{もみじ}を見に行く。明治になつては子規^{しき}と云う男が脊髄病^{せきずいびやう}
 を煩^{わづら}つて糸瓜^{へちま}の水を取つた。貧に誇る風流^{こんいち}は今日に至つても尽
 きぬ。ただ小野^{おの}さんはこれを卑^{いや}しとする。

仙人^{りゆうか}は流霞^{さん}を餐^{ちやうこう}し、朝沆^{あさ}を吸う。詩人の食物は想像である。
 美しくしき想像^{ふけ}に耽^{ふけ}るためには余裕がなくてはならぬ。美しくしき
 想像を実現するためには財産がなくてはならぬ。二十世紀の詩
 趣と元禄の風流とは別物である。

文明の詩は金剛石^{ダイヤモンド}より成る。紫^{むらさき}より成る。薔薇^{ばら}の香^かと、葡萄^{ぶどう}
 の酒^{こほく}と、琥珀^{こほく}の盃^{さかずき}より成る。冬は斑入^{ふいり}の大理石を四角に組んで、
 漆^{うるし}に似たる石炭に絹足袋^{きぬたび}の底^{あたた}を暖めるところにある。夏は氷盤^{ひやうばん}

に^{いちじ}苺を盛つて、^{あま}旨き血を、クリームの白きなかに溶し^{とか}込むところにある。あるときは熱帯の奇^き蘭^{らん}を見よがしに匂^{にお}わする温室にある。野^の路^じや空、月のなかなる花^は野^のを惜^お気^しも無く織り込んだ綴^{つづ}の丸帯にある。唐錦小袖振袖の擦^すれ違^{ちが}うところにある。——文
明の詩は金にある。小野さんは詩人の本分を完^まうするために金
を得ねばならぬ。

詩を作るより田を作れと云う。詩人にして産を成したものは
古今を傾けて幾人もない。ことに文明の民は詩人の歌よりも詩
人の行^{おこない}を愛する。彼らは日ごと夜ごとに文明の詩を實現して、
花に月^{ふうき}に富貴の實生活を詩化しつつある。小野さんの詩は一文
にもならぬ。

詩人ほど金にならん商買^{しょうばい}はない。同時に詩人ほど金のいる商
買もない。文明の詩人は是非^{ひと}共他の金で詩を作り、他の金で美

的生活を送らねばならぬ事となる。小野さんがわが本領を解する藤尾ふじおに頼たよりたくなるのは自然すうの数である。あすこには中以上の恒産こうさんがあると聞く。腹違の妹を片づけるにただの箆たんすと長持で承知するような母親ではない。ことに欽吾きんごは多病である。実の娘に婿むこを取つて、かかる気がないとも限らぬ。折々に、解いて見ると、わざとらしく結ぶ辻占つじうらがあたればいつも吉きちである。急せいては事を仕損ずる。小野さんはおとなしくして事件の発展を、自ら開くべき優曇華うどんげの未来に待ち暮していた。小野さんは進んで仕掛けるような相撲すもうをとらぬ、またとれぬ男である。

天地はこの有望の青年に対して悠久ゆうきゆうであつた。春は九十日の東風とうふうを限りなく得意ひたいの額に吹くように思われた。小野さんは優やさしい、物に逆さかわぬ、気の長い男であつた。——ところへ過去が押し寄せて来た。二十七年の長い夢と背そむを向けて、西の国へさ

らりと流したはずの昔から、一滴の墨汁ぼくじゅうにも較くらぶべきほどの暗いちざい小さい点が、明かなる都まで押し寄せて来た。押されるものが出る気がなくても前へのめりたがる。おとなしく時機を待つ覚悟を気長にきめた詩人も未来を急がねばならぬ。黒い点は頭の上にぴたりと留とどまっている。仰ぐとぐるぐる旋転せんてんしそうに見える。ぱつと散れば白雨ゆうだちが一度にくる。小野さんは首を縮めて馳かけ出したくなる。

四五日は孤堂こどう先生の世話やら用事やらで甲野こうのの方へ足を向ける事も出来なかった。昨夜ゆうべは出来ぬ工夫を無理にして、旧師への義理立てに、先生と小夜子さよこを博覧会へ案内した。恩は昔受けても今受けても恩である。恩を忘れるような不人情な詩人ではない。一飯漂母いっばんひょうぼを徳とすと云う故事を孤堂先生から教わった事さえある。先生のためならばこれから先どこまでも力になるつ

もりでいる。人の難儀を救うのは美くしい詩人の義務である。この義務を果して、濃こまやかな人情を、得意の現在に、わが歴史の一部として、思出の詩料に残すのは温厚なる小野さんにもつとも恰好かつこうな優しい振舞である。ただ何事も金がなくては出来ぬ。金は藤尾と結婚せねば出来ぬ。結婚が一日早く成立すれば、一日早く孤堂先生の世話が思うように出来る。——小野さんは机の前でこう云う論理を発明した。

小夜子を捨てるためではない、孤堂先生の世話が出来るために、早く藤尾と結婚してしまわなければならぬ。——小野さんは自分の考かんがえに間違はないはずだと思う。人が聞けば立派に弁解が立つと思う。小野さんは頭脳めいりょうの明瞭な男である。

ここまで考えた小野さんはやがて机の上に置いてある、茶の表紙に豊かな金文字を入れた厚い書物を開あけた。中からヌーボー

式に青い柳を染めて赤瓦の屋根が少し見える葉しおりがあらわれる。小野さんは左の手に槌すべを滑らして、細かい活字を金縁めがねの奥から読み始める。五分ごふんばかりは無事であつたが、しばらくすると、いつの間まにやら、黒い眼は頁ページを離れて、筋違すじかいに日脚ひあしの伸びた障子しょうじの棧さんを見詰めている。——四五日藤尾に逢あわぬ、きつと何とか思っているに違ない。ただの時なら四五日が十日とおかでもさして心配にはならぬ。過去に追いつかれた今の身には梳くしげずる間も千金である。逢えば逢うたびに願まことの的は近くなる。逢わねば元の君と我にたぐり寄すべき恋の綱の寸分だも縮まる縁えにしはない。のみならず、魔まは節穴ふしあなの隙すきにも射す。逢わぬ半日に日が落ちぬとも限らぬ、籠こもる一夜ひとよに月は入いる。等閑なおりのこの四五日に藤尾の眉まゆにいかな稲妻いなずまが差しているかは夢測はかりがたい。論文を書くための勉強は無論大切である。しかし藤尾は論文よりも大切であ

る。小野さんはぱたりと書物を伏せた。

芭蕉布ばしょうふの襖ふすまを開けると、押入の上段は夜具、下には柳行李やなぎこうりが

見える。小野さんは行李の上に畳んである背広せびろを出して手早く

着換きかえ終る。帽子は壁に主ぬしを待つ。がらりと障子を明けて、赤

い鼻緒はなおの上草履うわぞうりに、カシミヤの靴足袋くつたびを無理に突き込んだ時、

下女が来る。

「おや御出掛。少し御待ちなさいよ」

「何だ」と草履から顔を上げる。下女は笑っている。

「何か用かい」

「ええ」とやっぱり笑っている。

「何だ。冗談じやうだんか」と行こうとすると、卸おろし立ての草履が片方足かたかた

を離れて、拭き込んだ廊下を洋灯部屋ランペの方へ滑って行く。

「ホホホ余あんまり周章あわてるもんだから。御客様ですよ」

「誰だい」

「あら待ってた癖に空つとぼけて……」

「待ってた？ 何を」

「ホホホ大変真面目まじめですね」と笑いながら、返事も待たず、入口へ引き返す。小野さんは氣掛きがかりな顔をして障子の傍そばに上草履を揃そろえたまま廊下の突き当りを眺ながめている。何が出てくるかと思う。焦茶こげちゃの中折かもしが鴨居かもしを越すほどの高い背を伸のして、薄暗い廊下のはずれに折目正しく着こなした背広の地味なだけに、胸開むなあきの狭い胴衣チョッキから白い襯衣シヤツと白い襟えりが著みるしく上品に見える。小野さんは姿よく着こなした衣裳いしやうを、見栄みばえのせぬ廊下の片隅に、中ぶらりんに落ちつけて、光る眼鏡を斜めに、突き当りを眺のぞめている。何が出てくるのかと思ひながら眺のぞめている。両手を洋袴ズボンの隠袋かくしに挿さし込むのは落ちつかぬ時の、落ちついた姿である。

「そこを曲ると真直です」と云う下女の声が聞えたと思うと、
 すらりと小夜子の姿が廊下の端にあらわれた。海老茶色の緞子
 の片側が竜紋の所だけ異様に光線を射返して見える。在来りの
 銘仙の衿を、白足袋の甲を隠さぬほどに着て、きりりと角を曲つ
 た時、長襦袢らしいものがちらと色めいた。同時に遮ぎるもの
 もない中廊下に七歩の間隔を置いて、男女の視線は御互の顔の
 上に落ちる。

男はおやと思う。姿勢だけは崩さない。女ははつと躊躇う。
 やがて頬に差す紅を一度にかくして、乱るる笑顔を肩共に落す。
 油を注さぬ黒髪に、漣の琥珀に寄る幅広の絹の色が鮮な翼を片鬢
 に張る。

「さあ」と小野さんは隔たる人を近く誘うような挨拶をする。
 「どちらへか御出掛で……」と立ちながら両手を前に重ねた女

は、落した肩を、少しく浮かしたままで、気の毒そうに動かない。

「いえ何……まあ御這入おはいんなさい。さあ」と片足を部屋のうちへ引く。

「御免」と云いながら、手を重ねたまま擦足すりあしに廊下を滑すべつて来る。

男は全く部屋の中へ引き込んだ。女もつづいて這入はいる。明かなる日永の窓は若き二人に若き対話を促うながす。

「昨夜は御忙おいそがしいところを……」と女は入口に近く手をつかえる。

「いえ、さぞ御疲でしたろう。どうです、御気分は。もうすっかり好いですか」

「はあ、御蔭おかげさまで」と云う顔は何となく窶やつれている。男はちよつ

と真面目になつた。女はすぐ弁解する。

「あんな人込ひとしめへは滅多めったに出つた事がないもんですから」

文明の民は驚ろこわいて喜ぶために博覧会を開く。過去の人は驚ろいて怖こわがるためにイルミネーションを見る。

「先生はどうですか」

小夜子は返事を控えて淋さみしく笑つた。

「先生も雑沓ざつとくする所が嫌きらでしたね」

「どうも年を取つたもんですから」と氣の毒そうに、相手から眼を外はずして、畳の上に置いてある埋木うもれぎの茶托を眺ながめる。京焼の染付茶碗はさつきから膝頭ひざがしらに載のっている。

「御迷惑でしたらう」と小野さんは隠袋ポケットから煙草入を取り出す。

闇やみを照す月の色に富士と三保の松原が細かに彫つてある。その松に緑の絵の具を使ったのは詩人の持物としては少しく俗であ

る。派出はでを好む藤尾の贈物かも知れない。

「いえ、迷惑だなんて。こつちから願つて置いて」と小夜子は頭から小野さんの言葉を打ち消した。男は煙草入を開く。裏は一面の鍍金とぎんに、銀しろかねの冴さえたる上を、花やかにぱつと流す。淋しき女は見事だと思う。

「先生だけなら、もつと閑静な所へ案内した方が好かつたかも知れませんか」

忙しがる小野を無理に都合させて、好すかぬ人込へわざわざ出掛けるのも皆自分みんなが可愛いからである。済まぬ事には人込は自分も嫌である。せつかくの思に、袖振り交そでわして、長閑な歩のどか あゆみを、春の宵よいに併ならんで移す当人は、依然として近寄れない。小夜子は何と返事をしていいか躊躇ためらつた。相手の親切に気兼せたいをして、先方りようけんの心持を悪くさせまいと云う世態染せたいみた料簡からではない。

小夜子の躊躇つたのには、もう少し切ない意味が籠こもっている。

「先生にはやはり京都の方が好くはないですか」と女の躊躇けしきつた気色をどう解釈したか、小野さんは再び問い掛けた。

「東京へ来る前は、しきりに早く移りたいように云つてたんですけれども、来て見るとやはり住み馴なれた所が好いそうで」

「そうですか」と小野さんはおとなしく受けたが、心の中うちではそれほど性しょうに合わない所へなぜ出て来たのかと、自分の都合を考えて多少馬鹿らしい気もする。

「あなたは」と聞いて見る。

小夜子はまた口籠くちごもる。東京が好いか悪いかは、目の前に、西洋にがいの臭においのする煙草を燻くゆらしている青年の心掛一つできまる問題である。船頭が客人に、あなたは船が好きですかと聞いた時、好きも嫌きらいも御前の舵かじの取りよう一つさと答えなければならぬ

場合がある。責任のある船頭にこんな質問を掛けられるほど腹の立つ事はないように、自分の好悪を支配する人間から、素知らぬ顔ですきかきらいかを尋ねられるのは恨めしい。小夜子はまた口籠る。小野さんはなぜこう豁達せぬのかと思う。

チヨツキ
胸衣の隠袋から時計を出して見る。

「どちらへか御出掛で」と女はすぐ悟った。

「ええ、ちよつと」と旨い具合に渡し込む。

女はまた口籠る。男は少し焦慮くなる。藤尾が待っているだろう。——しばらくは無言である。

「実は父が……」と小夜子はやつとの思で口を切った。

「はあ、何か御用ですか」

「いろいろ買物がしたいんですが……」

「なるほど」

「もし、御閑おひまならば、小野さんにいつしよに行つていただいて
勧工場かんこうばでも買つて来いと申しましたから」

「はあ、そうですか。そりや、残念な事で。ちようど今から急
いで出なければならぬ所があるもんですからね。——じゃ、
こうしましょう。品物の名を聞いて置いて、私がわたし帰りに買つて
晩に持つて行きましょう」

「それでは御氣の毒で……」

「何構いません」

父の好意は再び水泡すいほうに帰した。小夜子は悄然しょうぜんとして帰る。小

野さんは、脱いだ帽子を頭へ載のせて手早く表へ出る。——同時
に逝ゆく春の舞台は廻る。

紫を辛夷こぶしの弁はなびらに洗う雨重なりて、花はようやく茶に朽くちかか
る椽えんに、干す髪ほの帯を隠して、動かせば背に陽炎かげろうが立つ。黒き

を外に、風が^{なぶ}拂り、日が^{なぶ}拂り、つい今しがたは黄な蝶^{ちよう}がひらひ
 らと^{なぶ}拂りに来た。知らぬ顔の藤尾は、内側を向いている。くつ
 きりと肉の締った横顔は、後ろ^{うし}からさす日の影に、耳を蔽^{おほ}うて
 肩に流す鬢^{びん}の影に、しつとりとして仄^{ほのか}である。千筋^{ちすじ}にぎらつい
 て深き^{すみれ}堇を一面に浴せる肩を通り越して、向う側はと覗^{のぞ}き込む
 とき、眩^{まば}ゆき眼はしんと静まる。夕暮にそれかと思う^{たで}蓼の花の、
 白きを人は潜むと云った。髪多く余る光を椽にこぼすこなたの
 影に、有るか無きかの細^{ほっそ}りした顔のなかを、濃く引き残したる
 眉の尾のみがたしかである。眉の下なる切長の黒い眼は何を語
 るか分らない。藤尾は寄木^{よせき}の小机に肱^{ひじ}を持たせて俯向^{うつむ}いている。
 心臓の扉を黄金^{こがね}の鎚^{つち}に敲^{たた}いて、青春^{さかずき}の盃に恋の血潮を盛る。飲
 まずと口を背^{そむ}けるものは片輪である。月傾いて山を慕い、人老
 いて^{みだ}妄りに道^{みち}を説く。若き空には星の乱れ、若き地^{つち}には花吹雪^{はなふぶき}、

一年を重ねて二十に至つて愛の神は今が盛である。緑濃き黒髪
 を婆娑とさばいて春風に織る羅を、蜘蛛の囿と五彩の軒に懸け
 て、自と引き掛る男を待つ。引き掛つた男は夜光の璧を迷宮に
 尋ねて、紫に輝やく糸の十字万字に、魂を逆にして、後の世まで
 の心を乱す。女はただ心地よげに見やる。耶蘇教の牧師は救わ
 れよという。臨濟、黄檗は悟れと云う。この女は迷えとのみ黒
 い眸を動かす。迷わぬものはすべてこの女の敵である。迷うて、
 苦しんで、狂うて、躍る時、始めて女の御意はめでたい。欄干に
 織い手を出してわんと云えという。わんと云えばまたわんと云
 えと云う。犬は続け様にわんと云う。女は片頬に笑を含む。犬
 はわんと云い、わんと云いながら右へ左へ走る。女は黙ってい
 る。犬は尾を逆にして狂う。女はますます得意である。——藤
 尾の解釈した愛はこれである。

石仏せきぶつに愛なし、色は出来ぬものと始から覚悟をきめているからである。愛は愛せらるる資格ありとの自信もつづに基いて起る。ただし愛せらるるの資格ありと自信して、愛するの資格なきに気のつかぬものがある。この両資格は多くの場合において反比例する。愛せらるるの資格を標榜ひょうぼうして憚はばからぬものは、いかなる犠牲をも相手に逼るせま。相手を愛するの資格を具そなえざるがためである。盼へんたる美目びもくに魂を打ち込むものは必ず食われる。小野さんは危あやうい。倩せんたる巧笑にわが命を托するものは必ず人を殺す。藤尾は丙午ひのえうまである。藤尾は己おのれのためにする愛を解する。人のためにする愛の、存在し得るやと考えた事もない。詩趣はある。道義はない。

愛の対象は玩具おもちゃである。神聖なる玩具である。普通の玩具は弄もてあそばるるだけが能である。愛の玩具は互に弄ぶをもつて原則と

する。藤尾は男を弄ぶ。一毫も男から弄ばるる事を許さぬ。藤
 尾は愛の女王である。成立つものは原則を外れた恋でなければ
 ならぬ。愛せらるる事を専門にするものと、愛する事のみを念
 頭に置くものが、春風の吹き回しで、旨い潮の満干で、はた
 りと天地の前に行き逢つた時、この変則の愛は成就する。
 我を立てて恋をするのは、火事頭巾を被つて、甘酒を飲むよ
 うなものである。調子がわるい。恋はすべてを溶かす。角張つ
 た絵紙鳶も飴細工であるからは必ず流れ出す。我は愛の水に浸
 して、三日三晩の長きに涉つてもふやける、けしきを見せぬ。どこ
 までも堅く控えている。我を立てて恋をするものは氷砂糖であ
 る。

シエクスピア

沙翁は女を評して脆きは汝が名なりと云つた。脆きが中に我
 を通す昂れる恋は、炊ぎたる飯の柔らかきに御影の砂を振り敷い

て、心を許す奥歯をがりがり寒からしむ。噛み締めるものに
 護謨ゴムの弾力がなくては無事には行かぬ。我の強い藤尾は恋をす
 るために我のない小野さんを舐んだ。蜘蛛の囿えらにかかる油蟬あぶらげみは
 かかつて暴れて行かぬ。時によると網を破つて逃げる事があ
 る。宗近君むねちかを捕とるは容易である。宗近君を馴ならすは藤尾といえ
 ども困難である。我がの女は願あこで相図をすれば、すぐ来るものを
 喜ぶ。小野さんはすぐ来るのみならず、来る時は必ず詩歌しいかの壁たま
 を懐ふところに抱いだいて来る。夢にだもわれを弄もてあそぶの意思なくして、満腔まんこう
 の誠を捧げてわが玩具おもちゃとなるを榮譽と思う。彼を愛するの資格
 をわれに求むる事は露知らず、ただ愛せらるべき資格を、わが
 眼に、わが眉まゆに、わが唇くちびるに、さてはわが才に認めてひたすらに
 渴仰かつぎうする。藤尾の恋は小野さんでなくてはならぬ。

唯々いとして来くるべきはずの小野さんが四五日見えぬ。藤尾は

薄き粧よそおいを日ごとにして我がの角かどを鏡の裡うちに隠していた。その五日

目の昨夕ゆうべ！ 驚くうちは楽たのしみがある！ 女は仕合せなものだ！ 嘲あざけり

の鈴れいはいまだに耳の底に鳴っている。小机に肱ひじを持たしたまま、

燃ゆる黒髪を照る日に打たして身動もせぬ。背を椽えんに、顔を影

なる居住いずまいは、考え事に明海あかるみを忌むい、昔からの掟おきてである。

縄ゆびさなくて十重とえに括くくる虜とりこは、捕われたるを誇顔ほこりがおに、麾さしまねけば来り、

指せば走るを、他意なしとのみ弄びたるに、奇麗な葉を裏返せ

ば毛虫がゐる。思う人ならと併んで姿見に向つた時、大丈夫写るは

君と我のみと、神懸かけて疑わぬを、見れば間違つた。男はその

ままの男に、寄り添うは見た事もない他人である。驚くうちは

楽がある！ 女は仕合せなものだ！

冴さえぬ白さに青味を含む憂顔うれいがおを、三五の卓を隔てて電灯もとの下

に眺めた時は、——わが傍かたえならでは、若き美しくしき女に近づく

まじきはずの男が、氣遣^{きづか}わし氣に、また親し氣に、この人と半々に洋卓^{テーブル}の角を回つて向き合つていた時は、——撞木^{しゅもく}で心臓をすぽりと敲^{たた}かれたような氣がした。拍子^{ひょうし}に胸の血はことごとく頬に潮^さす。紅は云う、赫^{かつ}としてここに躍^{おど}り上がると。

我は猛然として立つ。その儀ならばと云う。振り向いてもならぬ。不審を打つてもならぬ。一字の批評も不見識である。有^{あれ}ども無きがごとくに装^{よそお}え。昂然^{こうぜん}として水準以下に取り扱^{ふくしゅう}え。——氣がついた男は面目を失うに違ない。これが復讐^{ふくしゅう}である。

我の女はいざと云う間際^{まぎわ}まで心細い顔をせぬ。恨^{うら}むと云うは頼る人に見替^{あなどり}られた時に云う。侮^{あなどり}に対する適当な言葉は怒^{いかり}である。無念と嫉妬^{しつと}を交^まぜ合せた怒である。文明の淑女は人を馬鹿にするを第一義とする。人に馬鹿にされるのを死に優^{まさ}る不面目と思う。小野さんはたしかに淑女を辱^{はずか}しめた。

愛は信仰より成る。信仰は二つの神を念ずるを許さぬ。愛せらるべき、わが資格に、帰依きえの頭こうべを下げながら、二心ふたしころの背を輕薄ちまたの街に向けて、何やしろの社の鈴を鳴らす。牛頭ごず、馬骨ばこつ、祭るは人の勝手である。ただ小野さんは勝手な神に恋の御賽錢おさいせんを投げて、波か字かの辻占つじうらを見てはならぬ。小野さんは、この黒い眼から早速さそくに放つ、見えぬ光りに、空かけて織りなした無紋の網に引き掛つた餌食えじきである。外へはやられぬ。神聖なる玩具として生涯しょうがい大事にせねばならぬ。

神聖とは自分一人が玩具おもちゃにして、外の人には指もささせぬと云う意味である。昨夕ゆうべから小野さんは神聖でなくなつた。それのみか向うでこつちを玩具おもちゃにしているかも知れぬ。――肱ひじを持たして、俯向うつむくままの藤尾の眉が活きて来る。

玩具にされたのならこのままでは置かぬ。我がは愛を八つ裂やざきに

する。面当つらあてはいくらもある。貧乏は恋を乾干ひばしにする。富貴ふうきは恋

を贅沢ぜいたくにする。功名は恋を犠牲にする。我は未練な恋を踏みつ

ける。尖とがる錐きりに自分の股ももを刺し通して、それ見ろと人に示すも

のは我である。自己がもつとも価あたいありと思うものを捨てて得意

なもの是我である。我が立てば、虚栄の市にわが命ほさえ屠ふる。

逆さかしまに天国を辞して奈落の暗きに落つるセータンの耳を切る

地獄の風は我プライド！ 我プライド！ と叫ぶ。——藤尾は俯向うつむきながら下唇を

噛かんだ。

逢あわぬ四五日は手紙でも出そうかと思つていた。昨夕ゆうべ帰つて

からすぐ書きかけて見たが、五六行かいた後で何をとずたずた

に引き裂いた。けつして書くまい。頭を下げて先方から折れて

出るのを待っている。だまっていればきつと出てくる。出てく

れば謝罪あやまらせる。出て来なければ？ 我はちよつと困つた。手

の届かぬところに我を立てようがない。——なに來る、きつと來る、と藤尾は口の中で云う。うち知らぬ小野さんははたして我に引かれつつある。來つつある。

よし來ても昨夜ゆうべの女の事は聞くまい。聞けばあの女を眼中に置く事になる。昨夕食卓で兄と宗近が妙な合言葉を使っていた。あの女と小野の關係を聞えよがしに、自分を焦じらす料簡りょうけんだろう。頭を下げて聞き出しては我が折れる。二人で寄よつてたかつて人を馬鹿にするつもりならそれでよい。二人が仄ほのめかした事實の反証を挙げて鼻をあかしてやる。

小野はどうしても詫あやまらせなければならぬ。つらく當つて詫らせなければならぬ。同時に兄と宗近も詫らせなければならぬ。小野は全然わがもので、調戲面からかいづらにあてつけた二人の惡戯いたずらは何の役にも立たなかつた、見ろこの通りと親しいところを見せつけ

て、鼻をあかして詫らせなければならぬ。――藤尾は矛盾した

両面を我の一字で貫こうと、洗髪あらいがみの後に顔うずを埋めて考えている。

静かな椽えんに足音がする。背の高い影がのつと現われた。紺かすりの

あわせ

袷あわせの前が開いて、肌につけた鼠色ねずみいろの毛織シヤツの襯衣が、長い三角を

さかさま

逆様さかさまにして胸うつに映る上に、長い頸くびがある、長い顔がある。顔の色

あお

は蒼あおい。髪は渦うずを捲まいて、二三カ月は刈らぬと見える。四五日

くし

は櫛くしを入れないとも思われる。美くしいのは濃い眉まゆと口髭くちひげであ

たち

る。髭たちの質は極めて黒く、極めて細い。手を入れぬままに自然

そな

の趣そなを具えて何となく人柄に見える。腰は汚よごれた白縮緬しろちりめんを二重

まわ

に周まわして、長過ぎる端はじを、だらりと、猫じやらしに、右の袂たもとの

すそ

下で結んでいる。裾すそは固もとより合わない。引き掛けた法衣ころものよう

くろたび

にふわついた下から黒足袋くろたびが見える。足袋だけは新らしい。嗅か

こん

げば紺こんの匂がしそうである。古い頭に新らしい足の欽きん吾ごは、世

を逆様に歩いて、ふらりと椽側へ出た。

拭き込んだ細かい柾目の板が、雲齋底の影を写すほどに、軽

く足音を受けた時に、藤尾の背中に背負った黒い髪はさらりと動いた。途端に椽に落ちた紺足袋が女の眼に這入る。足袋の主は見なくても知れている。

紺足袋は静かに歩いて来た。

「藤尾」

声は後でする。雨戸の溝をすつくと仕切った柵の柱を背に、

欽吾は留つたらしい。藤尾は黙っている。

「また夢か」と欽吾は立つたまま、癖のない洗髪を見下した。

「何です」と云いなり女は、顔を向け直した。赤棟蛇の首を擡

げた時のようである。黒い髪に陽炎を砕く。

男は、眼さえ動かさない。蒼い顔で見下している。向き直つ

た女の額をじつと見下している。

「昨夕^{ゆうべ}は面白かったかい」

女は答える前に熱い団子をぐいと嚙^のみ下^{くだ}した。

「ええ」と極めて冷淡な挨拶^{あいさつ}をする。

「それは好かつた」と落ちつき払つて云う。

女は急^せいて来る。勝気な女は受太刀だたと気がつけば、すぐ

急いて来る。相手が落ちついていればなお急いて来る。汗を流

して斬り込むならまだしも、斬り込んで置きながら悠々^{ゆうゆう}として

柱に倚^よつて人を見下しているのは、酒を飲みつつ胡坐^{あぐら}をかいて

追剥^{おいはぎ}をすると同様、ちと虫がよすぎる。

「驚くうちは楽^{たのしみ}があるんでしよう」

女は逆^{さか}に寄せ返した。男は動じた様子もなく依然として上か

ら見下している。意味が通じた気色^{けしき}さえ見えぬ。欽吾の日記に

云う。——ある人は十銭をもつて一円の十分一じゅうぶいちと解釈し、ある人は十銭をもつて一銭の十倍と解釈すと。同じ言葉が人に依つて高くも低くもなる。言葉を用いる人の見識次第である。欽吾と藤尾の間にはこれだけの差がある。段が違けんかうものが喧嘩けんかをすると妙な現象が起る。

姿勢を変えるさえもの嬾ものうく見えた男はただ

「そうさ」と云つたのみである。

「兄さんのように学者になると驚きたくつても、驚ろけないから楽がないでしょう」

「たのしみ楽？」と聞いた。楽の意味が分つてゐるのかと云わぬばかりの

挨拶と藤尾は思う。兄はやがて云う。

「楽はそうないさ。その代り安心だ」

「なぜ」

「楽のないものは自殺する氣遣がない」

藤尾には兄の云う事がまるで分らない。蒼い顔は依然として見下している。なぜと聞くのは不見識だから黙っている。

「御前のように樂の多いものは危ないよ」

藤尾は思わず黒髪に波を打たした。きつと見上げる上から兄は分ったかとやはり見下している。何事とも知らず「埃及の御代しろし召す人の最後ぞ、かくありてこそ」と云う句を明かに思い出す。

「小野は相変らず来るかい」

藤尾の眼は火打石を金槌の先で敲いたような火花を射る。構

わぬ兄は

「来ないかい」と云う。

藤尾はぎりぎりと言齒を嚙んだ。兄は談話を控えた。しかし依

然として柱に倚よっている。

「兄さん」

「何だい」とまた見下す。

「あの金時計は、あなたには渡しません」

「おれに渡さなければ誰に渡す」

「当分私わたしがあずかつて置きます」

「当分御前があずかる？　それもよかろう。しかしあれは宗近にやる約束をしたから……」

「宗近さんに上げる時には私から上げます」

「御前から」と兄は少し顔を低くして妹の方へ眼を近寄せた。

「私から——ええ私から——私から誰かに上げます」と寄木よせぎの

机もたに凭ひじせた肘ひじを跳はねて、すつくり立ち上がる。紺と、濃い黄と、
木賊とくさと海老茶えびちやの棒縞ぼうじまが、棒のごとく揃そろって立ち上がる。裾すそだけ

が四色よいろの波のうねりを打って白足袋こはぜの靴を隠す。

「そうか」

と兄は雲齋底うんさいぞこの踵かかとを見せて、向むこへ行つてしまった。

甲野さんが幽霊のごとく現われて、幽霊のごとく消える間に、小野さんは近づいて来る。いくたびの降る雨に、土に籠こもる青味を蒸むし返して、湿しめりながらに暖かき大地を踏んで近づいて来る。磨みがき上げた山羊やぎの皮に被かむ埃ほこりさえ目につかぬほどの奇麗きれいな靴を、刻み足に運なばして甲野家の門に近づいて来る。

世を投げ遣やりのだらりとした姿の上に、義理に着る羽織ひもの紐を丸打に結んで、細い杖に本来空ほんらいくうの手持無沙汰てもちぶさたを紛まぎらす甲野さんと、近づいてくる小野さんは塀へいの側そばでぱたりと逢った。自然は対照を好む。

「どこへ」と小野さんは帽に手を懸けて、笑いながら寄つてく

る。

「やあ」と受け応こたえがあつた。そのまま洋杖ステツキは動かなくなる。本来は洋杖さえ手持無沙汰なものである。

「今、ちよつと行こうと思つて……」

「行きたまえ。藤尾はいる」と甲野さんは素直に相手を通す気である。小野さんは躊躇ちゆうちよする。

「君はどこへ」とまた聞き直す。君の妹には用があるが、君はどうなつても構わないと云う態度は小野さんの取るに忍びざるところである。

「僕か、僕はどこへ行くか分らない。僕がこの杖を引つ張り廻すように、何か僕を引つ張り廻すだけだ」

「ハハハハだいぶ哲学的だね。——散歩？」と下から覗のぞき込こんだ。

「ええ、まあ……好い天気だね」

「好い天気だ。——散歩より博覧会はどうだい」

「博覧会か——博覧会は——昨夕^{ゆうべ}見た」

「昨夕行つたつて？」と小野さんの眼は一時に坐る。

「ああ」

小野さんはあ、あ、の後から何か出て来るだろうと思つて、控えている。時鳥は一声で雲に入つたらしい。
ほととぎす

「一人で行つたのかい」と今度はこちらから聞いて見る。

「いいや。誘われたから行つた」

甲野さんにははたして連^{つれ}があつた。小野さんはもう少し進んで見なければ済まないようになる。

「そうかい、奇麗だつたらう」とまず繋^{つな}ぎに出して置いて、そのうちに次の問を考える事にする。ところが甲野さんは簡単に

「うん」の一句で答をしてしまう。こつちは考のまとまらないうち、すぐ何とか付けなければならぬ。始めは「誰と？」と聞こうとしたが、聞かぬ前にいや「何時頃？」^{なんじ}の方が便宜^{べんぎ}ではあるまいかと思う。いつそ「僕も行つた」と打つて出ようか知ら、そうしたら先方の答次第で万事が明瞭^{めいりょう}になる。しかしそれもいらぬ事だ。——小野さんは胸の上、咽喉^{のど}の奥でしばらく押問答をする。その間に甲野さんは細い杖の先を一尺ばかり動かした。杖のあとに動くものは足である。この相図をちらりと見て取つた小野さんはもう駄目だ、よそうと咽喉の奥でせつかくの計画をほごしてしまう。爪の垢^{あか}ほど先^{せん}を制せられても、取り返しをつけようと意思を働かせない人は、教育の力では翻^{ひるが}えす事の出来ぬ宿命論者である。

「まあ行きたまえ」とまた甲野さんが云う。催促されるような

氣持がする。運命が左へと指図さしずをしたらしく感じた時、後うしろから押すものがあれば、すぐ前へ出る。

「じゃあ……」と小野さんは帽子をとる。

「そうか、じゃあ失敬」と細い杖は空間を二尺ばかり小野さんから遠退とおのいた。一步門へ近寄った小野さんの靴は同時に一步杖に牽ひかれて故もとへ帰る。運命は無限の空間に甲野さんの杖と小野さんの足を置いて、一尺の間隔を争わしている。この杖とこの靴は人格である。我らの魂は時あつて靴の踵かかとに宿り、時あつて杖の先に潜む。魂を描えがく事を知らぬ小説家は杖と靴とを描く。

一步の空間を行き尽した靴は、光る頭こうべを回めぐらして、棄身すてみに細い体を大地に托した杖に問いかけた。

「藤尾さんも、昨夕まっすぐいっしょに行つたのかい」

棒のごとく真直まっすぐに立ち上がった杖は答える。

「ああ、藤尾も行つた。——ことに因よると今日は下読が出来ていないかも知れない」

細い杖は地に着くがごとく、また地を離るるがごとく、立つと思えば傾むき、傾むくと思えば立ち、無限の空間を刻んで行く。光る靴は突き込んだ頭に薄い泥を心持わるく被かぶつたまま、遠慮勝に門内の砂利を踏んで玄関に掛かかる。

小野さんが玄関に掛かると同時に、藤尾は椽の柱に倚よりながら、席に返らぬ爪つまさき先を、雨戸引く溝の上に翳かざして、手広く囲い込んだ庭の面を眺ながめている。藤尾が椽の柱に倚りかかるよほど前から、謎なぞの女は立て切つた一間ひとまのうちで、鳴る鉄瓶てつびんを相手に、行く春の行き尽さぬ間まを、根限こんかぎり考えている。

欽吾はわが腹を痛めぬ子である。——謎の女かんがえの考は、すべてこの一句から出立する。この一句を布衍ふえんすると謎の女の人生観

になる。人生観を増補すると宇宙観が出来る。謎の女は毎日鉄瓶の音を聞いては、六畳敷の人生観を作り宇宙観を作っている。人生観を作り宇宙観を作るものは閑のある人に限る。謎の女は絹布団の上でその日その日を送る果報な身分である。

居住は心を正す。端然と恋に焦れたもう雛は、虫が喰うて鼻が欠けても上品である。謎の女はしとやかに坐る。六畳敷の人生観もまたしとやかでなくてはならぬ。

老いて夫なきは心細い。かかるべき子なきはなおさら心細い。かかる子が他人なるは心細い上に忌わしい。かかるべき子を持ちながら、他人にかからねばならぬ掟は忌わしいのみか情けない。謎の女は自を情ない不幸の人と信じている。

他人でも合わぬとは限らぬ。醤油と味淋は昔から交っている。しかし酒と煙草をいっしょに吞めば咳が出る。親の器の方円に

応じて、盛らるる水の調子を合わせる欽吾ではない。日を経れ
 ば日を重ねて隔りの関が出来る。この頃は江戸の敵に長崎で巡
 り逢ったような心持がする。学問は立身出世の道具である。親
 の機嫌に逆つて、師走正月の拍子をはずすための修業ではある
 まい。金を掛けてわざわざ変人になつて、学校を出ると世間に
 通用しなくなるのは不名誉である。外聞がわるい。嗣子として
 は不都合と思う。こんなものに死水を取つて貰う気もないし、
 また取るほどの働のあるはずがない。

幸と藤尾がいる。冬を凌ぐ女竹の、吹き寄せて夜を積る粉雪
 をぴんと撥ねる力もある。十目を街頭に集むる春の姿に、蝶を
 縫い花を浮かした派出な衣裳も着せてある。わが子として押し
 出す世間は広い。晴れた天下を、晴れやかに練り行くを、迷う
 は人の随意である。三国一の婿と名乗る誰彼を、迷わしてこそ、

焦^じらしてこそ、育て上げた母の面目は揚^あがる。海鼠^{なまこ}の氷つたような他人にかかるよりは、羨^{うらやま}しがられて華麗^{はなやか}に暮れては明ける実の娘の月日に添うて墓に入るのが順路である。

蘭^{らん}は幽谷^{ゆうこく}に生じ、剣は烈士に帰す。美しくしき娘には、名ある聶^{むこ}を取らねばならぬ。申込はたくさんあるが、娘の氣に入らぬものは、自分の氣に入らぬものは、役に立たぬ。指の太さに合わぬ指輪は貰つても捨てるばかりである。大き過ぎても小さ過ぎても聶^{さん}には出来ぬ。したがつて聶^{こんにち}は今日まで出来ずにいた。燦^{さん}として群がるもののうちにただ一人小野さんが残っている。小野さんは大変学問のできる人だと云う。恩賜の時計をいただきたいと云う。もう少し立つと博士になると云う。のみならず愛嬌^{あいきょう}があつて親切である。上品で調子がいい。藤尾の聶^{さん}として恥ずかしくはあるまい。世話になつても心持がよからう。

小野さんは申分もうしぶんのない聾である。ただ財産のないのが欠点である。しかし聾の財産で世話になるのは、いかに氣に入つた男でも幅が利きかぬ。無一物の某それがしを入れて、おとなしく嫁姑よめしゅうとめを大事にさせるのが、藤尾の都合にもなる、自分のためでもある。一つ困る事はその財産である。夫おつとが外国で死んだ四ヵ月後の今日は当然欽吾の所有に歸きしてしまつた。魂胆はここから始まる。

欽吾は一文の財産もいらぬと云う。家も藤尾にやると云う。義理の着物を脱いで便利の赤裸はだかになれるものなら、降つて湧わいた温泉へ得たり賢いしようこしと飛び込む氣にもなる。しかし体裁に着る衣裳はそう無雑作むざうさに剥はぎ取れるものではない。降りそうだから傘かさをやろうと投げ出した時、二本あれば遠慮をせぬが世間であるが、見す見すくれる人が濡ぬれるのを構わずにわがままな手を出すのは人の思おもわくもある。そこに謎なぞが出来る。くれると云

うのは本気で云う嘘で、取らぬ顔つきを見せるのも隣近所への
 申訳に過ぎない。欽吾の財産を欽吾の方から無理に藤尾に譲る
 のを、厭々いやいやながら受取った顔つきに、文明の手前を繕つくろわねばな
 らぬ。そこで謎が解とける。くれると云うのを、くれない意
 味と解いて、貰りう料簡りょうけんで貰りわないと主張するのが謎の女である。
 六畳敷の人生観はすこぶる複雑である。

謎の女は問題の解決に苦しんでとうとう六畳敷を出た。貰あい
 たいものを飽あくまで貰あわないと主張して、しかも一日も早く貰あつ
 てしまう方法は微分積分でも容易に発見の出来ぬ方法である。
 謎の女が苦まし紛まれの屈託顔に六畳敷を出たのは、焦じれ慮つたいが高こうじ
 て、布団の上に坐いたたまれないからである。出て見ると春の日
 は存外のど閑で、平氣びんに鬢なみを翹なみる温風はいやに人を馬鹿にする。
 謎の女はいよいよ氣色きしよくが悪くなつた。

椽^{えん}を左に突き当れば西洋館で、応接間につづく一部屋は欽吾が書斎に使っている。右は鍵^{かぎ}の手に折れて、折れたはずれの南に突き出した六畳が藤尾の居間となる。

菱餅^{ひしもち}の底を渡る気で真直^{まっすぐ}な向う角を見ると藤尾が立っている。濡色^{ぬれいろ}に捌^{さば}いた濃き鬢^{びん}のあたりを、母^{つが}の柱に圧^おしつけて、斜めに持たした艶^{えん}な姿の中ほどに、帯深く差し込んだ手頸^{てくび}だけが白く見える。萩に伏し薄^{すすぎ}に靡^{なび}く故里を流離^{ふるさと}人はこんな風に眺^{なが}める事がある。故里を離れぬ藤尾は何を眺めているか分らない。母は椽を曲つて近寄つた。

「何を考えているの」

「おや、御母^{おつか}さん」と斜^{なな}めな身体を柱から離す。振り返った眼つきには愁^{うれい}の影さえもない。我^がの女と謎の女は互に顔を見合した。実の親子である。

「どうかしたのかい」と謎が云う。

「なぜ」と我が聞き返す。

「だって、何だか考え込んでいるからさ」

「何にも考えていやしません。庭の景色を見ていたんです」

「そう」と謎は意味のある顔つきをした。

「池の緋鯉ひぎいが跳ねはますよ」と我は飽くまでも主張する。なるほど濁った水のなかで、ぽちやりと云う音がした。

「おやおや。——御母おつかさんの部屋では少しも聞えないよ」

聞えないんではない。謎で夢中になっていたのである。

「そう」と今度は我の方で意味のある顔つきをする。世はさまざまである。

「おや、もう蓮はすの葉が出たね」

「ええ。まだ気がつかなかったの」

「いいえ。今始^{はじめ}て」と謎が云う。謎ばかり考えているものは迂濶^{うかつ}である。欽吾と藤尾の事を引き抜くと頭は真空になる。蓮の葉どころではない。

蓮の葉が出たあとには蓮の花が咲く。蓮の花が咲いたあとには蚊帳^{かや}を畳んで蔵へ入れる。それから蟋蟀^{こおろぎ}が鳴く。時雨^{しぐ}れる。木枯^{こがらし}が吹く。……謎の女が謎の解決に苦しんでいるうちに世の中は変つてしまふ。それでも謎の女は一つ所に坐^{すわ}つて謎を解くつもりでいる。謎の女は世の中で自分ほど賢いものはないと思つている。迂濶^{うかつ}だなどとは夢にも考えない。

緋鯉^{ひこい}ががぼちやりとまた跳ねる。薄濁^{うすにごり}のする水に、泥は沈んで、上皮だけは軽く温^{ぬる}む底から、朦朧^{もうろう}と朱^{あか}い影が静かな土を動かして、浮いて来る。滑^{なめ}らかな波にきらりと射す日影を崩^{くず}さぬほどに、尾を揺^ゆつているかと思うと、思い切つてぽんと水を敲^{たた}

いて飛びあがる。一面に揚る泥の濃きうちに、幽かなる朱いものが影を潜めて行く。温い水を背に押し分けて去る痕は、一筋のうねりを見せて、去年の蘆を風なきに撈る。甲野さんの日記には鳥入雲無迹、魚行水有紋と云う一聯が律にも絶句にもならず、そのまま楷書でかいてある。春光は天地を蔽わず、任意に人の心を悦ばしむ。ただ謎の女には幸せぬ。

「何だつて、あんなに跳ねるんだらうね」と聞いた。謎の女が謎を考へるごとく、緋鯉もむやみに跳ねるのであらう。酔狂と云えば双方とも酔狂である。藤尾は何とも答えなかつた。

浮き立ての蓮の葉を称して支那の詩人は青錢を置むと云つた。錢のような重い感じは無論ない。しかし水際に始めて昨日、今日の嫩い命を托して、娑婆の風に薄い顔を曝すうちは錢のごとく細かである。色も全く青いとは云えぬ。美濃紙の薄きに過ぎ

て、重苦しと碧を厭いとう柔らかき茶に、日ごとに冒おかす緑青を交ぜた葉の上には、鯉おどの躍つた、春の名残が、吹けば飛ぶ、置けば崩れぬ珠たまとなつて転がっている。――答をせぬ藤尾はただ眼前の景色を眺ながめる。鯉はまた躍つた。

母は無意味に池の上を睥みつめていたが、やがて気を換えて

「近頃、小野さんは来ないようだね。どうかしたのかい」と聞いて見る。

藤尾は屹きつと向き直つた。

「どうしたんですか」とじつと母を見た上で、澄してまた庭の方へ眸ひとみを反そらす。母はおやと思う。さっきの鯉が薄赤く浮葉の下を通る。葉は気軽に動く。

「来ないなら、何とか云つて来そうなんだね。病氣でもしているんじゃないか」

「病氣だつて？」と藤尾の声は疳走^{かんぱし}るほどに高かつた。

「いいえさ。病氣じゃないか、と聞くのさ」

「病氣なもんですか」

清水^{きよみず}の舞台から飛び降りたような語勢は鼻の先でふふんと留つた。母はまたおやと思う。

「あの人はいつ博士になるんだらうね」

「いつですか」とよそごとのように云う。

「御前^{おまい}——あの人と喧嘩^{けんか}でもしたのかい」

「小野さんに喧嘩が出来るもんですか」

「そうさ、ただ教えて貰やしまいし、相当の礼をしているんだから」

謎の女にはこれより以上の解釈は出来ないのである。藤尾は返事を見合せた。

昨夕ゆうべの事を打ち明けてこれこれであつたと話してしまえばそれまでである。母は無論躍起やつきになつて、こつちに同情するに違ない。打ち明けて都合が悪いとは露思わぬが、進んで同情を求めるのは、餓うえに逼せまつて、知らぬ人の門口かどぐちに、一錢二錢の憐あわれみを乞うのと大した相違はない。同情は我がの敵である。昨日きのうまで舞台に躍る操人形あやつりにんぎょうのように、物云うも懶ものうきわが小指の先で、意のごとく立たしたり、寝かしたり、果はては笑わしたり、焦じらしたり、どぎまぎさして、面白く興じていた手柄顔を、母も天晴あっぱれと、うごめかす鼻の先に、得意の見栄みえをぴくつかせていたものを、——あれは、ほんの表向で、内実の昨夕ゆうべを見たら、招く薄すすきは向むこうへ靡なびく。知らぬ顔の美しい人と、睦むつまじく御茶を飲んでいたと、心外ふたな蓋をとれば、母の手前で器量が下がる。我が承知が出来ぬと云う。外それた鷹たかなら見限みきりをつけてもういらぬと話す。あと

を跟^つけて鼻を鳴らさぬような犬ならば打ちやつた後で、捨てて来たと公言する。小野さんの不心得はそこまでは進んでおらぬ。放つて置けば帰るかも知れない。いや帰るに違ないと、小夜子と自分を比較した我が証言してくれる。帰つて来た時に辛^{から}い目に逢^あわせる。辛い目に逢^あわせた後で、立たしたり、寝かしたりする。笑わしたり、焦らしたり、どぎまぎさしたりする。そうして、面白^{てがらが}そうな手柄^お顔を、母に見せれば母への面目は立つ。兄^{はじめ}と一に見せれば、両^{ふたり}人への意趣返^{いしゆがえ}しになる。——それまでは話すまい。藤尾は返事を見合せた。母は自分の誤解を悟る機会を永久に失つた。

「さつき欽吾が来やしないか」と母はまた質問を掛ける。鯉^{おど}は躍^{はす}る。蓮^{はすめ}は芽を吹く、芝生はしだいに青くなる、辛夷^{こぶし}は朽^くちた。謎の女はそんな事に頓着^{とんじやく}はない。日となく夜となく欽吾の幽霊

で苦しめられている。書斎におれば何をしているかと思ひ、考えておれば何を考へているかと思ひ、藤尾の所へ来れば、どんな話をしに来たのかと思う。欽吾は腹を痛めぬ子である。腹を痛めぬ子に油断は出来ぬ。これが謎の女の先天的に教わつた大真理である。この真理を発見すると共に謎の女は神経衰弱に罹つた。神経衰弱は文明の流行病である。自分の神経衰弱を濫用すると、わが子までも神経衰弱にしてしまう。そうしてあれの病氣にも困り切りますと云う。感染したものこそいい迷惑である。困り切るのはどっちの云い分らない。ただ謎の女の方では、飽くまでも欽吾に困り切っている。

「さつき欽吾が来やしないか」と云う。

「来たわ」

「どうだい様子は」

「やっぱり相変らずですわ」

「あれにも、本当に……」で薄く八の字を寄せたが、

「困り者だね」と切った時、八の字は見る見る深くなつた。

「何でも奥歯に物の挟はさまつたような皮肉ばかり云うんですよ」

「皮肉なら好いけれども、時々気の知れない囁ねごと語を云うにや困るじゃないか。何でもこの頃は様子が少し変だよ」

「あれが哲学なんでしょう」

「哲学だか何だか知らないけれども。——さつき何か云つたかい」

「ええまた時計の事を……」

「返せて云うのかい。一はじめにやろうがやるまいが余計な御世話じゃないか」

「今どつかへ出掛けたでしょう」

「どこへ行つたんだらう」

「きつと宗近へ行つたんですよ」

対話がここまで進んだ時、小野さんがいらつしやいましたと下女が両手をつかえる。母は自分の部屋へ引き取つた。

椽側えんがわを曲つて母の影が障子しょうじのうちに消えたとき、小野さんは内玄関ないげんかんの方から、茶の間の横を通つて、次の六畳を、廊下へ廻らず抜けて来る。

磬けいを打つて入室相見にゆうしつしやうけんの時、足音を聞いただけで、公案くふうの工夫

が出来たか、出来ないか、手に取るようにわかるものじやと云つた和尚おしょうがある。

気の引けるときは歩き方にも現けものわれる。獸けものにさ

え屠所としよのあゆみと云う諺ことわざがある。参禅さんぜんの衲子のうしに限きつた現象とは

認められぬ。応用は才人小野さんの上にも利きく。小野さんは常から世の中に気兼をし過ぎる。今日は一入変ひとしおである。落人おちゆうどは戦そよ

ぐ芒^{すずき}に安からず、小野さんは軽く踏む青畳に、そと落す靴足袋^{くつたび}の黒き爪^{つま}先に憚^{はばか}り氣を置いて這^{はい}入つて來た。

一睛^{いつせい}を暗所^{あんしょ}に点ぜず、藤尾は眼を上げなかつた。ただ畳に落す靴足袋の先をちらりと見ただけではあと悟つた。小野さんは座に着かぬ先から、もう舐^なめられている。

「今日は……」と座りながら笑いかける。

「いらつしやい」と真面目な顔をして、始めて相手をまともに見る。見られた小野さんの眸^{ひとみ}はぐらついた。

「御無沙汰^{ごぶさた}をしました」とすぐ言訳を添える。

「いいえ」と女は遮^{さへぎ}つた。ただしそれぎりである。

男は出鼻^{くじ}を挫かれた氣持で、どこから出直そうかと考える。座敷は例のごとく静である。

「だいぶ暖^{あつた}かになりました」

「ええ」

座敷のなかにこの二句を点じただけで、後は故のごとく静になる。ところへ鯉がぼちやりとまた跳る。池は東側で、小野さんの背中に当る。小野さんはちよつと振り向いて鯉がと云おうとして、女の方を見ると、相手の眼は南側の辛夷に注いでいる。――壺のごとく長い弁から、濃い紫が春を追うて抜け出した後は、残骸に空しき茶の汚染を皴立てて、あるものはぼきりと絶えた萼のみあらわである。

鯉がと云おうとした小野さんはまた廃めた。女の顔は前よりも寄りつけない。――女は御無沙汰をした男から、御無沙汰をした訳を云わせる気で、ただいいえと受けた。男は仕損つたと心得て、だいぶ暖になりましたと気を換えて見たが、それでも鯉が見えぬので、鯉がの方へ移ろうとしたのである。男は踏み

留とどまれるところまで滑すべつて行く気で、氣を揉もんでいるのに、女は依然として故の所に坐まつて動かない。知らぬ小野さんはまた考えなければならぬ。

四五日来なかつたのが氣に入らないなら、どうでもなる。昨夕ゆうべ博覽会で見つかったのなら少し面倒である。それにしても弁解の道はいくらでもつく。しかし藤尾がはたして自分と小夜子を、ぞろぞろ動く黒い影の絶間なく入れ代るうちに認めたろうか。認められたらそれまでである。認められないのに、こちらから思い切さきつて持ち出すのは、肌を脱においで汚むさい腫物しゅもつを知らぬ人の鼻の前に臭さきわせると同じ事になる。

若い女と連れ立つて路を行くは当世である。ただ歩くだけなら名譽になろうとも瑕疵きずとは云わせぬ。今宵限こよいかぎりの朧おぼろだものと、即興にそそのかされて、他生たしようの縁そでの袖たもとと袂たもとを、今宵限り擦すり合

せて、あとは知らぬ世の、黒い波のざわつく中に、西東首を埋^{うず}めて、あかの他人と化けてしまふ。それならば差支^{さしつかえ}ない。進んでこうと話^{はな}もする。残念な事には、小夜子と自分は、碁盤の上に、訳もなく併^{なら}べられた二つの石の引つ付くような浅い関係ではない。こちらから逃げ延びた五年の永き年月を、向^{むこう}では離れ^{えに}じと、日^ひの間^まとも夜の間ともなく、繰^{つな}り出^とす糸の、誠は赤き縁^{えに}の色に、細くともこれまで繋^{つな}ぎ留^とめられた仲である。

ただの女と云い切れれば済まぬ事もない。その代り、人も嫌^{たたり}い自分も好かぬ嘘^{うそ}となる。嘘は河豚汁^{ふぐじる}である。その場限りで祟^{たたり}がなければこれほど旨^{うま}いものはない。しかし中毒^{あかつ}たが最後苦しい血も吐かねばならぬ。その上嘘は実^{まこと}を手繰^{たぐり}寄せ^よせる。黙^{もく}つていれば悟^{みづ}られずに、行き抜^{たより}ける便もあるに、隠^{かく}そうとする身繕^{みづくろい}、名繕^な、さては素性繕^{すじよう}に、疑^{うたがひ}の眸^{ひとみ}の征矢^{そや}はてつきりの的^{まと}と集りやすい。

うかのところでちよつとごとついた。

「ええ、行きました」

迷っている男の鼻面はなづらを掠かすめて、黒い影が颯さつと横切つて過ぎた。

男はあつと思う間まに先せんを越されてしまう。仕方がないから、

「奇麗きれいでしたろう」とつける。奇麗きれいでしたろうは詩人として余

り平凡である。口に出した当人も、これはひどいと自覚した。

「奇麗でした」と女は明確きつぱり受け留める。後あとから

「人間もだいぶ奇麗でした」と浴びせるように付け加えた。小

野さんは思わず藤尾の顔を見る。少し見当けんとうがつき兼ねるので

「そうでしたか」と云った。当り障りあたさわのない答は大抵の場合にお

いて愚ぐな答である。弱身のある時は、いかなる詩人も愚をもつ

て自ら甘んずる。

「奇麗な人間もだいぶ見みましたよ」と藤尾は鋭どく繰り返した。

何となく物騒な句である。なんだか無事に通り抜けられそうにない。男は仕方なしに口を緘つぐんだ。女も留ったまま動かない。まだ白状しない気かと云う眼つきをして小野さんを見ている。宗盛むねもりと云う人は刀を突きつけられてさえ腹を切らなかつたと云う。利害を重んずる文明の民が、そう軽卒に自分の損になる事を陳述する訳がない。小野さんはもう少し敵の動静を審つまびらかにする必要がある。

「誰か御伴おつれがありましたか」と何気なく聴いて見る。

今度は女の返事がない。どこまでも一つ関所を守っている。「今、門の所で甲野さんに逢つたら、甲野さんもいっしょに行つたそうですね」

「それほど知っていらつしやる癖に、何で御尋ねになるの」と女はつんと拗すねた。

「いえ、別に御伴でもあつたのかと思つて」と小野さんは、うまく逃げる。

「兄の外ほかにですか」

「ええ」

「兄に聞いて御覧になればいいのに」

機嫌は依然として悪いが、うまくすると、どうか、こうか渦うずの中を漕こぎ抜けられそうだ。向うの言葉にぶら下がって、往つたり来たりするうちに、いつの間まにやら平地ひらちへ出る事がある。小野さんは今まで毎度この手で成功している。

「甲野君に聞こうと思つたんですけれども、早く上がろうとして急いだもんですから」

「ホホホ」と突然藤尾は高く笑つた。男はぎよつとする。その隙すきに

「そんなに忙しいいそがいものが、何で四五日無届欠席をしたんです」と飛んで来た。

「いえ、四五日大変忙しくって、どうしても来られなかったんです」

「昼間も」と女は肩うしろを後へ引く。長い髪が一筋ごとに活いきているように動く。

「ええ？」と変な顔をする。

「昼間もそんなに忙しいんですか」

「昼間って……」

「ホホホホまだ分らないんですか」と今度はまた庭まで響くほどに痞かんだか高く笑う。女は自由自在に笑う事が出来る。男は茫然ぼうぜんとしている。

「小野さん、昼間もイルミネーションがありますか」と云って、

両手をおとなしく膝の上に重ねた。燦^{さん}たる金剛石^{ダイヤモンド}がぎらりと痛く、小野さんの眼に飛び込んで来る。小野さんは竹篋^{しつぺい}でぴしやりと頬^ほ辺^{おべた}を叩^{たた}かれた。同時に頭の底で見られたと云う音がする。「あんまり、勉強なさるとかえって金時計が取れませんよ」と女は澄した顔で畳み掛ける。男の陣立は総崩^{そうくずれ}となる。

「実は一週間前に京都から故^{もと}の先生が出て来たものですから……」「おや、そう、ちつとも知らなかったわ。それじゃ御忙しい訳ね。そうですか。そうとも知らずに、飛んだ失礼を申しまして」と嘯^{うそぶ}きながら頭を低^たれた。緑の髪がまた動く。

「京都におった時、大変世話になったものですから……」

「だから、いいじゃありませんか、大事にして上げたら。——私はね。昨夕^{ゆうべ}兄^{はじめ}と一さんと糸子さんといっしょに、イルミネーションを見に行つたんですよ」

「ああ、そうですか」

「ええ、そうして、あの池の辺にふち亀屋かめやの出店があるでしょう。

——ねえ知っていらつしやるでしょう、小野さん」

「ええ——知って——います」

「知っていらつしやる。——いらつしやるでしょう。あすこで
皆みんなして御茶を飲んだんです」

男は席を立ちたくなつた。女はわざと落ちついた風を、飽あく
までも粧よそおう。

「大変おishi旨い御茶でした事。あなた、まだ御這入おはいりになつた事はな
いの」

小野さんは黙っている。

「まだ御這入にならないなら、今度こんだ是非その京都の先生を御案内
なさい。私もまた一さんに連れて行つて貰うつもりですから」

藤尾は一さん、と云う名前を妙に響かした。

春の影は傾く。かたぶ永き日は、永くとも二人の専有ではない。床に飾ったマジヨリカの置時計が絶えざる對話をこの一句にちんと切った。三十分ほどしてから小野さんは門外へ出る。その夜よの夢に藤尾は、驚くうちは楽がある！たのしみ女は仕合なものだ！しあわせと云う嘲の鈴を聴かなかつた。あざけり

十三

太い角柱を二本立てて門と云う。扉はあるかないか分らない。やちゆうゆうびん夜中郵便と書いて板塀に穴があいているところを見ると夜は締しまりをするらしい。正面に芝生を土饅頭に盛り上げて市を遮さへぐる翠を傘と張る松を格のごとく植える。みどり松を廻れば、弧線を描いかた

て、頭の上に合う玄関の廂ひさしに、浮彫の波が見える。障子は明け放つたままである。呑気のんきな白襖しろぶすまに舞樂の面ほどな草体を、大雅堂流の筆勢で、無残むざんに書き散らして、座敷との仕切しきりとする。

甲野こうのさんは玄関を右に切れて、下駄箱の透すいて見える格子こうしをそろりと明けた。細い杖つえの先で合土たたきの上をこちこち叩たたいて立っている。頼むとも何とも云わぬ。無論応ずるものはない。屋敷のなかは人の住む気合けわいも見えぬほどにしんとしている。門前を通る車の方がかえつて賑にぎやかに聞える。細い杖の先がこちこち鳴る。

やがて静かなうちで、すうと唐紙からかみが明く音がする。清きよや清やと下女を呼ぶ。下女はいないらしい。足音は勝手の方に近づいて来た。杖の先はこちこちと云う。足音は勝手から内玄関の方へ抜け出した。障子があく。糸子いとこと甲野さんは顔を見合せて立つ

た。

下女もおり書生も置く身は、気軽く構えても滅多に取次に出る事はない。出ようと思う間に、立てかけた膝をおろして、一針でも二針でも縫糸が先へ出るが常である。重たき琵琶の抱き心地と云う永い昼が、永きに堪えず崩れんとするを、鳴く蟲にうつとりと夢を支えて、清を呼べば、清は裏へでも行つたらしい。からりとした勝手には茶釜ばかりが静かに光っている。黒田さんは例のごとく、書生部屋で、坊主頭を腕の中に埋めて、机の上に猫のように寝ているだろう。立ち退いた空屋敷とも思われるなかに、内玄関でこちこち音がする。はてなと何気なく障子を明けると——広い世界にたった一人の甲野さんが立っている。格子から差す戸外の日影を背に受けて、薄暗く高い身を、合土の真中に動かしもせず、しきりに杖を鳴らしている。

「あら」

同時に杖の音はとまる。甲野さんは帽の廂の下から女の顔を久しぶりのように見た。女は急に眼をはずして、細い杖の先を眺める。杖の先から熱いものが上つて、顔がぽうとほてる。油を抜いて、なすがままにふくらました髪を、落すがごとく前に、糸子は腰を折った。

「御出？」と甲野さんは言葉の尻を上げて簡単に聞く。

「今ちよつと」と答えたのみで、苦のない二重瞼に愛嬌の波が寄った。

「御留守ですか。——阿爺さんは」

「父は謡の会で朝から出ました」

「そう」と男は長い体軀を、半分回して、横顔を糸子の方へ向けた。

「まあ、御這入、——兄はもう帰りましょう」

「ありがとう」と甲野さんは壁に物を云う。

「どうぞ」と誘い込むように片足を後へ引いた。着物はあらゐしま縞の銘仙めいせんである。

「ありがとう」

「どうぞ」

「どこへ行つたんです」と甲野さんは壁に向けた顔を、少し女の方へ振り直す。後うしろから掠かすめて来る日影に、蒼あおい頬が、気のせいか、昨日きのうより少し瘡こけたようだ。

「散歩でしょう」と女は首を傾けて云う。

「私も今散歩した帰りだ。だいぶ歩いて疲れてしまつて……」

「じゃ、少し上がつて休んでいらつしやい。もう帰る時分ですから」

話は少しづつ延びる。話の延びるのは気の延びた証拠である。

甲野さんは粗^{あら}枉^まの俎^{まない}下^{いた}駄^たを脱いで座敷へ上がる。

長押^{ながしづく}作りに重い釘隠^{くぎかくし}を打って、動かぬ春の床^{とこ}には、常信^{つねのぶ}の雲竜^{うんりゅう}

の図を奥深く掛けてある。薄黒く墨を流した絹の色を、角^{かく}に取

り巻く紋緞^{もんどん}子の藍^{あい}に、寂^さびたる時代は、象牙^{ぞうげ}の軸^{えき}さえも落ちつ

いている。唐獅^{からじし}子を青磁^{せいじ}に鑄^いる、口ばかりなる香炉^{こうろ}を、どつか

と据^すえた尺余^{はだ}の卓^{つや}は、木理^{あぶら}に光沢ある膏^{あぶら}を吹いて、茶を紫に、紫

を黒に渡^ごる、胡麻^{ごま}濃^{こま}やかな紫檀^{したん}である。

椽^{えん}に遅^{ちじつ}日多し、世をひたすらに寒がる人は、端^{かすり}近く緋^{かすり}の前を

合^あせる。乱菊^{えり}に襟^{えり}晴^{えり}れがましきを豊^{ゆたか}なる顎^{あご}に圧^おしつけて、面と

向^{あきら}う障子^{あきら}の明^{あきら}なるを眩^{まばゆ}く思^{まばゆ}う女は入口に控える。八畳の座敷は

眺^{びよう}たる二人を離れ離れに容^いれて広^{ひろ}過ぎる。間は六尺もある。

忽然^{こっぜん}として黒田さんが現れた。小倉^{こくら}の襷^{ひだ}を飽くまで潰^{つぶ}した袴^{はかま}

の裾すそから赭黒あかぐろい足をにきよきと運ばして、茶を持って来る。
煙草たばこ盆ぼんを持って来る。菓子鉢わしを持って来る。六尺ろくしやくの距離は格かたの

ごとく埋うずめられて、主客の位地は辛うじて、接待の道具つなで繋つなが
れる。忽然こっぜんとして午睡の夢から起きた黒田さんは器械えんし的に縁えんしの

糸を二人の間に渡したまま、朦朧もうろうたる精神を毬栗頭いがぐりあたまの中に封じ

込めて、再び書生部屋へ引き下がる。あとは故もとの空屋敷あきやしきとなる。

「ゆうべ昨夕は、どうでした。疲れましたろう」

「いいえ」

「わたし疲れない？ 私より丈夫だね」と甲野さんは少し笑い掛けた。

「ゆきかえりだって、往復共電車ですもの」

「電車は疲れるもんですがね」

「どうして」

「あの人で。あの人で疲れます。それでも無いですか」

糸子は丸い頬に片^{かた}髷^{えくぼ}を見せたばかりである。返事はしなかった。

「面白かったですか」と甲野さんが聞く。

「ええ」

「何が面白かったですか。イルミネーションがですか」

「ええ、イルミネーションも面白かったけれども……」

「イルミネーションのほかになにか面白いものが有ったんですか」

「ええ」

「何が」

「でもおかしいわ」と首を傾^{かた}げて愛らしく笑っている。要領を得ぬ甲野さんも何となく笑いたくなる。

「何ですかその面白かったものは」

「云って見ましょうか」

「云つて御覧なさい」

「あの、皆みんなして御茶を飲んだでしょう」

「ええ、あの御茶が面白かつたんですか」

「御茶じゃないんです。御茶じゃないんですけれどもね」

「ああ」

「あの時小野さんがいらしたでしょう」

「ええ、いました」

「美しい方かたを連れていらしたでしょう」

「美しい？　そう。若い人といつしよのようでしたね」

「あの方を御存じでしょう」

「いいえ、知らない」

「あら。だつて兄がそう云いましたわ」

「そりや顔を知つてると云う意味なんでしょう。話をした事は

一遍もありません」

「でも知っていらつしやるでしょう」

「ハハハハ。どうしても知ってなければならぬんですか。実は逢^あつた事は何遍もあります」

「だから、そう云つたんですわ」

「だから何と」

「面白かつたつて」

「なぜ」

「なぜでも」

ふたえまぶた

二重瞼に寄る波は、寄りては崩^{くず}れ、崩れては寄り、黒い眸^{ひとみ}を、

見よがしに弄^{もてあそ}ぶ。繁^{しげ}き若葉を洩^もる日影の、錯落^{さくらく}と大地に鋪^しくを、

風は枝頭^{しとう}を揺^{うご}かして、ちらつく苔^{こけ}の定かならぬようである。甲

野さんは糸子の顔を見たまま、なぜの説明を求めなかつた。糸

子も進んでなぜの訳を話さなかった。なぜは愛嬌あいぎょうのうちに溺おぼれて、要領を得る前に、行方ゆくえを隠してしまった。

塗り立てて瓢箪形ひょうたんがたの池浅く、焙烙ほうろくに熬いる玉子の黄味に、朝夕を

楽しく暮す金魚の世は、尾を振り立てて藻もに潜もぐるとも、起つ波に

身を攪さるる憂うれいはない。鳴戸なるとを抜ける鯛たいの骨は潮に揉もまれて年々としどし

に硬くなる。荒海の下は地獄へ底抜けの、行くも帰るも徒事いたずらごとで

は通れない。ただ広海ひろうみの荒魚あらうおも、三つ尾の丸まるつ子こも、同じ箱に

入れられれば、水族館に隣合の友となる。隔たりの関は見えぬ

が、仕切る硝子ガラスは透すき通りながら、突き抜けようとすれば鼻頭はなづら

を痛めるばかりである。海を知らぬ糸子に、海の話は出来ぬ。

甲野さんはしばらく瓢箪形に応対をしている。

「あの女はそんなに美人でしようかね」

「私は美しいと思いますわ」

「そうかな」と甲野さんは椽側えんがわの方を見た。野面のづらの御影みかげに、乾かぬ露えらが降りて、いつまでも湿しつとりと眺めながられる径わだし二尺の、縁ふちを択えらんで、鷺草さぎそうとも堇すみれとも片づかぬ花が、数を乏しく、行く春ぬすを偷ぬすんで、ひそかに咲いている。

「美しい花が咲いている」

「どこに」

糸子の目には正面の赤松と根方ねがたにあしらった熊笹くまざさが見えるのみである。

「どこに」と暖い顎あごを延ばして向むを眺める。

「あすこに。——そこからは見えない」

糸子は少し腰を上げた。長い袖そでをふらつかせながら、二三歩膝頭ひざがしらで椽えんに近く擦すり寄つて来る。二人の距離が鼻の先に逼せまると共に微かすかな花は見えた。

「あら」と女は留^{とま}る。

「奇麗でしょう」

「ええ」

「知らなかったんですか」

「いいえ、ちつとも」

「あんまり小さいから気がつかない。いつ咲いて、いつ消える
か分らない」

「やっぱり桃や桜の方が奇麗でいいのね」

甲野さんは返事をせずに、ただ口のうちに

「憐^{ゆう}れな花だ」と云った。糸子は黙っている。

「昨夜^{ゆうべ}の女のような花だ」と甲野さんは重ねた。

「どうして」と女は不審そうに聞く。男は長い眼を翻^{ひる}えしてじつ

と女の顔を見ていたが、やがて、

「あなたは氣樂でいい」と真面目に云う。

「そうでしょうか」と真面目に答える。

賞められたのか、腐くさされたのか分らない。氣樂か氣樂でないか知らない。氣樂がいいものか、わるいものか解かいしにくい。ただ甲野さんを信じている。信じている人が真面目まじめに云うから、真面目にそうでしょうかと云うよりほかに道はない。

文あやは人の目を奪う。巧は人の目を掠かすめる。質は人の目を明かにする。そう、で、し、よ、う、か、を聞いた時、甲野さんは何となくありがたい心持がした。直下じきげに人の魂を見るとき、哲學者は理解りげの頭かしらを下げて、無念とも何とも思わぬ。

「いいですよ。それでいい。それで無くつちや駄目だ。いつまでもそれでなくつちや駄目だ」

糸子は美しい齒を露わした。あら

「どうせこうですわ。いつまで立ったって、こうですわ」

「そうは行かない」

「だって、これが生れつきなんだから、いつまで立ったって、変りようがないわ」

「変ります。——阿爺おとっさんと兄さんの傍そばを離れると変ります」

「どうしてでしょうか」

「離れると、もっと利口に変ります」

「私わたしもっと利口になりたいと思ってるんですわ。利口に変れば
変る方がいいんでしょう。どうかして藤尾ふじおさんのようになりた
いと思うんですけれども、こんな馬鹿なものだから……」

甲野さんは世に気の毒な顔をして糸子のあどけない口元を見
ている。

「藤尾がそんなに羨しいんですか」
うらやま

「ええ、本当に羨ましいわ」

「糸子さん」と男は突然優しい調子になった。

「なに」と糸子は打ち解けている。

「藤尾のような女は今の世に有過ぎて困るんですよ。気をつけないと危ない」
あぶ

女は依然として、肉余るまぶた 瞼を二重に、愛嬌あいぎようの露を大きな眸ひとみの上に滴したたらしているのみである。危ないという気色けしきは影さえ見えぬ。

「藤尾が一人出ると昨夕ゆうべのような女を五人殺します」

鮮かな眸に滴るものはぱつと散った。表情はとつきに変わる。
あざや
殺すと云う言葉はさほどに怖おそろしい。——その他の意味は無論分
らぬ。

「あなたはそれで結構だ。動くと変ります。動いてはいけない」

「動くと？」

「ええ、恋をすると変ります」

女は咽喉のどから飛び出し、そうなるものを、ぐつと嚙くみ下くだした。顔は真赤まっかになる。

「嫁に行くと変ります」

女は俯向うつむいた。

「それで結構だ。嫁に行くのはもったいない」

可愛らしい二重瞼あまりようがつづけ様に二三度またいた。結んだ口元をちよろちよると雨竜さぎそうの影が渡る。鷺草すみれとも堇とも片づかぬ花は依然として春を乏ともしく咲いている。

電車が赤い札を卸おろして、ぶうと鳴つて来る。入れ代うしろつて後から町内の風を鉄軌レールの上に追い捲まくつて去る。按摩あんまが隙すきを見計はかつて恐る恐る向側むこうがわへ渡る。茶屋の小僧が臼うすを挽ひきながら笑う。旗振はたふりの着るヘル地の織目は、埃ほこりがいっぱい溜ためつて、黄色にぼけている。古本屋から洋服が出て来る。鳥打帽が寄席よせの前に立っている。今晚の語り物が塗板に白くかいてある。空は針線はりがねだらけである。一羽の鳶とびも見えぬ。上の静なるだけに下はすこぶる雑駁ざつぱくな世界である。

「おいおい」と大きな声で後から呼ぶ。

二十四五の夫人がちよつと振り向いたまま行く。

「おい」

今度は印絆しるしばんてん天が向いた。

呼ばれた本人は、知らぬ氣げに、来る人を避よけて早足に行く。

抜き競くらをして飛んで来た二輛りようの人力じんりきに遮さえぎられて、間はますます遠くなる。宗近君むねちかは胸を出して馳かけ出した。寛ゆるく着た袷あわせと羽織おろが、足を下おろすたんびに躍おどりを踊る。

「おい」と後うしろから手を懸かける。肩がぴたりと留まると共に、小野さんの細面ほそおもてが斜ななめに見えた。両手は塞ふさがっている。

「おい」と手を懸けたまま肩をゆす振る。小野さんはゆす振られながら向き直った。

「誰かと思つたら……失敬」

小野さんは帽子のまま鄭寧ていねいに会釈えしやくした。両手は塞ふさがっている。「何を考えてるんだ。いくら呼んでも聴きこえない」

「そうでしたか。ちつとも気がつかなかった」

「急いであるようで、しかも地面の上を歩いていないようで、少し妙だよ」

「何が」

「君の歩行方あるきかたがさ」

「二十世紀だから、ハハハハ」

「それが新式の歩行方か。何だか片足が新で片足が旧のようだ」
「實際こう云うものを提さげていると歩行にさくいから……」

小野さんは両手を前の方へ出して、この通りと云わぬばかりに、自分から下の方へ眼を着けて見せる。宗近君も自然と腰から下へ視線を移す。

「何だい、それは」

「こつちが紙屑籠かみくずかご、こつちが洋灯ランプの台」

「そんなハイカラな形姿なりをして、大きな紙屑籠なんぞを提さげるから妙なんだよ」

「妙でも仕方がない、頼まれものだから」

「頼まれて妙になるのは感心だ。君に紙屑籠を提^さげて往来を歩くだけの義侠心があるとは思わなかった」

小野さんは黙って笑ながら御辞儀^{おじぎ}をした。

「時にどこへ行くんだね」

「これを持って……」

「それを持って帰るのかね」

「いいえ。頼まれたから買って行ってやるんです。君は？」

「僕はどっちへでも行く」

小野さんは内心少々当惑した。急いでいるようで、しかも地

面の上を歩行^{ある}ていないようだ、と、宗近君が云ったのは、まさに

現下の状態によく適合^{あてはま}った小野評である。靴に踏む大地は広く

もある、堅くもある、しかし何となく踏み心地が確かでない。

にもかかわらず急ぎたい。気楽な宗近君などに逢^あつては立話を

するのさえ難義である。いつしよにあるこうと云われるとなおさら困る。

常でさえ宗近君に捕つかまると何となく不安である。宗近君と藤尾ふじおの関係を知るような知らぬような間まに、自分と藤尾との関係は成り立ってしまった。表向人おもてむきの許嫁いいなづけを盗んだほどの罪は犯さぬつもりであるが、宗近君の心は聞かんでも知れている。露骨な人の立居振舞の折々にも、気のあるところはそれと推測が出来る。それを裏から壊しに掛つたとまでは行かぬにしても、事實は宗近君の望を、われ故ゆえに、永久に鎖した訳になる。人情としては気の毒である。

気の毒はこれだけで気の毒である上に、宗近君が氣樂べんがらに構えて、毫べんも自分と藤尾の仲を苦にしていなのがおさらの気の毒になる。逢えば隔意なく話をする。冗談じょうだんを云う。笑う。男子

の本領を説く。東洋の経綸を論ずる。もつとも恋の事は余り語らぬ。語らぬと云わんよりむしろ語れぬのかも知れぬ。宗近君は恐らく恋の真相を解げせぬ男だろう。藤尾おつとの夫には不足である。それにもかかわらず気の毒は依然として気の毒である。

気の毒とは自我を没した言葉である。自我を没した言葉であるからありがたい。小野さんは心のうちで宗近君に気の毒だと思つてゐる。しかしこの気の毒のうちに大いなる己おのれを含んでゐる。悪戯いたづらをして親の前へ出るときの心持を考えて見るとわかる。

気の毒だったと親のために悔ゆる了見りようけんよりは何となく物騒だと云う感じが重おもである。わが悪戯が、己れと掛け離れた別人の頭の上に落した迷惑はともかくも、この迷惑が反響して自分の頭ががんと鳴るのが気味が悪い。雷らいの嫌きらいなもの、雷を封じた雲の峰の前へ出ると、少しく逡巡しゅんじゅんするのと一般である。ただの気

の毒とはよほど趣^{おもむき}が違う。けれども小野さんはこれを称して気の毒と云っている。小野さんは自分の感じを気の毒以下に分解するのを好まぬからであらう。

「散歩ですか」と小野さんは鄭^{てい}寧^{ねい}に聞いた。

「うん。今、その角^{かど}で電車を下りたばかりだ。だから、どつちへ行つてもいい」

この答は少々論理に叶^{かな}わないと、小野さんは思った。しかし論理はどうでも構わない。

「僕は少し急ぐから……」

「僕も急いで差支^{さしつかえ}ない。少し君の歩く方角へ急いでいっしょに行こう。——その紙屑籠^{かみくずかご}を出せ。持ってやるから」

「なにいいです。見つともない」

「まあ、出しなさい。なるほど嵩張^{かさば}る割に軽いもんだね。見つ

ともないと云うのは小野さんの事だ」と宗近君は屑籠を揺りながら歩き出す。

「そう云う風に提げるとさも軽そうだ」

「物は提げ様一つさ。ハハハハ。こりや勸工場かんこうばで買ったのかい。

だいぶ精巧なものだね。紙屑を入れるのはもったいない」

「だから、まあ往来を持って歩けるんだ。本当の紙屑が這入はいつていちや……」

「なに持って歩けるよ。電車は人屑をいっぱい詰めて威張おごって往来を歩いてるじゃないか」

「ハハハハすると君は屑籠の運転手と云う事になる」

「君が屑籠の社長で、頼んだ男は株主か。滅多めったな屑は入れられない」

「歌反古うたほごとか、五車反古ごしやと云うようなものを入れちゃ、どうで

す」

「そんなものは要^いらない。紙幣^{しへい}の反古をたくさん入れて貰^{もら}いた
い」

「ただの反古を入れて置いて、催眠術を掛けて貰^{もら}う方が早そう
だ」

「まず人間の方で先に反古^{ほご}になる訳^{わけ}だな。乞^こう傀^{かい}より始めよか。
人間の反古なら催眠術を掛けなくてもたくさんいる。なぜこ
う傀より始めたがるのかな」

「なかなか傀より始めたがらないですよ。人間の反故が自分で
屑籠の中へ這入ってくれと都合がいいんだけれども」

「自動屑籠を発明したら好^{この}かろう。そうしたら人間の反故がみ
んな自分で飛び込むだろう」

「一つ専売でも取るか」

「アハハハハ好かう。知つたもののうちで飛び込みたい人間でもあるかね」

「あるかも知れませんが」と小野さんは切り抜けた。

「時に君は昨夕ゆうべ妙な伴つれとイルミネーションを見に行つたね」

見物に行つた事はさつき露見してしまつた。今更いまさら隠す必要はない。

「ええ、君らも行つたそうですね」と小野さんは何気なく答へた。甲野こうのさんは見つけても知らぬ顔をしている。藤尾は知らぬ顔をして、しかも是非共こちらから白状せようとする。宗近君は向むかから正面に質問してくる。小野さんは何気なく答えながら、心のうちになるほどと思つた。

「あれは君の何だい」

「少し猛烈ですね。——故もとの先生です」

「あの女は、それじゃ恩師の令嬢だね」

「まあ、そんなものです」

「ああやつて、いつしよに茶を飲んでいるところを見ると、他人とは見えない」

「兄妹と見えますか」

「夫婦さ。好い夫婦だ」

「恐れ入ります」と小野さんはちよつと笑つたがすぐ眼を外しそらた。向側の硝子戸むこうがわのなかに金文字入の洋書が燦爛さんらんと詩人の注意を促うながしている。

「君、あすここにだいぶ新刊の書物が来ているようだが、見ようじゃありませんか」

「書物か。何か買うのかい」

「面白いものがあれば買つてもいいが」

「屑籠を買つて、書物を買うのはすこぶるアイロニーだ」

「なぜ」

宗近君は返事をする前に、屑籠を提げたまま、電車の間を向側へ馳^かけ抜けた。小野さんも小走^{こばしり}に跟^ついて来る。

「はあだいぶ奇麗な本が陳列している。どうだい欲しいものがあるかい」

「さよう」と小野さんは腰を屈めながら金縁の眼鏡^{めがね}を硝子窓に擦^すり寄せて余念なく見取れている。

小羊^{ラム}の皮を柔らかに鞣^{なめ}して、木賊色^{とくさいろ}の濃き真中に、水蓮^{すいれん}を細

く金^{えが}に描^{えが}いて、弁^{はなびら}の尽くる萼^{うてな}のあたりから、直なる線を底まで

通して、ぐるりと表紙の周囲を回^{まわ}らしたのがある。背を平らに

截^たつて、深^{くれない}き紅に金髪を一面に這^はわせたような模様がある。堅

き真鍮版^{しんちゅうばん}に、どつかと布^{クロス}の目を潰^{つぶ}して、重たき箔^{はく}を楯形^{たてがた}に置い

たのがある。素気^{すげ}なきカーフの背を鈍色^{にびいろ}に緑に上下^{うえした}に区切つて、
双方に文字だけを鏤^{ちりば}めたのがある。ざら目の紙に、品^{ひん}よく朱の
書名を配置した扉^{とびら}も見える。

「みんな欲しそうだね」と宗近君は書物を見ずに、小野さんの
眼鏡ばかり見ている。

「みんな新式^{バイシンジグ}な装釘だ。どうも」

「表紙だけ奇麗にして、内容の保険をつけた気なのかな」

「あなた方のほうと違って文学書だから」

「文学書だから上部^{うわべ}を奇麗にする必要があるのかね。それじゃ
文学者だから金縁の眼鏡を掛ける必要が起るんだね」

「どうも、きびしい。しかしある意味で云えば、文学者も多少
美術品でしょう」と小野さんはようやく窓を離れた。

「美術品で結構だが、金縁眼鏡だけで保険をつけてるのは情^{なさけ}な

い」

「とかく眼鏡が祟^{たた}るようだ。——宗近君は近視眼じゃないんですか」

「勉強しないから、なりたくてもなれない」

「遠視眼でもないんですか」

「冗談^{じようだん}を云つちやいけない。——さあ好加減^{いいかげん}に歩こう」

二人は肩を比^{なら}べてまた歩き出した。

「君、鵜^うと云う鳥を知つてるだろう」と宗近君が歩きながら云う。

「ええ。鵜がどうかしたんですか」

「あの鳥は魚をせつかく呑んだと思うと吐いてしまう。つまりない」

「つまらない。しかし魚は漁夫^{りようし}の魚籃^{びく}の中に這入^{はい}るから、いい

じゃないですか」

「だからアイロニーさ。せつかく本を読むかと思うとすぐ屑籠くずかごのなかへ入れてしまう。学者と云うものは本を吐いて暮している。なんにも自分の滋養にやならない。得とくの行くのは屑籠ばかりだ」

「そう云われると学者も気の毒だ。何をしたら好いか分らなくなる」

「行為アクションさ。本を読むばかりで何にも出来ないのは、皿に盛った牡丹餅ぼたんもちを画えにかいた牡丹餅と間違えておとなしく眺ながめているのと同様だ。ことに文学者なんてものは奇麗な事を吐く割に、奇麗な事をしないものだ。どうだい小野さん、西洋の詩人なんかによくそんなのがあるようじゃないか」

「さよう」と小野さんは間まを延ばして答えたが、

「例^{たと}えば」と聞き返した。

「名前なんか忘れたが、何でも女をごまかしたり、女房をうちやつたりしたのがいるぜ」

「そんなのはいないでしょう」

「なにいろ、たしかにいる」

「そうかな。僕もよく覚えていないが……」

「専門家が覚えていなくっちゃ困る。——そりやそうと昨夜^{ゆうべ}の女ね」

小野さんの腋^{わき}の下が何だかじめじめする。

「あれは僕よく知ってるぜ」

琴^{こと}の事件なら糸子から聞いた。その外^{ほか}に何も知るはずがない。

「蔦屋^{つたや}の裏にいたでしょう」と一躍して先へ出てしまった。

「琴を弾いていた」

「なかなか旨いうまでしょう」と小野さんは容易に悄然しよげない。藤尾に逢った時とは少々様子が違う。

「旨いんだろう、何となく眠氣ねむけを催したから」

「ハハハハそれこそアイロニーだ」と小野さんは笑った。小野さんの笑い声はいかなる場合でも静の一字を離れない。その上色彩つやがある。

「冷やかすんじゃない。真面目まじめなところだ。かりそめにも君の恩師の令嬢を馬鹿にしちゃ済まない」

「しかし眠氣を催しちゃ困りますね」

「眠氣を催おすところが好いんだ。人間でもそうだ。眠氣を催おすような人間はどこか尊たつといところがある」

「古くつて尊といんでしょう」

「君のような新式な男はどうしても眠くならない」

「だから尊とくない」

「ばかりじゃない。ことに依ると、尊とい人間を時候おく後れだなどとけなしたがる」

「今日は何だか攻撃ばかりされている。ここいらで御分れにしましょうか」と小野さんは少し苦しいところを、わざと笑つて、立ち留る。同時に右の手を出す。紙屑籠を受取ろうと云う謎なぞである。

「いや、もう少し持つてやる。どうせ暇なんだから」

二人はまた歩き出す。二人が二人の心を並べたままいっしょに歩き出す。双方で双方を軽蔑けいべつしている。

「君は毎日暇のようですね」

「僕か？ 本はあんまり読まないね」

「ほかにだつて、あまり忙がしい事がありそうには見えません

よ」

「そう忙がしがる必要を認めないからさ」

「結構です」

「結構に出来る間は結構にして置かんと、いざと云う時に困る」

「臨時応急の結構。いよいよ結構ですハハハハ」

「君、相変らず甲野へ行くかい」

「今行つて来たんです」

「甲野へ行つたり、恩師を案内したり、忙がしいだろう」

「甲野の方は四五日休みました」

「論文は」

「ハハハハいつの事やら」

「急いで出すが好い。いつの事やらじゃせつかく忙がしがる甲斐がない」

「まあ臨時応急にやりましょう」

「時にあの恩師の令嬢はね」

「ええ」

「あの令嬢についてよつぽど面白い話があるがね」

小野さんは急にどきんとした。何の話か分らない。眼鏡の縁ふちから、斜めに宗近君を見ると、相変らず、紙屑籠かみくずかごを揺ふつて、揚よう々ようと正面を向いて歩いている。

「どんな……」と聞き返した時は何となく勢せいがなかった。

「どんなって、よつぽど深い因縁いんねんと見える」

「誰が」

「僕らとあの令嬢がさ」

小野さんは少し安心した。しかし何だか引つ掛つてゐる。浅かれ深かれ宗近君と孤堂先生こどうとの関係をふすりと切つて棄てた

い。しかし自然が結んだものは、いくら能才でも天才でも、どうする訳にも行かない。京の宿屋は何百軒とあるに、何で蔦屋つたやへ泊り込んだものだろうと思う。泊らんでも済むだろうにと思う。わざわざ三条へ梶棒かじぼうを卸おろして、わざわざ蔦屋へ泊るのはいらざる事だと思う。酔興すいきようだと思う。余計な悪戯いたづらだと思う。先方に益えきもないのに好んで人を苦しめる泊り方だと思う。しかしいくら、どう思っても仕方がないと思う。小野さんは返事をする元氣も出なかった。

「あの令嬢がね。小野さん」

「ええ」

「あの令嬢がねじやいけない。あの令嬢をだ。——見たよ」

「宿の二階からですか」

「二階から見えた」

もの字が少し気になる。春雨の欄に出て、連翹れんぎょうの花もろともに古い庭を見下みくだされた事は、とくの昔に知っている。今更ひきあい引合に出されても驚ろきはしない。しかし二階けいからもとなると剣呑けんおんだ。そのほかにまだ見られた事があるにきまつている。不斷な進んで聞くとところだが、何となく空景からけい氣を着けるような心持がして、どこでと押を強く出損でそくなつたまま、二三步あるく。

嵐山らんざんへ行くとところも見た」

「見ただけですか」

「知らない人に話は出来ない。見ただけさ」

「話して見れば好かつたのに」

小野さんは突然冗談じょうだんを云う。にわかに景氣が好くなつた。

「団子をお食つているところも見た」

「どこで」

「やっぱり嵐山だ」
らんざん

「それっ切りですか」

「まだ有る。京都から東京までいつしよに来た」

「なるほど勘定して見ると同じ汽車でしたね」

「君が停車場へ迎えに行つたところも見た」
ステーション

「そうでしたか」と小野さんは苦笑した。

「あの人は東京ものだそうだね」

「誰が……」と云い掛けて、小野さんは、眼鏡の珠のはずれか
たま
ら、変に相手の横顔を覗き込んだ。
のぞ

「誰が？ 誰がとは」

「誰が話したんです」

小野さんの調子は存外落ついている。

「宿屋の下女が話した」

「宿屋の下女が？ 蔦屋つたやの？」

念を押したような、後あとが聞きたいような、後がないのを確かめたいような様子である。

「うん」と宗近君は云った。

「蔦屋の下女は……」

「そっちへ曲るのかい」

「もう少し、どうです、散歩は」

「もう好い加減に引き返そう。さあ大事の紙屑籠。落さないように持って行くがいい」

小野さんは恭うやうやしく屑籠を受取った。宗近君は飄然ひようぜんとして去る。

一人になると急ぎたくなる。急げば早く孤堂先生の家うちへ着く。

着くのはありがたくない。孤堂先生の家へ急ぎたいのではない。

小野さんは何だか急ぎたいのである。両手は塞ふさがっている。足は

動いている。恩賜の時計は胴衣チョツキのなかで鳴っている。往来は賑にぎやかである。——すべてのものを忘れて、小野さんの頭は急いでいる。早くしなければならん。しかしどうして早くして好いか分らない。ただ一昼夜が十二時間に縮まつて、運命の車が思う方角へ全速力で廻転してくれるよりほかに致し方はない。進んで自然の法則を破るほどの不料簡ふりようけんは起きぬつもりである。しかし自然の方で、少しは事情を斟酌しんしゃくして、自分の味方になつて働らいてくれても好きそうなものだ。そうなる事は受合だと保証がつけば、観音様かんのんへ御百度を踏んでも構わない。不動様ぶどうさまへ護摩ごまを上げてよろも宜しい。耶蘇教ヤソキョウの信者には無論なる。小野さんは歩きながら神の必要を感じた。

宗近と云う男は学問も出来ない、勉強もしない。詩趣も解しない。あれで将来何になる気かと思ふ事がある。何が

出来るものかと輕蔑さげすむ事もある。露骨でいやになる事もある。しかし今更のように考えて見ると、あの態度は自分にはとうてい出来ない態度である。出来ないからこちらが劣っていると結論はせん。世の中には出来もせぬが、またしたくもない事がある。箸はしの先で皿を廻す芸当は出来るより出来ない方が上品だと思う。宗近の言語動作は無論自分には出来にくい。しかし出来にくいから、かえつて自分の名誉だと今までは心得ていた。あの男の前へ出ると何だか圧迫を受ける。不愉快である。個人の義務は相手に愉快を与えるが専一と思う。宗近は社交の第一要義にも通じておらん。あんな男はただの世の中でも成功は出来ない。外交官の試験に落第するのは当り前である。

しかしあの男の前へ出て感じる圧迫は一種妙である。露骨から来るのか、単調から来るのか、いわゆる昔風の率直から来るの

か、いまだに解剖して見ようと企てた事はないがとにかく妙である。故意に自分を圧おしつけようとしている景色けしきが寸毫すんごうも先方に見えないのにこちらは何となく感じてくる。ただ会釈えしやくもなく思うままを随意に振舞っている自然のなかから、どうだと云わぬばかりに圧迫が顔を出す。自分はなんだか気が引ける。あの男に対しては済まぬ裏面の義理もあるから、それが祟たつて、徳義が制裁を加えるとのみ思い通して来たがそればかりではけつしてない。例たとえば天を憚はばからず地を憚はばからぬ山の、無頓着むとんじやくに聳そびえて、面白からぬと云わんよりは、美しく思えぬ感じである。星から墜おつる露を、蕊ずいに受けて、可憐はなびらの弁を、折々は、風の音信たよりと小川へ流す。自分はこんな景色でなければ楽しいとは思えぬ。要するに宗近と自分とは檜山ひのきやまと花圃はなばたけの差で、本来しやうから性が合あわぬから妙な感じがするに違ちがい。

性が合わぬ人を、合わねばそれまでと澄しやうしていた事もある。気の毒だと考えた事もある。情なさけないと軽蔑さげすんだ事もある。しかし今日ほど羨うらやましく感じた事はない。高尚だから、上品だから、自分の理想に近いから、羨ましいとは夢にも思わぬ。ただあんな気分になれたらさぞよかろうと、今の苦しみひに引ひき較くらべて、急に羨ましくなつた。

藤尾には小夜子さよこと自分の関係を云い切つてしまつた。あるとは云い切らない。世話になつた昔の人に、心細く附き添ちう小き影を、逢あわぬ五年を霞かすみと隔へてて、再び逢あうたばかりの朦朧ぼんやりした間柄ていしと云い切つてしまつた。恩を着るは情なさけの肌、師に渥あつきは弟子ていしの分、そのほかには鳥と魚との関係だにないと云い切つてしまつた。できるならばと辛防しんぼうして来た嘘うそはとうとう吐ついてしまつた。ようやくの思で吐いた嘘は、嘘でも立てなければなら

ぬ。嘘を^{まこと}実と偽^{いつ}わる料簡^{りようけん}はなくとも、吐くからは嘘に対して義務がある、責任が出る。あからさまに云えば嘘に対して一生の利害が伴なつて来る。もう嘘は吐けぬ。二重の嘘は神も^{きら}嫌だと聞く。今日からは是非共嘘を実と通用させなければならぬ。

それが何となく苦しい。これから先生の所へ行けばきつと二重の嘘を吐かねばならぬような話を持ちかけられるに違ない。切り抜ける手はいくらもあるが、手詰^{えづめ}に出られると跳ね^はつける勇氣はない。もう少し冷刻に生れていれば何の雑作^{ぞうさ}もない。法律上の問題になるような不都合はしておらんつもりだから、判断^{はっさ}断わつてしまえばそれまでである。しかしそれでは恩人に済まぬ。恩人から^{せま}逼られぬうちに、自分の嘘が発覚せぬうちに、自然が早く廻転して、自分と藤尾が公然結婚するように運ばなければならぬ。――^{あと}後は？ 後は後から考える。事実は何よりも

有効である。結婚と云う事実が成立すれば、万事はこの新事実を土台にして考え直さなければならん。この新事実を一般から認められれば、あとはどんな不都合な犠牲でもする。どんなにつらい考え直し方でもする。

ただ機一髪と云う間際で、煩悶する。どうする事も出来ぬ心が急く。進むのが怖い。退却するのが厭だ。早く事件が発展すればと念じながら、発展するのが不安心である。したがって気楽な宗近が羨ましい。万事を商量するものは一本調子の人を羨ましがる。

春は行く。行く春は暮れる。絹のごとき浅黄の幕はふわりふわりと幾枚も空を離れて地の上に被さつてくる。払い退ける風も見えぬ往来は、夕暮のなすがままに静まり返つて、蒼然たる大地の色は刻々に蔓つて来る。西の果に用もなく薄焼けていた

雲はようやく紫に変わった。

蕎麦屋そばやの看板におかめの顔が薄暗く膨ふくれて、後うしろから点ける灯ひを今やと赤い頬に待つ向横町むこうよちようは、二間足らずの狭い往来になる。黄昏たそがれは細長く家と家の間に落ちて、鎖とざさぬ門かどを戸ごとにくぐる。部屋のなかはなおさら暗いだろう。

曲まがつて左側の三軒目まで来た。門構と云う名はつけられない。往来をわずかに仕切る格子戸こうしどをそろりと明けると、なかは、ほのくらく近づく宵よいを、一段と刻んで下へ降りたような心持がする。

「御免」と云う。

静かな声は落ついた春の調子を乱さぬほどに穩おだやかである。幅一尺あげいたの揚板ひしがたに、菱形の黒い穴が、椽えんの下へ抜けているのを眺ながめながら取次をおとなしく待つ。返事はやがてした。うんと云うの

か、あ、あと云うのかはい、と云うのか、さらに要領を得ぬ声である。小野さんはやはり菱形の黒い穴を覗のぞきながら取次を待っている。やがて障子しょうじの向むこうでずしんと誰か跳はね起きた様子である。怪しい普請ふしんと見えて根太ねだの鳴る音が手に取るように聞える。例の壁紙模様の襖ふすまが開く。二畳の玄関へ出て来たなと思う間まもなく、薄暗い障子の影に、肉の落ちた孤堂先生の顔が髯ひげもろともに現われた。

平生からあまり丈夫には見えない。骨が細く、軀からだが細く、顔はことさらに細く出来上ったうえに、取る年は争われぬ雨と風と苦勞とを吹きつけて、辛いから浮世に、辛くも取り留めた心さえ細くなるばかりである。今日は一層ひとしお顔色が悪い。得意の髯ひげさえも尋常には見えぬ。黒い隙間すきまを白いのが埋うずめて、白い隙間を風が通る。

いにしえ
古の人は顎あごの下まで影が薄い。一本ずつ吟味して見ると先生の髻は一本ごとにひよろひよろしている。小野さんは鄭寧ていねいに帽を脱いで、無言のまま挨拶あいさつをする。英吉利刈イギリスがりの新式な頭は、眇然びょうぜんたる「過去」の前に落ちた。

さしわたし
径何十尺の円を描いて、周囲に鉄の格子を嵌はめた箱をいくつとなくさげる。運命の玩弄兒がんろうじはわれ先にとこの箱へ這入はいる。円は廻り出す。この箱にいるものが青空へ近く昇る時、あの箱にいるものは、すべてを吸い尽す大地へそろりそろりと落ちて行く。観覧車を発明したものは皮肉な哲学者である。

イギリスしき
英吉利式の頭は、この箱の中でこれから雲へ昇ろうとする。心細い髻ひげに、世を侘わび古りた記念のためと、大事に胡麻塩ごましおを振り懸けている先生は、あの箱の中でこれから暗い所へ落ちつこうとする。片々かたかたが一尺昇れば片々は一尺下がるように運命は出

来上つてゐる。

昇るものは、昇りつつある自覚を抱いて、降りつつ夜に行くものの前に鄭寧^{ていねい}な頭^{こうべ}を惜気もなく下げた。これを神の作れるアイロニーと云う。

「やあ、これは」と先生は機嫌が好い。運命の車で降りるものが、昇るものに出合ふと自然に機嫌がよくなる。

「さあ御上り」とたちまち座敷へ取つて返す。小野さんは靴の紐^{ひも}を解く。解き終らぬ先に先生はまた出てくる。

「さあ御上り」

座敷の真中に、昼を厭^{いと}わず延べた床^{とこ}を、壁際へ押しやったあとに、新調の座布団が敷いてある。

「どうか、なさいましたか」

「何だか、今朝から心持が悪くつてね。それでも朝のうちは我

慢していたが、午ひるからとうとう寝てしまった。今ちようとうと
うとしていたところへ君が来たので、待たして御氣の毒だった」

「いえ、今格子を開あけたばかりです」

「そうかい。何でも誰か来たようだから驚いて出て見た」

「そうですか、それは御邪魔をしました。寝ていらつしやれば
好かつたですね」

「なに大した事はないから。——それに小夜も婆さんもない
ものだから」

「どこかへ……」

「ちよつと風呂に行つた。買物かたがた」

床の抜殻は、こんもり高く、這はい出した穴を障子に向けてい
る。影になつた方が、薄暗く夜着の模様を暈ぼかす上に、投げ懸けた
羽織の裏が、乏ひかりしき光線をきらきらと聚あつめる。裏は鼠ねずみの甲斐かい絹き

である。

「少しぞくぞくするようだ。羽織でも着よう」と先生は立ち上がる。

「寝ていらしつたら好いでしょう」

「いや少し起きて見よう」

「何ですかね」

「風邪かぜでもないようだが、——なに大した事もあるまい」

「昨夕ゆうべ御出おでになったのが悪かったですかね」

「いえ、なに。——時に昨夕は大きに御厄介」

「いいえ」

「小夜も大変喜んで。御蔭おかげで好い保養をした」

「もう少し閑ひまだと、方々へ御供をする事が出来るんですが……」

「忙がしいだろうからね。いや忙がしいのは結構だ」

「どうも御気の毒で……」

「いや、そんな心配はちつとも要^いらない。君の忙がしいのは、つまり我々の幸福^{しあわせ}なんだから」

小野さんは黙った。部屋はしだいに暗くなる。

「時に飯は食ったかね」と先生が聞く。

「ええ」

「食った？——食わなければ御上り。何にもないが茶漬ならあるだろう」とふらふらと立ち懸^かける。締め切った障子に黒い長い影が出来る。

「先生、もう好いんです。飯は済まして来たんです」

「本当かい。遠慮しちやいかん」

「遠慮しやしません」

黒い影は折れて故^{もと}のごとく低くなる。え、が、ら、つ、ぽ、い、咳が二つ

三つ出る。

「咳が出ますか」

「から——からっ咳が出て……」と云い懸ける途端にまた二つ三つ込み上げる。小野さんは憮然として咳の終るを待つ。

「横になつて温まつていらしたら好いでしょう。冷えると毒です」

「いえ、もう大丈夫。出だすと一時いけないんだがね。——年を取ると意気地がなくなつて——何でも若いうちの事だよ」

若いうちの事だとは今まで毎度聞いた言葉である。しかし孤堂先生の口から聞いたのは今が始めてである。骨ばかりこの世に取り残されたかと思う人の、疎らな髯を風塵に託して、残喘に一昔と二昔を、互違に呼吸する口から聞いたのは、少なくとも今が始めてである。子の鐘は陰に響いてぼうんと鳴る。薄暗い

部屋のなかで、薄暗い人からこの言葉を聞いた小野さんは、つくづく若いうちの事だと思つた。若いうちは二度とないと思つた。若いうち^{うま}旨くやらないと生涯^{しょうがい}の損だと思つた。

生涯の損をしてこの先生のように老朽した時の心持は定めて淋^{さび}しかろう。よくよくつまらないだろう。しかし恩のある人に済まぬ不義理をして死ぬまで寝醒^{ねざめ}が悪いのは、損をした昔を思い出すより鬱陶^{うつとう}しいかも知れぬ。いずれにしても若いうちは二度とは来ない。二度と来ない若いうちにきめた事は生涯きまつてしまう。生涯きまつてしまう事を、自分は今どつちかにきめなければならぬ。今日藤尾に逢う前に先生の所へ来たら、あの嘘を当分見合せたかも知れぬ。しかし嘘を吐^ついてしまった今となつて見ると致し方はない。将来の運命は藤尾に任せたと云つて差^さし支^{つか}ない。——小野さんは心中でこう云う言訳をした。

「東京は変つたね」と先生が云う。

「はげ烈しい所で、毎日変つています」

「恐ろしいくらいだ。昨夜もだ**い**ぶ驚いたよ」

「随分人が出ましたから」

「出たねえ。あれでも知つた人には滅多に逢めつたわないだろうね」

「そうですね」と曖昧あいまいに受ける。

「逢うかね」

小野さんは「まあ……」と濁しかけたが「まあ、逢わない方ですね」と思い切つてしまった。

「逢わない。なるほど広い所に違いない」と先生は大いに感心して
いる。なんだか田舎染いなかじみて見える。小野さんは光沢つやの悪い先生
の顔から眼を放して、自分の膝元を眺めた。カフスは真白であ
る。七宝しっぽうの夫婦釦めおとボタンは滑なめな淡紅色ときいろを緑の上に浮かして、華奢きゃしゃな金

縁のなかに暖かく包まれている。背広せびろの地は品の好い英吉利織イギリスおりである。自己をまのあたりに物色した時、小野さんは自己の住むべき世界を卒然と自覚した。先生に釣り込まれそうな際きわどいところで急に忘れ物を思い出したような気分になる。先生には無論分らぬ。

「いつしよにあるいたのも久しぶりだね。今年でちょうど五年目になるかい」とさも可懐なつかしげに話しかける。

「ええ五年目です」

「五年目でも、十年目でも、こうして一つ所に住むようになれば結構さ。——小夜も喜んでいゝ」と後から継つぎ足したように一句を付け添えた。小野さんは早速さそくの返事を忘れて、暗い部屋のなかに竦すくまるような気がした。

「さつき御嬢おいでさんが御出でした」と仕方がないから渡し込む。

「ああ、——なに急ぐ事でも無かつたんだが、もしや暇があつたらいつしよに連れて行つて買物をして貰おうと思つてね」

「あいにく出掛でがけだつたものですから」

「そうだつてね。飛んだ御邪魔をしたろう。どこぞ急用でもあつたのかい」

「いえ——急用でもなかつたんですが」と相手は少々言い淀よどむ。先生は追窮しない。

「はあ、そうかい。そりやあ」と漠々ばくばくたる挨拶あいさつをした。挨拶が

漠々たると共に、部屋のなかも朦朧もうろうと取締とりしまりがなくなつて来る。

今宵は月だ。月だが、まだ間まがある。のに日は落おちた。床とこは一

間を申訳のために濃い藍あいの砂壁に塗り立てた奥には、先生が秘

蔵ぎとの義董ふくの幅が掛かつていた。唐代の衣冠いかんに蹣跚まんさんの履くつを危うく

踏んで、だらしなく腕に巻きつけた長い袖を、童子の肩に凭もたし

た酔態は、この家の淋さびしさに似ず、春王はるおうの四月に叶かなう樂天家である。仰せのごとく額をかくす冠かんむりの、黒い色が著るしく目についたのは今先の事であつたに、ふと見ると、纓ひもか飾よいか、紋切形に左右に流す幅広の絹さえ、ぼんやりと近づく宵よいを迎えて、来る夜に紛まぎれ込もうとする。先生も自分もぐずぐずすると一つ穴へはまつて、影のように消えて行きそうだ。

「先生、御頼おたのみの洋灯ランプの台を買つて来ました」

「それはありがたい。どれ」

小野さんは薄暗いなかを玄関へ出て、台と屑籠くずかごを持ってくる。

「はあ——何だか暗くつてよく見えない。灯火あかりを点つつけてから緩ゆる

くり拝見しよう」

「私が点つつけましょう。洋灯ランプはどこにありますか」

「気の毒だね。もう帰つて来る時分だが。じゃ椽側へ出ると右

の戸袋のなかにあるから頼もう。掃除はもうしてあるはずだ」

薄暗い影が一つ立って、障子しょうじをすうと明ける。残る影はひそ

かに手を拱こまぬいて動かぬほどを、夜は襲おそつて来る。六畳の座敷は

淋さみしい人を陰気に封じ込めた。ごほんごほんと咳をせく。

やがて椽えんの片隅で擦する燐寸マツチの音と共に、咳はやんだ。明るい

ものは室へやのなかに動いて来る。小野さんは洋袴ズボンの膝を折って、

五分心ごぶじんを新らしい台の上に載のせる。

「ちようどよく合うね。据すわりがいい。紫檀したんかい」

「模擬まがいでしょう」

「模擬でも立派なものだ。代は？」

「何ようござんす」

「よくはない。いくらかね」

「両方で四円少しです」

「四円。なるほど東京は物が高いね。——少しばかりの恩給でやつて行くには京都の方が遙はるかに好いようだ」

二三年前と違つて、先生は些さ額がくの恩給とわずかな貯蓄から上がる利子とで生活して行かねばならぬ。小野さんの世話をした時とはだいぶ違う。事に依れば小野さんの方から幾分か貢みついで貰もらいたいようにも見える。小野さんは畏かしこまつて控ひかえている。

「なに小夜さえなければ、京都にいても差さし支つかえないんだが、若い娘を持つとなかなか心配なもので……」と途中でちよつと休んで見せる。小野さんは畏おそまつたまま応こたじなかつた。

「私わたしなどはどこの果はたで死しのうが同じ事だが、後に残つた小夜がたつた一人で可かわい哀そう想だからこの年になつて、わざわざ東京まで出掛けて来たのさ。——いかな故郷でももう出てから二十にもなる。知合つきあいも交際もない。まるで他国と同様だ。それに来て

見ると、砂が立つ、埃ほこりが立つ。雑沓ざつとうはする、物価ものは貴たかし、けつして住み好いとは思わない。……」

「住み好い所ではありませんね」

「それでも昔は親類も二三軒はあつたんだが、長い間音信いんしん不通ふつうにしていたものだから、今では居所も分らない。不断はさほどにも思わないが、こうやって、半日でも寝ると考えるね。何となく心細い」

「なるほど」

「まあ御前が傍そばにいてくれるのが何よりの依頼たよりだ」

「御役にも立ちませんで……」

「いえ、いろいろ親切にしてくれてまことにありがたい。忙いそがしいところを……」

「論文の方がないと、まだ閑ひまなんですが」

「論文。博士論文だね」

「ええ、まあそうです」

「いつ出すのかね」

いつ出すのか分らなかった。早く出さなければならぬと思う。こんな引つ掛りがなければ、もうよほど書けたらうと思う。口では

「今一生懸命に書いてるところです」と云う。

先生は襦袢じゆばんの袖そでから手を抜いて、素肌の懷ふところに肘ひじまで収めたま

ま、二三度肩をゆすつて

「どうも、ぞくぞくする」と細長い髯ひげを襟えりのなかに埋うづめた。

「御寝おやすみなさい。起きていらつしやると毒ですから。私はもう

御暇おいとまをします」

「なに、まあ御話し。もう小夜が帰る時分だから。寝たければ

私^{わたし}の方で御免蒙^{ごめんこうむ}つて寝る。それにまだ話も残っているから」

先生は急に胸の中から、手を出して膝^{ひざ}の上へ乗せて、双方を一度に打った。

「まあ緩^{ゆつ}くりするが好い。今暮れたばかりだ」

迷惑のうちにも小野さんはさすが気の毒に思つた。これほどまでに自分を引き留めたいのは、ただ当年の可^{なつかし}懐味や、一夕^{いっせき}の無聊^{ぶりよう}ではない。よくよく行く先が案じられて、亡き後の安心を片時^{へんじ}も早く、脈の打つ手に握りたいからであらう。

実は夕食^{めし}もまだ食わない。いれば耳を傾けたくない話が出る。

腰だけはとうから宙に浮いている。しかし先生の様子を見ると無理に洋袴^{ズボン}の膝^{のば}を伸す訳にもいかない。老人は病^{つと}を力めて、わがために強いて元氣をつけている。親しみやすき蒲団^{ふとん}は片寄せられて、穴ばかりになつた。温^{ぬくも}気は昔の事である。

「時に小夜の事だがね」と先生は洋灯ランプの灯を見ながら云う。五分心ごぶしんを蒲鉾形かまぼこなりに点ともる火屋ほやのなかは、壺つぼに充みつる油を、物言わず吸い上げて、穏かな燄ほのおの舌が、暮れたばかりの春を、動かず守る。人わび佗さみて淋よしき宵を、ただ一点の明あかきに償つぐう。燈灯ともしびは希望のぞみの影を招く。

「時に小夜の事だがね。知つての通りああ云う内気うちけな性質たではあるし、今の女学生のようにハイカラな教育もないからとうてい気にもいるまいが、……」まで来て先生は洋灯から眼を放した。眼は小野さんの方に向う。何とか取り合わなければならぬい。

「いいえ——どうして——」と受けて、ちよつと句を切つて見せたが、先生は依然として、こつちの顔ひとみから眸ひとみを動かさない。その上口きを開きかず何だか待っている。

「氣にいらんなんて——そんな事が——あるはずがないですが」とぼつぼつに答える。ようやくに納得した先生は先へ進む。

「あれも不憫だからね」

小野さんは、そうだと、そうでないとも云わなかった。手は膝ひざの上にある。眼は手の上にある。

「私わたしがこうして、どうかこうかしているうちは好い。好いがこ

の通りの身体だから、いつ何時なんどきどんな事がないとも限らない。

その時が困る。兼かねての約束はあるし、御前も約束を反故ほごにする

ような軽薄な男ではないから、小夜の事は私がない後あとでも世

話はしてくれるだろうが……」

「そりや勿論もちろんです」と云わなければならない。

「そこは私も安心している。しかし女は氣の狭いものでね。アハハハ困るよ」

何だか無理に笑ったように聞える。先生の顔は笑ったために
いよいよ淋さみしくなった。

「そんなに御心配なさる事も要いらんでしょう」と覚束おぼつかなく云う。
言葉の腰がふらふらしている。

「私がいいが、小夜がさ」

小野さんは右の手で洋服の膝を摩こすり始めた。しばらくは二人
とも無言である。心なき灯火ともしびが双方を半分はんぶんずつ照らす。

「御前の方にもいろいろな都合はあるだろう。しかし都合はい
くら立たったって片づくものじゃない」

「それでも無いです。もう少しです」

「だって卒業して二年になるじゃないか」

「ええ。しかもう少しの間は……」

「少すこしって、いつまでの事かい。そこが判然はつきりしていれば待つて

も好きさ。小夜にも私からよく話して置く。しかしただ少しでは困る。いくら親でも子に対して幾分か責任があるから。——少しつて云うのは博士論文でも書き上げてしまふまでかい」

「ええ、まずそうです」

「だいぶ久しく書いているようだが、まあいつごろ済むつもりかね。大体^{おおよそ}」

「なるべく早く書いてしまおうと思って骨を折っているんですが。何分問題が大きいものですから」

「しかし大体の見当は着くだろう」

「もう少しです」

「来月くらいかい」

「そう早くは……」

「来々月はどうだね^{さらいげつ}」

「どうも……」

「じゃ、結婚をしてからにしたら好かろう、結婚をしたから論文が書けなくなったと云う理由も出て来そうにない」

「ですが、責任が重くなるから」

「いいじゃないか、今まで通りに働いてさえいれば。当分の間、我々は経済上、君の世話にならんでもいいから」

小野さんは返事のしようがなかった。

「収入は今どのくらいあるのかね」

「わずかです」

「わずかとは」

「みんなで六十円ばかりです。一人がようようです」

「下宿をして？」

「ええ」

「そりや馬鹿ばか氣げている。一人で六十円使うのはもつたいない。家を持つても楽に暮せる」

小野さんはまた返事のしようがなかった。

東京は物価ものが高いと云いながら、東京と京都の区別を知らない。鳴海絞なるみしぼりの兵児帯へこおびを締めて芋粥いもがに寒さを凌しのいだ時代と、大学を卒業して相当の尊敬を衣帽いぼうの末に払わねばならぬ今の境遇とを比較する事を知らない。書物は学者に取つて命から二代目である。按摩あんまの杖と同じく、無くつては世渡りが出来ぬほどに大切な道具である。その書物は机の上へ湧わいてでも出る事か、中には人の驚くような奮発をして集めている。先生はそんな費用が、どれくらいかかるかまるで一切空いっさいくうである。したがって、おいそれと簡単な返事が出来ない。

小野さんは何を思ったか、左手を畳へつかえると、右を伸のし

て洋灯ランプの心をぱつと出した。六畳の小地球が急に東の方へ廻転したように、一度は明るくなる。先生の世界観またたきが瞬と共に変わるように明るくなる。小野さんはまだ螺旋ねじから手を放さない。「もう好い。そのくらいで好い。あんまり出すと危ない」と先生が云う。

小野さんは手を放した。手を引くときに、自分でカフスの奥を腕のぞまで覗いて見る。やがて背広せびろの表隠袋おもてかくしから、真白な手巾ハンケチを撮つまみ出して丁寧に指頭ゆびさきの油を拭き取った。

「少し灯ひが曲っているから……」と小野さんは拭き取った指頭を鼻の先へ持って来てふんふんと二三度嗅かいだ。

「あの婆さんが切るといつでも曲る」と先生は股またの開いた灯を見ながら云う。

「時にあの婆さんはどうです、御間に合いますか」

「そう、まだ礼も云わなかったね。だんだん御手数おてすうを掛けて……」

「いいえ。実は年を取ってるから働らけるかと思つたんですが」

「まあ、あれで結構だ。だんだん慣なれてくる様子だから」

「そうですか、そりや好い按排あんばいでした。実はどうかと思つて心配していたんですが。その代り人間はたしかだそうです。浅井が受合つて行つたんですから」

「そうかい。時に浅井と云えば、どうしたい。まだ帰らないかい」

「もう帰る時分ですが。ことに因よると今日くらいの汽車で帰つて来るかも知れません」

「一昨おとといかの手紙には、二三日中に帰るとあつたよ」

「はあ、そうでしたか」と云つたぎり、小野さんは振ねじ上げた五分心ごぶじんの頭を無心に眺ながめている。浅井の帰京と五分心の關係を

見極めんと思索するごとくに眸子みきわは一点に集つた。

「先生」と云う。顔は先生の方へ向け易かえた。例になく口の角かどにいささかの決心を齎もたらしている。

「何だい」

「今の御話です」

「うん」

「もう二三日待つて下さいませんか」

「もう二三日」

「つまり要領を得た御返事をする前にいろいろ考えて見たいですから」

「そりゃ好いとも。三日でも四日でも、——一週間でも好い。事が判然はつきりさえすれば安心して待つてゐる。じゃ小夜にもそう話して置こう」

「ええ、どうか」と云いながら恩賜の時計を出す。夏に向う永い日影が落ちてから、夜の針は疾く回^よるらしい。

「じゃ、今夜は失礼します」

「まあ好いじゃないか。もう帰つて来る」

「また、すぐ来ますから」

「それでは——御疎忽^{おそうそう}であつた」

小野さんはすつきりと立つ。先生は洋灯^{ランプ}を執^とる。

「もう、どうぞ。分ります」と云いつつ玄関へ出る。

「やあ、月夜だね」と洋灯を肩の高さに支えた先生がいう。

「ええ穩^{おだやか}な晩です」と小野さんは靴の紐^{ひも}を締めつつ格子^{こうし}から往

来を見る。

「京都はなお穩だよ」

屈こつんでいた小野さんはようやく沓脱くつぬぎに立つた。格子あが明く。
華奢きゃしゃな体軀からだが半分ばかり往来へ出る。

「清三」と先生は洋灯の影から呼び留めた。

「ええ」と小野さんは月のさす方から振り向いた。

「なに別段用じやない。——こうして東京へ出掛けて来たのは、小夜の事を早く片づけてしまいたいからだと思ってくれ。分つたろうな」と云う。

小野さんは恭うやうやしく帽子を脱ぐ。先生の影は洋灯と共に消えた。

外おぼろは朧である。半なかば世を照らし、半ば世を鎖とざす光が空に懸る。

空は高きがごとく低きがごとく据すわらぬ腰を、更ふけぬ宵よいに浮かし
ている。懸るものはなおさらふわふわする。丸い縁ふちに黄を帯び
た輪をぼんやり膨ふくらまして輪廓たしかも確でない。黄な帯は外そと圀いに近
く色を失つて、黒ずんだ藍あいのなかに煮染にじみだ出す。流れれば月も消

えそうに見える。月は空に、人は地に紛れやすい晩である。

小野さんの靴は、湿つぽい光を憚かるごとく、地に落す踵をズボン裾に隠して、小路を蕎麦屋の行灯まで抜け出して左へ折れた。往来は人の香がする。地に拖く影は長くはない。丸まって動いて来る。こんもりと揺れて去る。下駄の音は臍に包まれて、霜のようにほやえぬ。撫でて通る電信柱に白い模様が見えた。すかす眸を不審と据えると白墨の相々傘が映る。それほど浅い夜を、昼から引越して来た霞が立て籠める。行く人も来る人も何となく要領を得ぬ。逃れば靄のなか、出れば月の世界である。小野さんは夢のように歩を移して来た。躑々としてひとり行くと言ふ句に似ている。

実は夕食もまだ食わない。いつもなら通りへ出ると、すぐ西洋料理へでも飛び込む料簡で、得意な襞の正しい洋袴を、誇り

顔に運ぶはずである。今宵こよいはいつまで立つても腹も減らない。
牛乳ミルクさえ飲む気にならん。陽気は暖か過ぎる。胃は重い。引く
足は千鳥にはならんが、確しかと踏答ふみこたえがないような心持である。そ
と卸おろすせいかも知れぬ。さればとて、こつりと大地へ当てる気
にはならん。巡查のようにあるけたなら世に臆おそは要らぬ。次に
心配は要らぬ。巡查だから、ああも歩ける。小野さんには――
ことに今夜の小野さんには――巡查の真似は出来ない。

なぜこう気が弱いだろう――小野さんは考えながら、ふらふ
ら歩いている。――なぜこう気が弱いだろう。頭脳も人には負
けぬ。学問も級友の倍はある。挙止動作から衣服きものの着こなし方
に至つて、ことごとく粹すいを尽くしていると自信している。ただ
気が弱い。気が弱いために損をする。損をするだけならいいが
乗のつ引びきならぬ羽目はめに陥おちる。水に溺おぼれるものは水を蹴けると何か

の本にあつた。背に腹は替えられぬ今の場合、と諦めて蹴つてしまえばそれまでである。が……

女の話し声がする。人影は二つ、路の向う側をこちらへ近づいて来る。吾妻下駄あずまげたと駒下駄こまげたの音が調子を揃そろえて生温なまぬるく宵を刻んで寛ゆたかなるなかに、話し声は聞える。

「洋灯ランプの台を買つて来て下さつたでしようか」と一人が云う。

「そうさね」と一人が応こたえる。「今頃は来ていらつしやるかも知れませんが」と前の声がまた云う。「どうだか」と後の声あとがまた応こたえる。「でも買つて行くとおつしやつたんでしよう」と押す。

「ああ。——何だか暖あつたか過ぎる晩だこと」と逃げる。「御湯のせいでござんすよ。薬湯は温あつたまりますから」と説明する。

二人の話はここで小野さんの向側むこうがわを通り越した。見送ると並ぶ軒下から頭の影だけが斜はすに出て、蕎麦屋の方へ動いて行く。

しばらく首を振^ねじ向けて、立ち留^{とど}っていた小野さんは、また歩き出した。

浅井のように気の毒気の少ないものなら、すぐ片づける事も出来る。宗近^{むねちか}のような平気な男なら、苦もなくどうかするだろう。甲野^{こうの}なら超然として板挟^{いたばさ}みになつてゐるかも知れぬ。しかし自分には出来ない。向^{むこ}へ行つて一步深く陥^{はま}り、こつちへ来て一步深く陥る。双方へ気兼をして、片足ずつ双方へ取られてしまふ。つまりは人情に絡^{から}んで意思に乏しいからである。利害？ 利害の念は人情の土台の上に、後^{あと}から被^{かぶ}せた景気の皮である。自分を動かす第一の力とは聞かれれば、すぐ人情だと答える。利害の念は第三にも第四にも、ことによつたら全くなかつても、自分はやはり同様の結果に陥^{おち}るだろうと思う。——小野さんはこう考えて歩いて行く。

いかに人情でも、こんなに優柔ではいけまい。手を拱こまぬいて、自然なの為すがままにして置いたら、事件はどう発展するか分らない。想像すると怖おそろしくなる。人情に屈託していればいるほど、怖しい発展を、眼まのあたりに見るようになるかもしれぬ。是非ここで、どうかせねばならん。しかし、まだ二三日の余裕はある。二三日よく考えた上で決断しても遅くはない。二三日立つて善よい智慧ちえが出なければ、その時こそ仕方がない。浅井を捕つらまえて、孤堂先生への談判を頼んでしまふ。実はさつきもその考で、浅井の歸りを勘定に入れて、二三日の猶予をと云った。こんな事は人情に拘泥こうでいしない浅井に限る。自分のような情に篤あついものはとうてい断わり切れない。——小野さんはこう考えて歩いて行く。

月はまだ天そらのなかにいる。流れんとして流るる気色けしきも見えぬ。

地に落つる光は、冴^さゆる暇なきを、重たき温氣^{おんき}に封じ込められ
て、限りなき大夢を半空に曳^ひく。乏しい星は雲を潜^{くぐ}つて向側^{むこうがわ}へ
抜けそうに見える。綿のなかに砲弾を打ち込んだのが辛^{から}うじて
輝やくようだ。静かに重い宵である。小野さんはこのなかを考
えながら歩いて行く。今夜は半鐘も鳴るまい。

十五

部屋は南を向く。仏蘭西式^{フランスしき}の窓は床^{ゆか}を去る事五寸にして、す
ぐ硝子^{ガラス}となる。明け放^あてば日^ひが這入^{はい}る。温^{あた}かい風が這入^{はい}る。日
は椅子^{いす}の足で留まる。風は留まる事を知らぬ故、容赦^{てんじよう}なく天井
まで吹く。窓掛の裏まで渡る。からりとして朗らかな書齋^{てんじよう}にな
る。

仏蘭西窓を右に避けて一脚の机を据える。蒲鉾形に引戸を卸せば、上から錠がかかる。明ければ、緑の羅紗を張り詰めた真中を、斜めに低く手元へ削つて、背を平らかに、書を開くべき便宜とする。下は左右を銀金具の抽出に畳み卸してその四つ目が床に着く。床は樟の木の寄木に仮漆を掛けて、札に叶わぬ靴の裏を、ともすれば危からしめんと、てらてらする。

そのほかに洋卓がある。チップペンデールとヌーヴォーを取り合せたような組み方に、思い切つた今様を華奢な昔に忍ばして、^{へや}室の真中を占領している。周囲に並ぶ四脚の椅子は無^{どうしき}論同式の構造である。繻子の模様も対とは思^ひうが、日除の白^{しろ}蔽に、卸す腰も、凭^{もた}れる背も、ただ心安しと氣を樂に落ちつけるばかりで、目の保養にはならぬ。

書棚は壁に片寄せて、間の高さを九尺列ねて戸口まで続く。

組めば重ね、離せば一段の棚を喜んで、亡き父が西洋から取り寄せたものである。いっばいに並べた書物が紺に、黄に、いろいろに、ゆかしき光を闘わすなかに花文字の、角文字の金は、縦にも横にも奇麗である。

小野さんは欽吾の書齋を見るたびに羨しいと思わぬ事はない。欽吾も無論嫌きらつてはおらぬ。もとは父の居間であつた。仕切りの戸を一つ明けると直応接間へ抜ける。残る一つを出ると内廊下から日本座敷へ続く。洋風の二間は、父が手狭てげまな住居を、二十世紀に取り拡ひろげた便利の結果である。趣味に叶かなうと云わんよりは、むしろ実用に逼せまられて、時好の程度に己おのれを委却いきやくした建築である。さほどに嬉うれしい部屋ではない。けれども小野さんは非常に羨ましがっている。

こう云う書齋に這入はいつて、好きな書物を、好きな時に読んで、

厭^あきた時分に、好きな人と好きな話をしたら極樂^{ごくらく}だろうと思う。博士論文はすぐ書いて見せる。博士論文を書いたあとは後代を驚ろかすような大著述をして見せる。定めて愉快だろう。しかし今のような下宿住居で、隣り近所の乱調子に頭を攪^かき廻されるようではとうてい駄目である。今のように過去に追窮されて、義理や人情のごたごたに、日夜共心を使つてはとうてい駄目である。自慢ではないが自分は立派な頭脳を持っている。立派な頭脳を持つているものは、この頭脳を使つて世間に貢献するのが天職である。天職を尽すためには、尽し得るだけの条件がある。こう云う書齋はその条件の一つである。——小野さんはこう云う書齋に這^{はい}入りたくてたまらない。

高等学校こそ違え、大学では甲^{こう}野さんも小野さんも同年であつた。哲学と純文学は科が異なるから、小野さんは甲野さんの学

力を知りようがない。ただ「哲世界と実世界」と云う論文を出して卒業したと聞くばかりである。「哲世界と実世界」の価値は、読まぬ身に分るはずがないが、とにかく甲野さんは時計をちようだいしておらん。自分はちようだいしておる。恩賜の時計は時を計るのみならず、脳の善悪よしあしをも計る。未来の進歩と、学界の成功をも計る。特典に洩もれた甲野さんは大した人間ではないにきまつている。その上卒業してからこれと云う研究もしないようだ。深い考を内に蓄たくわえているかも知れぬが、蓄たくわえていゝるならもう出すはずである。出さぬは蓄がない証拠さしつかえと見て差支さしつかえない。どうしても自分は甲野さんより有益な材である。その有益な材を抱こまぬいて奔走に、六十円に、月々を衣食するに、甲野さんは、手を拱こまぬいて、徒然とぜんの日を退屈そうに暮らしている。この書齋を甲野さんが占領するのはもつたない。自分が甲野の身

分でこの部屋の主人となる事が出来るなら、この二年の間に相應の仕事はしているものを、親譲りの貧乏に、驢も櫪に伏す天の不公平を、やむを得ず、今日まで忍んで来た。一陽は幸なき人の上にも来り復ると聞く。願くは願くはと小野さんは日頃に念じていた。——知らぬ甲野さんはぽつ然として机に向っている。

正面の窓を明けたらば、石二級の歩に過ぎずして、広い芝生を一目に見渡すのみか、朗な気が地つづきを、すぐ部屋のなかに這入るものを、甲野さんは締め切ったまま、ひそりと立て籠っている。

右手の小窓は、硝子を下した上に、左右から垂れかかる窓掛に半ば蔽われている。通う光線は幽かに床の上に落つる。窓掛は海老茶の毛織に浮出しの花模様を埃のままだに、二十日ほどは動

いた事がないようである。色もだいぶ褪^さめた。部屋と調和のない装飾も、過渡時代の日本には当然として立派に通用する。窓掛^{すきま}の隙間から硝子へ顔を圧^おしつけて、外を覗^{のぞ}くと扇骨木^{かなめ}の植込^{うえこみ}を通して池が見える。棒縞^{ぼうじま}の間から横へ抜けた波模様のよう、途切れ途切れに見える。池の筋向^{すじむこう}が藤尾^{ふじお}の座敷になる。甲野さんは植込も見ず、池も見ず、芝生も見ず、机^よに凭^よつてじつとしている。焚^たき残された去年の石炭が、煖炉^{たんろ}のなかにただ一個冷やかに春を觀^{てい}ずる体である。

やがて、かたりと書物を置き易^かえる音がする。甲野さんは手垢^{てあか}の着いた、例の日記帳を取り出して、誌^つけ始める。

「多くの人は吾^{われ}に対して悪を施さんと欲す。同時に吾の、彼らを目^いして凶徒となすを許さず。またその凶暴に抗するを許さず。曰^{いわ}く。命に服せざれば汝^にを嫉^{にく}まん」と

細字^{さいじ}に書き終った甲野さんは、その後^{あと}に片仮名^{かたかな}でレオパルジ
と入れた。日記を右に片寄せる。置き易えた書物を再び^{もと}故の座
に直して、静かに読み始める。細い青貝の軸を着けた洋筆^{ペン}がこ
ろと机を滑^{すべ}って床^{ゆか}に落ちた。ぽたりと黒いものが足の下に出
来る。甲野さんは両手を机の角^{かど}に突張^きつて、心持腰^{うしろ}を後へ浮かし
たが、眼を落してまず黒いしたたりを眺めた。丸い輪に墨が余つ
てぽつと四方に飛んでゐる。青貝は寝返りを打って、薄暗いな
かに冷たそうな長い光を放つ。甲野さんは椅子をずらす。手搜^{てさぐり}
に取り上げた洋筆軸^{ペンじく}は父が西洋から買つて来てくれた昔土産^{むかしみやげ}
である。

甲野さんは、指先に軸^{つま}を撮^とんだ手を裏返して、拾^{ひろ}つた物を、指
の谷から滑^{すべ}らして掌^{てのひら}のなかに落し込む。掌^{むき}の向^むきを上下に易^かえる
と、長い軸は、ころころと前へ行き後^{うし}ろへ戻る。動^{うご}くたびにき

らきら光る。小さい記念かたみである。

洋筆軸を転がしながら、書物の続きを読む。頁ページをはぐるときこんな事が、かいてある。

「剣客の剣を舞わずに、力相あいし若くときは剣術は無術と同じ。彼、これを一籌いっちゆうの末に制する事能あたわざれば、学ばざるものの相對して敵となるに等しければなり。人を欺くもまたこれに類す。欺かるるもの、欺くものと一様の譎詐ぎつさに富むとき、二人の位地ににんは、誠実をもつて相對すると毫ごうも異なるところなきに至る。この故に偽と悪とは優勢しゆつがいを引いて援護となすにあらざるよりは、不足偽ふそくぎ、不足悪に出会しゆっかいするにあらざるよりは、最後に、至善を敵とするにあらざるよりは、——効果を収むる事難かたしとす。第三の場合ひつてきは固もとより稀まれなり。第二もまた多からず。凶漢は敗徳において匹敵あたいするをもつて常態とすればなり。人相賊あいぞくしてついに達する能あたわ

ず、あるいは千辛万苦して始めて達し得べきものも、ただ互に善を行い徳を施こして容易に到り得べきを思えば、悲しむべし」

甲野さんはまた日記を取り上げた。青貝の洋筆軸を、ぽとりと墨壺の底に落す。落したまま容易に上げないと思うと、ついには手を放した。レオパルジは開いたまま、黄な表紙の日記を頁の上に載せる。両足を踏張つて、組み合せた手を、頸根にうんと椅子の背に凭れかかる。仰向く途端に父の半身画と顔を見合わした。

余り大きくはない。半身とは云え胴衣の釦が二つ見えるだけである。服はフロックと思われるが、背景の暗いうちに吸い取られて、明らかなのは、わずかに洩るる白襯衣の色と、額の広い顔だけである。

名のある人の筆になると云う。三年前帰朝の節、父はこの一

面を携えて、遙^{はる}かなる海を横浜の埠頭^{ふとう}に上った。それより以後は、欽吾^{みおろ}が仰ぐたびに壁間に懸^かつている。仰がぬ時も壁間から欽吾を見下している。筆を執^とるときも、頬杖^{ほおづえ}を突くときも、仮寝の頭を机に支うるときも——絶えず見下している。欽吾がいない時ですら、画布^{カンヴァス}の人は、常に書斎を見下している。

見下すだけあつて活きている。眼玉に締りがある。それも丹念に塗^ぬりたくつて、根氣任せに鍊^ねり上げた眼玉ではない。一刷毛^{ひとはけ}に輪廓^{えが}を描いて、眉と睫^{まつげ}の間に自然の影が出来る。下瞼^{したまぶた}の垂味^{たるみ}が見える。取る年が集つて目尻を引張る波足が浮く。その中に瞳^{ひとみ}が活^いきている。動かないでしかも活きている刹那^{さつな}の表情を、そのまま画布に落した手腕は、会心の機^{さそく}を早速に捕えた非凡の技^ぎと云わねばならぬ。甲野さんはこの眼を見るたびに活きてるなと思う。

想界いちらんに一瀾を点ずれば、千瀾追うて至る。瀾々相擁らんらんあいようして思索の郷くにに、吾を忘るるとき、懊惱おうのうの頭こころを上げて、この眼にはたりと逢あえば、あつ、在あつたなと思う。ある時はおやいたかと驚ろく事さえある。——甲野さんがレオパルジから眼を放して、万事を椅子の背に託した時は、常よりも烈はげしくおやいたなと驚ろいた。

思出おもいでの種なに、亡なき人を忍かたみぶ片身とは、思い出たよりす便を与えながら、亡もとき人を故に返さぬ無惨むざんなものである。肌かみに離さぬ数糸の髪を、懷いだいては、泣いては、月日はただ先へと廻めぐるのみの浮世である。片身は焼くに限る。父が死んでからの甲野さんは、何となくこの面を見るのが厭いやになつた。離れても別状がないと落つきの根城すを据すえて、咫尺しせきに慈顔じがんを髣髴ほうふつするは、離れたる親を、記憶の紙あふに炙あぶり出すのみか、逢あえる日を春に待てとの占うらにもな

る。が、逢おうと思つた本人はもう死んでしまつた。生きてゐるものはただ眼玉だけである。それすら生きてゐるのみで毫も動かない。——甲野さんは茫然^{ぼうぜん}として、眼玉を眺^{なが}めながら考へてゐる。

親父も氣の毒な事をした。もう少し生きれば生きられる年なのに。髭^{ひげ}もまるで白くはない。血色もみずみずしている。死ぬ氣は無論なかつたろう。氣の毒な事をした。どうせ死ぬなら、日本へ歸つてから死んでくれれば好いのに。言い置いて行きたい事も定めてあつたろう。聞きたい事、話したい事もたくさんあつた。惜しい事をした。好い年をして三遍も四遍も外国へやられて、しかも任地で急病に罹^{かか}つて頓死^{とんし}してしまつた。……

生きてゐる眼は、壁の上から甲野さんを見詰めている。甲野さんは椅子^{いす}に倚^より掛つたまま、壁の上を見詰めている。二人の

眼は見るたびにぴたりと合う。じつとして動かずに、合わせたままの秒を重ねて分に至ると、向うの眸ひとみが何となく働らいて来た。晴せいを閑所かんしょに転ずる気紛きまぐれの働ではない。打ち守る光が次第に強くなつて、眼を抜けた魂がじりじりと一直線に甲野さんに逼せまつて来る。甲野さんはおやと、首を動うごした。髪の毛が、椅子の背を離れて二寸ばかり前へ出た時、もう魂はいなくなつた。いつの間まにやら、眼のなかへ引き返したと見える。一枚の額は依然として一枚の額に過ぎない。甲野さんは再び黒い頭を椅子の肩に投げかけた。

馬鹿馬鹿しい。が近頃時々こんな事がある。身体からだが衰弱したせいか、頭脳あたまの具合が悪いからだろう。それにしてもこの画は厭だ。なまじい親父おやじに似ているだけがなくお氣掛りである。死んだものに心を残したって始まらないのは知れている。ところへ

死んだものを鼻の先へぶら下げて思え思えと催促されるのは、木刀を突き付けて、さあ腹を切れと逼せびられるようなものだ。うるさいのみか不快になる。

それもただの場合ならともかくである。親父の事を思い出すたびに、親父に気の毒になる。今の身と、今の心は自分にさえ気の毒である。実世界に住むとは、名ばかりの衣と住と食とを貪むさぼるだけで、頭はほかの国に、母も妹も忘れればこそ、こう生きてもいる。実世界の地面から、踵かかとを上げる事を解げし得ぬ利害の人の眼に見たら、定めし馬鹿の骨頂だろう。自分は自分にすべてを棄すてる覚悟があるにもせよ、この体ていたらくを親父には見せたくない。親父はただの人である。草葉の蔭で親父が見ていたら、定めて不肖ふしようの子と思うだろう。不肖の子は親父の事を思い出したくない。思い出せば気の毒になる。——どうもこの画は

いかん。折があつたら蔵のなかへでも片づけてしまおう。……
 十人は十人の因果いんがを持つ。羹あつものに懲こりて膾なますを吹くは、株しゆを守つて
 兎を待つと、等しく一樣の大律たいりつに支配せらる。白日天に中ちゆうして
 万戸に午砲いひの飯かしを炊ぐとき、蹠下しよかの民は褥裏じよくりに夜半太平やはんの計はかりごと
 熟す。甲野さんがただ一人書齋で考えている間に、母と藤尾ふじおは
 日本間の方で小声に話している。

「じゃあ、まだ話さないんですね」と藤尾が云う。茶の勝つた
 節糸ふしいとの拾あわせは存外地味じみな代りに、長く明けた袖そでの後うしろから紅絹もみの裏
 が婀娜あだな色を一筋ひとすじなまめかす。帯に代赭たいしやの古代模様こだいもようが見える。
 織物の名は分らぬ。

「欽吾にかい」と母が聞き直す。これもくすんだ縞物しまものを、年相
 応に着こなして、腹合せの黒だけが目に着くほどに締めている。
 「ええ」と応じた藤尾は

「兄さんは、まだ知らないんでしょう」と念を押す。

「まだ話さないよ」と云ったぎり、母は落ちついている。座布団ざぶとんの縁ふちを捲まくつて、

「おや、煙管きせるはどうしたろう」と云う。

煙管は火鉢の向う側にある。長い羅字らおを、逆さかに、親指まはの股またに挟んで

「はい」と手取形の鉄瓶てつびんの上から渡す。

「話したら何とか云うでしょうか」と差し出した手をこちら側へ引く。

「云えば御廃およしかい」と母は皮肉に云い切ったまま、下を向いて、雁首がんくびへ雲井を詰める。娘は答えなかった。答えをすれば弱くなる。もつとも強い返事をしようと思うときは黙っているに限る。無言は黄金おうごんである。

五徳の下で、存分に吸いつけた母は、鼻から出る煙と共に口を開いた。

「話はいつでも出来るよ。話すのが好ければ私が話して上げる。なに相談するがものはない。こう云う風にするつもりだからと云えば、それぎりの事だよ」

「そりや私だって、自分の考がきまつた以上は、兄さんがいくら何と云つたつて承知しやしませんけれども……」

「何にも云える人じゃないよ。相談相手に出来るくらいなら、初手しよてからこうしないでもほかにいくら遣口やりくちはあらあね」

「でも兄さんの心持一つで、こつちが困るようになるんだから」
「そうさ。それさえなければ、話も何も要いりやしないんだが。どうも表向家うちの相続人だから、あの人がうんと云つてくれないと、こつちが路頭に迷うようになるばかりだからね」

「その癖、何か話したんびに、財産はみんな御前にやるから、そのつもりでいるがいいって云うんですがね」

「云うだけじゃ仕方がないじゃないか」

「まさか催促する訳にも行かないでしょう」

「なにくれるものなら、催促して貰もらったって、構わないんだが——ただ世間体せけんていがわるいからね。いくらあの人ひとが学者でもこつちからそうは切り出し悪いよ」

「だから、話したら好いいじゃありませんか」

「何を」

「何をつて、あの事を」

「小野さんの事かい」

「ええ」と藤尾は明瞭めいりょうに答えた。

「話しても好いよ。どうせいつか話さなければならんだか

ら」

「そうしたら、どうにかするでしょう。まるつきり財産をくれるつもりなら、くれるでしょうし。幾らか分けてくれる気なら、分けるでしょうし、家が厭ならどこへでも行くでしょうし」

「だが、御母おつかさんの口から、御前の世話にはなりたくないから藤尾をどうかしてくれとも云い悪いからね」

「だつて向で世話をするのが厭だつて云うんじやありませんか。世話は出来ない、財産はやらない。それじや御母おつかさんをどうするつもりなんです」

「どうするつもりも何も有りやしない。ただああやってぐずぐずして人を困らせる男なんだよ」

「少しはこつちの様子でも分りそうなもんですがね」

母は黙っている。

「この間金時計を宗近むねちかにやれつて云つた時でも……」

「小野さんに上げると御云いのかい」

「小野さんには云わないけれども。はじめ一さんに上げるとは云わ

なかつたわ」

「妙だよあの人は。藤尾に養子をして、面倒を見て御貰おもいなさい

と云うかと思うと、やつぱり御前を一にやりたいんだよ。だつ

て一は一人息子じゃないか。養子なんぞに來られるものかね」

「ふん」と受けた藤尾は、細い首を横に庭の方かたを見る。夕暮を

促がすとのみ眺められた浅葱桜あさぎざくらは、ことごとく梢こしえを辞して、光

る茶色の嫩葉わかばさえ吹き出している。左に茂る三四本の扇骨木かなめの

丸く刈り込まれた間から、書齋の窓が少し見える。思うさま片

寄つて枝を伸のした桜の幹を、右へ離れると池になる。池が尽き

れば張り出した自分の座敷である。

静かな庭を一目見廻わした藤尾は再び横顔を返して、母を真向まむきに見る。母はさつきから藤尾の方を向いたなり眼を放さない。二人が顔を合せた時、何を思ったか、藤尾は美しい片頬かたほをむずつかせた。笑とまで片づかぬものは、明かに浮ばぬ先に自然じねんと消える。

「宗近の方は大丈夫なんでしょうね」

「大丈夫でなくったって、仕方がないじゃないか」

「でも断つて下すつたんでしよう」

「断つたんだとも。この間行つた時に、宗近の阿爺おとっさんに逢つて、よ

く理由わけは話して来たのさ。——帰つてから御前にも話した通り」

「それは覚えていますけれども、何だか判然はつきりしないようだったから」

「判然しないのは向の事さ。阿爺があを通り気の長い人だもん

だから」

「こつちでも判然とは断わらなかつたんでしょ」

「そりや今までの義理があるから、そう子供の使のように、藤尾が厭いやだと申しますから、平ひらに御断わり申しますとは云えないからね」

「なに厭なもの、どうしたって好くなりっこ無いんだから、いつそ平つたく云つた方が好いんですよ」

「だって、世間はそうしたもんじゃあるまい。御前はまだ年が若いから露骨むぎだしでも構わないと御思おもひかも知れないが、世の中はそうは行かないよ。同じ断わるにしても、そこにはね。やつぱり蓋ふたも味みもあるように云わないと——ただ怒らしてしまつたつて仕方がないから」

「何とか云つて断つたのね」

「欽吾がどうあつても嫁を貰うと云つてくれません。私も取る年で心細うございますから」と一と息に下して来る。ちよつと御茶を呑む。

「年を取つて心細いから」

「心細いから、欽吾があのまま押し通す料簡なら、藤尾に養子でもして掛かるよりほかに致し方がございません。すると一さんは大事な宗近家の御相続人だから私共へいらしつていただく訳にも行かず、また藤尾を差し上げる訳にも参らなくなりますから……」

「それじゃ兄さんがもしや御嫁を貰うと云い出したら困るでしょう」

「なに大丈夫だよ」と母は浅黒い額へ癩癩の八の字を寄せた。八の字はすぐとれる。やがて云う。

「貰うなら、貰うで、糸子いとこでも何でも勝手な人を貰うがいいやね。こっちはこっちで早く小野さんを入れてしまおうから」

「でも宗近の方は」

「いいよ。そう心配しないでも」と地烈太じれったそうに云い切った後で

「外交官の試験に及第しないうちは嫁どころじゃないやね」と付けた。

「もし及第したら、すぐ何か云うでしょう」

「だって、彼男あのに及第が出来ますものかね。考えて御覧な。——もし及第なすったら藤尾を差上さしあげましよう」と約束したって大丈夫だよ」

「そう云ったの」

「そうは云わないさ。そうは云わないが、云っても大丈夫、及

第出来つ子ない男だあね」

藤尾は笑ながら、首を傾けた。やがてすつきと姿勢を正して、話を切り上げながら云う。

「じゃ宗近の御叔父おじさんはたしかに断わられたと思ってるんですね」
「思ってるはずだがね。——どうだい、あれから一の様子は、少しは変ったかい」

「やつぱり同じおんなですからさ。この間博覧会へ行つたときも相変らずですもの」

「博覧会へ行つたのは、いつだつたかね」

「今日で」と考える。「一昨日おととい、一昨日さきおとといの晩です」と云う。

「そんなら、もう一に通じている時分だが。——もつとも宗近の御叔父がああ云う人だから、ことに依ると謎なぞが通じなかつたかも知れないね」とさも齒痒はがゆそうである。

「それとも一さんの事だから、御叔父から聞いても平氣でいるのかも知れないわね」

「そうさ。どつちがどつちとも云えないね。じゃ、こうしよう。ともかくも欽吾に話してしまおう。——こつちで黙つていちゃ、いつまで立つても際限がない」

「今、書齋にいるでしょう」

母は立ち上がった。椽側へ出た足をえんがわ一歩後へ返して、小聲に

「御前、一に逢あうだろう」と屈こじみながら云う。

「逢うかも知れません」

「逢つたら少し匂わして置く方が好いよ。小野さんと大森へ行くと云つていたじゃないか。明日あしただったかね」

「ええ、明日の約束です」

「何なら二人で遊んで歩くところでも見せてやると好い」

「ホホホホ」

母は書齋に向う。

からりとした椽えんを通り越して、奇麗な木理もくめを一面に研とぎ出している西洋間の戸を半分明けると、立て切った中は暗い。円鈕ノブを前に押ししながら、開く戸に身を任せて、音なき両足を寄木よせぎの床に落した時、釘舌ボルトのかちやりと跳ね返る音がする。窓掛に春を遮さえぎる書齋は、薄暗く二人を、人の世から仕切った。

「暗い事」と云いながら、母は真中の洋卓テエブルまで来て立ち留まる。

椅子いすの背の上に首だけ見えた欽吾の後姿が、声のした方へ、じいつと廻り込むと、なぞえに引いた眉の切れが三が一ほどあらわれた。黒い片髭かたひげが上唇を沿うて、自然じねんと下りて来て、尽んとする角かどから、急に捲まき返す。口は結んでいる。同時に黒い眸ひとみは眼尻まで擦ずつて来た。母と子はこの姿勢のうちに互を認識した。

「陰気だねえ」と母は立ちながら繰り返す。

無言の人は立ち上る。上靴を二三度床に鳴らして、洋卓の角まで足を運ばした時、始めて

「窓を明けましようか」と緩聞ゆつくりいた。

「どうでも——母おつかさんはどうでも構わないが、ただ御前うつとが鬱陶しいだろうと思つてさ」

無言の人は再び右の手の平を、洋卓越に前へ出した。促うながされたる母はまず椅子に着く。欽吾も腰を卸おろした。

「どうだね、具合は」

「ありがとう」

「ちつとは好い方かね」

「ええ——まあ——」と生返事なまへんじをした時、甲野さんは背を引い

て腕を組んだ。同時に洋卓の下で、右足の甲の上へ左の外踝そとくろふしを

乗せる。母の眼からは、ただ衿ゆきの縮んだ卵色の襯衣シヤツの袖が正面に見える。

「身体からだを丈夫にしてくれないとね、母さんも心配だから……」
句の切れぬうちに、甲野さんは自分の顎あごを咽喉のどへ押しつけて、
洋卓の下を覗き込んだ。黒い足袋が二つ重なっている。母の足
は見えない。母は出直した。

「身体が悪いと、つい気分まで鬱陶しくなつて、自分も面白くないし……」

甲野さんはふと眼を上げた。母は急に言葉を移す。

「でも京都へ行つてから、少しは好いようだね」

「そうですか」

「ホホホホ、そうですかつて、他人ひとの事のように。——何だか
顔色が丈夫丈夫して来たじゃないか。日に焼けたせいかね」

「そうかも知れない」と甲野さんは、首を向け直して、窓の方を見る。窓掛の深い襷ひだが左右に切れる間から、扇骨木かなめの若葉が燃えるように硝子ガラスに映うつる。

「ちつと、日本間の方へ話にでも来て御覧。あつちは、廊からとして、書斎より心持が好いから。たまには、一はじめのようにつまらない女を相手にして世間話をするのも気が変つて面白いものだよ」

「ありがとう」

「どうせ相手になるほどの話は出来ないけれども——それでも馬鹿は馬鹿なりにね。……」

甲野さんは眩まよしそうな眼を扇骨木から放した。

「扇骨木が大変奇麗きれいに芽めを吹きましたね」

「見事だね。かえつて生なまじいな花よりも、好よござんすよ。ここ

からは、たつた一本しつきや見えないね。向^{むこう}へ廻ると刈り込んだのが丸^{まる}く揃^{そろ}つて、そりや奇麗

「あなたの部屋からが一番好く見えるようですね」

「ああ、御覧かい」

甲野さんは見たとも見ないとも云わなかった。母は云う。――

「それにね。近頃は陽気のせいか池の緋鯉^{ひごい}が、まことによく跳^{はね}るんで……ここから聞えますかい」

「鯉の跳る音がですか」

「ああ」

「いいえ」

「聞えない。聞えないだろうねこう立て切つて有つちやあ。母^{おつか}さんの部屋からでも聞えないくらいだから。この間藤尾に母さんは耳が悪くなつたつて、さんざん笑われたのさ。――もつと

も、もう耳も悪くなつて好い年だから仕方がないけれども」

「藤尾はいますか」

「いるよ。もう小野さんが来て稽古けいこをする時分だろう。——何

か用でもあるかい」

「いえ、用は別にありません」

「あれも、あんな、気の勝った子で、さぞ御前さんの気に障さわる事もあるうが、まあ我慢して、本当の妹だと思つて、面倒を見てやつて下さい」

甲野さんは腕組のまま、じつと、深い瞳ひとみを母の上に据すえた。

母の眼はなぜか洋卓テェブルの上に落ちてゐる。

「世話はする気です」と徐しずかに云う。

「御前がそう云つてくれると私わたしもまことに安心です」

「する気どころじゃない。したいと思つてゐるくらいです」

「それほどに思つてくれると聞いたら当人もさぞ喜ぶ事だろう」
「ですが……」で言葉は切れた。母は後^{あと}を待つ。欽吾は腕組を解いて、椅子に倚^よる背を前に、胸を洋卓^{テエブル}の角^{かど}へ着けるほど母に近づいた。

「ですが、母^{おつか}さん。藤尾の方では世話になる気ありません」
「そんな事が」と今度は母の方が身体^{からだ}を椅子の背に引いた。甲野さんは一筋の眉さえ動かさない。同じような低い声を、静かに繋^{つな}げて行く。

「世話をする」と云うのは、世話になる方^{あと}でこつちを信仰——信仰と云うのは神さまのようでおかしい」

甲野さんはここでぽつりと言葉を切った。母はまだ番が回つて来ないと心得たか、尋常に控えている。

「とにかく世話になつても好いと思うくらいに信用する人物で

なくつちや駄目です」

「そりや御前にそう見限られてしまえばそれまでだが」とここまでは何の苦もなく出したが、急に調子を逼^{せま}らして、

「^{あれ}藤尾も実は可^{かわいそう}哀想だからね。そう云わずに、どうかしてやつて下さい」と云う。甲野さんは肘^{ひじ}を立てて、手の平で額^{ひたい}を抑えた。

「だって見^み縊^{くび}られているんだから、世話を焼けば喧嘩^{けんか}になるばかりです」

「藤尾が御前さんを見縊^くるなんて……」と打^うち消^けはしとやかな母にしては比較的に大きな声であつた。

「そんな事があつては第一私^{わたし}が済まない」と次に添えた時はもう常に復していた。

甲野さんは黙つて肘を立てている。

「何か藤尾が不都合な事でもしたかい」

甲野さんは依然として額に加えた手の下から母を眺^{なが}めている。

「もし不都合があつたら、私から篤^{とく}と云つて聞かせるから、遠慮しないで、何でも話しておくれ。御互のなかで氣不味^{きまず}い事があつちやあ面白くないから」

額に加えた五本の指は、節長に細^{ほっそ}りして、爪の形さえ女のよう^{きやしゃ}に華奢^{きやしゃ}に出来ている。

「藤尾はたしか二十四になつたんですね」

「明けて四^しになつたのさ」

「もうどうかしなくつちやならないでしょう」

「嫁の口かい」と母は簡単に念を押した。甲野さんは嫁とも聲^{むこ}とも判然した答をしない。母は云う。

「藤尾の事も、実は相談したいと思つてゐるんだが、その前に

ね」

「何ですか」

右の眉まゆはやはり手の下に隠れている。眼の光いろは深い。けれども鋭い点はどこにも見えぬ。

「どうだろう。もう一遍考え直してくれると好いがね」

「何をですか」

「御前の事をさ。藤尾も藤尾でどうかしなければならぬが、御前の方を先へきめないと、母おつかさんが困るからね」

甲野さんは手の甲の影で片頬かたほに笑った。淋さみしい笑である。

「身体からだが悪いと御云いだけでも、御前くらいの身体で御嫁を取った人はいくらでもあります」

「そりや、有るでしょう」

「だからさ。御前も、もう一遍考え直して御覧な。中には御嫁

を貰つて大變丈夫になつた人もあるくらいだよ」

甲野さんの手はこの時始めて額を離れた。洋卓テェブルの上には一枚の罫紙けいしに鉛筆が添えて載せてある。何気なく罫紙を取り上げて裏を返して見ると三四行の英語が書いてある。読み掛けて気がついた。昨日きのう読んだ書物の中から備忘のため抄録して、そのまゝに捨てて置いた紙片かみきれである。甲野さんは罫紙を洋卓の上に伏せた。

母は額の裏側だけに八の字を寄せて、甲野さんの返事をおとなしく待っている。甲野さんは鉛筆を執とつて紙の上へ烏と云う字を書いた。

「どうだろうね」

烏と云う字が鳥になつた。

「そうしてくれると好いがね」

鳥と云う字が駄げきの字になつた。その下に舌の字が付いた。そうして顔を上げた。云う。

「まあ藤尾の方からきめたら好いでしょう」

「御前が、どうしても承知してくれなければ、そうするよりほかに道はあるまい」

云い終つた母は悄然しやうぜんとして下を向いた。同時に忤せがれの紙の上に

三角が出来た。三角が三つ重なつて鱗うろこの紋になる。

「母おつかさん。家は藤尾にやりますよ」

「それじゃ御前……」と打ち消けしにかかる。

「財産も藤尾にやります。私わたしは何にもいらない」

「それじゃ私達が困るばかりだあね」

「困りますか」と落ちついて云つた。母子おやこはちよつと眼を見合せる。

「困りますかつて。——私が、死んだ阿父おとつさんに済まないじゃないか」

「そうですか。じゃどうすれば好いんです」と飴色あめいろに塗った鉛筆を洋卓の上にはたりと放り出した。

「どうすれば好いか、どうせ母おつかさんのような無学なものには分らないが、無学は無学なりにそれじゃ済まないと思いますよ」

「厭いやなんですか」

「厭だなんて、そんなもつたない事を今まで云つた事があつたかね」

「有りません」

「私も無いつもりだ。御前がそう云つてくれるたんびに、御礼わたしは始終しよつちゆう云つてゐるじゃないか」

「御礼は始終聞いています」

母は転がった鉛筆を取り上げて、尖^{とが}った先を見た。丸い護謨^{ゴム}の尻を見た。心のうちで手のつけようのない人だと思った。やあつて護謨の尻をきゆうつと洋卓^{テアブル}の上へ引つ張りながら云う。

「じゃ、どうあつても家^{うち}を襲^つぐ気はないんだね」

「家は襲いでいます。法律上私は相続人です」

「甲野の家は襲いでも、母^{おつ}かさんの世話^{おつ}はしてくれないんだね」

甲野さんは返事をする前に、眸^{ひとみ}を長い眼の真中に据えてつくづくと母の顔を眺めた。やがて、

「だから、家も財産もみんな藤尾にやると云うんです」と慇懃^{いんぎん}に云う。

「それほどに御云いなら、仕方がない」

母は溜息と共に、この一句を洋卓の上にうちやった。甲野さんは超然としている。

「じゃ仕方がないから、御前の事は御前の思い通りにするとして、——藤尾の方だがね」

「ええ」

「実はあの小野さんが好かろうと思うんだが、どうだろう」

「小野をですか」と云ったぎり、黙った。

「いけまいか」

「いけない事もないでしょう」と緩^{ゆっ}くり云う。

「よければ、そうきめようと思うが……」

「好いでしょう」

「好いかい」

「ええ」

「それでようやく安心した」

甲野さんはじつと眼を凝^こらして正面に何物をか見詰めている。

あたかも前にある母の存在を認めざるごとくである。

「それでようやく——御前どうかおしakai」

「母かさん、藤尾は承知なんでしょうね」

「無論知っているよ。なぜ」

甲野さんは、やはり遠方を見ている。やがて瞬をまたたき一つすると共に、眼は急に近くなつた。

「宗近はいけないんですか」と聞く。

「はじめ一かい。本来なら一が一番好いんだけど。——父さんおとつと

宗近とは、ああ云う間柄ではあるしね」

「約束でもありやしなかつたですか」

「約束と云うほどの事はなかつたよ」

「何だか父さんおとつが時計をやるとか云つた事があるように覚えて
いますか」

「時計？」と母は首を傾かたげた。

「父さんの金時計です。柘榴石ガーネットの着いている」

「ああ、そうそう。そんな事が有ったようだね」と母は思い出したごとくに云う。

「一はじめはまだ当あてにしているようです」

「そうかい」と云ったぎり母は澄ましている。

「約束があるならやらなくっちゃ悪い。義理が欠ける」

「時計は今藤尾が預あづかっているから、私わたしから、よく、そう云つて置おこう」

「時計もだが、藤尾の事を重おもに云つてゐるんです」

「だって藤尾をやろうと云う約束はまるで無いんだよ」

「そうですか。——それじゃ、好いでしよう」

「そう云うと私が何だか御前の氣に逆さからうように悪いけれども、

——そんな約束はまるで覚おぼえがないんだもの」

「はああ。じゃ無いんでしよう」

「そりゃね。約束があつても無くつても、一ならやつても好いんだが、あれも外交官の試験がまだ済まないんだから勉強中に嫁でもあるまいし」

「そりゃ、構わないです」

「それに一は長男だから、どうしても宗近の家を襲うがなくつちやならずね」

「藤尾へは養子をするつもりなんですか」

「したくはないが、御前が母おつかさんの云う事を聞いておくれでないから……」

「藤尾がわきへ行くにしても、財産は藤尾にやります」

「財産は——御前私の料簡りようけんを間違えて取っておくれだと困るが

おっか

——母さんの腹の中には財産の事なんかまるでありやしないよ。そりや割って見せたいくらいに奇麗きれいなつもりだがね。そうは見えないか知ら」

「見えます」と甲野さんが云った。極めて真面目まじめな調子である。母にさえ嘲弄ちやうろうの意味には受取れなかった。

「ただ年を取って心細いから……たった一人の藤尾をやつてしまうと、後あとが困るんでね」

「なるほど」

「でなければ一が好いんだがね。御前とも仲が善し……」

「母かさん、小野をよく知っていますか」

「知ってるつもりです。叮嚀ていねいで、親切で、学問がよく出来て立

派な人じゃないか。——なぜ」

「そんなら好いです」

「そう素気なく云わずと、何か考があるなら聞かしておくれな。
せつかく相談に來たんだから」

しばらく罫紙の上の樂書を見詰めていた甲野さんは眼を上げると共に穩かに云い切った。

「宗近の方が小野より母さんを大事にします」

「そりや」とたちまち出る。後から靜かに云う。

「そうかも知れない——御前の見た眼に間違はあるまいが、ほかの事と違つて、こればかりは親や兄の自由には行かないものだからね」

「藤尾が是非にと云うんですか」

「え、まあ——是非とも云うまいが」

「そりや私も知つてゐる。知つてゐるんだが。——藤尾はいますか」

「呼びましょう」

母は立つた。薄紅色ときいろに深く唐草からくさを散らした壁紙に、立ちながら、手頃に届く電鈴ベルを、白きただ中に押すと、座に返るほどなきに応こたえがある。入口の戸が五寸ばかりそつと明あく、ところを振り返つた母が

「藤尾に用があるからちよいと」と云う。そつと明いた戸はそつと締る。

母と子は洋卓テエブルを隔てて差し向う。互に無言である。欽吾はまた鉛筆を取り上げた。三つ鱗みうろこの周圍まわりに擦れ擦れの大きさに円まるを描く。円と鱗の間を塗る。黒い線を一本一本叮嚀ていねいに並行させて行く。母は所在なさに、悴せがれの図案を慇懃いんぎんに眺ながめている。

二人の心は無論わからぬ。ただ上部うわべだけはいかにも静である。もし手足しゅそくの拳止が、内面の消息を形而下けいじかに運び来る記号となり

得るならば、この二人ほどに長閑な母子は容易に見出し得まい。
 退屈の刻を、数十の線に劃して、行儀よく三つ鱗の外部を塗り
 潰す子と、尋常に手を膝の上に重ねて、一劃ごとに黒くなる円
 の中を、端然と打ち守る母とは、咸雍の母子である。和怡の母
 子である。挟さむ洋卓に、遮らるる胸と胸を対い合せて、春鎖
 す窓掛のうちに、世を、人を、争を、忘れたる姿である。亡き
 人の肖像は例に因つて、壁の上から、閑静なるこの母子を照ら
 している。

丹念に引く線はようやく繁くなる。黒い部分はしだいに増す。
 残るはただ右手に当る弓形の一カ所となつた時、がちやりと釘舌
 を振る音がして、待ち設けた藤尾の姿が入口に現われた。白い
 姿を春に託す。深い背景のうちに肩から上が浮いて見える。甲
 野さんの鉛筆は引きかけた線の半ばでぴたりと留つた。同時に

藤尾の顔は背景を抜け出して来る。

「炙^{あぶ}り出しはどうして」と言いながら、母の隣まで来て、横合から腰を卸^{おろ}す。卸し終った時、また、

「出て？」と母に聞く。母はただ藤尾の方を意味ありげに見たのみである。甲野さんの黒い線はこの間に四本増した。

「兄さんが御前に何か御用があると御云いだから」

「そう」と云ったなり、藤尾は兄の方へ向き直った。黒い線がしきりに出来つつある。

「兄さん、何か御用」

「うん」と云った甲野さんは、ようやく顔を上げた。顔を上げたなり何とも云わない。

藤尾は再び母の方を見た。見ると共に薄笑^{うすわらい}の影が奇麗^{きれい}な頬にさす。兄はやつと口を切る。

「藤尾、この家と、私が父さんから受け襲いだ財産はみんな御前にやるよ」

「いつ」

「今日からやる。——その代り、母さんの世話は御前がしなければいけない」

「ありがとう」と云いながら、また母の方を見る。やはり笑っている。

「御前宗近へ行く気はないか」

「ええ」

「ない？ どうしても厭か」

「厭です」

「そうか。——そんなに小野が好いのか」

藤尾は屹きつとなる。

「それを聞いて何になさる」と椅子いすの上に背を伸のして云う。

「何にもしない。私のためには何にもならない事だ。ただ御前のために云つてやるのだ」

「私のために？」と言葉の尻を上げて置いて、

「そう」とさも輕蔑けいべつしたように落す。母は始めて口を出す。

「兄さんの考では、小野さんより一はじめの方がよかろうと云う話なんだがね」

「兄さんは兄さん。私は私です」

「兄さんは小野さんよりも一の方が、母さんを大事にしてくれると御言いのだよ」

「兄さん」と藤尾は鋭く欽吾に向つた。「あなた小野さんの性格を知つていらつしやるか」

「知つている」と閑静しずかに云う。

「知ってるもんですか」と立ち上がる。「小野さんは詩人です。高尚な詩人です」

「そうか」

「趣味を解した人です。愛を解した人です。温厚の君子です。——哲学者には分らない人格です。あなたには一さんは分るでしょう。しかし小野さんの価値ねうちは分りません。けっして分りません。一さんを賞める人ほに小野さんの価値が分る訳がありません。……」

「じゃ小野にするさ」

「無論します」

云い棄すてて紫の絹リボンは戸口の方へ揺うごいた。織ほそい手に円鈕ノブをぐるりと回すや否いなや藤尾の姿は深い背景のうちに隠れた。

叙述の筆は甲野こうのの書斎を去つて、宗近むねちかの家庭に入る。同日である。また同刻である。

相変らずの唐机とうづくえを控えて、宗近の父おとつさんが鬼更紗おにぎらさの座蒲団ざぶとんの上に坐っている。襦衣シヤツを嫌つた、黒八丈くろはちじようの襦袢じゆばんの襟えりが崩くずれて、素肌すみに、もじゃ、もじゃと胸毛が見える。忌部焼いんべやきの布袋ほていの置物しやくぶにこんなのがよくある。布袋の前に異様の煙草盆たばこぼんを置く。呉祥瑞ごしよんずいの銘そめつけのある染付せんぎには山がある、柳がある、人物がいる。人物と山と同じくらいな大きさに描えがかれている間を、一筋の金泥きんでいが蜿蜒えんえんと縁ふちまで這上はいあがる。形は甕かめのごとく、鉢はちが開いて、開いた頂いただきが、がつくりと縮まると、丸い縁ふちになる。向い合せの耳みみを潜くぐる蔓つるには、ぎりぎりしふと洩しふを帯びた籐とを巻きつけて手提てさげの便を計る。

宗近の父おとつさんは昨日きのうどこの古道具屋からか、継つぎのあるこの煙

草盆を掘り出して来て、今朝から祥瑞だ、祥瑞だと騒いだ結果、灰を入れ、火を入れ、しきりに煙草を吸っている。

ところへ入口の唐紙からかみをさらりと開けて、宗近君が例のごとく活潑かつぱつに這入はいつて来る。父は煙草盆から眼を離した。見ると悴せがれは親譲りの背広をだぶだぶに着て、カシミヤの靴足袋くつたびだけに、大なる通つうをきめている。

「どこぞへ行くかね」

「行くんじゃない、今帰ったところです。——ああ暑い。今日はよつぽど暑いですね」

「家うちにいと、そうでもない。御前はむやみに急ぐから暑いんだ。もう少し落ちついて歩いたらどうだ」

「充分落ちついているつもりなんだが、そう見えないかな。弱

るな。——やあ、とうとう煙草盆へ火を入れましたね。なるほど」

「どうだ祥瑞は」

「何だか酒甕さかがめのようですね」

「なに煙草盆さ。御前達は何だかだつて笑うが、こうやって灰を入れて見るとやつぱり煙草盆らしいだろう」

老人は蔓つるを持って、ぐつと祥瑞を宙に釣るし上げた。

「どうだ」

「ええ。好いですね」

「好いだろう。祥瑞は贗にせの多いもんで容易には買えない」

「全体いくらなんですか」

「いくらだか当てる御覧」

「見当が着きませんね。滅多めったな事を云うとまたこの間の松見た

ように頭ごなしに叱られるからな」

「壺円八十銭だ。安いもんだろう」

「安いですかね」

「全く堀出だ」
ほりだし

「へええ——おや椽側にもまた新らしい植木が出来ましたね」

「さつき万両まんりようと植え替えた。それは薩摩さつまの鉢はちで古いものだ」

「十六世紀頃の葡萄耳ポルトガル人が被った帽子のような恰好かっこうですね。——

この薔薇ばらはまた大変赤いもんだな、こりやあ」

「それは仏見笑ぶつけんしょうと云ってね。やつぱり薔薇の一種だ」

「仏見笑？ 妙な名だな」

「華嚴經けこんきやうに外面げめん如菩薩にょぼさつ、内心ないしん如夜叉にやしゃと云う句がある。知ってる

だろう」

「文句だけは知ってます」

「それで仏見笑と云うんだそうだ。花は奇麗だが、大変刺^{とげ}がある。触^{さわ}つて御覧」

「なに触らなくつても結構です」

「ハハハ外面如菩薩、内心如夜叉。女は危ないものだ」と云いながら、老人は雁首^{がんくび}の先で祥瑞^{しやんずい}の中を穿^ほり廻す。

「むずかしい薔薇があるもんだな」と宗近君は感心して仏見笑を眺^{なが}めている。

「うん」と老人は思い出したように膝を打つ。

「一^{はじめ}あの花を見た事があるかい。あの床^{とこ}に挿^さしてある」

老人はいながら、顔の向^{うしろ}を後へ変える。振^{ねじ}れた頸^{くび}に、行き所を失つた肉が、三筋ほど括^{くび}られて肩の方へ競^せり出して来る。

茶^{ちや}がかつた平床^{ひらどこ}には、釣竿^{つりざん}を担^{かつ}いだ蜆^{けん}子和尚^{すおしよう}を一筆^{ひとふで}に描^かいた軸^{じく}を閑静に掛けて、前に青銅の古瓶^{こへい}を据^すえる。鶴ほどに長い頸

の中から、すい^{ふたくぎ}と出る二茎に、十字と四方に囲う葉を境に、数珠^{じゆず}に貫^ぬく露の珠^{たま}が二穗^{ふたほ}ずつ偶^{ぐう}を作つて咲いている。

「大変細い花ですね。——見た事がない。何と云うんですか」

「これが例^{ふたりしずか}の二人静だ」

「例の二人静？ 例にも何にも今まで聞いた事がないですね」

「覚えて置くがいい。面白い花だ。白い穗^ほがきつと二本ずつ出る。だから二人静。謡曲に静の霊が二人して舞うと云う事がある。知っているかね」

「知りませんね」

「二人静。ハハハ面白い花だ」

「何だか因果^{いんが}のある花ばかりですね」

「調べさえすれば因果はいくらでもある。御前、梅に幾通^{いくとお}あるか知ってるか」と煙草盆を釣^{きせる}るして、また煙管^{きせる}の雁首^{かり}で灰の中

を搔^かき廻す。宗近君はこの機に乗じて話頭を転換した。

「阿爺^{おとつ}さん。今日ね、久しぶりに髪結^{かみゆいどこ}床へ行つて、頭を刈^たつて

来ました」と右の手で黒いところを撫^なで廻す。

「頭を」と云いながら羅宇^{らお}の中ほどを祥瑞^{しやんずい}の縁^{ふち}でとんと叩^{たた}いて灰を落す。

「あんまり奇麗^{きれい}にもならんじやないか」と真向^{まむき}に帰つてから云う。

「奇麗にもならんじやないかつて、阿爺^{おとつ}さん、こりや五分刈^{ごぶがり}じやないですぜ」

「じゃ何刈^{なん}だい」

「分けるんです」

「分かつていないじやないか」

「今に分かるようになるんです。真中が少し長いでしょう」

「そう云えば心持長いかな。廃せ^よばいいのに、見つともない」

「見つともないですか」

「それにこれから夏向は熱苦しくつて……」

「ところがいくら熱苦しくつても、こうして置かないと不都合なんです」

「なぜ」

「なぜでも不都合なんです」

「妙な奴だな」

「ハハハハ実はね、阿爺さん」

「うん」

「外交官の試験に及第してね」

「及第したか。そりやそりや。そうか。そんなら早くそう云え

ば好いのに」

「まあ頭でも^{こしら}拵えてからにしようと思つて」

「頭なんぞはどうでも好いさ」

「ところが五分刈で外国へ行くと懲役人と間違えられるつて云いますからね」

「外国へ——外国へ行くのかい。いつ」

「まあこの髪が延びて小野清三式になる時分でしょう」

「じゃ、まだ一カ月くらいはあるな」

「ええ、そのくらいはあります」

「一カ月あるならまあ安心だ。立つ前にゆつくり相談も出来るから」

「ええ時間はいくらでもあります。時間の方はいくらでもあります。この洋服は今日限^{こんにちかぎり}御返納に及びたいです」

「ハハハハいかんかい。よく似合うぜ」

「あなたが似合う似合うとおつしやるから今日まで着たようなものの――至るところだぶだぶしていますぜ」

「そうかそれじゃ廃よすがいい。また阿爺よさんが着よう」

「ハハハハ驚いたなあ。それこそ御廃およしなさい」

「廃しても好い。黒田にでもやるかな」

「黒田こそいい迷惑だ」

「そんなにおかしいかな」

「おかしくないが、身体からだに合わないでさあ」

「そうか、それじゃやつぱりおかしいだろう」

「ええ、つまるところおかしいです」

「ハハハハ時に糸にも話したかい」

「試験の事ですか」

「ああ」

「まだ話さないです」

「まだ話さない。なぜ。——全体いつ分ったんだ」

「通知のあつたのは二三日前ですがね。つい、忙しいもんだから、まだ誰にも話さない」

「御前は呑氣のんき過ぎていかんよ」

「なに忘れやしません。大丈夫」

「ハハハ忘れちゃ大変だ。まあもう、ちつと氣をつけるがいい」

「ええこれから糸公に話してやろうと思つてね。——心配しているから。——及第の件とそれからこの頭の説明を」

「頭は好いが——全体どこへ行く事になつたのかい。英吉利イギリスか、仏蘭西フランスか」

「その辺はまだ分らないです。何でも西洋は西洋でしょう」

「ハハハハ氣樂なもんだ。まあどこへでも行くが好い」

「西洋なんか行きたくもないんだけれども——まあ順序だから仕方がない」

「うん、まあ勝手な所へ行くがいい」

「支那や朝鮮なら、故の通もととおの五分刈で、このだぶだぶの洋服を着て出掛けるですがね」

「西洋はやかましい。御前のような不作法ふさほうものには好い修業になつて結構だ」

「ハハハハ西洋へ行くと墮落するだろうと思つてね」

「なぜ」

「西洋へ行くと人間を二ふた通とおり拵こしらえて持つていないと不都合ですからね」

「二た通とは」

「不^ぶ作^さ法^{ぽう}な裏と、奇麗な表と。厄^{やっ}介^{かい}でさあ」

「日本でもそうじゃないか。文明の圧迫^{はげ}が烈^{うわ}しいから上部^べを奇麗にしないと社会に住めなくなる」

「その代り生存競争も烈^{うわ}しくなるから、内部はますます不^ぶ作^さ法^{ぽう}になりまさあ」

「ちようどなんだな。裏と表と反対の方角に発達する訳になるな。これからの人間は生きながら八^やつ裂^{さき}の刑を受けるようなものだ。苦しいだろう」

「今に人間が進化すると、神様の顔へ豚の睾丸^{きんたま}をつけたような奴^{やつ}ばかり出来て、それで落つきが取れるかも知れない。いやだな、そんな修業に出掛けるのは」

「いつそ廃^{やめ}にするか。うちにいて親父^{おやじ}の古洋服でも着て太平樂を並べている方が好いかも知れない。ハハハハ」

「ことに英吉利人は氣に喰わ^{イギリス}ない。一から十まで英国が模範である^{あり}と云わ^{イギリス}んばかりの顔をして、何でもかでも我流^{がりゅう}で押し通そうとするんですからね」

「だが英国紳士と云つて近頃だいぶ評判がいいじゃないか」

「日英同盟だつて、何もあんなに賞^ほめるにも当らない訳だ。弥次馬共が英国へ行つた事もない癖に、旗ばかり押し立てて、まるで日本が無くなつたようじゃありませんか」

「うん。どこの国でも表が表だけに発達すると、裏も裏相応に発達するだろうからな。——なに国ばかりじゃない個人でもそうだ」

「日本がえらくなつて、英国の方で日本の真似でもするようになくつちや駄目だ」

「御前が日本をえらくするさ。ハハハハ」

宗近君は日本をえらくするとも、しないとも云わなかつた。
ふと手を伸すのばと更紗さらさの結襟ネクタイが白襟カラの真中まんなかまで浮き出して結目は
横ねじに捩ねれている。

「どうも、この襟飾えりかざりは滑すべつていけない」と手探てさぐりに位地を正しな
がら、

「じゃ糸にちよつと話しましょう」と立ちかける。

「まあ御待ち、少し相談がある」

「何ですか」と立ち掛けた尻おろを卸しす機会おに、準胡坐じゅんあぐらの姿勢を取
る。

「実は今までは、御前の位地もまだきまつていなかったから、さ
ほどもにも云わなかつたが……」

「嫁ですかね」

「そうさ。どうせ外国へ行くなら、行く前にきめるとか、結婚

するとか、または連れて行くとか……」

「とても連れちゃ行かれませんよ。金が足りないから」

「連れて行かんでも好い。ちゃんと片をつけて、そうして置いて行くなら。留守中は私が大事に預かつてやる」

「私もそうしようと思ってるんです」

「どうだなそこで。気に入った婦人でもあるかな」

「甲野の妹を貰うつもりなんですがね。どうでしょう」

「藤尾ふじおかい。うん」

「駄目ですかね」

「なに駄目じゃない」

「外交官の女房にや、ああ云うんでないといけないです」

「そこでだて。実は甲野の親父おやじが生きているうち、私と親父の間、少しはその話もあったんだがな。御前は知らんかも知ら

んが」

「叔父さんは時計をやると云いました」

「あの金時計かい。藤尾が玩弄おもちゃにするんで有名な」

「ええ、あの太古の時計です」

「ハハハあれで針が回るかな。時計はそれとして、実は肝心かんじんの本人の事だが——この間甲野の母さんおつかが来た時、ついでだから話して見たんだがね」

「はあ、何とか云いましたか」

「まことに好い御縁だが、まだ御身分がきまつて御出おいででないから残念だけでも……」

「身分がきまらなと云うのは外交官の試験に及第しないと云う意味ですかね」

「まあ、そうだろう」

「だろうはちつと驚ろいたな」

「いや、あの女の云う事は、非常に能弁な代りによく意味が通じないで困る。滔々とうとうと述べる事は述べるが、ついに要点が分らない。要するに不経済な女だ」

多少苦々にがにがしい気色けしきに、煙管でとんと膝頭ひざがしらを敲たたいた父さんは、視線さえ椽側えんがわの方へ移した。最前植え易かえた仏見笑ぶつけんしょうが鮮な紅を春と夏の境さかいに今ぞと誇うっている。

「だけれども断きつたんだか、断らないんだか分らないのは厄介やっかいですね」

「厄介だよ。あの女にかかると今までも随分厄介な事がだいぶあつた。猫撫声ねこなでこえで長ながつたらしくつて——私わしや嫌きらいだ」

「ハハハハそりや好よいが——ついに談判は発展しずになりましたんですか」

「つまり先方の云うところでは、御前が外交官の試験に及第したらやつてもいいと云うんだ」

「じゃ訳ない。この通り及第したんだから」

「ところがまだあるんだ。面倒な事が。まことにどうも」と云いながら父さんおとうは、手の平を二つ内側へ揃そろえて眼の球をぐりぐり擦こする。眼の球は赤くなる。

「及第しても駄目なんですか」

「駄目じゃあるまいが——欽吾きんごがうちを出ると云うそうだ」

「馬鹿な」

「もし出られてしまうと、年寄の世話の仕手がなくなる。だから藤尾に養子をしなければならない。すると宗近へでも、どこへでも嫁にやる訳には行かなくなると、まあこう云うんだな」

「下らない事を云うもんですね。第一甲野うちが家を出るなんて、

そんな訳がないがな」

「家を出るって、まさか坊主になる料簡りようけんでもなからうが、つまり嫁を貰って、あの御袋の世話をするのが厭いやだと云うんだろужやないか」

「甲野が神経衰弱だから、そんな馬鹿ばか気げた事を云うんですよ。間違ってる。よし出るたって——叔母さんが甲野を出して、養子をする気なんですか」

「そうなつては大変だと云って心配しているのさ」

「そんなら藤尾さんを嫁にやつても好きそうなものじゃありませんか」

「好い。好いが、万一の事を考えると私も心細くつてたまらないと云うのさ」

「何が何だか分りやしない。まるで八幡やわたの藪やぶ不知しらずへ這入はいったよ

うなものだ」

「本当に——要領を得ないにも困り切る」

父さんおとつは額おつに皺しわを寄せて上眼うわめを使いながら、頭なを撫で廻す。

「元来そりやいつの事です」

「この間だ。今日で一週間にもなるかな」

「ハハハハ私わたしの及第報告は二三日後おくれただけだが、父さんのは

一週間だ。親だけあつて、私より倍以上気楽ですぜ」

「ハハハだが要領を得ないからね」

「要領はたしかに得ませんね。早速要領を得るようにして来ます」

「どうして」

「まず甲野に妻帯の件を説諭して、坊主にならないようにしてしまつて、それから藤尾さんをくれるかくれないか判然はつきり談判し

て来るつもりです」

「御前一人でやる気かね」

「ええ、一人でたくさんです。卒業してから何にもしないから、せめてこんな事でもしなくっちゃ退屈でいけない」

「うん、自分の事を自分で片づけるのは結構な事だ。一つやつて見るが好い」

「それでね。もし甲野が妻を貰うと云ったら糸をやるつもりですが好いでしょうね」

「それは好い。構わない」

「一先本人の意志を聞いて見て……」

「聞かんでも好かろう」

「だって、そりや聞かなくっちゃいけませんよ。ほかの事とは違うから」

「そんなら聞いて見るが好い。ここへ呼ぼうか」

「ハハハハ親と兄の前で詰問しちやなおいけない。これから私が聞いて見ます。で当人が好いと云つたら、そのつもりで甲野に話しますからね」

「うん、よかろう」

宗近君は^{ぎり}ズボンと切の洋袴を二本ぬつと立てた。^{ぶつけんしやう}仏見笑と二人静けんすおしやうと蜷い子和尚と活きた布袋ほていの置物を残して廊下つづきを中二階ちゆうにかいへ上る。

とんとんと二段踏むと妹の御太鼓おたいこが奇麗きれいに見える。三段目に水色の絹リボンが、横に傾いて、ふつくらした片頬かたほが入口の方に向いた。

「今日は勉強だね。珍らしい。何だい」といきなり机の横へ坐り込む。糸子いとこははたりと本を伏せた。伏せた上へ肉のついた丸

い手を置く。

「何でもありませんよ」

「何でもない本を読むなんて、天下の逸民だね」

「どうせ、そうよ」

「手を放したって好いじゃないか。まるで散らしでも取ったよ
うだ」

「散らしでも何でも好くってよ。御生ごしようだからあっちへ行つてちよ
うだい」

「大変邪魔にするね。糸公、父おとつさんが、そう云つてたぜ」

「何て」

「糸はちつと女大学でも読めば好いのに、近頃は恋愛小説ばかり
読んでて、まことに困るって」

「あら嘘うそばかり。私がいつそんなものを読んで」

「兄さんは知らないよ。阿父さんおとつがそう云うんだから」

「嘘よ、阿父様おとうさまがそんな事をおっしゃるもんですか」

「そうかい。だって、人が来ると読み掛けた本を伏せて、ますおと杵落し見たように一生懸命におさえているところをもつて見ると、

阿父さんの云うところもまんざら嘘とは思えないじゃないか」

「嘘ですよ。嘘だって云うのに、あなたもよっぽど卑劣な方ね」

「卑劣は一大痛棒だね。注意人物の売国奴ばいこくどじゃないかハハハハ」

「だって人の云う事を信用なさらないんですもの。そんなら証拠を見せて上げましょうか。ね。待っていらつしやいよ」

糸子は抑えた本を袖で隠さんばかりに、机から手本てもとへ引き取つ

て、兄の見えぬように帯の影に忍ばした。

「す掬り替えちゃいけないぜ」

「まあ黙つて、待っていらつしやい」

糸子は兄の眼を掠^{かす}めて、長い袖の下に隠した本を、しきりに細工していたが、やがて

「ほら」と上へ出す。

両手で叮嚀^{ていねい}に抑えた頁^{ページ}の、残る一寸角^{いっすんかく}の真中に朱印が見える。

「見留^{みとめ}じゃないか。なんだ——甲野」

「分ったでしょう」

「借りたのかい」

「ええ。恋愛小説じゃないでしょう」

「種を見せない以上は何とも云えないが、まあ勘弁してやろう。時に糸公御前今年幾歳^{いくつ}になるね」

「当てて御覧なさい」

「当てて見ないだつて区役所へ行きや、すぐ分る事だが、ちよいと参考のために聞いて見るんだよ。隠さずに云う方が御前の

利益だ」

「隠さずに云う方がだつて——何だか悪い事でもしたようね。
わたしいや
私厭だわ、そんなに強迫されて云うのは」

「ハハハハさすが哲学者の御弟子だけあつて、容易に権威に服従しないところが感心だ。じゃ改めて伺うが、取つて御幾歳おいくつですか」

「そんな茶化ちやかしたつて、誰が云うもんですか」

「困つたな。叮嚀ていねいに云えば云うで怒るし。——一だつたかね。
二かい」

「おおかたそんなところでしよう」

「判然しないのか。自分の年が判然しないようじゃ、兄さんも少々心細いな。とにかく十代じゃないね」

「余計な御世話じゃありませんか。人の年齢としなんぞ聞いて。——それを聞いて何になさるの」

「なに別の用でもないが、実は糸公を御嫁にやろうと思つてさ」
冗談半分に相手になつて、調戯からかわれていた妹の様子は突然と變つた。熱い石を氷の上に置くと見る見る冷めて来る。糸子は一度に元気を放散した。同時に陽気な眼を陰に俯ふせて、畳みの目を勘定かんじようし出した。

「どうだい、御嫁は。厭いやでもないだろう」

「知らないわ」と低い声で云う。やつぱり下を向いたままである。

「知らなくつちや困るね。兄さんが行くんじゃない、御前が行くんだ」

「行くつて云いもしないのに」

「じゃ行かないのか」

糸子は頭かぶりをたてに振った。

「行かない？ 本当に」

答はなかった。今度は首さえ動かさない。

「行かないとなると、兄さんが切腹しなけりやならない。大変だ」

俯うつむ向いた眼の色は見えぬ。ただ豊ゆたかなる頬をかす掠めて笑の影が飛

び去った。

「笑い事じゃない。本当に腹を切るよ。好いかね」

「勝手に御切んなさい」と突然顔を上げた。にこにここと笑う。

「切るのは好いが、あんまり深刻だからね。なろう事ならこのまんまで生きている方が、御互に便利じゃないか。御前だつてたつた一人の兄さんに腹を切らしたつて、つまらないだろう」

「誰もつまると云やしないわ」

「だから兄さんを助けると思つてうんと御云い」

「だつて訳も話さないで、藪やぶから棒ぼうにそんな無理を云つたつて」

「訳は聞きさえすれば、いくらでも話すさ」

「好くつてよ、訳なんか聞かなくつても、私御嫁なんかに行かないんだから」

「糸公御前の返事は鼠ねずみ花火はなびのようにくるくる廻まわつているよ。錯乱さくらんたい体

だ」

「何ですつて」

「なに、何でもいい、法律上の術語だから——それでね、糸公、いつまで行つても埒らちが明かないから、一ひと思おもいに打ち明けて話してしまふが、実はこうなんだ」

「訳は聞いても御嫁にや行かなくつてよ」

「条件つきに聞くつもりか。なかなか狡猾だね。——実は兄さんが藤尾さんを御嫁に貰おうと思うんだがね」

「まだ」

「まだって今度^{こんだ}が^{はじめ}始てだね」

「だけれど、藤尾さんは御^お廃^よしなさいよ。藤尾さんの方で来たがつていないんだから」

「御前この間もそんな事を云つたね」

「ええ、だつて、厭^{いや}がつてるものを貰わなくつても好いじゃありませんか。ほかに女がいくらでも有るのに」

「そりや大いにごもつともだ。厭なものを強^ね請^だるなんて卑怯な兄さんじゃない。糸公の威信にも関係する。厭なら厭と事がきまればほかに捜すよ」

「いつそそうなすつた方がいいでしょう」

「だがその辺が判然しないからね」

「だから判然させるの。まあ」と内気な妹は少し驚いたように眼を机の上に転じた。

「この間甲野の御叔母おばさんが来て、下で内談をしていたろう。あの時その話があったんだとき。叔母さんが云うには、今はまだいけないが、一さんはじめが外交官の試験に及第して、身分がきまつたら、どうでも御相談を致ししょうつて阿爺おとつさんに話したそうだ」

「それで」

「だから好いじゃないか、兄さんがちゃんと外交官の試験に及第したんだから」

「おや、いつ」

「いつつて、ちゃんと及第しちまつたんだよ」

「あら、本当なの、驚ろいた」

「兄が及第して驚ろく奴があるもんか。失礼千万な」

「だって、そんなら早くそうおっしやれば好いのに。これでもだいぶ心配して上げたんだわ」

「全く御前の御蔭だよ。おかげ大いに感泣かんきゅうしているさ。感泣はしているようなものの忘れちまったんだから仕方がない」

兄妹は隔へだてなき眼と眼を見合せた。そうして同時に笑った。

笑い切った時、兄が云う。

「そこで兄さんもこの通り頭を刈つて、近々きんきん洋行するはずになつたんだが、阿父おとつさんの云うには、立つ前に嫁を貰もらつて人格を作つてけて責めるから、兄さんが、どうせ貰うなら藤尾さんを貰いましょう。外交官の妻君にはああ云うハイカラでないと将来困るからと云ったのさ」

「それほど御氣に入ったら藤尾さんになさい。——女を見るの

はやっぱり女の方が上手ね」

「そりゃ才媛糸公の意見に間違はなからうから、充分兄さんも参考にはするつもりだが、とにかく判然談判をきめて来なくっちゃいけない。向うだつて厭いやなら厭と云うだろう。外交官の試験に及第したからつて、急に気が變つて参りましようなんて輕薄な事は云うまい」

糸子は微かすかな笑を、二三段に切つて鼻から洩もらした。

「云うかね」

「どうですか。聞いて御覽なさらなくっちゃ——しかし聞くなら欽吾さんに御聞きなさいよ。恥かを搔かくといけないから」

「ハハハハ厭ことわなら断ことわるのが天下の定法じょうほうだ。断ことわわれたつて恥じやない……」

「だつて」

「……ないが甲野に聞くよ。聞く事は甲野に聞くが——そこに問題がある」

「どんな」

「先決問題がある。——先決問題だよ、糸公」

「だから、どんなつて、聞いてるじゃありませんか」

「ほかでもないが、甲野が坊主になるつて騒ぎなんだよ」

「馬鹿をおつしやい。縁喜えんぎでもない」

「なに、今の世に坊主になるくらいな決心があるなら、縁喜はともかく、大に慶すおおいべき現象だ」

「苛い事ひどを……だつて坊さんになるのは、酔興すいきようになるんじゃないでしよう」

「何とも云えない。近頃のように煩悶はんもんが流行した日にや」

「じゃ、兄さんからなつて御覧なさいよ」

「酔興にかい」

「酔興でも何でもいいから」

「だって五分刈ごぶがりでさえ懲役人と間違えられるところを青坊主になつて、外国の公使館に詰めていりや氣違としきや思われないもの。ほかの事なら一人の妹の事だから何でも聞くつもりだが、坊主だけは勘弁して貰いたい。坊主と油揚げあぶらげは小供の時きらいから嫌な
んだから」

「じゃ欽吾さんもしないだつて好いじゃありませんか」

「そうさ、何だか論理ロジックが少し変だが、しかしまあ、ならずに済むだらうよ」

「兄さんのおつしやる事はどこまでが真面目まじめでどこまでが冗談じょうだんだか分らないのね。それで外交官が勤まるでしようか」

「こう云うんでないと外交官には向かないとき」

「人を……それで欽吾さんがどうなすったんですよ。本当のところ」

「本当のところ、甲野がね。家と財産を藤尾にやって、自分を出てしまおうと云うんだとさ」

「なぜでしょう」

「つまり、病身で御叔母おばさんの世話が出来ないからだそうだ」

「そう、御氣の毒ね。ああ云う方は御金も家もいらないでしょう。そうなさる方が好いかも知れないわ」

「そう御前まで賛成しちゃ、先決問題が解決しにくくなる」

「だって御金が山のようにあつたって、欽吾さんには何にもならないでしょう。それよりか藤尾さんに上げる方が好よござんすよ」

「御前は女に似合わず氣前が好いね。もつとも人のものだけれども」

「私だつて御金なんかいりませんわ。邪魔になるばかりですもの」

「邪魔にするほどないからたしかだ。ハハハハ。しかしその心掛は感心だ。尼になれるよ」

「おお厭だ。^{いや}尼だの坊さんだのつて大嫌い」

「そこだけは兄さんも賛成だ。しかし自分の財産を棄てて吾家^{わがいえ}を出るなんて馬鹿^{ばか}氣^げている。財産はまあいいとして、——^{はじめ}欽吾に出られればあとが困るから藤尾に養子をする。すると一さんへは上げられませんと、こう御叔母^{おば}さんが云うんだよ。もつともだ。つまり甲野のわがままで兄さんの方が破談になると云う始末さ」

「じゃ兄さんが藤尾さんを貰うために、欽吾さんを留めようと云うんですね」

「まあ一面から云えばそうなるさ」

「それじゃ欽吾さんより兄さんの方がわがままじゃありませんか」

「今度は非常に論理的ロジカルに來たね。だってつまらんじゃないか、当然相續つづしている財産を捨てて」

「だって厭いやなら仕方がないわ」

「厭だなんて云うのは神経衰弱のせいだあね」

「神経衰弱じゃありませんよ」

「病的に違ないじゃないか」

「病氣じゃありません」

「糸公、今日は例に似ず大いに断々だんだんこ乎ことしているね」

「だって欽吾さんは、ああ云う方なんですもの。それを皆が病気にするのは、皆の方が間違っているんです」

「しかし健全じゃないよ。そんな動議を呈出するのは」

「自分のものを自分が棄てるんでしよう」

「そりゃごもつともだがね……」

「要らないから棄てるんでしよう」

「要らないって……」

「本当に要らないんですよ、甲野さんのは。負けおしや面当じやありません」

「糸公、御前は甲野の知己だよ。兄さん以上の知己だ。それほど信仰しているとは思わなかった」

「知己でも知己でなくつても、本当のところを云うんです。正

しい事を云うんです。叔母さんや藤尾さんがそうでないと云うんなら、叔母さんや藤尾さんの方が間違ってるんです。私は嘘を吐くのは大嫌だいきらいです」

「感心だ。学問がなくつても誠から出た自信があるから感心だ。兄さん大賛成だ。それでね、糸公、改めて相談するが甲野が家を出ても出なくつても、財産をやつてもやらなくつても、御前甲野のところへ嫁に行く気はあるかい」

「それは話がまるで違いますわ。今云つたのはただ正直なところを云つただけですもの。欽吾さんに御気の毒だから云つたんです」

「よろしい。なかなか訳が分っている。妹ながら見上げたものだ。だから別問題として聞くんだよ。どうだね厭いやかい」

「厭だつて……」 と言ひ懸^かけて糸子は急に俯^{うつむ}向いた。しばらくは半襟^{はんえり}の模様を見詰^みめてゐるよう^{ひとしずつ}に見えた。やがて瞬^{しげ}く睫^{まつげ}を絡^{から}んで一雫^{ひとしずく}の涙がぼたりと膝^{ひざ}の上に落ちた。

「糸公、どうしたんだ。今日は天候劇^{げき}変^{へん}で兄^{めい}さんに面喰^{めんくら}わしてばかりゐるね」

答のない口元が結^{むす}んだまましやくんで、見るうちにまた二雫^{ふたしずく}落ちた。宗近君は親讓^{せびろ}の背広^かの隠袋^{かくし}から、くちやくちやの手巾^{ハンケチ}をするりと出した。

「さあ、御拭^{ごふき}き」と云いながら糸子の胸の先へ押し付ける。妹は作りつけの人形のようにじつとして動かない。宗近君は右の手^てに手巾を差し出したまま、少し及び腰^{のぞ}になつて、下から妹の顔^{かほ}を覗^{のぞ}き込む。

「糸公厭^{いや}なのかい」

糸子は無言のまま首を掉^ふつた。

「じゃ、行く気だね」

今度は首が動かない。

宗近君は手巾を妹の膝の上に落したまま、身体^{からだ}だけを故^{もと}へ戻す。

「泣いちゃいけないよ」と云つて糸子の顔を見守っている。しばらくは双方共言葉が途切れた。

糸子はようやく手巾を取上げる。粗^{あら}い銘仙^{めいせん}の膝が少し染^{しみ}になつた。その上へ、手巾の皺^{しわ}を叮嚀^{ていねい}に延^のして四つ折に敷いた。角^{かど}をしつかり抑えている。それから眼を上げた。眼は海のようにである。

「私は御嫁には行きません」と云う。

「御嫁には行かない」とほとんど無意味に繰り返した宗近君は、

たちまち勢をつけて

「冗談云つちやいけない。今厭じゃないと云つたばかりじゃないか」

「でも、欽吾さんは御嫁を御貰いなさりやしませんもの」

「そりや聞いて見なけりや——だから兄さんが聞きに行くんだよ」

「聞くのは廃^よしてちょうだい」

「なぜ」

「なぜでも廃してちょうだい」

「じゃしょうがない」

「しょうがなくつても好いから廃してちょうだい。私は今のままでちつとも不足はありません。これで好いんです。御嫁に行くとかえつていけません」

「困つたな、いつの間に、そう硬くなつたんだらう。——糸公、兄さんはね、藤尾さんを貰うために、御前を甲野にやろうなんて利己主義で云つてゐるんじゃないよ。今のところじゃ、ただ御前の事ばかり考えて相談してゐるんだよ」

「そりや分つていますわ」

「そこが分りさえすれば、後が話がし好い。それでと、御前は甲野を嫌つてゐるんじゃないやなからう。——よし、それは兄さんがそう認めるから構わない。好いかね。次に、甲野に貰うか貰わないか聞くのは厭だと云うんだね。兄さんにはその理窟がさらに解せないんだが、それも、それでよしとするさ。——聞くのは厭だとして、もし甲野が貰うと云いさえすれば行つても好いんだらう。——なに金や家はどうでも構わないさ。一文無の甲野のところへ行こうと云やあ、かえつて御前の名誉だ。それでこ

そ糸公だ。兄さんも阿父さんおとつも故障を云やしない。……」

「御嫁に行ったら人間が悪くなるもんでしょうか」

「ハハハハ突然大問題を呈出するね。なぜ」

「なぜでも——もし悪くなると愛想あいそをつかさねるばかりですもの。だからいつまでもこうやって阿父様おとうさまと兄さんの傍そばにいた方が好いと思いますわ」

「阿父様と兄さんと——そりや阿父様も兄さんもいつまでも御前といつしよにいたい事はいたいがね。なあ糸公、そこが問題だ。御嫁に行ってますます人間が上等になつて、そうして御亭主に可愛がられれば好いじゃないか。——それよりか實際問題が肝要だ。そこでね、さっきの話だが兄さんが受合ったら好いだろう」

「何を」

「甲野に聞くのは厭だと、と云つて甲野の方から御前を貰いに来るのはいつの事だか分らずと……」

「いつまで待ったつて、そんな事があるものですか。私には欽吾さんの胸の中がちゃんと分つています」

「だからさ、兄さんが受合うんだよ。是非甲野にうんと云わせるんだよ」

「だつて……」

「何云わせて見せる。兄さんが責任をもつて受合うよ。なあに大丈夫だよ。兄さんもこの頭が延びしだい外国へ行かなくっちゃならない。すると当分糸公にも逢^あえないから、平生親切^{へいぜい}にしてくれた御礼に、やつてやるよ。——狐の袖無^{ちやんちやん}の御礼に。ねえ好いだろう」

糸子は何とも答えなかつた。下で阿父^{おとつ}さんが謡^{うたい}をうたい出す。

「そら始まつた——じゃ行つて来るよ」と宗近君は中二階ちゆうにかいを下りる。

十七

小野と浅井は橋まで来た。来た路は青麦の中から出る。行く路は青麦のなかに入る。一筋を前後に余して、深い谷の底を鉄軌レエルが通る。高い土手は春に籠こもる緑を今やと吹き返しつつ、見事なる切り岸を立て廻して、丸い屏風びやうぶのごとく弧形に折れて遥はるかに去る。断橋は鉄軌レエルを高きに隔つる事丈じやうを重ねて十に至つて南より北に横ぎる。欄に倚よつて俯ふすとき広き兩岸の青せいを極きわめつくして、始めて石垣に至る。石垣を底に見下して始めて茶色の路みちが細く横よこたわる。鉄軌は細い路のなかに細く光る。——二人は断橋

の上まで来て留^{とま}った。

「いい景色だね」

「うん、ええ景色じゃ」

二人は欄に倚^よつて立つた。立つて見る間^まに、限りなき麦は一分^{いちぶ}ずつ延びて行く。暖かいと云わんよりむしろ暑い日である。

あおむしろ

青蓆をのべつに敷いた一枚の果^{はて}は、がたりと調子の変った地味な森になる。黒ずんだ常磐木^{ときわぎ}の中に、けばけばしくも黄を含む緑の、粉^ことなって空に吹き散るかと思われるのは、樟^{くす}の若葉らしい。

「久しぶりで郊外へ来て好い心持だ」

「たまには、こう云う所も好^ええな。僕はしかし田舎^{いなか}から帰ったばかりだからいっこう珍しゅうない」

「君はそうだろう。君をこんな所へ連れて来たのは少し気の毒

だつたね」

「なに構わん。どうせ遊あそんどるんだから。しかし人間も遊んどる暇があるようでは駄目じゃな、君。ちつとなんぞ金儲かねもうけの口はないかい」

「金儲は僕の方にやないが、君の方にやたくさんあるだろう」

「いや近頃は法科もつまらん。文科と同じこつちや、銀時計でなくちや通用せん」

小野さんは橋の手擦てすりに背を靠もたせたまま、内隠袋うちがくしから例の通り銀製の煙草入を出してぱちりと開あけた。箔はくを置いた埃及煙草エジプトたばこの吸口が奇麗に並んでゐる。

「一本どうだね」

「や、ありがとう。大変立派なものを持つとるの」

「貰い物だ」と小野さんは、自分も一本抜き取った後で、また

見えない所へ投げ込んだ。

二人の煙はつつがなく立ち騰のぼつて、事なき空に入る。

「君は始終しじゅうこんな上等な煙草を呑のんだのか。よほど余裕がある
と見えるの。少し貸さんか」

「ハハハハこつちが借りたいくらいだ」

「なにそんな事があるものか。少し貸せ。僕は今度国へ行つた
んで大變ぜい錢がいつて困つとるところじゃ」

本氣に云っているらしい。小野さんの煙草の煙がふうと横に
走つた。

「どのくらい要いるのかね」

「三十円でも二十円でも好ええ」

「そんなにあるものか」

「じゃ十円でも好え。五円でも好え」

浅井君はいくらでも下げる。小野さんは両肘りょうじうを鉄の手擦てすりに後うしろから持たして、山羊仔キッドの靴を心持前へ出した。煙草を啣くわえたまま、眼鏡越に爪先の飾を眺ながめている。遅日影長くして光を惜まちじつず。拭き込んだ皮の濃こまやかに照る上に、眼に入らぬほどの埃ほこりが一面に積んでゐる。小野さんは携えた細手の洋杖ステッキで靴の横腹をぽんぽんと鞭むちうった。埃は靴を離れて一寸いっすんほど舞い上がる。鞭うたれた局部またらだけは斑まだらに黒くなった。並んで見える浅井の靴は、兵隊靴のごとく重くかつ無細工ぶさいくである。

「十円くらいなら都合が出来ない事も無いが——いつ頃ごろまで」
 「今月末すえにはきつと返す。それで好かろう」と浅井君は顔を寄せて来る。小野さんは口から煙草を離した。指の股またに挟んだまま、一振はたと三分さんぶの灰は靴の甲に落ちた。
 体たいをそのままに白い襟えりの上から首だけを横ねじに振ると、欄干らんかんに

頬杖をついた人の顔が五寸下に見える。

「今月末でも、いつでも好い。——その代り少し御願がある。聞いてくれるかい」

「うん、話して見い」

浅井君は容易に受合った。同時に頬杖をやめて背を立てる。二人の顔はすれすれに來た。

「実は井上先生の事だがね」

「おお、先生はどうしとるか。帰つてから、まだ尋ねる閑がな
いから、行かんが。君先生に逢うたら宜しく云うてくれ。ついでに御嬢さんにも」

浅井君はハハハハと高く笑つた。ついでに欄干から胸をつき出して、涎のごとき唾を遙かの下に吐いた。

「その御嬢さんの事なんだが……」

「いよいよ結婚するか」

「君は気が早くつていけない。そう先へ云つちまつちやあ……」
と言葉を切つて、しばらく麦畑を眺めていたが、たちまち手に持った吸殻を向へ投げた。白いカフスが七宝の夫婦釦と共にかしゃと鳴る。一寸に余る金が空を掠めて橋の袂に落ちた。落ちた煙は逆様に地から這い揚がる。

「もつたいない事をするのう」と浅井君が云った。

「君本当に僕の云う事を聞いてくれるのかい」

「本当に聞いとる。それから」

「それからつて、まだ何にも話しやしないじゃないか。——金の工面はどうでもするが、君に折入つて御願があるんだよ」

「だから話せ。京都からの知己じゃ。何でもしてやるぞ」

調子はだいぶ熱心である。小野さんは片肘を放して、ぐるり

と浅井君の方へ向き直る。

「君ならやつてくれるだろうと思つて、実は君の帰るのを待つていたところだ」

「そりや、好え時に帰つて来た。何か談判でもするのか。結婚の条件か。近頃は無財産の細君を貰うのは不便だからのう」

「そんな事じゃない」

「しかし、そう云う条件を付けて置く方が君の将来のために好えぞ。そうせい。僕が懸合^{かけあ}うてやる」

「そりや貰^{もら}うとなれば、そう云う談判にしても好いが……」

「貰う事は貰うつもりじやろう。みんな、そう思うとるぞ」

「誰が」

「誰がてて、我々が」

「そりや困る。僕が井上の御嬢さんを貰うなんて、——そんな

堅い約束はないんだからね」

「そうか。——いや怪しいぞ」と浅井君が云った。小野さんは腹の中で下等な男だと思う。こんな男だから破談を平気に持ち込む事が出来るんだと思う。

「そう頭から冷やかしかつや話が出来ない」と故もとのようなおとなしい調子で云う。

「ハハハハ。そう真面目まじめにならんでも好い。そうおとなしくちや損だぞ。もう少し面つらの皮を厚くせんと」

「まあ少し待ってくれたまえ。修業中なんだから」

「ちと稽古けいこのためにどつかへ連れて行つてやろうか」

「何分宜よろしく……」

「などと云つて、裏では盛さかんに修業しとるかも知れんの」

「まさか」

「いやそうでないぞ。近頃だいぶ修飾^{しやれ}するところをもつて見ると。ことにきつきの巻煙草入の出所^{でところ}などははなはだ疑わしい。そう云えばこの煙草も何となく妙な臭^{におい}がするわい」

浅井君はここに至つて指の股に焦^こげついて来そうな煙草を、鼻の先へ持つて来てふんふんと二三度嗅^かいだ。小野さんはいよいよノンセンスなわる洒落^{じゃれ}だと思つた。

「まあ歩きながら話そう」

悪洒落の続きを切るために、小野さんは一歩橋の真中^{まんなか}へ踏み出した。浅井君の肘^{ひじ}は欄干を離れる。右左地を抜く麦に、日は空から寄つて来る。暖かき緑は穂^{かす}を掠^{あぜ}めて畦^{のぼ}を騰^{たの}る。野を蔽^{おほ}う一面の陽炎^{かげろう}は逆上^{のぼせ}るほどに二人を込めた。

「暑い^{あつ}のう」と浅井君は後から跟^ついて来る。

「暑い」と待ち合わせた小野さんは、肩の並んだ時、歩き出す。

歩き出しながら真面目な問題に入る。

「さっきの話だが——実は二三日前井上先生の所へ行つたところ、先生から突然例の縁談一条を持ち出されて、ね。……」

「待つてましたじゃ」と受けた浅井君はまた何か云いそうだから、小野さんは談話の速力を増して、急に進行してしまふ。——

「先生が随分はげしく来たので、僕もそう世話になつた先生の感情を害する訳にも行かないから、熟考するために二三日の余裕を与えて貰つて歸つたんだがね」

「そりや慎重の……」

「まあしまいまで聞いてくれたまえ。批評はあとで緩くり聞^{ゆつ}くから。——それで僕も、君の知^とっている通、先生の世話には大變なつたんだから、先生の云う事は何でも聞かなければ義理がわるい……」

「そりゃ悪い」

「悪いが、ほかの事と違つて結婚問題は生涯しょうがいの幸福に關係する大事件だから、いくら恩のある先生の命令だつて、そう、おいそれと服従する訳にはいかない」

「そりゃいけない」

小野さんは、相手の顔をじろりと見た。相手は存外真面目である。話は進行する。――

「それも僕に判然たる約束をしたとか、あるいは御嬢さんに対して済まん關係でも忤こじらえたと云う大責任があれば、先生から催促されるまでもない。こつちから進んで、どうでも方かたをつけるともりだが、實際僕はその点に関しては潔白なんだからね」

「うん潔白だ。君ほど高尚で潔白な人間はない。僕が保証する」
小野さんはまたじろりと浅井君の顔を見た。浅井君はいつこ

う気が着かない。話はまた進行する。――

「ところが先生の方では、頭から僕にそれだけの責任があるかのごとく見倣みなしてしまつて、そうして万事をそれから演繹えんえきしてくるんだらう」

「うん」

「まさか根本に立ち返つて、あなたの御考は出立点が間違つていますと誤謬ごびゅうを指摘する訳にも行かず……」

「そりゃ、あまり君が人が好過ぎるからじゃ。もう少し世の中に擦すれんと損だぞ」

「損は僕も知つてゐるんだが、どうも僕の性質として、そう露骨むきに人に反対する事が出来ないんだね。ことに相手は世話になつた先生だらう」

「そう、相手が世話になつた先生じゃからな」

「それに僕の方から云うと、今ちようど博士論文を書きかけている最中だから、そんな話を持ち込まれると余計困るんだ」

「博士論文をまだ書いとるか、えらいもんじゃな」

「えらい事もない」

「なにえらい。銀時計の頭でなくちや、とても出来ん」

「そりやどうでも好いが、——それでね、今云う通りの事情だから、せつかくの厚意はありがたいけれども、まあこのところはいったん断わりたいと思うんだね。しかし僕の性質じゃ、とても先生に逢^あうと気の毒で、そんな強い事が云えそうもないから、それで君に頼みたいと云う訳だが。どうだね、引き受けてくれるかい」

「そうか、訳ない。僕が先生に逢^おうてよく話してやろう」

浅井君は茶漬を掻^かき込^こむように容易^{たやす}く引き受けた。注文通り

に行つた小野さんは中休みに一二歩前へ移す。そうして云う。

「その代り先生の世話は生涯しやうがいする考だ。僕もいつまでもこんなにぐずぐずしているつもりでもないから——実のところを云うと先生も故もとのように経済が楽じゃないようだ。だからなお気の毒なのさ。今度の相談もただ結婚と云う単純な問題そふりじゃなくて、それを方便にして、僕の補助を受けたいような素振も見えたくらいだ。だから、そりややるよ。飽あくまでも先生のために尽すつもりだ。だが結婚したから尽す、結婚せんから尽さないなんて、そんな輕薄な料簡りようけんは少しもこつちにやないんだから——世話になつた以上はどうしたつて世話になつたのさ。それを返してしまふまではどうしたつて恩は消えやしないからな」

「君は感心な男だ。先生が聞いたらさぞ喜ぶだろう」

「よく僕の意志が徹するように云つてくれたまえ。誤解が出来るとまた後が困るから」

「よし。感情を害せんようにの。よう云うてやる。その代り十円貸すんぜ」

「貸すよ」と小野さんは笑ながら答えた。

錐は穴を穿つ道具である。縄は物を括る手段である。浅井君は破談を申し込む器械である。錐でなくては松板を潜り抜けようと企てるものはない。縄でなくては榮螺を取り巻く覚悟はつかぬ。浅井君にして始めてこの談判を、風呂に行く気で、引き受ける事が出来る。小野さんは才人である。よく道具を用いるの法を心得ている。

ただ破談を申し込むのと、破談を申し込みながら、申し込んだ後を奇麗に片づけるのとは別才である。落葉を振うものは必

ずしも庭を掃く人とは限らない。浅井君はたとい内裏拝観だいりはいかんの際でも落葉を振りおとす事をあえてする無遠慮な男である。と共に、たとい内裏拝観の際でも一塵を掃う事を解せざるほどに無責任の男である。浅井君は浮ぶ術を心得ずして、水に潜る度胸もぐ者である。否潜るときに、浮ぶ術が必要であると考えつけぬ豪傑である。ただ引受ける。やつて見ようと云う気で、何でも引き受ける。それだけである。善悪、理非、輕重けいちよう、結果を度外に置いて事物を考え得るならば、浅井君は他意なき善人である。

それほどの事を知らぬ小野さんではない。知つて依頼するのはただ破談を申し込めばそれで構わんと見限みぎりをつけたからである。先方で苦状くじようを云えば逃げる気である。逃げられなくても、そのうち向うから泣寝入なきねいりにせねばならぬような準備をととのえてある。小野さんは明日藤尾あしたと大森へ遊びに行く約束がある。

——大森から帰ったあととならば大抵な事が露見しても、藤尾と関係を絶つ訳には行かぬだろう。そこで井上へは約束通り物質的の補助をする。

こう思い定めている小野さんは、浅井君が快よく依頼に応じた時、まず片荷かたにだけ卸おろしたなと思った。

「こう日が照ると、麦の香においが鼻の先へ浮ういてくるようだね」と小野さんの話頭はようやく自然に触れた。

「香においがするかの。僕にはいつこうにおわんが」と浅井君は丸い鼻をふんふんと云わしたが、

「時に君はやはりあのハムレットの家うちへ行くのか」と聞く。

「甲野こうのの家かい。まだ行っている。今日もこれから行くんだ」と何気なく云う。

「この間京都へ行つたそうじゃな。もう帰つたか。ちと麦の香におい

でも嗅^かいで来たか知らんて。——つまらんのう、あんな人間は。何だか陰気くさい顔ばかりしているじゃないか」

「そうさね」

「ああ云う人間は早く死んでくれる方が好^ええ。だいぶ財産があるか」

「あるようだね」

「あの親類の人はどうした。学校で時々顔を見たが」

「宗近^{むねちか}かい」

「そうそう。あの男の所へ二三日中^{うち}に行こうと思つとる」

小野さんは突然留^{とど}めた。

「何しに」

「口を頼みにさ。できるだけ運動して置かんと駄目だからな」

「だって、宗近だって外交官の試験に及第しないで困つてると

ころだよ。頼んだつてしようがない」

「なに構わん。話に行つて見る」

小野さんは眼を地面の上へ卸おろして、二三間は無言で来た。

「君、先生のところへはいつ行つてくれる」

「今夜か明日あしたの朝行つてやる」

「そうか」

麦畑を折れると、杉の木陰こかげのだらだら坂になる。二人は前後して坂を下りた。言葉を交すほどの違いとまもない。下り切つて疎まばらな杉垣を、肩を並べて通り越すとき、小野さんは云つた。――

「君もし宗近へ行つたらね。井上先生の事は話さずに置いてくれたまえ」

「話しやせん」

「いえ、本当に」

「ハハハハ大變恥^{はじ}かんどるの。構^はわんじやないか」

「少し困る事があるんだから、是非……」

「好し、話しやせん」

小野さんははなはだ心元^{しころもと}なく思つた。半分ほどは今頼んだ事を取り返したと思つた。

四つ角で浅井君に別れた小野さんは、安からぬ胸を運んで甲野^{やしき}の邸^{やしろ}まで来る。藤尾^{ふじお}の部屋へ這^{はい}入つて十五分ほど過ぎた頃、宗近君の姿は甲野さんの書齋の戸口に立つた。

「おい」

甲野さんは故^{もと}の椅子に、故の通りに腰を掛けて、故のごとくに幾^き何^か模様を図案^{ずあん}している。丸に三^みつ鱗^{うろこ}はとくに出来上つた。

おいと呼ばれた時、首を上げる。驚いたと云わんよりは、激したと云わんよりは、臆^{おく}したと云わんよりは、様子ぶつたと云

わんよりはむしろ遥かに簡単な上げ方である。したがつて哲学的である。

「君か」と云う。

宗近君はつかつかと洋卓の角まで進んで来たが、いきなり太い眉に八の字を寄せて、

「こりや空気が悪い。毒だ。少し開けよう」と上下の栓釘を抜き放つて、真中の円鈕を握るや否や、正面の仏蘭西窓を、床を掃うごとく、一文字に開いた。室の中には、庭前に芽ぐむ芝生の緑と共に、広い春が吹き込んで来る。

「こうすると大変陽気になる。ああ好い心持だ。庭の芝がだいぶ色づいて来た」

宗近君は再び洋卓まで戻つて、始めて腰を卸した。今さきが謎の女が坐っていた椅子の上である。

「何をしているね」

「うん？」と云つて鉛筆の進行を留めた甲野さんは

「どうだ。なかなか旨い^{うま}だろう」と模様いっぱいになった紙片を、宗近君の方へ、洋卓の上を滑^{すべ}らせる。

「何だこりや。恐ろしいたくさん書いたね」

「もう一時間以上書いています」

「僕が来なければ晩まで書いているんだろう。くだらない」

甲野さんは何とも云わなかった。

「これが哲学と何か関係でもあるのかい」

「有つても好い」

「万有世界の哲学的象徴とでも云うんだろう。よく一人の頭でこんな並べられたもんだね。紺屋^{こんや}の上絵師^{うわえし}と哲学者と云う論文でも書く気じゃないか」

甲野さんは今度も何とも云わなかった。

「何だか、どうも相変らずぐずぐずしているね。いつ見ても煮え切らない」

「今日は特別煮え切らない」

「天気の良いじゃないか、ハハハハ」

「天気の良いより、生きてるせいだよ」

「そうさね、煮え切ってぴんぴんしているものは沢山たんとないよう
だ。御互も、こうやって三十年近くも、しくしくして……」

「いつまでも浮世の鍋なべの中で、煮え切れずにいるのさ」

甲野さんはここに至って始めて笑った。

「時に甲野さん、今日は報告かたがた少々談判に来たんだがね」

「むつかしい来きようだ」

「近いうち洋行をするよ」

「洋行を」

「うん欧羅巴^{ヨーロッパ}へ行くのさ」

「行くのはいいが、親父^{おやじ}見たように、煮え切っちゃいけない」

「なんとも云えないが、印度^{インド}洋さえ越せば大抵大丈夫だろう」

甲野さんはハハハハと笑った。

「実は最近の好機において外交官の試験に及第したんだから、この通り早速頭を刈ってね、やつぱり、最近の好機において出掛けなくっちゃならない。塵事多忙だ。なかなか丸や三角を並べちゃいけない」

「そりやおめでたい」と云った甲野さんは洋卓越^{テエブル}に相手の頭をつらつら観察した。しかし別段批評も加えなかった。質問も起さなかった。宗近君の方でも進んで説明の労を取らなかった。したがって頭はそれぎりになる。

「まずここまでが報告だ、甲野さん」と云う。

「うちの母に逢ったかい」と甲野さんが聞く。

「まだ逢わない。今日はこっちの玄関から、上ったから、日本間の方はまるで通らない」

なるほど宗近君は靴のままである。甲野さんは椅子の背に倚りかかつて、この楽天家の頭と、更紗模様の襟飾と——襟飾は例に因つて襟の途中まで浮き出している。——それから親讓の背広とをじつと眺めている。

「何を見ているんだ」

「いや」と云つたままやつぱり眺めている。

「御叔母さんに話して来ようか」

今度はいいや、とも何とも云わずに眺めている。宗近君は椅子から腰を浮かしかかる。

「廃よすが好い」

洋卓むこうがわの向側から一句を明瞭めいりょうに云い切った。

おもむろ

徐に椅子を離れた長髪おさの人は右の手で額を搔かき上げながら、左の手に椅子の肩を抑えたまま、亡なき父の肖像画の方に顔を向けた。

「母に話すくらいなら、あの肖像に話してくれ」

親譲りの背広を着た男は、丸い眼を据すえて、室へやの中に聳そびえる、漆うるしのような髪あるじの主を見守った。次に丸い眼を据えて、壁の上に

ある故人の肖像を見守った。最後に漆の髪の主と、故人の肖像とを見較みくらべた。見較べてしまった時、聳えたる人は瘠やせた肩を動かして、宗近君の頭の上から云う。――

「父は死んでいる。しかし活いきた母よりもたしかだよ。たしかだよ」

椅子に倚る人の顔は、この言葉と共に、自おのずからまた画像の方に向つた。向つたなりしばらくは動かない。活きた眼は上からみおろ見下している。

しばらくして、椅子に倚る人が云う。――

「御お叔父じさんも氣の毒な事をしたなあ」

立つ人は答えた。――

「あの眼は活きている。まだ活きている」

言い終つて、部屋の中を歩き出した。

「庭へ出よう、部屋の中は陰氣でいけない」

席を立つた宗近君は、横から来て甲野さんの手を取るや否や、

明け放つた仏蘭西窓フランスまどを抜けて二段の石階しばふを芝生くだへ下る。足が柔

かい地に着いた時、

「いつたいたいどうしたんだ」と宗近君が聞いた。

芝生は南に走る事十間余にして、高檜たかがしの生垣に尽くる。幅は半ばに足らぬ。繁しげき植込に遮さえぎられた奥は、五坪いつつばほどの池を隔てて、張出はりだしの新座敷には藤尾の机が据えてある。

二人は緩ゆるき歩調に、芝生を突き当った。帰りには二三間迂回うねつて、植込の陰を書斎かたの方へ戻つて来た。双方共無言である。足並は偶然にも揃そろつている。植込が真中で開いて、一二の敷石に、池の方かたへ人を誘う曲り角まで来た時、突然新座敷で、雉子きじの鳴くように、けたたましく笑う声がした。二人の足は申し合せたごとくぴたりと留まる。眼は一時に同じ方角へ走る。

四尺の空地くうちを池の縁ふちまで細長く余して、真直まっすぐに水に落つる池の向側むこうがわに、横から伸のす浅葱桜あさぎざくらの長い枝を軒のあたりに翳かざして小野さんと藤尾がこちらを向いて笑いながら椽鼻えんばなに立っている。不規則なる春の雑樹ぞうきを左右に、桜の枝を上のぼる温ぬるむ水に根を

抽^{ぬきん}でて這^はい上がる蓮^{はす}の浮葉を下に、——二人の活人画は包まれ
 て立つ。仕切る枠^{わく}が自然の景物の粹^{すい}をあつめて成るがために、
 ——枠の形が趣きを損^{そこ}なわぬほどに正しくて、また眼を乱さぬ
 ほどに不規則なるがために——飛石に、水に、椽^{えん}に、間隔の適
 度なるがために——高きに失わず、低きに過ぎざる恰好^{かつこう}の地位
 にあるために——最後に、一息の短かきに、吐^{まほろし}く幻影と、忽然^{こつぜん}
 に現われたるために——二人の視線は水^{むかい}の向の二人にあつまつ
 た。と共に、水の向の二人の視線も、水のこなたの二人に落ち
 た。見合す四人は、互に互^{くぎづけ}を釘付にして立つ。際^{きわ}どい瞬間であ
 る。はつと思う刹那^{せつな}を一番早く飛び超^こえたものが勝になる。
 女はちらりと白足袋の片方を後^{うしろ}へ引いた。代赭^{たいしゃ}に染めた古代
 模様の鮮^{あざや}かに春^さを寂^さびたる帯の間から、するすると蜿蜒^{うね}るもの
 を、引き千切^{ちぎ}れとばかり鋭^きどく抜き出した。織^{ほそ}き蛇^だの膨^{ふく}れたる

頭を掌に握つて、黄金の色を細長く空に振れば、深紅の光は
発矢と尾より迸しる。――次の瞬間には、小野さんの胸を左右
に、燦爛たる金鎖が動かぬ稲妻のごとく懸つていた。

「ホホホホ一番あなたによく似合う事」

藤尾の癩声は鈍い水を敲いて、鋭どく二人の耳に跳ね返つて
来た。

「藤……」と動き出そうとする宗近君の横腹を突かぬばかりに、
甲野さんは前へ押した。宗近君の眼から活人画が消える。追いかぶさるように、後から乗し懸つて来た甲野さんの顔が、親し
き友の耳のあたりまで着いたとき、

「黙つて……」と小声に云いながら、煙に巻かれた人を植込の
影へ引いて行く。

肩に手を掛けて押すように石段を上つて、書齋に引き返した

甲野さんは、無言のまま、扉に似たる仏蘭西窓を左右からどたりと立て切った。上下うえしたの栓釘ボルトを式かたのごとく鎖さす。次に入口の戸に向う。かねて差し込んである鍵かぎをかちやりと回すと、錠じようは苦もなく卸おりた。

「何をするんだ」

「部屋を立て切った。人が這はい入つて来ないように」

「なぜ」

「なぜでも好い」

「全体どうしたんだ。大変顔色が悪い」

「なに大丈夫。まあ掛けたまえ」と最前の椅子を机に近く引きずつて来る。宗近君は小供のごとく命令に服した。甲野さんは相手を落ちつけた後、静のちかに、用い慣なれた安楽椅子に腰おろを卸す。体は机に向つたままである。

「宗近さん」と壁を向いて呼んだが、やがて首だけぐるりと回して、正面から、

「藤尾は駄目だよ」と云う。落ちついた調子のうちに、何となくぬる あたたかみ温い暖味があつた。すべての枝を縁に返す用意のために、寂びたる中を人知れず通う春の脈は、甲野さんの同情である。

「そうか」

腕を組んだ宗近君はこれだけ答えた。あとから、

「糸公もそう云つた」と沈んでつけた。

「君より、君の妹の方が眼がある。藤尾は駄目だ。飛び上りものだ」

かちやりと入口の円鈕ノツブをねじ握つたものがある。戸は開あかない。今度はとんとんと外からたた敲く。宗近君は振り向いた。甲野さんは眼さえ動かさない。

「うちやつて置け」と冷やかに云う。

入口の扉に口を着けたようにホホホと高く笑ったものがある。足音は日本間の方へ馳^かけながら遠退^{とおの}いて行く。二人は顔を見合わした。

「藤尾だ」と甲野さんが云う。

「そうか」と宗近君がまた答えた。

あとは静かになる。机の上の置時計がきちきちと鳴る。

「金時計も廃^よせ」

「うん。廃そう」

甲野さんは首を壁に向けたまま、宗近君は腕^{こまめ}を拱^{こまめ}いたまま、

——時計はきちきちと鳴る。日本間の方で大勢が一度に笑った。

「宗近さん」と欽^{きん}吾^ごはまた首を向け直した。「藤尾に嫌われた

よ。黙^{もく}つてゐる方がいい」

「うん黙っている」

「藤尾には君のような人格は解らない。浅墓あさはかな跳ね返りはかえものだ。

小野にやってしまえ」

「この通り頭ができた」

宗近君は節太ふしづとの手を胸から抜いて、刈り立かたての頭てつぺんの天辺をとんと敲いた。

甲野さんは眼尻に笑の波を、あるか、なきかに寄せて重々おもおもしく首肯うなずいた。あとから云う。

「頭ができれば、藤尾なんぞは要いらないだろう」

宗近君は軽くうふんと云ったのみである。

「それでようやく安心した」と甲野さんは、くつろいだ片足を上げて、残る膝頭ひざがしらの上へ載のせる。宗近君は巻煙草を燻くゆらし始めた。吹く煙のなから、

「これからだ」と独語ひとりごとのように云う。

「これからだ。僕もこれからだ」と甲野さんも独語のように答えた。

「君もこれからか。どうこれからなんだ」と宗近君は煙草の煙けむを押し開いて、元氣づいた顔を近寄ちかよせた。

「本来の無一物から出直すんだからこれからさ」

指の股しきしまに敷島しきしまを挟んだまま、持つて行く口のある事さえ忘れ

て、呆氣あつけに取られた宗近君は、

「本来の無一物から出直すとは」と自ら自らの頭脳みずかを疑うごと

く問い返した。甲野さんは尋常の調子で、落ちつき払った答をする。――

「僕はこの家うちも、財産も、みんな藤尾にやってしまった」

「やってしまった？　いつ」

「もう少しさつき。その紋尽しを書いている時だ」

「そりゃ……」

「ちようどその丸に三つ鱗を描いてる時だ。——その模様が一番よく出来ている」

「やつてしまうつてそう容易く……」

「何要るものか。あればあるほど累だ」

「御叔母さんは承知したのかい」

「承知しない」

「承知しないものを……それじゃ御叔母さんが困るだろう」

「やらない方が困るんだ」

「だって御叔母さんは始終君がむやみな事をしやしまいかと思つて心配しているんじゃないか」

「僕の母は偽物だよ。君らがみんな欺かれてるんだ。母じや

ない謎だ。^{なぞ}澆季の文明の特産物だ」

「そりゃ、あんまり……」

「君は本当の母でないから僕が僻^{ひが}んでいると思つてゐるんだろう。それならそれで好いさ」

「しかし……」

「君は僕を信用しないか」

「無論信用するさ」

「僕の方が母より高いよ。賢いよ。理^{わけ}由が分つてゐるよ。そうして僕の方が母より善人だよ」

宗近君は黙つてゐる。甲野さんは続けた。――

「母の家を出てくれるなと云うのは、出てくれと云う意味なんだ。財産を取れと云うのは寄こせと云う意味なんだ。世話をし
て貰^{もら}いたいと云うのは、世話になるのが厭^{いや}だと云う意味なんだ。」

——だから僕は表向母の意志に忤さからつて、内実は母の希望通にしてやるのさ。——見たまえ、僕が家を出たあとには、母が僕がわるくつて出たように云うから、世間もそう信じるから——僕はそれだけの犠牲をあえてして、母や妹のために計つてやるんだ」

宗近君は突然椅子いすを立つて、机の角かどまで来ると片肘かたひじを上かたに突いて、甲野さんの顔を掩おいかぶすように覗のぞき込みながら、

「貴様、気が狂ったか」と云った。

「氣違は頭から承知の上だ。——今まででも蔭じや、馬鹿の氣違のと呼びつづけに呼ばれていたんだ」

この時宗近君の大きな丸い眼から涙がぽたぽたと机の上のレオパルジに落ちた。

「なぜ黙っていたんだ。向むこうを出してしまえば好いのに……」

「向を出したって、向の性格は墮落するばかりだ」

「向を出さないまでも、こつちが出るには当るまい」

「こつちが出なければ、こつちの性格が墮落するばかりだ」

「なぜ財産をみんなやつたのか」

「要^いらないもの」

「ちよつと僕に相談してくれば好かつたのに」

「要らないものをやるのに相談の必要もないからさ」

宗近君はふうんと云つた。

「僕に要らない金のために、義理のある母や妹を墮落させたところが手柄にもならない」

「じやいよいよ家を出る気だね」

「出る。おれば両方が墮落する」

「出てどこへ行く」

「どこだか分らない」

宗近君は机の上にあるレオパルジを無意味に取つて、背皮せがわを
豎たてに、勾配こうばいのついた櫺けやきの角でとんとんと軽く敲たたきながら、少し
沈吟ちんぎんの体ていであつたが、やがて、

「僕のうちへ来ないか」と云う。

「君のうちへ行つたつて仕方がない」

「厭いやかい」

「厭いやじゃないが、仕方がない」

宗近君はじつと甲野さんを見た。

「甲野さん。頼むから来てくれ。僕や阿父おやじのためはとにかく、

糸公のために来てやつてくれ」

「糸公のために？」

「糸公は君の知己みそこだよ。御叔母おばさんや藤尾さんが君を誤解して
も、僕が君を見損みそこなつても、日本中がことごとく君に迫害を加

えても、糸公だけはたしかだよ。糸公は学問も才気もないが、よく君の価値ねうちを解している。君の胸の中を知り抜いている。糸公は僕の妹だが、えらい女だ。尊たつとい女だ。糸公は金が一文もなくつても墮落する気遣きづかいのない女だ。——甲野さん、糸公を貰つてやつてくれ。家うちを出ても好い。山の中へ這入はいつても好い。どこへ行つてどう流浪るろうしても構わない。何でも好いから糸公を連れて行つてやつてくれ。——僕は責任をもつて糸公に受合つて来たんだ。君が云う事を聞いてくれないと妹に合す顔がない。たった一人の妹を殺さなくっちゃならない。糸公は尊たつとい女だ、誠のある女だ。正直だよ、君のためなら何でもするよ。殺すのはもつたいない」

宗近君は骨張つた甲野さんの肩を椅子の上で振り動かした。

十八

小夜子^{さよこ}は婆さんから菓子^{こし}の袋を受取った。底を立てて出雲焼^{いずもやき}の皿に移すと、真中にある青い鳳凰^{ほうおう}の模様が和製のビスケットで隠れた。黄色な縁^{ふち}はだいぶ残っている。揃^{そろ}えて渡す二本の竹箸^{たけばし}を、落さぬように茶の間から座敷へ持つて出た。座敷には浅井君が先生を相手に、京都以来の旧歡を暖めている。時は朝である。日影はじりじりと椽^{えん}に逼^{せま}ってくる。

「御嬢さんは、東京を御存じでしたな」と問いかけた。

菓子皿を主客の間に置いて、やさしい肩^{うしろ}を後へ引くついでに、「ええ」と小声に答えて、立ち兼ねた。

「これは東京で育ったのだよ」と先生が足らぬところを補ってくれる。

「そうでしたな。——大変大きくなりましたな」と突然別問題に飛び移った。

小夜子は淋しい笑顔を俯^{うつむ}向けて、今度は答さえも控えた。浅井君は遠慮のない顔をして小夜子を眺^{なが}めている。これからこの女の結婚問題を壊すんだなと思いながら平氣に眺めている。浅井君の結婚問題に関する意見は大道易者のごとく容易^{ひよう}である。女の未来や生涯^{しょうがい}の幸福についてはあまり同情を表しておらん。ただ頼まれたから頼まれたなりに事を運べば好いものと心得ている。そうしてそれがもつとも法學士的で、法學士的はもつとも實際的で、實際的は最上の方法だと心得ている。浅井君はもつとも想像力の少ない男で、しかも想像力の少ないのをかつて不足だと思つた事のない男である。想像力は理知の活動とは全然別作用で、理知の活動はかえつて想像力のために常に阻害^{そがい}せら

るるものと信じている。想像力を待つて、始めて、全^{まっ}たき人性に^{もと}戻らざる好処置が、知^ち慧^え分別の純作用以外に活^いきてくる場合があるうなどとは法科の教室で、どの先生からも聞いた事が無い。したがつて浅井君はいつこう知らない。ただ断^{こと}われれば済むと思つてゐる。淋しい小夜子の運命が、夫子^{ふうし}の一言^{いちごん}でどう變化するだらうかとは浅井君の夢にだも考え得ざる問題である。

浅井君が無意味に小夜子を眺めてゐるうちに、孤^こ堂^{どう}先生は變な咳を二つ三つ塞^せいた。小夜子は心元なく父^{かた}の方を向く。

「御藥はもう上がったんですか」

「朝の分はもう飲んだよ」

「御寒い事はござんせんか」

「寒くはないが、少し……」

先生は右の手頸^{てくび}へ左の指を三本懸^かけた。小夜子は浅井のいる

事も忘れて、脈をはかる先生の顔ばかり見詰めている。先生の顔は髻ひげと共に日ごとに細長く瘡やせこけて来る。

「どうですか」と氣遣きづかわし氣げに聞く。

「少し、早いようだ。やつぱり熱が除とれない」と額に少し皺しわが

寄つた。先生が熱度を計つて、じれつたそうに不愉快な顔をす

るたびに小夜子は悲しくなる。夕立を野中に避けて、頼たよりと思う

一本杉をありがたしと梢こずえを見れば稲妻いなずまがさす。怖いと云うより

も、年を取つた人に氣の毒である。行き届かぬ世話から出る疳癰かんしゃう

なら、機嫌きげんの取りようもある。氣で勝てぬ病氣のためなら孝行

の尽しようがない。かりそめの風邪かぜと、当人も思い、自分も苦

にしなかつた昨日今日の咳せきを、蔭へ廻つて聞いて見ると、医者

は性質たちが善くないと云う。二三日で熱が退ひかないと云つて焦慮じれ

るような軽い病症ではあるまい。知らせれば心配する。云わね

ば氣で通す。その上^{かん}疳を起す。この調子で進んで行くと、一年の^{のち}後には神経が赤裸^{あかはだか}になつて、空氣に触れても飛び上がるかも知れない。——昨夜^{ゆうべ}小夜子は眼を合せなかつた。

「羽織でも召していらしたら好いでしょう」

孤堂先生は返事をせずに、

「驗温器があるかい。一つ計つてみよう」と云う。小夜子は茶の間へ立つ。

「どうかなすつたんですか」と浅井君が無^む雑^{ぞう}作に尋ねた。

「いえ、ちつと風邪^{かぜ}を引いてね」

「はあ、そうですか。——もう若葉がだいぶ出ましたな」と云つた。先生の病氣に対してはまるで同情も頓^{とん}着^{じやく}もなかつた。病氣の原因と、経過と、容体を精^{くわ}しく聞いて貰おうと思つていた先生は当^{あて}が外^{はず}れた。

「おい、無いかね。どうした」と次の間を向いて、常よりは大きな声を出す。ついでに咳が二つ出た。

「はい、ただ今」と小さい声ちが答えた。が驗温器を持つて出る様子が無い。先生は浅井君の方を向いて

「はあ、そうかい」と氣のない返事をした。

浅井君はつまらなくなる。早く用を片づけて帰ろうと思う。

「先生小野はいつこう駄目ですな、ハイカラにばかりなつて。御嬢さんと結婚する氣はないですよ」とばたばたと順序なく並べた。

孤堂先生の窪くぼんだ眼まなこは一度に鋭とがどくなつた。やがて鋭とがいものにがにがが一面に広がって顔中苦々にがにがしくなる。

「廃よした方が好ええですな」

置き失なくした驗温器を搜さががしていた、次の間の小夜子は、長

火鉢の二番目の抽出を二寸ほど抜いたまま、はたりと引く手を留めた。

先生の苦々しい顔は一層こまやかになる。想像力のない浅井君はとんと結果を予想し得ない。

「小野は近頃非常なハイカラになりました。あんな所へ行くのは御嬢さんの損です」

苦々しい顔はとうとう持ち切れなくなった。

「君は小野の悪口を云いに來たのかね」

「ハハハハ先生本当ですよ」

浅井君は妙なところで高笑をいた。

「余計な御世話だ。軽薄な」と鋭どく跳ねつけた。先生の声はよく尋常を離れる。浅井君は始めて驚ろいた。しばらく黙っている。

「おい驗温器はまだか。何をぐずぐずしている」

次の間の返事は聞えなかった。ことりとも云わぬうちに、片寄せた障子しょうじに影がさす。腰板こしの外から細い白木の筒つつがそつと出る。畳の上で受取った先生はぽんと云わして筒を抜いた。取り出した驗温器を日に翳かざして二三度やけに振りながら、
「何だつて、そんな余計な事を云うんだ」と度盛どもりを透すかして見る。
先生の精神は半ば驗温器にある。浅井君はこの間に元氣を回復した。

「実は頼まれたんです」

「頼まれた？ 誰に」

「小野に頼まれたんです」

「小野に頼まれた？」

先生は腋わきの下へ驗温器を持って行く事を忘れた。茫然ぼうぜんとして

いる。

「ああ云う男だものだから、自分で先生の所へ来て断わり切れないんです。それで僕に頼んだです」

「ふうん。もつと精くわしく話すがいい」

「二三日中じゅうに是非こちらへ御返事をしなければならぬからと云いますから、僕が代理にやつて来たんです」

「だから、どう云う理由で断わるんだか、それを精しく話したら好いじゃないか」

襖ふすまの蔭で小夜子むこうが涙はなをかんだ。つつましき音ではあるが、一重ひとえ

隔へててすぐ向むかひにいる人のそれと受け取れる。鴨居かもいに近く聞えたのは、襖越ふすまごしに立っているらしい。浅井君の耳にはどんな感じを与えたか知らぬ。

「理由はですな。博士にならなければならぬから、どうも結

婚なんぞしておられないと云うんです」

「じゃ博士の称号の方が、小夜より大事だと云うんだね」

「そう云う訳でもないでしょうが、博士になつて置かんと将来非常な不利益ですからな」

「よし分つた。理由はそれぎりかい」

「それに確然たる契約のない事だからと云うんです」

「契約とは法律上有効の契約という意味だな。証文のやりとりの事だね」

「証文でもないですが——その代り長い間御世話になつたから、その御礼としては物質的の補助をしたいと云うんです」

「月々金でもくると云うのかい」

「そうです」

「おい小夜や、ちよつと御出。おいで小夜や——小夜や」と声はしだ

いに高くなる。返事はついにない。

小夜子は襖ふすまの蔭に蹲踞うずくまつたまま、動かずにいる。先生は仕方なしに浅井君の方へ向き直った。

「君は妻君があるかい」

「ないです。貰いたいが、自分の口が大事ですからな」

「妻君がなければ参考のために聞いて置くがいい。——人の娘は玩具おもちゃじゃないぜ。博士の称号と小夜と引き替にされてたまるものか。考えて見るがいい。いかな貧乏人の娘でも活物いきものだよ。私わしから云えば大事な娘だ。人一人殺しても博士になる気かと小野に聞いてくれ。それから、そう云ってくれ。井上孤堂は法律上の契約よりも徳義上の契約を重んずる人間だって。——月々金を貢みついでやる？ 貢いでくれと誰が頼んだ。小野の世話をしたのは、泣きついて来て可愛想かわいそうだから、好意こういずくでした事だ。

何だ物質的の補助をするなんて、失礼千万な。——小夜や、用があるからちよつと出て御出、おいしいのか」

小夜子は襖の蔭で啜り泣すすなきをしている。先生はしきりに咳せく。

浅井君は面喰めんくらつた。

こう怒られようとは思わなかつた。またこう怒られる訳がない。自分の云う事は事理明白である。世間に立つて成功するには誰の目にも博士号は大切である。曖昧あいまいな約束をやめてくれと云うのもさほど不義理とは受取れない。世話をして貰いつ放しでは不都合かも知れないが、して貰つただけの事を物質的に返すと云い出せば、喜んでこっちの義務心を満足させべきはずである。それを突然怒り出す。——そこで浅井君は面喰つた。

「先生そう怒っちゃ困ります。悪ければまた小野に逢あつて話して見ますから」と云つた。これは本気の沙汰さたである。

しばらく黙っていた先生は、やや落ちついた調子で、

「君は結婚を極めて容易事たやすのように考えているが、そんなものじゃない」と口惜くちおしそうに云う。

先生の云う主意は分らんが、先生の様子にはさすがの浅井君も少し心を動かした。しかし結婚は便宜べんぎによつて約束を取り結び、便宜によつて約束を破棄するだけで差支さしつかえないと信じている浅井君は、別に返事もしなかった。

「君は女の心を知らないから、そんな使に來たんだらう」
浅井君はやつぱり黙っている。

「人情を知らないから平氣でそんな事を云うんだらう。小野の方が破談になれば小夜は明日あしたからどこへでも行けるだらうと思つて、云うんだらう。五年以来夫だと思ひ込んでいた人から、特別の理由もないのに、急に斷わられて、平氣ですぐ他家わきへ嫁に

行くような女があるものか。あるかも知れないが小夜はそんな軽薄な女じゃない。そんな軽薄に育て上げたつもりじゃない。——君はそう軽卒に破談の取次をして、小夜の生涯しょうがいを誤まらして、それで好い心持なのか」

先生の窪くぼんだ眼が煮染にじんで来た。しきりに咳が出る。浅井君はなるほどそれが事実ならと感心した。ようやく気の毒になつてくる。

「じゃ、まあ御待ちなさい、先生。もう一遍小野に話して見ますから。僕はただ頼まれたから来たんで、そんな精くわしい事情は知らんですから」

「いや、話してくれないでも好い。厭いやだと云うものに無理に貫つてもらいたくはない。しかし本人が来て自家じかに訳を話すが好い」
「しかし御嬢さんが、そう云う御考だと……」

「小夜の考ぐらい小野には分っているはずださ」と先生は平手ひらてで頬を打つように、ぴしやりと云った。

「ですがな、それだと小野も困るでしょうから、もう一遍……」

「小野にそう云つてくれ。井上孤堂はいくら娘が可愛くつても、厭だと云う人に頭を下げて貰つてもらうような卑劣な男ではないつて。——小夜や、おい、いないか」

ふすま　むこうがわ
襖の向側で、袖そでらしいものが唐紙からかみの裾すそにあたる音がした。

「そう返事をして差支さしつかえないだろうね」

答はさらになかった。ややあつて、わつと云う顔を袖の中に埋うずめた声がした。

「先生もう一遍小野に話しましょう」

「話さないでも好い。自家に来て断われと云つてくれ」

「とにかく……そう小野に云いましょう」

浅井君はついに立つた。玄関まで送つて来た先生に頭を下げた時、先生は

「娘なんぞ持つもんじゃないな」と云つた。表へ出た浅井君はほつと息をつく。今までこんな感じを経験した事はない。横町を出て蕎麦屋そばやの行灯あんどうを右に通へ出て、電車のある所まで来ると突然飛び乗つた。

突然電車に乗つた浅井君は約一時間余よの後のち、ぶらりと宗近家むねちかの門からあらわれた。つづいて車が二挺出る。一挺は小野の下宿へ向う。一挺は孤堂先生の家に行く。五十分ほど後おくれて、玄関の松の根際に梶棒かじぼうを上げた一挺は、黒い幌ほろを卸おろしたまま、甲野こうのの屋敷を指して馳かける。小説はこの三挺の使命を順次に述べなければならぬ。

宗近君の車が、小野さんの下宿の前で、車輪はの音おとを留めた時、

小野さんはちようど午飯ひるめしを済ましたばかりである。膳ぜんが出てい
る。飯櫃めしびつも引かれずにある。主人公は机の前へ座を移して、口
から吹く濃き煙を眺めながら考えている。今日は藤尾ふじおと大森へ
行く約束がある。約束だから行かなければならぬ。しかし是非
行かねばならぬとなると、何となく気が咎とがめる。不安である。約
束さえしなければ、もう少しは太平であつたらう。飯ももう一杯
ぐらいは食えたかも知れぬ。賽さいは固もとより自分で投げた。一六いちろうくの
目は明かに出た。ルビコンは渡らねばならぬ。しかし事もなげ
に河を横切つた該撒シーザーは英雄である。通例の人はいざと云う間際まぎわ
になつてからまた思い返す。小野さんは思い返すたびに、必ず
廃よせばよかつたと後悔する。乗り掛けた船に片足を入れた時、
船頭が出来ますよと棹さおを取り直すと、待つてくれと云いたくなる。
誰か陸おかから来て引つ張つてくれれば好いと思う。乗り掛けたば

かりならまだ陸へ戻る機会があるからである。約束も履行せん
 うちには岸を離れぬ舟と同じく、まだ絶体絶命と云う場合ではな
 い。メレジスの小説にこんな話がある。——ある男とある女が
 謀し合せて、停車場で落ち合う手筈をする。手筈が順に行つて、
 汽笛がひゅうと鳴れば二人の名誉はそれぎりになる。二人の運
 命がいざと云う間際まで逼つた時女はついに停車場へ来なかつ
 た。男は待ち耄の顔を箱馬車の中に入れて、空しく家へ帰つて
 来た。あとで聞くと朋友の誰彼が、女を抑留して、わざと約束
 の期を誤まらしたのだと云う。——藤尾と約束をした小野さん
 は、こんな風に約束を破る事が出来たら、かえつて仕合かも知
 れぬと思いつつ煙草の煙を眺めている。それに浅井の返事がま
 だ来ない。諾と云えばどっちへ転んでも幸である。否と聞くな
 らば、退つ引きならぬ瀬戸際まであらかじめ押して置いて、振

り返つてから、臨機応変に難関を切り抜けて行くつもり
の計画だから、一刻も早く大森へ行つてしまえば済む。否ひと云う返事を待つ必要は無論ない。ないが、決行する間際になると気掛りになる。頭で拵こしらえ上げた計画を人情が崩くずしにかかる。想像力が実行させぬように引き戻す。小野さんは詩人だけにもつとも想像力に富んでいる。

想像力に富んでおればこそ、自分で断わりに行く気になれなかつた。先生の顔と小夜子の顔と、部屋の模様と、暮しの有様とを眼まのあたりに見て、眼のあたりに見たものを未来に延長ひきのばして想像の鏡に思い浮べて眺ながめると二た通ふとおになる。自分がこの鏡のなかに織り込まれているときは、春である、豊である、ことごとく幸福である。鏡おもての面から自分の影を拭き消すと闇やみになる、暮になる。すべてが悲惨みじめになる。この一団の精神から、自分の

魂だけを切り離す談判をするのは、小さき竈かまどに立つべき煙を予想しながら薪たきぎを奪うと一般である。忍びない。人は眼を閉つぶつて苦にがい物を呑のむ。こんな絡からんだ縁をふつりと切るのに想像の眼を開あいては出来ぬ。そこで小野さんは眼の閉つぶれた浅井君を頼んだ。頼たのんだ後は、想像を殺してしまえば済む。と覚束おぼつかないが決心だけはした。しかし犬一匹でも殺すのは容易な事ではない。持つて生れた心の作用を、不都合なところだけ黒く塗ぬつて、消し切りに消すのは、古来から幾千万人の試みた窮策で、幾千万人が等しく失敗した陋策ろうさくである。人間の心は原稿紙とは違ちがう。小野さんがこの決心をしたその晩から想像力は復活した。――

瘠やせた頬えがを描く。落ち込んだ眼を描く。纏もつれた髪を描く。虫のような氣息いきを描く。――そうして想像は一転する。

血を描く。物凄ものすごき夜と風と雨とを描く。寒ともしびき灯火を描く。白張しらはり

の提灯を描く。——ぞつとして想像はとまる。

想像のとまった時、急に約束を思い出す。約束の履行から出る快こころよからぬ結果を思い出す。結果はまたも想像の力で曲々きよくきよくの波瀾を起す。——良心を質に取られる。生涯受け出す事が出来ぬ。利に利がつもる。背中が重くなる、痛くなる、そうして腰が曲る。寢覚ねざめがわるい。社会が後指うしろゆびを指す。

惘然もうぜんとして煙草の煙を眺めている。恩賜の時計は一秒ごとに約束の履行を促うなががす。櫓そりの上に力なき身を託したようなものである。手を拱こまぬいていれば自然と約束の淵ふちへ滑り込む。「時」の櫓そりほど正確に滑るものはない。

「やつぱり行く事にするか。後暗うしろぐらい行きさえなければ行つても差支さしつかえないはずだ。それさえ慎めば取り返しはつく。小夜子の方は浅井の返事しだいで、どうにかしよう」

煙草の煙が、未来の影を朦朧と罩め尽すまで濃く揺曳した時、宗近君の頑丈な姿が、すべての想像を払って、現実界にあらわれた。

いつの間にどう下女が案内をしたか知らなかった。宗近君はぬつと這入った。

「だいぶ狼籍だね」と云いながら紅溜の膳を廊下へ出す。黒塗の飯櫃を出す。土瓶まで運び出して置いて、

「どうだい」と部屋の真中に腰を卸した。

「どうも失敬です」と主人は恐縮の体で向き直る。折よく下女が来て湯沸と共に膳碗を引いて行く。

心を二六時に委ねて、隻手を動かす事をあえてせざるものは、自から約束を踐まねばならぬ運命を有つ。安からぬ胸を秒ごとに重ねて、じりじりと怖い所へ行く。突然と横合から飛び出し

た宗近君は、滑るべく余儀なくせられたる人を、半途はんと さんえぎに遮さへつた。遮さへぎられた人は邪魔に逢あうと同時に、一刻の安やすきを故もとの位地に貪むさぼる事が出来る。

約束は履行すべきものときまつている。しかし履行すべき条件を奪つたものは自分ではない。自分から進んで違約したのと、邪魔が降くだつて来て、守る事が出来なかつたのとは心持が違ちがう。約束が剣呑けんおんになつて来た時、自分に責任がないように、人が履行を妨さまたげてくれるのは嬉しい。なぜ行かないと良心に責められたなら、行くつもりさまたの義務心はあつたが、宗近君に邪魔をされたから仕方がないと答える。

小野さんはむしろ好意をもつて宗近君を迎えた。しかしこの一点の好意は、不幸にして面白からぬ感情のために四方から深く鎖とざされている。

宗近君と藤尾とは遠い縁続である。自分が藤尾を陥おとしいれるにしても、藤尾が自分を陥おとしいれるにしても、二人の間に取り返しのつかぬ関係が出来そうな際どい約束を、素知らぬ顔で結んだのみか、今実行にとりかかろうと云う矢先に、突然飛び込まれたのは、迷惑はさて置いて、大いに気が咎とがめる。無関係のものならそれでも好い。突然飛び込んだものは、人もあろうに、相手の親類である。

ただの親類ならまだしもである。兼かねてから藤尾に心のある宗近君である。外国で死んだ人が、これこそ娘の婿ととうから許していた宗近君である。昨日きのうまで二人の関係を知らずに、昔の望をそのままに繋つないでいた宗近君である。偷ぬすまれた金の行先も知らずに、空金庫からぎんこを護まもっていた宗近君である。

秘密の雲は、春を射る金鎖の稲妻で、半なかば劈つんざれた。眠つてい

た眼を醒さましかけた金鎖のあとへ、浅井君が行つて井上の事でも喋しゃべ舌つたら——困る。氣の毒とはただ先方へ対して云う言葉である。氣が咎とがめるとは、その上にこちらから済まぬ事をした場合うわてに用いる。困るとなると、もう一層上手に出で、利害が直接に吾身わがみの上に跳ね返つて来る時に使う。小野さんは宗近君の顔を見て大いに困つた。

宗近君の来訪に対して歓迎の意を表する一点好意の核は、氣の毒の輪で尻こそばゆく取り巻かれている。その上には氣が咎める、輪が氣味わるそうに重なっている。一番外には困る、輪が黒墨を流したように際限なく未来に連つらなっている。そうして宗近君はこの未来を司つかさどる主人公のように見えた。

「昨日きのうは失敬した」と宗近君が云う。小野さんは赤くなつて下を向いた。あとから金時計が出るだろうと、心元なく煙草へ火

を移す。宗近君はそんな気色けしきも見えぬ。

「小野さん、さつき浅井が来てね。その事でわざわざやって来た」とすぱりと云う。

小野さんの神経は一度にびりりと動いた。すこし、してから煙草の煙が陰気にむうつと鼻から出る。

「小野さん、敵かたきが来たと思つちやいけない」

「いえけつして……」と云つた時に小野さんはまたぎくりとした。

「僕は当あてつ擦こすりなどを云つて、人の弱点に乗ずるような人間じゃない。この通り頭ができた。そんな暇は薬にたくつてもない。あつても僕のうちの家風に背そむく……」

宗近君の意味は通じた。ただ頭のできた由来が分らなかつた。しかし問い返すほどの勇気がないから黙っている。

「そんな卑いやしい人間と思われちゃ、急がしいところをわざわざ来た甲斐かいがない。君だつて教育のある事理わけの分つた男だ。僕をそう云う男と見て取つたが最後、僕の云う事は君に対して全然無効になる訳だ」

小野さんはまだ黙っている。

「僕はいくら閑人ひまじんだつて、君に軽蔑けいべつされようと思つて車を飛ばして来やしない。——とにかく浅井の云う通なんだろうね」

「浅井がどう云いましたか」

「小野さん、真面目まじめだよ。いいかね。人間は年ねんに一度ぐらい真面目にならなくっちゃならない場合がある。上皮うわかわばかりで生きていちや、相手にする張合はりあいがない。また相手にされてもつまらない。僕は君を相手にするつもりで来たんだよ。好いかね、分つたかい」

「ええ、分りました」と小野さんはおとなしく答えた。

「分つたら君を対等の人間と見て云うがね。君はなんだか始終不安じゃないか。少しも泰然としていないようだが」

「そうかも——知れないです」と小野さんは術^{じゆつ}なげながら、正直に白状した。

「そう君が平たく云うと、はなはだ御氣の毒だが、全く事実だろう」

「ええ」

「他人^{ひと}が不安であろうと、泰然としていなかろうと、上皮^{うわかわ}ばかりで

生きている軽薄な社会では構つた事じゃない。他人^{ひと}どころ

か自分自身が不安でいながら得意がつている連中もたくさんある。僕もその一人^{いちにん}かも知れない。知れないどころじゃない、た

しかにその一人だろう」

小野さんはこの時始めて積極的に相手を遮ぎつた。さえ

「あなたは羨しいです。うらやま 実はあなたのようになれたら結構だと思つて、始終考えてるくらいです。そんなところへ行くと僕はつまらない人間に違います」

あいきよう 愛嬌に調子を合せるとは思えない。上皮の文明は破れた。中から本音ほんねが出る。悄然しょうぜんとして誠を帯びた声である。

「小野さん、そこに気がついているのかね」

宗近君の言葉には何だか暖味あたたかみがあつた。

「います」と答えた。しばらくしてまた、

「います」と答えた。下を向く。宗近君は顔を前へ出した。

相手は下を向いたまま、

「僕の性質は弱いです」と云つた。

「どうして」

「生れつきだから仕方がないです」

これも下を向いたまま云う。

宗近君はなおと顔を寄せる。片膝を立てる。膝の上に肱ひじを乗せる。肱で前へ出した顔を支える。そうして云う。

「君は学問も僕より出来る。頭も僕より好い。僕は君を尊敬している。尊敬しているから救いに来た」

「救いに……」と顔を上げた時、宗近君は鼻の先にいた。顔を押しつけるようにして云う。――

「こう云う危あやうい時に、生れつきを敲たたき直して置かないと、生涯しょうがい

不安でしまうよ。いくら勉強しても、いくら学者になつても取り返しはつかない。ここだよ、小野さん、真面目まじめになるのは。

世の中に真面目は、どんなものか一生知らずに済んでしまう人間がいくらかもある。皮かわだけで生きている人間は、土つちだけで出来

ている人形とそう違わない。真面目がなければだが、あるのに人形になるのはもったいない。真面目になつた後は心持あとがいいものだよ。君にそう云う経験があるかい」

小野さんは首を垂れた。

「なければ、一つなつて見たまえ、今だ。こんな事は生涯に二度とは来ない。この機をはずすと、もう駄目だ。生涯真面目まじめの味を知らずに死んでしまう。死ぬまでむく犬のようにうろろして不安ばかりだ。人間は真面目になる機会が重なれば重なるほど出来上ってくる。人間らしい気持がしてくる。——法螺ほらじゃない。自分で経験して見ないうちは分らない。僕はこの通り学問もない、勉強もしない、落第もする、ごろごろしている。それでも君より平気だ。うちの妹なんぞは神経が鈍いからだと思っている。なるほど神経も鈍いだろう。——しかしそう無神経な

ら今日でも、こうやって車で馳^かけつけやしない。そうじゃないか、小野さん」

宗近君はにこりと笑った。小野さんは笑わなかった。

「僕が君より平気なのは、学問のためでも、勉強のためでも、何でもない。時々真面目になるからさ。なるからと云うより、なれるからと云った方が適當だろう。真面目になれるほど、自信力が出る事はない。真面目になれるほど、腰^{すわ}が据^{すわ}る事はない。真面目になれるほど、精神の存在を自覚する事はない。天地の前に自分が儼^{げん}存^{そん}していると云う觀念は、真面目になつて始めて得られる自覚だ。真面目とはね、君、真劍勝負の意味だよ。やつつける意味だよ。やつつけなくつちやいられない意味だよ。人間全体が活動する意味だよ。口^{こう}が巧^{しや}者に働^{はたら}いたり、手が小器用に働^{はたら}いたりするのは、いくら働^{はたら}いたつて真面目じゃない。頭の

中を遺憾なく世の中へ敲きつけて始めて真面目になった氣持になる。安心する。実を云うと僕の妹も昨日真面目になった。甲野も昨日真面目になった。僕は昨日も、今日も真面目だ。君もこの際一度真面目になれ。人一人真面目になると当人が助かるばかりじゃない。世の中が助かる。——どうだね、小野さん、僕の云う事は分らないかね」

「いえ、分ったです」

「真面目だよ」

「真面目に分ったです」

「そんなら好い」

「ありがたいです」

「そこでと、——あの浅井と云う男は、まるで人間として通用しない男だから、あれの云う事を一々真に受けちゃ大變だが——」

本来を云うと浅井が来てこれこれだと、あれが僕に話した通とおを君の前で箇条がきにしてでも述べるところだね。そうして、君の云うところと照し合せた上で事実を判断するのが順当かも知れない。いくら頭の悪い僕でもそのくらいな事は知ってる。しかし真面目になると、ならないとは大問題だ。契約があつたの、滑すべつたの転ころんだの。嫁があつちやあ博士になれないの、博士にならなくつちや外聞が悪いのつて、まるで小供見たような事は、どつちがどつちだつて構わないだろう、なあ君」

「ええ構わないです」

「要するに真面目な処置は、どうつけければ好いのかね。そこが君のやるところだ。邪魔でなければ相談になろう。奔走しても好い」

悄然しょうぜんとして項垂うなだれていた小野さんは、この時居ずまいを正ただし

た。顔を上げて宗近君を真向まむきに見る。眸ひとみは例になく確乎しつぷと坐つていた。

「真面目な処置は、出来るだけ早く、小夜子と結婚するのです。小夜子を捨てては済まんです。孤堂先生にも済まんです。僕が悪かったです。断わったのは全く僕が悪かったです。君に対しても済まんです」

「僕に済まん？ まあそりや好い、後あとで分る事だから」

「全く済まんです。——断わらなければ好かったです。断わらなければ——浅井はもう断わってしまったんでしょうね」

「そりや君が頼んだ通り断わったそうだ。しかし井上さんは君自身に来て断われと云うそうだ」

「じゃ、行きます。これから、すぐ行つて謝罪あやまつて来ます」

「だがね、今僕の阿父おやじを井上さんの所へやつておいたから」

「阿父さんおとつを？」

「うん、浅井の話によると、何でも大変怒ってるそうだ。それから御嬢さんはひどく泣いてると云うからね。僕が君のうちへ来て相談をしているうちに、何か事でも起ると困るから慰問なぐさめかたがたつなぎにやっておいた」

「どうもいろいろ御親切に」と小野さんは畳に近く頭を下げた。「なに老人はどうせ遊んでいるんだから、御役にさえ立てば喜んで何でもしてくれる。それで、こうしておいたんだがね、——もし談判が調ととのえば、車で御嬢さん呼びにやるからこっちへ寄こしてくれて。——来たら、僕のいる前で、御嬢さんに未来の細君だと君の口から明言してやれ」

「やります。こっちから行っても好いです」

「いや、ここへ呼ぶのはまだほかにも用があるからだ。それが

済んだら三人で甲野へ行くんだよ。そうして藤尾さんの前で、もう一遍君が明言するんだ」

小野さんは少しく痺ひるんで見えた。宗近君はすぐつける。

「何、僕が君の妻君を藤尾さんに紹介してもいい」

「そう云う必要があるでしょうか」

「君は真面目になるんだろう。——僕の前で奇麗きれいに藤尾さんとの関係を絶つて見せるがいい。その証拠に小夜子さんを連れて行くのさ」

「連れて行つても好いですが、あんまり面当つらあてになるから——なるべくなら穩便おんびんにした方が……」

「面当は僕も嫌きらいが、藤尾さんを助けるためだから仕方がない。あんな性格は尋常の手段じゃ直せっこない」

「しかし……」

「君が面目ないと云うのかね。こう云う羽目^{はめ}になつて、面目ないの、きまりが悪いのと云つてぐずぐずしているようじゃやっぱり上皮^{うわかわ}の活動だ。君は今真面目になると云つたばかりじゃないか。真面目と云うのはね、僕に云わせると、つまり実行の二字に帰着するのだ。口だけで真面目になるのは、口だけが真面目になるので、人間が真面目になつたんじゃない。君と云う一個の人間が真面目になつたと主張するなら、主張するだけの証拠を實地に見せなけりや何にもならない。……」

う

「宜^よろしい」

「ところで、みんな打ち明けてしまいますが。——実は今日大森へ行く約束があるんです」

「大森へ。誰と」

「その——今の人とです」

「藤尾さんとかね。何時なんじに」

「三時に停車場ステーションで出合うはずになっているんですが」

「三時と——今何時か知らん」

「ぱちりと宗近君の胴衣チョッキの中ほどで音がした。

「もう二時だ。君はどうせ行くまい」

「廃よすです」

「藤尾さん一人で大森へ行く事は大丈夫ないね。うちやっておいたら帰ってくるだろう。三時過きづかいになれば」

「一分でも後おくれたら、待ち合あす気遣きづかいありません。すぐ帰るでしよう」

「ちようど好い。——何だか、降って来たな。雨が降っても行

く約束かい」

「ええ」

「この雨は——なかなか歇やすみそうもない。——とにかく手紙で小夜子さんを呼ぼう。阿父おやじが待ち兼かねて心配しているに違ない」

春に似合わぬ強い雨が斜めに降る。空の底は計られぬほど深い。深いなかから、とめどもなく千筋ちすじを引いて落ちてくる。火鉢が欲しいくらいの寒さむさである。

手紙は点滴てんてきの響の裡うちに認めしたたられた。使が幌ほろの色を、打つ雨に揺うごかして、一散に去った時、叙述は移る。最前宗近家の門を出た第二の車はすでに孤堂先生の僑居きようきよに在あつて、応分の使命をつくしつである。

孤堂先生は熱が出て寝た。秘蔵の義董ぎとうの幅ふくに背そむいて横よこえた額際ひたいぎわを、小夜子が氷囊ひようのうで冷している。蹲踞うずくまる枕元に、泣き腫はらした

眼を赤くして、氷嚢くくりめの括目に寄る皺しわを勘定しているかと思われる。容易に顔を上げない。宗近の阿父おとつさんは、鉄線模様の臥被てっせんもよう かいまきを二尺ばかり離れて、どっしりと尻しつを据すえている。厚い膝頭ひざがしらがざぶざぶとん坐布団から喰はみ出して軽く畳を抑えたところは、血が退ひいて肉が落ちた孤堂先生の顔に比べると威風堂々たるものである。

宗近老人の声は相変らず大きい。孤堂先生の声は常よりは高い。対話はこの兩人の間に進行しつつある。

「実はそう云うしだいで突然参上致したので、御不快のところをはなはだ恐縮であるが、取り急ぐ事と、どうか悪しからず」
 「いや、はなはだ失礼の体ていたらくで、私こそ恐縮で。起きて御挨拶ごあいさつを申し上げなければならんのだが……」

「どう致して、そのままの方が御話がしやすくて結句けっく私の都合になります。ハハハハ」

「まことに御親切にわざわざ御尋ね下すつてありがたい」

「なに、昔なら武士は相見互あいみたがいと云うところで。ハハハハ私など

もいつ何時御世話にならんとも限らん。しかし久しぶりで東京

へ御移おうつりではさぞ御不自由で御困りだろう」

「二十年目になります」

「二十年目、そりやあそりやあ。二た昔ふむかしですな。御親類は」

「無いと同然で。久しい間、音信不通いんしんふつうにしておったのですか

らな」

「なるほど。それじゃ、全く小野氏うじだけが御力ですな。そりや、

どうも、怪けしからん事になったもので」

「馬鹿を見ました」

「いやしかし、どうにか、なりましょう。そう御心配なさらずとも」

「心配は致しません。ただ馬鹿を見ただけで、先刻さつきよく娘にも因果いんがを含めて申し聞かしておきました」

「しかしせつかくこれまで御丹精になったものを、そう思い切りよく御断念おあきらめになるのも惜いおしから、どうかここはひとまず私共に御任せ下さい。忤せがれも出来るだけ骨を折つて見たいと申ししておりましたから」

「御好意は実に辱かたじけない。しかし先方で断わる以上は、娘も参りたくもなからうし、参ると申しても私がやれんような始末で……」
小夜子は氷嚢ひょうのうをそつと上げて、額の露を丁寧てぬぐいに手拭でふいた。
「冷やすのは少し休やめて見よう。——なあ小夜子行かんでも好いな」

小夜子は氷嚢を盆へ載のせた。両手を畳の上へ突いて、盆の上へ蔽おいかぶせるように首を出す。氷嚢へぽたりぽたりと涙が垂

れる。孤堂先生は枕に着けた胡麻塩頭ごましおあたまを

「好いな」と云いながら半分ほど後うしろへ振ねじ向けた。ぽたりと氷囊へ垂れるところが見えた。

「ごもつともで。ごもつともで……」と宗近老人はとりあえず二遍つづけざまに述べる。孤堂先生の首は故もとの位地に復した。潤うるんだ眼をひからしてじつと老人を見守っている。やがて

「しかしそれがために小野が藤尾さんとか云う婦人と結婚でもしたら、御子息には御氣の毒ですな」と云った。

「いや——そりや——御心配には及ばんです。忤は貰わん事にしました。多分——いや貰わんです。貰うと云つても私が不承知です。忤きらを嫌うような婦人は、忤が貰いたいと申しても私が許しません」

「小夜や、宗近さんの阿父おとつさんも、ああおつしやる。同じ事おんなだ

ろう」

「私は——参らんでも——宜^{よろ}しゅうございます」と小夜子が枕^{うしろ}の後で切れ切れに云った。雨の音の強いなかでようやく聞き取れる。

「いや、そうなっちゃ困る。私がわざわざ飛んで来た^か甲斐^いがない。小野氏^{うじ}にもだんだん事情のある事だろうから、まあ忤^{せがれ}の通知^{おきき}だけで、どうか、先刻御話を申したように御聞済^{きき}を願いたい。——自分で忤^わの事をかれこれ申すのは異^いなものだが、忤^わは事理^わの分った奴で、けっして後で御迷惑になるような取計^{とりは}は致^{いた}しますまい。御破談になった方が御為だと思えばその方を御勧めして来るでしょう。——始めて御目^めに懸^かつたのだがどうか私を御信用下さい。——もう何とか云つて来る時分だが、あいにくの雨で……」

雨を衝く一輛りようの車は輪を鳴らして、格子こうしの前で留つた。がらりと明く途端に、ぐちやりと濡れた草鞋わらじを沓脱くつぬぎへ踏み込んだものがある。——叙述は第三の車の使命に移る。

第三の車が糸子を載せたまま、甲野の門に隣々りんりんの響を送りつつ馳かけて来る間に、甲野さんは書斎を片づけ始めた。机の抽出ひきだしを一つずつ抜いて、いつとなく溜つた往復の書類を裂いては捨て、裂いては捨る。床ゆかの上は千切れた半切で膝の所だけが堆うずたかくなつた。甲野さんは乱るる反故屑ほごくずを踏みつけて立つた。今度は抽出ひきだしから一枚、二枚と細字さいじに認めた控を取り出す。中には五六頁ページ纏めて綴じ込んだものもある。大抵は西洋紙である。また西洋字である。甲野さんは一と目見て、すぐ机の上へ重ねる。中には半行も読まずに置き易かえるものもある。しばらくすると、重かさなるものは小一尺の高たかさまで来た。抽出は大抵空になる。甲野さん

は上下へ手を掛けて、総体を煖炉の傍まで持つて来たが、やがて、無言のまま抛げ込んだ。重なるものは主人公の手を離るると共に一面に崩れた。

葡萄の葉を青銅に鑄た灰皿が洋卓の上にある。灰皿の上に燐寸

がある。甲野さんは手を延ばして燐寸の箱を取った。取りながら横に振ると、あたじけない五六本の音がする。今度は机へ帰る。レオパルジの隣にあつた黄表紙の日記を持つて煖炉の前まで戻つて来た。親指を抑えにして小口を雨のように飛ばして見ると、黒い印氣と鼠の鉛筆が、ちら、ちら、ちらと黄色い表紙まで来て留った。何を書いたものやらいつこう要領を得ない。

昨夕寝る前に書き込んだ、

入道無言客。出家有髮僧。

の一聯が、最後の頁の最後の句である事だけを記憶している。

甲野さんは思い切つて日記を散らばつた紙の上へ乗せた。屈しゃがんだ。煖炉ハースラツグ敷の前でしゅつと云う音がする。乱れた紙は、静なるうちに、倦怠けつたるの伸のびをしながら、下から暖められて来る。きな臭い煙が、紙と紙の隙間すきまを這はい上のぼつて出た。すると紙は下層したがわの方から動き出した。

「うん、まだ書く事があつた」

と甲野さんは膝を立てながら、日記を煙のなかから救い出す。紙は茶に変わる。ぼうと音がすると煖炉のうちは一面の火になつた。

「おや、どうしたの」

戸口に立つた母は不審そうに煖炉の中を見詰めている。甲野さんは声に応じて体たいを斜めに開く。袂たもとの先に火を受けて母と向き合つた。

「寒いから部屋をあた暖めます」と云つたなり、上からみ暖炉の中を見下した。火は薄い水飴みずあめの色に燃える。藍あいと紫むらさきが折々は思ひ出したように交つて煙突の裏うちへ上のぼつて行く。

「まあ御あたんなさい」

折から風に誘われた雨が四五筋、窓硝子まじガラスに当つて碎けた。

「降り出しましたね」

母は返事をせずに三足みあしほど部屋の中に進んで来た。すかさよ

うに欽吾を見て、

「寒ければ、石炭を焼たかせようか」と云つた。

めらめらと燃えた火は、揺ゆぐ紫の舌の立ち騰のぼる後あとから、ぱつ

と一度に消えた。暖炉の中は真黒である。

「もうたくさんです。もう消えました」

云い終つた欽吾は、暖炉に背中を向けた。時に亡父おやじの眼玉が

壁の上からぴかりと落ちて来た。雨の音がざあつとする。

「おやおや、手紙が大変散らばつて——みんな要らないのかい」

欽吾は床ゆかの上を眺ながめた。裂き棄すてた書面は見事に乱れている。あるいは二三行、あるいは五六行、はなはだしいのは一行の半分で引き千切つたのがある。

「みんな要りません」

「それじゃ、ちつと片づけよう。紙屑籠かみくずかごはどこにあるの」

欽吾は答えなかつた。母は机の下を覗のぞき込む。西洋流の籃製かごせいの屑籠くずかごが、足掛あしかけの向むこうに仄ほのかに見える。母は屈こじんで手を伸のびした。紺緞子こんどんす

の帯が、窓からさす明あかりをまともに受けた。

欽吾は腕を右へ真直まっすぐに、日蔽ひおいのかかつた椅子いすの背頸せくびを握つた。瘠やせた肩を斜ななめにして、ずるずると机の傍そばまで引いて来た。

母は机の奥から屑籠くずかごを引きひ擦ずり出した。手紙の断片きれを一つ一

つ床から拾つて籠の中へ入れる。捩じ曲げたのを丹念に引き延ばして見る。「いづれ拜眉はいびの上……」と云うのを投げ込む。「……ごめんごめんこうむたぐそろ御免蒙り度候。もつとも事情の許す場合には御……」と云うのを投げ込む。「……はとうてい辛抱致しかね……」と云うのを裏返して見る。

欽吾は尻眼に母をじろりと眺ながめた。机の角に引き寄せた椅子の背に、うんと腕の力を入れた。ひらりと紺足袋こんたびが白い日蔽ひおひの上に揃そろった。揃った紺足袋はすぐ机の上に飛び上る。

「おや、何をするの」と母は手紙の断片を持ったまま、下から仰向あおむいた。眼と眼の間に怖おそれの色が明かに読まれた。

「額おろを卸します」と上から落ちついて云う。

「額を？」

怖おそれは愕おどろと変じた。欽吾は鍍金ときんの枠わくに右の手を懸かけた。

「ちよいと御待ち」

「何ですか」と右の手はやはり杵に懸っている。

「額を外はずして何にする気だい」

「持つて行くんです」

「どこへ」

「家うちを出るから、額だけ持つて行くんです」

「出るなんて、まあ。——出るにしても、もつとゆつくりはず緩外したら

宜よさそうなもんじゃないか」

「悪いですか」

「悪くはないよ。御前が欲しければ持つて行くが、いいけれども。何もそんなに急がなくなつても好いんだろう」

「だって今外さなくっちゃ、時間がありません」

母は変な顔をして呆然ぼうぜんとして立つた。欽吾は両手を額に掛け

る。

「出るって、御前本当に出る気なのかい」

「出る気です」

欽吾は後ろ向うしむきに答えた。

「いつ」

「これから、出るんです」

欽吾は両手で一度上へ揺り上げた額を、折釘おれくぎから外して、下へさげた。細い糸一本で額は壁とつながっている。手を放すと、糸が切れて落ちそうだ。両手で恭うやうやしく捧げたままである。母は下から云う。

「こんな雨の降るのに」

「雨が降っても構わないです」

「せめて藤尾に暇乞いとまごでもして行つてやつておくれな」

「藤尾はいないでしょう」

「だから待つておくれと云うのだあね。藪やぶから棒ぼうに出るなんて、御母さんおつかを困らせるようなもんじゃないか」

「困らせるつもりじゃありません」

「御前がその気でなくつても、世間と云うものがあります。出るなら出るようにして出てくれないと、御母さんが恥かを掻きま
す」

「世間が……」と云いかけて額ひたびを持ちながら、首うしろだけ後へ向けた時、細長く切れた欽吾の眼は一度は母に落ちた。やがて母から遠退とおのいて戸口に至つてはたと動かなくなつた。——母は気味悪そうに振返る。

「おや」

天から降つたように、静かに立っていた糸子は、ゆるやかに

頭つむりを下げた。鷹揚おうように膨ふくらました廂髪ひさしがみが故もとに帰ると、糸子は机そばの傍

まで歩を移して来る。白足袋が両方揃そろった時、

「御迎おもむかえに参りました」と真直まつすぐに欽吾を見上げた。

「鉢はさみを取つて下さい」と欽吾は上から頼む。顎あごで差図をした、レ

オパールジの傍に、鉢がある。——ぶつりと云う音と共に額は壁を離れた。鉢はかちやりと床ゆかの上に落ちた。両手に額を捧げた欽吾は、机の上でくると正面に向き直った。

「兄が欽吾さん連れて来いと申しましたから参りました」

欽吾は捧げた額を眼めはちぶん八分ぶんから、そろりそろりと下の方へ移す。

「受取つて下さい」

糸子は確しかと受取った。欽吾は机から飛び下りる。

「行きました。——車で来たんですか」

「ええ」

「この額が乗りますか」

「乗ります」

「じゃあ」と再び額を受取つて、戸口の方へ行く。糸子も行く。母は呼びとめた。

「少し御待ちよ。——糸子さんも少し待つてちょうだい。何が気に入らないで、親の家を出るんだか知らないが、少しは私の心持にもなつて見てくれないと、私が世間へ対して面目がないじゃないか」

「世間はどうでも構わないです」

「そんな聞訊ききわけのない事を云つて、——頑是がんぜない小供みたように」

「小供なら結構です。小供になれば結構です」

「またそんな。——せつかく、小供から大人おとなになつたんじゃないか。これまでに丹精するのは、一と通りや二た通りの事じや

ないよ、御前。少しは考えて御覧な」

「考えたから出るんです」

「どうして、まあ、そんな無理を云うんだらうね。——それもこれもみんな私の不行届から起つた事だから、今更泣いたつて、口説いたつて仕方がないけれども、——私は——亡くなつた阿父さんに——」

「阿父さんは大丈夫です。何とも云やしません」

「云やしませんたつて——何も、そう、意地にかかつて私を苛めなくつても宜さそうなもんじやないか」

甲野さんは額を提げたまま、何とも返事をしなくなつた。糸子はおとなしく傍に着いている。雨は部屋を取り巻いて吹き寄せて来る。遠い所から風が音を軋めてくる。ざあつと云う高い響である。また広い響である。響の裡に甲野さんは默然として

立っている。糸子も黙然として立っている。

「少しは分ったかい」と母が聞いた。

甲野さんは依然として黙している。

「これほど云つても、まだ分らないのかね」

甲野さんはやはり口を開かない。

「糸子さん、こう云う体ていたらくなんですから。どうぞ御宅へ御歸りになったら、阿父さんや兄さんに御覽の通りを御話し下さい。——まことに、こんなところをあなた方に御見せ申すのは、何ともかとも面目しだいもございません」

「御叔母おばさん。欽吾さんは出たいのですから、素直に出して御上げなすつたら好いでしょう。無理に引つ張つても何にもならないと思います」

「あなたまでそれじゃ仕方ありませんね。——それは失礼な

がら、まだ御若いから、そう云う奥底のない御考も出るんでしようが。——いくら出たいたつて、山の中の一軒家に住んでいる人間じゃなし、そう今が今思い立つて、今出られちゃ、出る当人より、残ったものが困りまさあね」

「なぜ」

「だって人の口は五月蠅うるさいじゃありませんか」

「人が何と云ったつて——それがなぜ悪いんでしよう」

「だって御互に世間に顔出しが出来ればこそ、こうやって今日こんにちを送っているんじゃないやしませんか。自分より世間の義理の方が大事でさあね」

「だって、こんなに出たいとおつしやるんですもの。御可哀想おかawaiiそうじゃありませんか」

「そこが義理ですよ」

「それが義理なの。つまらないのね」

「つまらなありませんやね」

「だって欽吾さんは、どうなつても構わない……」

「構わなかないんです。それがやつぱり欽吾のためになるんです」

「欽吾さんより御叔母さんおばのためになるんじゃないの」

「世の中への義理ですよ」

「分らないわ、私わたしには。——出たいものは世間が何と云つたつて出たいんですもの。それが御叔母さんおばの迷惑になるはずはないわ」

「だって、こんな雨が降つて……」

「雨が降つても、御叔母さんは濡ぬれないんだから構わないじゃないですか」

汽車のない時の事であつた。山の男と海の男が喧嘩けんかをした。山の男が魚は塩辛いものだと言ふ。海の男が魚に塩氣があるものかと言ふ。喧嘩はいつまで立つても鎮しずまらなかつた。教育と名なづくる汽車がかかつて、理性の階段かいだんを自由に上下する方便ほうべんが開けないと、御互おんがえの考は御互に分らない。ある時は俗社会の塩漬になり過ぎて、ただ見てさえも冥眩めんけんしそんな人間でないと、人間として通用しない事がある。それは嘘うそだ偽いつわりだと説いて聞かしてもなかなか承知しない。どこまでも塩漬趣味を主張する。――

謎なぞの女と糸子の応対は、どこまで行つても並行するだけで一点には集まらない。山の男と海の男が魚に対して根本的の觀念を異ことにするごとく、謎の女と糸子とは、人間に対して冒頭あたまから考が違ふ。

海と山とを心得た甲野さんは黙つて二人を見下みおろしている。糸

子の云うところは弁護の出来ぬほど簡単である。母の主張は愛想あいそのつきるほど愚にしてかつ俗である。この二人の問答を前に控えて、甲野さんは阿爺おやじの額を抱いたまま立っている。別段退屈した気色けしきも見えない。焦慮じれつたそうな様子もない。困ったと云う風情ふぜいもない。二人の問答が、日暮まで続けば、日暮まで額を持つて、同じ姿勢で、立っているだろうと思われる。

ところへ、雨の中の掛声がした。車が玄関で留った。玄関から足音が近づいて来た。真先に宗近君があらわれた。

「やあ、まだ行かないのか」と甲野さんに聞く。

「うん」と答えたぎりである。

「御叔母おばさんもここか、ちょうど好い」と腰を掛ける。後あとから小野さんが這入はいって来る。小野さんの影を一寸いっすんも出ないように小夜子がついてくる。

「御叔母さん、雨の降るのに大入おおいりですよ。——小夜子さん、これが僕の妹です」

活躍の児こは一句にして挨拶あいさつと紹介かを兼る。宗近君は忙しい。

甲野さんは依然として額を支えて立ったままである。小野さんも手持てもちぶさた無沙汰に席に着かぬ。小夜子と糸子はいたずらに丁寧な頭つむりを下げた。打ち解けた言葉は無論交す機会がない。

「雨の降るのに、まあよく……」

母はこれだけの愛嬌あいぎょうを一面に振り蒔まいた。

「よく降りますね」と宗近君はすぐ答えた。

「小野さんは……」と母が云い懸かけた時、宗近君がまた遮さへぎった。

「小野さんは今日藤尾さんと大森へ行く約束があるんだそうですね。ところが行かなくなつて……」

「そう——でも、藤尾はさつき出ましたよ」

「まだ帰らないですか」と宗近君は平氣に聞いた。母は少しく不快な顔をする。

「どうして大森どころじゃない」と独語ひとりごとのように云つたが、ちよつと振り返つて、

「みんな掛けないか。立つてると草臥くたびれるぜ。もう直藤尾じきさんも帰るだろう」と注意を与えた。

「さあ、どうぞ」と母が云う。

「小野さん、掛けたまえ。小夜子さんも、どうです。——甲野さん何だい、それは……」

「父の肖像を卸おろしまして、あなた。持つて出るとか申して」

「甲野さん、少し待ちたまえ。もう藤尾さんが帰つて来るから」
甲野さんは別に返事もしなかつた。

「少し私が持ちましょう」と糸子が低い声で云う。

「なに……」と甲野さんは提^さげていた額^{ぬか}を床の上へ卸して壁へ立て掛けた。小夜子は俯^{うつむ}向きながら、そつと額の方を見る。

「なんぞ藤尾に、御用でも御有^{おあん}なさるんですか」

これは母の言葉であつた。

「ええ、あるんです」

これは宗近の答であつた。

あとは——雨が降る。誰も何とも云わない。この時一輛^{りよう}の車はクレオパトラの怒^{いかり}を乗せて韋駄天^{いだてん}のごとく新橋から馳^かけて来る。

宗近君は胴衣^{ちよつぎ}の上で、ぱちりと云わした。

「三時二十分」

何とも応^{こた}えるものがない。車は千筋^{ちすじ}の雨を、黒い幌^{ほろ}に弾^{はじ}いて一散に飛んで来る。クレオパトラの怒^{いかり}は布団^{ふとん}の上で躍^{おど}り上る。

「御叔母さん京都の話でも、しましうかね」

降る雨の地に落ちぬ間を追い越せと、乗る怒は車夫の背を鞭つて馳けつける。横に煽る風を真向に切つて、齒を逆に振ると、甲野の門内に敷き詰めた砂利が、玄関先まで長く二行に碎けて来た。

濃い紫の絹紐に、怒をあつめて、幌を潜るときに颯とふるわしたクレオパトラは、突然と玄関に飛び上がった。

「二十五分」

と宗近君が云い切らぬうちに、怒の権化は、辱しめられたる女王のごとく、書斎の真中に突つ立った。六人の目はことごとく紫の絹紐にあつまる。

「やあ、御帰り」と宗近君が煙草を啣えながら云う。藤尾は一言の挨拶すら返す事を屑とせぬ。高い背を高く反らして、屹と

部屋のなかを見廻した。見廻した眼は、最後に小野さんに至つて、ぐさりと刺さった。小夜子は背広せびろの肩にかくれた。宗近君はぬつと立つた。呑み掛けの煙草を、青葡萄あおぶどうの灰皿ほうに放り込む。藤尾さん。小野さんは新橋へ行かなかつたよ」

「あなたに用はありません。——小野さん。なぜいらつしやらなかつたんです」

「行つては済まん事になりました」

小野さんの句切りは例になく明瞭めいりょうであつた。稲妻いなずまははたはたとクレオパトラの眸ひとみから飛ぶ。何を猪子才ちよこざいなと小野さんの額を射た。

「約束を守らなければ、説明いが要ります」

「約束を守ると大変な事になるから、小野さんはやめたんだよ」と宗近君が云う。

「黙つていらつしやい。——小野さん、なぜいらつしやらなかつたんです」

宗近君は二三歩大股に歩いて来た。

「僕が紹介してやろう」と一足小野さんを横へ押し退けると、後から小さい小夜子が出た。

「藤尾さん、これが小野さんの妻君だ」

藤尾の表情は忽然として憎悪となつた。憎悪はしだいに嫉妬となつた。嫉妬の最も深く刻み込まれた時、ぴたりと化石した。

「まだ妻君じゃない。ないが早晚妻君になる人だ。五年前からの約束だそうだ」

小夜子は泣き腫らした眼を俯せたまま、細い首を下げる。藤尾は白い拳を握ったまま、動かない。

「嘘です。嘘です」と二遍云つた。「小野さんは私の夫です。私

の未来の夫です。あなたは何を云うんです。失礼な」と云った。
「僕はただ好意上事実を報知するまでさ。ついでに小夜子さんを紹介しようと思つて」

「わたしを侮辱する気ですね」

化石した表情の裏で急に血管が破裂した。紫色の血は再度の怒^{いかり}を満面^{そそ}に注ぐ。

「好意だよ。好意だよ。誤解しちゃ困る」と宗近君はむしろ平然としている。——小野さんはようやく口を開いた。——

「宗近君の云うところは一々本当です。これは私の未来の妻に違ありません。——藤尾さん、今日^{こんにち}までの私は全く軽薄な人間です。あなたにも済みません。小夜子にも済みません。宗近君にも済みません。今日から改めます。真面目^{まじめ}な人間になります。どうか許して下さい。新橋へ行けばあなたのためにも、私のた

めにも悪いです。だから行かなかつたです。許して下さい」

藤尾の表情は三たび変つた。破裂した血管の血は真白に吸収されて、侮蔑ぶべつの色のみが深刻に残つた。仮面めんの形は急に崩くずれる。

「ホホホホ」

歇ヒステリ私的里性の笑は窓外の雨を衝ついて高く迸ほとばしつた。同時に握る

拳こぶしを厚板の奥に差し込む途端にぬらぬらと長い鎖を引き出した。深紅しんくの尾は怪しき光を帯びて、右へ左へ揺うごく。

「じゃ、これはあなたには不用なんですね。ようござんす。——宗近さん、あなたに上げましょう。さあ」

白い手は腕をあらわに、すらりと延びた。時計は赭黒あかぐろい宗近君の掌てのひらに確しつと落かちた。宗近君は一步を煖炉に近く大股に開いた。やつと云う掛声と共に赭黒あかぐろい拳が空くうに躍おどる。時計は大理石の角かどで砕けた。

「藤尾さん、僕は時計が欲しいために、こんな酔興すいきような邪魔をしたんじやない。小野さん、僕は人の思をかけた女が欲しいから、こんな悪戯いたづらをしたんじやない。こう壊してしまえば僕の精神は君らに分るだろう。これも第一義の活動の一部分だ。なあ甲野さん」

「そうだ」

呆然ぼうぜんとして立った藤尾の顔は急に筋肉が働かなくなった。手が硬かたくなった。足が硬かたくなった。中心を失った石像のように椅子を蹴返して、床ゆかの上に倒れた。

十九

凝こる雲の底を抜いて、小一日空こいちにちを傾けた雨は、大地の髓ずいに浸し

み込むまで降つて歇やすんだ。春はここに尽きる。梅に、桜に、桃に、李すももに、かつ散り、かつ散つて、残る紅くれなゐもまた夢のように散つてしまった。春に誇るものはことごとく亡ほろぶ。我がの女は虚栄の毒を仰いで斃たおれた。花に相手を失つた風は、いたずらに亡なき人の部屋に薰かおり初そめる。

藤尾は北を枕に寝る。薄く掛けた友禅ゆうぜんの小夜着こよぎには片輪車かたわぐるまを、浮世うきよらしからぬ恰好かつこうに、染め抜いた。上には半分ほど色づいた蔦つたが一面に這はいかかる。淋さみしき模様である。動く気色けしきもない。敷布敷布団は厚い郡内ぐんないを二枚重ねたらしい。塵ちりさえ立たぬ敷布シートを滑なめらかに敷き詰めた下から、粗あらい格子こうしの黄と焦茶こげちやが一本ずつ見える。変らぬものは黒髪である。紫むらさきの絹紐リボンは取つて捨てた。有るたけは、有るに任せて枕に乱した。今日きょうまでの浮世きょうと思う母は、櫛くしの齒も入れてやらぬと見える。乱るる髪は、純白まつしろな敷布シートにこ

ぼれて、小夜着こよぎの襟えりの天鵲絨びろうどに連つらなる。その中に仰向あおもむけた顔がある。昨日きのうの肉をそのままに、ただ色が違う。眉は依然さすとして濃い。眼はさつき母が眠らした。眠るまで母は丹念さすに撫つたのである。——顔よりほかは見えぬ。

敷布の上に時計がある。濃こまやかに刻んだ七子は無惨むざんに潰つぶれてしまつた。鎖だけはたしかである。ぐるぐると両蓋りょうふたの縁ふちを巻いて、黄金こがねの光を五分ごぶごとに曲折する真中に、柘榴珠ざくろだまが、へしやげた蓋まなこの眼のごとく乗っている。

逆さかに立てたのは二枚折の銀屏ぎんびようである。一面に冴さえ返る月の色ほうの方六尺のなかに、会釈えしやくもなく緑青ろくしょうを使つて、柔婉なややかなる茎を乱るばかりに描かいた。不規則にぎざぎざを畳む鋸葉のこぎりはを描いた。緑青の尽きる茎の頭には、薄はなびらてのい弁を掌おおきほどの大きさに描いた。茎を弾はじけば、ひらひらと落つるばかりに軽く描いた。吉野紙を縮ま

して幾重の襞を、絞りに畳み込んだように描いた。色は赤に描いた。紫に描いた。すべてが銀の中から生える。銀の中に咲く。落つるも銀の中と思わせるほどに描いた。——花は虞美人草である。落款は抱一である。

屏風の陰に用い慣れた寄木の小机を置く。高岡塗の蒔絵の硯箱は書物と共に違棚に移した。机の上には油を注した瓦器を供えて、昼ながらの灯火を一本の灯心に点ける。灯心は新らしい。瓦器の丈を余りて、三寸を尾に引く先は、油さえ含まず白くすらりと延びている。

ほかには白磁の香炉がある。線香の袋が蒼ざめた赤い色を机の角に出している。灰の中に立てた五六本は、一点の紅から煙となつて消えて行く。香は仏に似ている。色は流るる藍である。根本から濃く立ち騰るうちに右に揺き左へ揺く。揺くたびに幅

が広くなる。幅が広くなるうちに色が薄くなる。薄くなる帯のなかに濃い筋がゆるやかに流れて、しまいには広い幅も、帯も、濃い筋も行方知れずになる。時に燃え尽した灰がぱたりと、棒のまま倒れる。

違棚の高岡塗は沈んだ小豆色に古木の幹を青く盛り上げて、寒紅梅かんこうばいの数点を螺鈿らでん擬まがいに鍊ねり出した。裏は黒地に鶯うぐいすが一羽飛んでいる。並ぶ蘆雁ろがんの高時絵の中には昨日きのうまで、深き光を暗き底に放つ柘榴珠が収めてあった。両蓋に隙間すきまなく七子を盛る金側時計が収めてあった。高時絵の上には一卷の書物が載のせてある。四隅よすみを金きんに立ち切った箔はくの小口だけが鮮あざやかに見える。間から紫しおりの葉の房が長く垂れている。葉を差し込んだ頁ページの上から七行目に「埃及エジプトの御代みよしろし召す人の最後ぞ、かくありてこそ」の一句がある。色鉛筆で細い筋を入れてある。

すべてが美しい。美しいもののなかに横よこたわる人の顔も美しくい。驕おごる眼は長とこしなえに閉じた。驕おごる眼を眠ねむった藤尾の眉まゆは、額は、黒髪は、天女てんによのごとく美しい。

「御線香が切れやしないかしら」と母は次つぎの間から立ちかかる。
「今上げて来ました」と欽吾が云う。膝ひざを正しく組み合あわして、手を拱こまぬいている。

「一はじめさんも上げてやって下さい」

「私わたしも今上げて来た」

線香の香は藤尾の部屋から、思い出したように吹いてくる。
燃え切った灰は、棒のままで、はたりはたりと香炉の中に倒れつつつある。銀屏ぎんびようは知らぬ間まに薰くゆる。

「小野さんは、まだ来ないんですか」と母が云う。

「もう来るでしょう。今呼びにやりました」と欽吾が云う。

部屋はわざと立て切った。隔へだての襖ふすまだけは明けてある。片輪車の友禅ゆうぜんの裾すそだけが見える。あとは芭蕉布ばしょうふの唐紙からかみで万事を隠す。幽冥ゆうめいを仕切る縁ふちは黒である。一寸幅に鴨居かもいから敷居しきいまで真直まつすぐに貫くわいている。母は襖ふすまのこちらに坐りながら、折々は、見えぬ所のぞを覗のぞき込むように、首を傾けて背を反そらす。冷かな足よりも冷かな顔の方が気にかかる。覗くたびに黒い縁は、すつきりと友禅の小夜着こよぎを斜はすに断ち切っている。写せばそのままの模様画になる。

「御叔母おおばさん、飛んだ事になって、御氣の毒だが、仕方がない。御諦おあきらめなさい」

「こんな事になろうとは……」

「泣いたって、今更いまさらしようがない。因果いんがだ」

「本当に残念な事をしました」と眼を拭う。

「あんまり泣くとかえつて供養くようにならない。それより後の始末あとが大事ですよ。こうなつちや、是非甲野さんにいてもらうより仕方がないんだから、その気になつてやらないと、あなたが困るばかりだ」

母はわつと泣き出した。過去を顧かえりみる涙は抑おさえやすい。卒然として未来におけるわが運命を自覚した時の涙は発作的ほつさてきに来る。

「どうしたら好いか——それを思うと——一さん」

切れ切れの言葉が、涙と涙はなの間から出た。

「御叔母さん、失礼ながら、ちつと平生へいぜいの考え方が悪かった」

「私の不行届から、藤尾はこんな事になる。欽吾には見放される……」

「だからね。そう泣いたつてしょうがないから……」

「……まことに面目しだいもございません」

「だからこれから少し考え直すさ。ねえ、甲野さん、そうしたら好いだろう」

「みんな私が悪いんでしょね」と母は始めて欽吾に向った。腕組をしていた人はようやく口を開く。――

「偽の子だとか、本当の子だとか区別しなければ好いんです。平たく当り前にして下されば好いんです。遠慮なんぞなさらないければ好いんです。なんでもない事をむずかしく考えなければ好いんです」

甲野さんは句を切った。母は下を向いて答えない。あるいは理解出来ないからかと思う。甲野さんは再び口を開いた。――

「あなたは藤尾に家も財産もやりたかつたのでしょ。だからやろうと私が云うのに、いつまでも私を疑って信用なさらないのが悪いんです。あなたは私が家にいるのを面白く思っておい

ででなかつたでしょう。だから私が家を出ると云うのに、面当^{つらあて}のためだとか、何とか悪く考えるのがいけないです。あなたは小野さんを藤尾の養子にしたかつたんでしょう。私が不承知を云うだろうと思つて、私を京都へ遊びにやつて、その留守中に小野と藤尾の關係を一日一日と深くしてしまつたのでしょう。そう云う策略がいけないです。私を京都へ遊びにやるんでも私の病氣を癒^{なお}すためにやつたんだと、私にも人にもおつしやるでしょう。そう云う嘘^{うそ}が悪いんです。——そう云うところさえ考え直して下されば別に家を出る必要はないのです。いつまでも御世話をして好いのです」

甲野さんはこれだけでやめる。母は俯向^{うつむ}いたまま、しばらく考えていたが、ついに低い声で答えた。——

「そう云われて見ると、全く私が悪かつたよ。——これから御

前さんがたの意見を聞いて、どうとも悪いところは直すつもりだから……」

「それで結構です、ねえ甲野さん。君にも御母さんだ。家にて面倒を見て上げるがいい。糸公にもよく話しておくから」

「うん」と甲野さんは答えたぎりである。

隣室の線香が絶えんとする時、小野さんは蒼白い額を抑えて来た。藍色の煙は再び銀屏を掠めて立ち騰った。

二日して葬式は済んだ。葬式の済んだ夜、甲野さんは日記を書き込んだ。――

「悲劇はついに来た。来るべき悲劇はとうから預想していた。預想した悲劇を、なすがままの発展に任せて、隻手をだに下さぬは、業深き人の所為に對して、隻手の無能なるを知るが故である。悲劇の偉大なるを知るが故である。悲劇の偉大なるを知らぬが故である。悲劇の偉大なる勢力

を味わわしめて、三世に跨がる業を根柢から洗わんがためである。不親切なためではない。隻手を挙げれば隻手を失い、一目を揺かせば一目を眇す。手と目とを害うて、しかも第二者の業は依然として変らぬ。のみか時々刻々に深くなる。手を袖に、眼を閉ずるは恐るるのではない。手と目より偉大なる自然の制裁を親切に感受して、石火の一撈に本来の面目に逢着せしむるの微意にほかならぬ。

悲劇は喜劇より偉大である。これを説明して死は万障を封ずるが故に偉大だと云うものがある。取り返しがつかぬ運命の底に陥つて、出て来ぬから偉大だと云うのは、流るる水が逝いて歸らぬ故に偉大だと云うと一般である。運命は単に最終結を告ぐるがためにのみ偉大にはならぬ。忽然として生を変じて死となすが故に偉大なのである。忘れたる死を不用意の際に点出す

るから偉大なのである。ふざけたるものが急に襟えりを正すから偉大なのである。襟を正して道義の必要を今更のごとく感ずるか
ら偉大なのである。人生の第一義は道義にありとの命題を脳裏のうりに樹立するが故ゆえに偉大なのである。道義の運行は悲劇に際会して始めて渋滞じゅうたいせざるが故に偉大なのである。道義の実践はこれを人に望む事切せつなるにもかかわらず、われのもつとも難かたしとするところである。悲劇は個人をしてこの実践をあえてせしむるがために偉大である。道義の実践は他人にもつとも便宜べんぎにして、自己にもつとも不利益である。人々力にんにんをここに致すとき、一般の幸福を促うながして、社会を真正の文明に導くが故に、悲劇は偉大である。

問題は無数にある。粟あわか米か、これは喜劇である。工か商か、これも喜劇である。あの女かこの女か、これも喜劇である。綴織つづれおり

か繻珍しゅちんか、これも喜劇である。英語か独乙語ドイツ語か、これも喜劇である。すべてが喜劇である。最後に一つの問題が残る。――生か死か。これが悲劇である。

十年は三千六百日である。普通の人が朝から晩に至つて身心を勞する問題は皆喜劇である。三千六百日を通して喜劇を演ずるものはついに悲劇を忘れる。いかにして生を解釈せんかの問題に煩悶はんもんして、死の一字を念頭に置かなくなる。この生とあの生との取捨に忙がしきが故に生と死との最大問題を閑却する。

死を忘るるものは贅沢ぜいたくになる。一浮いっふも生中である。一沈いっちんも生中である。一挙手も一投足もことごとく生中にあるが故に、いかに踊るも、いかに狂うも、いかにふざけるも、大丈夫生中を出ずる氣遣きづかいなしと思う。贅沢こうは高じて大胆となる。大胆は道義を蹂躪じゅうりふして大自在だいじざいに跳梁ちやうりやうする。

万人はことごとく生死の大問題より出立する。この問題を解決して死を捨てると云う。生を好むと云う。ここにおいて万人は生に向つて進んだ。ただ死を捨てると云うにおいて、万人は一致するが故に、死を捨ててべき必要の条件たる道義を、相互に守るべく默契した。されども、万人は日に日に生に向つて進むが故に、日に日に死に背いて遠ざかるが故に、大自在に跳梁びょうりやうして毫も生中を脱するの虞おそれなしと自信するが故に、——道義は不必要となる。

道義に重おもきを置かざる万人は、道義を犠牲にしてあらゆる喜劇を演じて得意である。ふざける。騒ぐ。あざむ欺く。嘲弄する。ちやうろう馬鹿にする。踏む。蹴る。——ことごとく万人が喜劇より受くる快樂である。この快樂は生に向つて進むに従つて分化発展するが故に——この快樂は道義を犠牲にして始めて享受し得るが故に

——喜劇の進歩は底止^{ていし}するところを知らずして、道義の觀念は日を追うて下る^{くだ}。

道義の觀念が極度に衰えて、生を欲する万人の社会を満足に維持しがたき時、悲劇は突然として起る。ここにおいて万人の眼はことごとく自己の出立点に向う。始めて生の隣に死が住む事を知る。妄^{みだ}りに踊り狂うとき、人をして生の境を踏み外^{はず}して、死の園内^{けんない}に入らしむる事を知る。人もわれももつとも忌^いみ嫌^{きら}える死は、ついに忘るべからざる永劫^{えいこく}の陷^{かん}穽^{せい}なる事を知る。陷^{かん}穽^{せい}の周圍^{くわい}に朽^くちかかる道義の繩は妄^{みだ}りに飛び超^こゆべからざるを知る。繩は新たに張らねばならぬを知る。第二義以下の活動の無意味なる事を知る。しかして始めて悲劇の偉大なるを悟る。……」

二カ月後^ご甲野さんはこの一節を抄録して倫敦^{ロンドン}の宗近君に送つた。宗近君の返事にはこうあつた。——

「
ここでは喜劇ばかり流行^{はや}る
」

底本：「夏目漱石全集 4」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和 63）年 1 月 26 日第 1 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 4 月～1972（昭和 47）年 1 月

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999 年 4 月 3 日公開

2004 年 1 月 10 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。